

西脇市

津万遺跡群1

—一般国道175号西脇北バイパス事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—



令和5（2023）年3月

兵庫県教育委員会



遺跡の立地（南から）



寺内地区遠景（南から）



寺内O区 SH1 (北から)



寺内O区 SH1 中央土坑 (北から)



寺内O区 SH1 P1 (北から)



寺内 1 区 SH1 (西北西から)



寺内 1 区 SB5 (西から)



寺内2区（北東から）



寺内2区 SK25（西から）

遺物 75・W10・W9



寺内 2 区 SK10-2
(南東から)
遺物 W14・W44



寺内 2 区 SK47 (西から)
遺物 97～103・123
W25・W33・W45・W46



寺内 2 区 SK116-6・7間
(北西から)
遺物 153・156・161



寺内 2 区 SK116-6
(北東から)
遺物 152・W17・W20・W30



寺内 2 区 SK130-4
(北西から)
遺物 162・168・169・W41・W49



寺内 2 区 SD8 桁列
(北西から)
遺物 W65～W80・W83



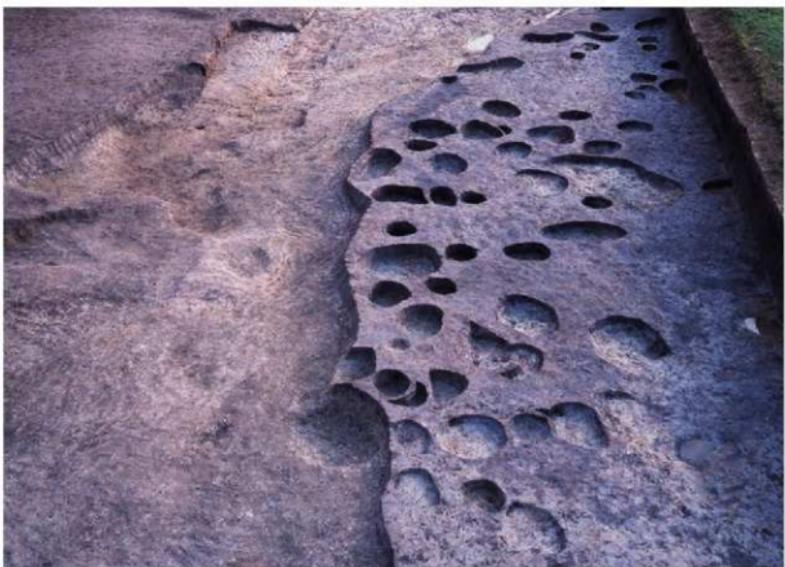
寺内3区 SB1（北から）



寺内5区 SB2（南西から）



寺内 5 区 旧河道 SR1 (北から)



寺内 6 区 粘土探掘坑 (北から)



寺内0区 出土土器



寺内1区 出土土器



寺内2区 出土土器



寺内 2 区 出土土器



寺内 2 区 出土土器



寺内 2 区 出土土器



寺内 2 区 出土土器

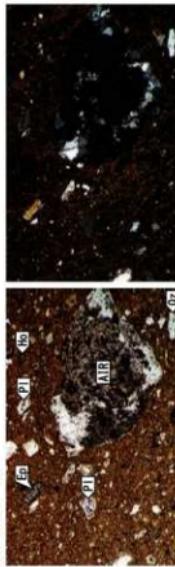


寺内 6 区 出土土器

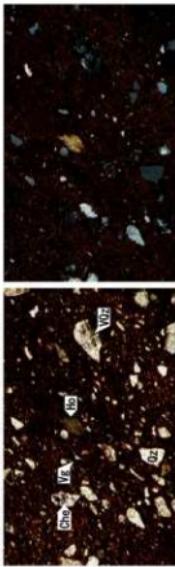


寺内 2 区 出土木製品

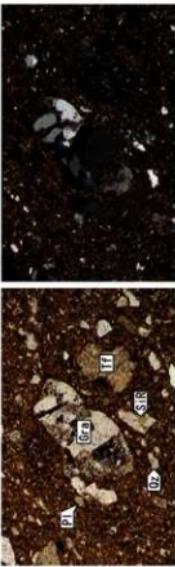
胎生土壤片 (1)



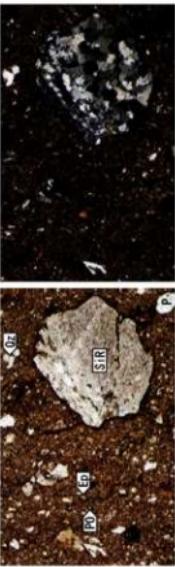
[卷之二] 通志



2. 试料番号2(23) 孕生土器 韩 帝内1区 SHI中央土壤



3 试料番号3(28 弥生土器 要 奇内1区 SD2)

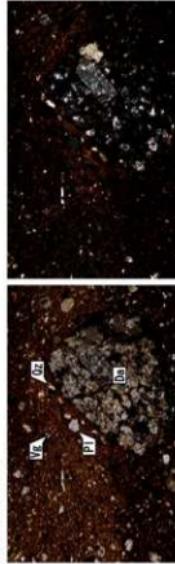


4. 試料番号4(31 弥生土器 墓 動内1区 SD2)

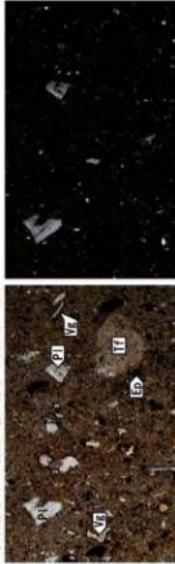
卷之三

1

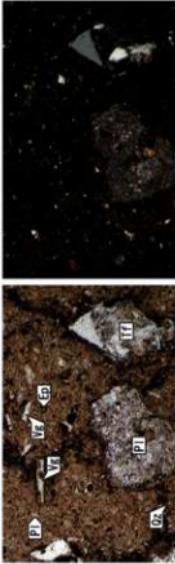
胎土襯片(2)



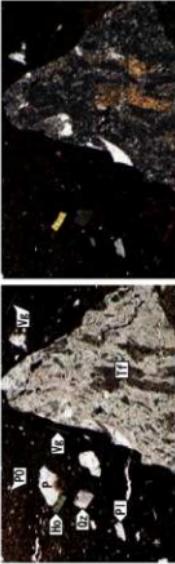
5 試料番号5(40 猪牛土器 鋼台 牛肉1区 SD2)



6 试料番号6(45 弥生土器 固付無頭壺 墓内2区南端 SP2)



7.7. 识别器号746 稀土土器 针 滤内2区 SD9-4

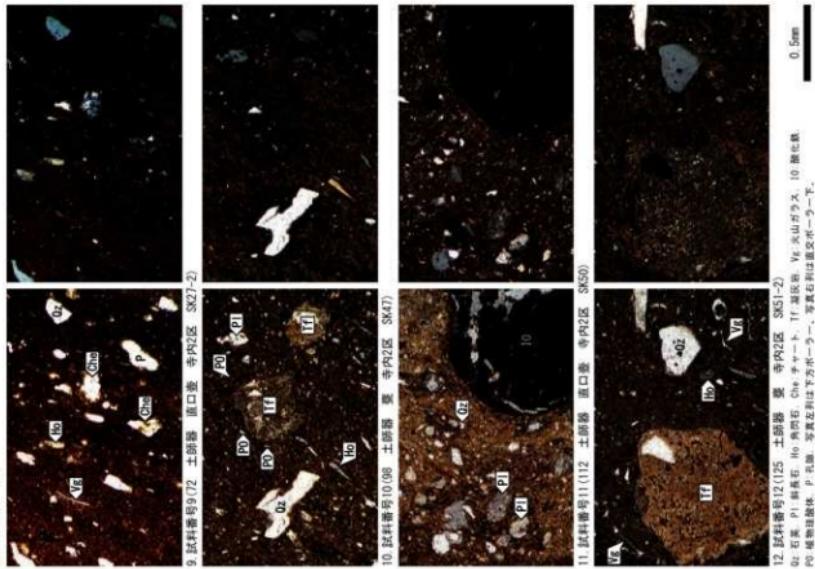


試料番号8(62 土師器 錠 内2区北京 SK2)

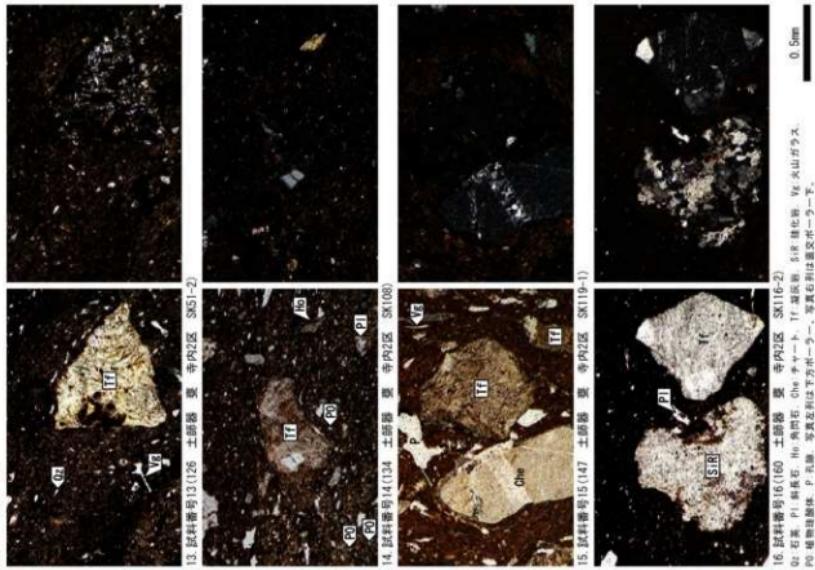
石英 鋸長石 Eo 線レシ石

1

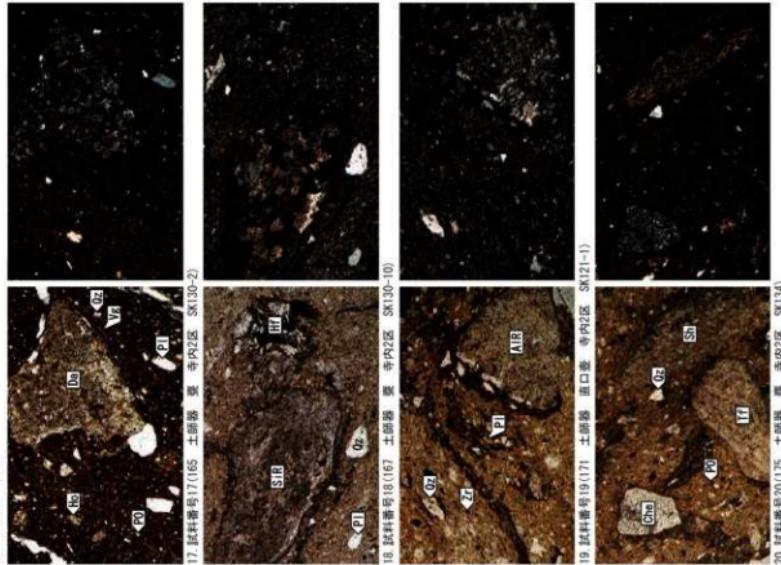
胎土薄片 (3)



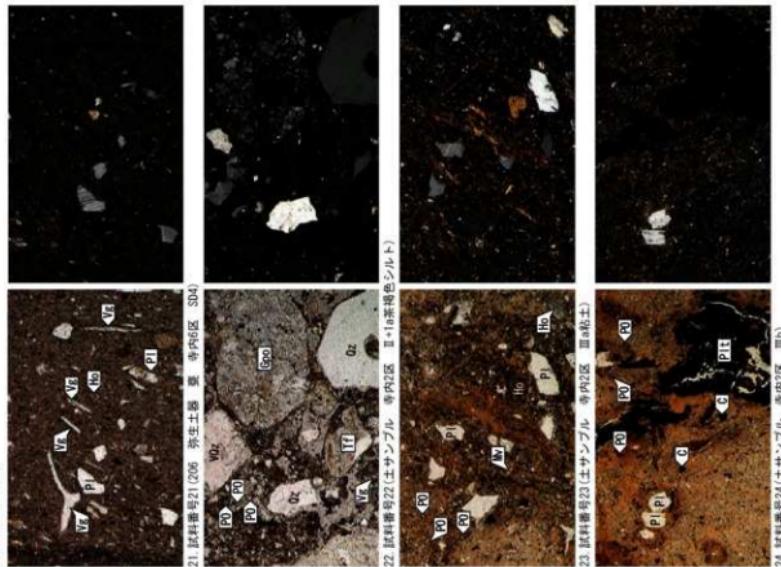
胎土薄片(4)



胎土薄片 (5)



胎土薄片 (6)



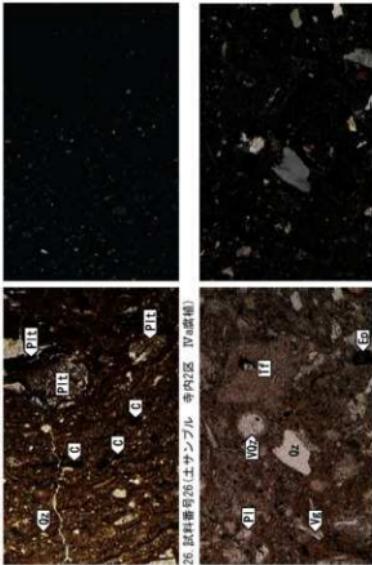
Qz: 長石
Pd: 粘土質
Hg: 白雲母
Vt: 云母
SR: 蒙脱石
Vd: 钾长石
PI: 硅酸鹽
Et: 钾長石
AR: 铝鐵
Chn: 磷灰石
Sn: 硫化物
Pt: 磷
M: 钙
Ho: 钨
Po: 钼
C: 云母
Pt: 磷
PI: 硅酸鹽
Qz: 長石
Pd: 粘土質
Hg: 白雲母
Vt: 云母
SR: 蒙脱石
Vd: 钾长石
PI: 硅酸鹽
Et: 钾長石
AR: 铝鐵
Chn: 磷灰石
Sn: 硫化物
Pt: 磷
M: 钙
Ho: 钨
Po: 钼
C: 云母
Pt: 磷
PI: 硅酸鹽

0.5mm

胎土薄片 (7)

試料 報告 番号	種別	器種	出土地区	出土遺構
1 2	土師器	壺	寺内区	SH1
2 23	土師器	鉢	寺内区	SH1中央土坑
3 28	土師器	壺	寺内区	SD2
4 31	土師器	壺	寺内区	SD2
5 40	土師器	器台	寺内区	SD2
6 45	弥生土器	脚付黒頭壺	寺内2区南端	SD2
7 46	弥生土器	鉢	寺内区	SD9-4
8 62	土師器	壺	寺内区北東	SK2
9 72	土師器	壺口壺	寺内2区	SK27-2
10 98	土師器	壺	寺内2区	SK47
11 112	土師器	壺口壺	寺内2区	SK50
12 125	土師器	壺	寺内区	SK51-2
13 126	土師器	壺	寺内区	SK51-2
14 134	土師器	壺	寺内2区	SK108
15 147	土師器	壺	寺内2区	SK119-1
16 160	土師器	壺	寺内区	SK116-2
17 165	土師器	壺	寺内区	SK130-2
18 167	土師器	壺	寺内区	SK130-10
19 171	土師器	壺口壺	寺内2区	SK121-1
20 175	土師器	壺	寺内区	SK134
21 206	弥生土器	壺	寺内区	SD4
22 -	-	土サンブル	-	II+la茶褐色シルト
23 -	-	土サンブル	-	IIIa茶土
24 -	-	土サンブル	-	寺内2区
25 -	-	土サンブル	-	寺内2区
26 -	-	土サンブル	-	寺内2区
27 -	-	土サンブル	-	寺内2区

25 試料番号25(土サンブル 寺内2区 直-1b中砂)



26 試料番号26(土サンブル 寺内2区 M赤粘土)

27 試料番号27(土サンブル 寺内2区 ベースのシルトV層)



表1 胎土分析試料一覧

試料 番号	種別	器種	出土地区	出土遺構
1 2	土師器	壺	寺内区	SH1
2 23	土師器	鉢	寺内区	SH1中央土坑
3 28	土師器	壺	寺内区	SD2
4 31	土師器	壺	寺内区	SD2
5 40	土師器	器台	寺内区	SD2
6 45	弥生土器	脚付黒頭壺	寺内2区南端	SD2
7 46	弥生土器	鉢	寺内区	SD9-4
8 62	土師器	壺	寺内区北東	SK2
9 72	土師器	壺口壺	寺内2区	SK27-2
10 98	土師器	壺	寺内2区	SK47
11 112	土師器	壺口壺	寺内2区	SK50
12 125	土師器	壺	寺内区	SK51-2
13 126	土師器	壺	寺内区	SK51-2
14 134	土師器	壺	寺内2区	SK108
15 147	土師器	壺	寺内2区	SK119-1
16 160	土師器	壺	寺内区	SK116-2
17 165	土師器	壺	寺内区	SK130-2
18 167	土師器	壺	寺内区	SK130-10
19 171	土師器	壺口壺	寺内2区	SK121-1
20 175	土師器	壺	寺内区	SK134
21 206	弥生土器	壺	寺内区	SD4
22 -	-	土サンブル	-	II+la茶褐色シルト
23 -	-	土サンブル	-	IIIa茶土
24 -	-	土サンブル	-	寺内2区
25 -	-	土サンブル	-	寺内2区
26 -	-	土サンブル	-	寺内2区
27 -	-	土サンブル	-	寺内2区

0.5mm



c 泥質物

p1 動植物

Q 石英

P1 鈍長石

T1 青灰岩

S1a 斜方石

V1 灰山ガラス

V2 黄鐵矿

O2 鉄

V3

E5

例　　言

1. 本書は、兵庫県西脇市寺内に所在する「津万遺跡群」(つまいせきぐん)1 寺内地区的発掘調査報告書である。

津万遺跡群は北から寺内地区（津万遺跡群1）、西嶋地区（津万遺跡群2）、嶋地区（津万遺跡群2・3）、津万地区（津万遺跡群3・4）に分割して報告する。
2. 本調査は、国道175号西脇北バイパス事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所（当時）の依頼に基づき、平成18・19年度に兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県埋蔵文化財調査事務所、兵庫県立考古博物館を調査機関として実施した。
3. 本報告書作成にかかる整理作業は、国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所の依頼を受けて、平成23年度に兵庫県立考古博物館が、平成24・25・30～令和4年度に公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
4. 本報告書掲載の第1図は国土地理院発行のものを基とした兵庫県教育委員会発行「兵庫県遺跡地図」を基に作成した。図版1・3・5は国土交通省近畿地方整備局兵庫国道事務所作成のものを使用した。遺構全体図や平面図は株式会社リオプラン（2006年度）及び、株式会社バスコ（2007年度）による空中写真測量のものを使用した。その他の実測図は調査担当者、調査補助員および整理技術員によるものを使用した。
5. 遺物写真は平成25年度に株式会社クレアチオに撮影を委託した。空中写真は株式会社リオプラン（2006年度）及び、株式会社バスコ（2007年度）撮影のものを使用した。その他の写真は調査担当者によるものを使用した。
6. 本報告書は、池田悦子の補助の下、別府洋二が編集し、執筆は目次の記載の通り別府、西口圭介、山上雅弘、篠宮正、上田健太郎が分担した。出土資料の分析は、株式会社古環境研究所、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第5章にその結果を報告している。
7. 本報告書内で用いている遺構名は各地区ごとに付しており、竪穴住居跡にはSH、掘立柱建物跡にSB、土坑にSK、井戸にSE、柱穴にP、流路・旧河道にSRを冠して番号付けている。遺物は古墳時代以前の土器と古代以降の土器に分けて通し番号を付して報告し、木製品にはW、石製品にはS、金属製品にはMを冠して番号付けている。土器の断面黒塗りは須恵器、網目は陶磁器を表している。
8. 発掘調査、整理作業に際して以下の方々の指導・助言、協力を受けました。記して感謝いたします。
(順不同、敬称略)

岸本一郎、小川真理子、青木哲哉、小谷義男、菅澤敏弘

本文目次

第1章 遺跡の環境	(別府洋二)	1
第2章 調査の経緯と経過	(別府)	5
第3章 遺構		
第1節 寺内0区の遺構	(山上雅弘、上田健太郎)	9
第2節 寺内1区の遺構	(篠宮 正)	11
第3節 寺内2区の遺構	(西口圭介、別府)	14
第4節 寺内3区の遺構	(山上、上田)	18
第5節 寺内4区の遺構	(山上、上田)	19
第6節 寺内5区の遺構	(山上、上田)	21
第7節 寺内6区の遺構	(山上、上田)	22
第4章 遺物		
第1節 弥生時代から古墳時代の土器	(篠宮)	23
第2節 古代から近世の土器	(西口)	34
第3節 木製品	(別府)	40
第4節 石製品	(上田)	51
第5節 金属製品	(別府)	52
第5章 分析		
第1節 胎土分析	(株式会社古環境研究所)	53
第2節 樹種同定	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	63
第6章 考察	(別府、篠宮)	69

挿図目次

第1図 津万遺跡群の周辺の遺跡分布図	4
第2図 基本土層模式図	15
第3図 大門烟瀬遺跡出土磨製石剣	51
第4図 津万遺跡群4の鉄製品	52
第5図 胎土中の碎屑物の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)~(3)	59・60
第6図 胎土中の碎屑物の粒径組成(1)~(3)	61・62
第7図 碎屑物・基質・孔隙の割合	62
第8図 木材写真(1)~(4)	67・68
第9図 板材に残された傷	72
第10図 銀計測部位名	73
第11図 売96 ケズリ津付着内面	77

表 目 次

表1 胎土分析試料一覧	卷頭写真図版16
表2 津万遺跡群周辺の遺跡	3
表3 胎土分類結果	54
表4 薄片観察結果(1)~(7)	56
表5 津万遺跡群1の樹種同定結果	64
表6 津万遺跡群1の器種別種類構成	66
表7 寺内地区出土土器一覧表(1)~(6)	79
表8 寺内地区出土木製品一覧表(1)・(2)	85
表9 寺内地区出土石製品一覧表	86
表10 寺内地区出土金属製品一覧表	86
表11 寺内2区土坑別出土遺物一覧表(1)~(3)	87

図 版 目 次

図版1 津万遺跡群1 トレチ配置図	図版21 寺内1区 SB5~7
図版2 津万遺跡群1 トレチ土層断面柱状図	図版22 寺内1区 SK1~4
図版3 津万遺跡群1 調査区配置図	図版23 寺内2区 全体図
図版4 津万遺跡群1 寺内地区遺構全体図	図版24 寺内2区 北壁・西壁土層断面図
図版5 津万遺跡群1 寺内地区遺構配置図	図版25 寺内2区 東壁・南壁土層断面図
図版6 寺内0区 全体図	図版26 寺内2区 SK①
図版7 寺内0区 SH1①	図版27 寺内2区 SK②
図版8 寺内0区 SH1②	図版28 寺内2区 SK③
図版9 寺内0区 SD1・SX1・SX2	図版29 寺内2区 SK④
図版10 寺内0区 SD2	図版30 寺内2区 SK⑤
図版11 寺内0区 SE1	図版31 寺内2区 SK⑥
図版12 寺内0区 SE2・SE3	図版32 寺内2区 SK⑦
図版13 寺内0区 SB1	図版33 寺内2区 SK⑧
図版14 寺内1区 全体図	図版34 寺内2区 SK⑨
図版15 寺内1区 南壁・西壁土層断面図	図版35 寺内2区 SK⑩
図版16 寺内1区 SH1	図版36 寺内2区 SK⑪
図版17 寺内1区 SD2~6	図版37 寺内2区 SK⑫
図版18 寺内1区 SB1・SB2	図版38 寺内2区 SK⑬
図版19 寺内1区 SB3	図版39 寺内2区 SK⑭
図版20 寺内1区 SB4	図版40 寺内2区 SK⑮

図版 41	寺内 2 区 SK ⑯	図版 73	弥生・古墳時代 土器 11
図版 42	寺内 2 区 SK ⑰・SD ①	図版 74	弥生・古墳時代 土器 12
図版 43	寺内 2 区 SD ②	図版 75	弥生・古墳時代 土器 13
図版 44	寺内 2 区 杭列	図版 76	弥生・古墳時代 土器 14
図版 45	寺内 3 区 全体図	図版 77	弥生・古墳時代 土器 15
図版 46	寺内 3 区 西壁・北壁土層断面図	図版 78	古代～近世 土器 1
図版 47	寺内 3 区 SB1	図版 79	古代～近世 土器 2
図版 48	寺内 3 区 SD・SK4・SX22	図版 80	古代～近世 土器 3
図版 49	寺内 4 区 全体図	図版 81	古代～近世 土器 4
図版 50	寺内 4 区 西壁・南壁土層断面図	図版 82	木製品 1
図版 51	寺内 4 区 SK2・SD ①	図版 83	木製品 2
図版 52	寺内 4 区 SD ②	図版 84	木製品 3
図版 53	寺内 5 区 全体図	図版 85	木製品 4
図版 54	寺内 5 区 SB1	図版 86	木製品 5
図版 55	寺内 5 区 SB2・SB3	図版 87	木製品 6
図版 56	寺内 5 区 SD1～SD4	図版 88	木製品 7
図版 57	寺内 6 区 全体図	図版 89	木製品 8
図版 58	寺内 6 区 南壁・西壁土層断面図	図版 90	木製品 9
図版 59	寺内 6 区 SR1・SD ①	図版 91	木製品 10
図版 60	寺内 6 区 SK ①	図版 92	木製品 11
図版 61	寺内 6 区 SK ②	図版 93	木製品 12
図版 62	寺内 6 区 SK ③	図版 94	木製品 13
図版 63	弥生・古墳時代 土器 1	図版 95	木製品 14
図版 64	弥生・古墳時代 土器 2	図版 96	木製品 15
図版 65	弥生・古墳時代 土器 3	図版 97	木製品 16
図版 66	弥生・古墳時代 土器 4	図版 98	木製品 17
図版 67	弥生・古墳時代 土器 5	図版 99	木製品 18
図版 68	弥生・古墳時代 土器 6	図版 100	木製品 19
図版 69	弥生・古墳時代 土器 7	図版 101	木製品 20
図版 70	弥生・古墳時代 土器 8	図版 102	木製品 21
図版 71	弥生・古墳時代 土器 9	図版 103	木製品 22
図版 72	弥生・古墳時代 土器 10	図版 104	石製品・金属製品

卷頭写真図版目次

卷頭写真図版1 遺跡の立地・寺内地区遠景

卷頭写真図版3 寺内1区

卷頭写真図版2 寺内0区

卷頭写真図版4 寺内2区

卷頭写真図版 5 寺内 2 区	卷頭写真図版 11 寺内 2 区・6 区 出土土器
卷頭写真図版 6 寺内 2 区	卷頭写真図版 12 寺内 2 区 出土木製品
卷頭写真図版 7 寺内 3 区・5 区	卷頭写真図版 13 胎土薄片(1)(2)
卷頭写真図版 8 寺内 5 区・6 区	卷頭写真図版 14 胎土薄片(3)(4)
卷頭写真図版 9 寺内 0 区・1 区・2 区 出土土器	卷頭写真図版 15 胎土薄片(5)(6)
卷頭写真図版 10 寺内 2 区 出土土器	卷頭写真図版 16 胎土薄片(7)・胎土分析試料一覧

写 真 図 版 目 次

写真図版 1 遺跡遠景	写真図版 29 寺内 2 区 遺構 5
写真図版 2 寺内地区遠景	写真図版 30 寺内 2 区 遺構 6
写真図版 3 寺内 0 区 全景 1	写真図版 31 寺内 2 区 遺構 7
写真図版 4 寺内 0 区 全景 2	写真図版 32 寺内 2 区 遺構 8
写真図版 5 寺内 0 区 遺構 1	写真図版 33 寺内 2 区 遺構 9
写真図版 6 寺内 0 区 遺構 2	写真図版 34 寺内 2 区 遺構 10
写真図版 7 寺内 0 区 遺構 3	写真図版 35 寺内 2 区 遺構 11
写真図版 8 寺内 0 区 遺構 4	写真図版 36 寺内 2 区 遺構 12
写真図版 9 寺内 1 区 全景 1	写真図版 37 寺内 2 区 遺構 13
写真図版 10 寺内 1 区 全景 2	写真図版 38 寺内 2 区 遺構 14
写真図版 11 寺内 1 区 遺構 1	写真図版 39 寺内 2 区 遺構 15
写真図版 12 寺内 1 区 遺構 2	写真図版 40 寺内 2 区 遺構 16
写真図版 13 寺内 1 区 遺構 3	写真図版 41 寺内 2 区 遺構 17
写真図版 14 寺内 1 区 遺構 4	写真図版 42 寺内 2 区 遺構 18
写真図版 15 寺内 1 区 遺構 5	写真図版 43 寺内 2 区 遺構 19
写真図版 16 寺内 1 区 遺構 6	写真図版 44 寺内 3 区・4 区 全景
写真図版 17 寺内 1 区 遺構 7	写真図版 45 寺内 3 区 全景
写真図版 18 寺内 1 区 遺構 8	写真図版 46 寺内 3 区 遺構
写真図版 19 寺内 1 区 遺構 9	写真図版 47 寺内 4 区 全景・遺構 1
写真図版 20 寺内 1 区 遺構 10	写真図版 48 寺内 4 区 遺構 2
写真図版 21 寺内 1 区 遺構 11	写真図版 49 寺内 5 区・6 区 全景
写真図版 22 寺内 1 区 遺構 12	写真図版 50 寺内 5 区 全景
写真図版 23 寺内 2 区 全景 1	写真図版 51 寺内 5 区 遺構 1
写真図版 24 寺内 2 区 全景 2	写真図版 52 寺内 5 区 遺構 2
写真図版 25 寺内 2 区 遺構 1	写真図版 53 寺内 5 区 遺構 3
写真図版 26 寺内 2 区 遺構 2	写真図版 54 寺内 5 区 遺構 4
写真図版 27 寺内 2 区 遺構 3	写真図版 55 寺内 6 区 全景
写真図版 28 寺内 2 区 遺構 4	写真図版 56 寺内 6 区 遺構 1

写真図版 57	寺内 6 区 遺構 2	写真図版 81	弥生・古墳時代 土器 23
写真図版 58	寺内 6 区 遺構 3	写真図版 82	弥生・古墳時代 土器 24
写真図版 59	弥生・古墳時代 土器 1	写真図版 83	弥生・古墳時代 土器 25
写真図版 60	弥生・古墳時代 土器 2	写真図版 84	弥生・古墳時代 土器 26
写真図版 61	弥生・古墳時代 土器 3	写真図版 85	古代～近世 土器 1
写真図版 62	弥生・古墳時代 土器 4	写真図版 86	古代～近世 土器 2
写真図版 63	弥生・古墳時代 土器 5	写真図版 87	古代～近世 土器 3
写真図版 64	弥生・古墳時代 土器 6	写真図版 88	古代～近世 土器 4
写真図版 65	弥生・古墳時代 土器 7	写真図版 89	古代～近世 土器 5
写真図版 66	弥生・古墳時代 土器 8	写真図版 90	古代～近世 土器 6
写真図版 67	弥生・古墳時代 土器 9	写真図版 91	古代～近世 土器 7
写真図版 68	弥生・古墳時代 土器 10	写真図版 92	古代～近世 土器 8
写真図版 69	弥生・古墳時代 土器 11	写真図版 93	古代～近世 土器 9
写真図版 70	弥生・古墳時代 土器 12	写真図版 94	木製品 1
写真図版 71	弥生・古墳時代 土器 13	写真図版 95	木製品 2
写真図版 72	弥生・古墳時代 土器 14	写真図版 96	木製品 3
写真図版 73	弥生・古墳時代 土器 15	写真図版 97	木製品 4
写真図版 74	弥生・古墳時代 土器 16	写真図版 98	木製品 5
写真図版 75	弥生・古墳時代 土器 17	写真図版 99	木製品 6
写真図版 76	弥生・古墳時代 土器 18	写真図版 100	木製品 7
写真図版 77	弥生・古墳時代 土器 19	写真図版 101	木製品 8
写真図版 78	弥生・古墳時代 土器 20	写真図版 102	木製品 9
写真図版 79	弥生・古墳時代 土器 21	写真図版 103	木製品 10
写真図版 80	弥生・古墳時代 土器 22	写真図版 104	木製品 11
		写真図版 105	木製品 12
		写真図版 106	石製品・金属製品

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

遺跡のある西脇市は、兵庫県の内陸中央部にあり、東経135度と北緯35度とが交差する「日本のへそ」のまちとして有名である。遺跡の東を南流する加古川は瀬戸内海に注ぎ込むが、その最上流は日本一低い丹波市氷上町石生の分水界で日本海に向かって流れる由良川と結ばれている。この本州を南北に貫く地形は、古くから人が行き来する回廊として利用してきた。

加古川西岸に位置する津万地域は、周辺では最も広い平地を有しているが、元々は標高60m内外の加古川本流の氾濫原であり、一部に段丘が現れ旧河道と自然堤防が交互に現れる地形である。現在の集落ののる微高地にはまさしく「鶴」「西鶴」といった地名が付されている。また、西側の山塊からは小河川が流れ、寺内地区の西の坂本などでは扇状地が広がる地形となる。津万地域周辺には条里地割が配されていたと思われるが、発掘調査では中世前半以降の建物などがこの地割に従っている。

明治22年（1889）多可郡津万村・日野村・重春村・比延庄村が成立。大正2年（1913）には津万村が町制を施行して西脇町が成立し、昭和27年（1952）にはこれらが合併して西脇市となる。加東郡芳田村や平成17年（2005）の黒田庄村との合併を経て、現在の西脇市となる。北西部は中町・加美町・八千代町が合併した多可郡多可町に接し、南部は加西市や加東市、北東部は丹波篠山市や丹波市と接する。

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

鹿野宮ノ前遺跡でサヌカイト製の削器、野村構居遺跡からは同縦長削片、市原新池遺跡からは同ナイフ型石器が出土している。大門畠瀬遺跡からはチャート製のナイフ型石器が出土している。

2 繩文時代

楠丘遺跡で焼石集積土坑が検出され、早期の押型文土器が出土している。富吉上遺跡からは後期の土器が出土している。上ノ段遺跡では落とし穴が検出されている。大垣内遺跡で有舌尖頭器が見つかっている。津万遺跡群でも津万5東区から晩期の深鉢片が出土している。

3 弥生時代

前期では黒田庄中学校遺跡や大垣内遺跡から土器が出土している。中期後葉になると遺跡数は飛躍的に増加する。大門畠瀬遺跡の濠状遺構や大伏北山遺跡で検出された段状遺構も弥生時代中期のものである。大門畠瀬遺跡では確認調査の際に磨製石剣片が出土している。鹿野宮ノ前遺跡からも銅劍形石剣が出土しており、堅穴住居が検出されている。

後期には黒田庄中学校遺跡で堅穴住居跡が検出されており、岡・古門遺跡でも遺構が確認されている。前坂北山遺跡や上戸田遺跡からは後期末頃の堅穴住居跡が検出されている。大垣内遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡等が検出され、対岸の鹿野宮ノ前遺跡とともに拠点集落と考えられている。津万遺跡群でも鶴・西鶴・津万地区から堅穴住居跡や土坑、溝が見つかっている。寺内地区からは後期末の堅穴住居跡が検出されている。大伏北山遺跡で見つかった墳墓はこの時期と考えられている。上戸田遺跡からも後期後半頃の堅穴住居跡が検出されている。津万平野のあたりに分布する微高地には同

時代や次の古墳時代の集落が点在していることが判明した。杉原川流域では富吉遺跡の規模が大きい。

4 古墳時代

大垣内遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居跡等が検出された。加古川対岸の岡ノ山古墳群と同一時期の集落遺跡であり注目される。中期には、円満寺・東の谷遺跡で堅穴住居跡1棟が確認された程度であり、他にも詳細の分かる遺跡は知られていない。中期に該当するTK208型式併行以前の須恵器窯跡は確認されていない。

黒田庄中学校遺跡で弥生時代終末期～奈良時代の遺物が出土し、古墳時代後期の堅穴住居跡が検出された。また、大門畠瀬遺跡では7世紀初頭の堅穴住居跡3棟が確認された。谷田遺跡に古墳時代終末期の堅穴住居跡2棟等があるほか、津万遺跡群寺内地区において、古墳時代中期の粘土採掘坑が確認された。円満寺・東の谷遺跡で7世紀後葉～8世紀初めの土器等とともに陶馬が出土した。

各地に須恵器窯跡が知られている。TK10型式併行の前坂・大歳神社窯跡、TK43～TK209型式併行の田高窯跡、黒田・大山谷1号窯跡、黒田・中池1号窯跡等4基の窯跡が加古川左岸に営まれた。また、TK217型式併行の北垣内池窯跡が、TK43～TK209型式併行の童子山窯跡、谷窯跡等が知られる。

前期古墳として、岡ノ山古墳と滝ノ上古墳群20号墳がある。岡ノ山古墳は加古川上流域の前期古墳で唯一の前方後円墳である。全長51.6mを測り、埋葬施設は長さ約8mの堅穴式石室と推測されている。埴輪は確認されていない。滝ノ上古墳群20号墳は、葺石をもつ一辺16mの方墳である。埋葬施設は北頭位の割石積み堅穴式石室であり、硬玉製勾玉・碧玉管管玉・ガラス小玉・鉄刀・鉄槍等の副葬品が出土した。副室とされる箱式石棺状の施設には仿製內行花文鏡・銅鏡・鐵鏡・方形鍔先等が納められていた。

続く中期には、周濠と埴輪をもつ全長約30～40mの前方後円墳である水塚古墳が知られている。また岡ノ山西古墳群の3基から円筒埴輪、蓋形埴輪片が採集されている。

10m程度の円墳あるいは方墳、葺石や埴輪をもつ直径20～30m程度の円墳等があり、前者には経ヶ芝古墳、下戸田古墳群、後者には道の上1号墳、上本町大塚1号墳、苦木古墳、頼政塚古墳、福地・百合山1号墳などがある。経ヶ芝古墳の埋葬施設は箱式石棺2基で、副葬品は出土しなかった。大伏・南山1号墳の箱式石棺からは、直弧文を施した鹿角袋の鉄劍、鉄刀等が出土した。

後期から終末期にかけての古墳には、傑出した内容を持つ古墳あるいは古墳群は認められない。加古川左岸の黒田・前坂・岡に広がる比較的大きな扇状地周辺に古墳が集中する傾向がある。10基に満たない古墳で構成される古墳群が多いが、小苗古墳群には40基以上、黒田・栢木谷古墳群には22基の横穴式石室墳が知られる。井原至山古墳は、MT15型式併行期の両袖式の横穴式石室を持つ古墳である。

寺内古墳群は、28基の古墳が7世紀第2四半期から末にわたり、均質的に営まれた古墳群であることが判明した。横穴式石室墳が集中するのは、石ヶ谷古墳群、高松古墳群である。高松7号墳は、坂本古墳群1号墳と同様、加古川流域に多いとされる横穴式石室内に小石棺を持つ古墳として知られる。城山1号墳は確認調査により横穴式石室の存在が認められた。TK10およびMT85型式併行の須恵器が出土し、多可町内で最古の横穴式石室と判明した。

5 律令期

津万地域は、すでに播磨国風土記に託賀郡都麻里の記載が見られ、その後の和名抄では資母里と呼ばれた範囲に当たるものとされる。ハゼノ木遺跡では整然と並んだ3棟の倉庫群が検出されている。鹿野宮ノ前遺跡でも大型の掘立柱建物跡が見つかっている。上ノ段遺跡（野村廃寺）と、八坂廃寺が近接して造営されており、平安時代には山林寺院と呼べる寺院が造られている。

大門烟瀬遺跡からは掘立柱建物跡や溝が検出され、円面鏡が出土している。津万遺跡群跡地区では掘立柱建物が検出され石帶・円面鏡などが出土している。津万地区からは「妻」の墨書のある須恵器が出土している。須恵器窯跡では、18支群の東播北部古窯跡群と総称され、6世紀後半から12世紀末まで約200基の窯跡が確認されており、11世紀から12世紀末を中心に碗類を主体とした雑器類を生産している。津万遺跡群近隣の大伏窯跡群や煙瀬未谷窯跡群では8世紀後半から9世紀前半、大門1号窯は9世紀代に生産を行っている。12世紀末には東海地方の影響を受けた分塙柱を備えた綠風台窯が出現している。

加古川沿いには経塚も分布している。久安5年(1149)銘経筒が出土した福地経塚、承安4年(1174)銘経巻が出土した石原経塚などが著名である。喜多城山城跡や大伏北山遺跡からも経筒と思われる土師器筒形容器が出土している。

6 中世

平安時代には道田莊や比延莊、黒田莊などの荘園が建てられ、津万郷が含まれる道田莊は平家没官領から平頼盛へと返還、その子光盛から、承久の乱後間もない寛喜元年(1229)にはその四女三条局に相伝されている。道田莊は皇室を本家として、領家に平氏を置く荘園であった。寛正三年(1462)、道田莊内の津万郷では、津万三郎右衛門尉満京が久我家に対して出した請文が残っており、在地の土豪による請所が成立する。郷名の津万を名字とする土豪は、津万地区で検出された複数棟の掘立柱建物、銅鏡や鉄・毛抜き、青白磁などを有した墓や、鳥帽子を有した墓などとの関係を想像することができる。その後、守護赤松氏から庶流の在田氏、別所氏、住吉神社や羽柴秀吉の支配を受ける。

城郭関係では、方形区画を検出した鹿野官ノ前遺跡や、山城全体の調査を実施し古後藤の辻などが出土した水尾城跡、甲冑や刀剣類の部品が出土した喜多城山城跡や、平地居館跡である比延前田遺跡、野村構居跡などが調査されている。

【参考文献】

岸本一郎 1987 「兵庫県西脇市岡之山周辺の古墳」『古代学研究』113号 古代学研究会

黒田庄町 1972 『黒田庄町史』

西脇市 1983 『西脇市史』本篇

兵庫県教育委員会 1991 『大垣内遺跡』兵庫県文化財調査報告第88番

兵庫県教育委員会 2013 『高砂3号墳』兵庫県文化財調査報告第437番

兵庫県教育委員会 2017 『大垣内遺跡・大伏北山遺跡』兵庫県文化財調査報告第486番

兵庫県教育委員会 2020 『喜多城山城跡』兵庫県文化財調査報告第512番

中町教育委員会 2000 『宮ヶ谷道路 長坂谷道路 円満寺東の谷道路 西安田道路』中町文化財報告18-2

中町教育委員会 2004 『中町の道路Ⅱ付 国山1・2号墳 中村機場』中町文化財報告30

中町教育委員会 2004 『東山野原1・2号墳 付 城山古墳群 東山古墳群 田野口・北道路』中町文化財報告31

西脇市教育委員会 2003 『西脇市古墳調査集録』西脇市文化財調査報告書第12集

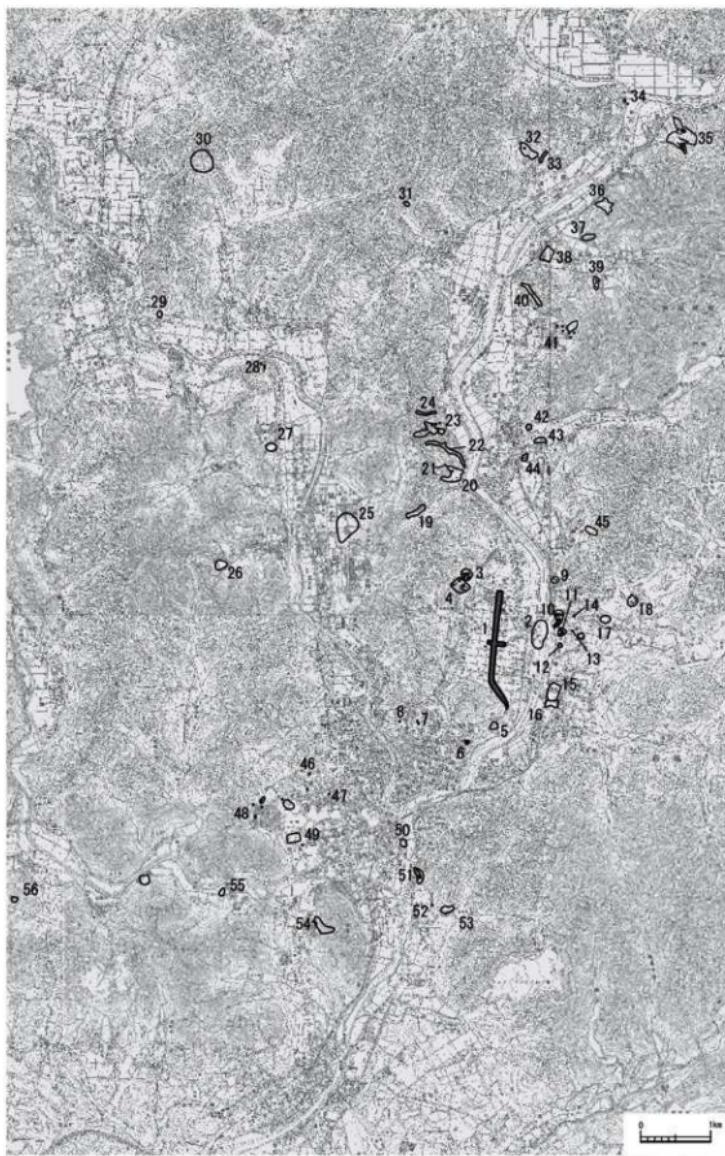
西脇市教育委員会 2004 『寺内古墳群』西脇市文化財調査報告書第13集

西脇市教育委員会 2005 『西脇市集落調査集録』西脇市文化財調査報告書第15集

西脇市教育委員会 2007 『西脇市集落道路調査集録Ⅲ』西脇市文化財調査報告Ⅱ

表2 津万遺跡群周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	津万遺跡群	15	比延前田遺跡	29	城山古墳群	43	岡・古門遺跡
2	大垣内遺跡	16	鹿野官ノ前遺跡	30	円満寺・東の谷道路	44	植丘道路
3	寺内古墳群	17	谷田遺跡	31	石原経塚	45	岡・福地経塚
4	坂本古墳群	18	北川内池道路	32	田高塚跡	46	谷原跡
5	上戸田遺跡	19	煙瀬未谷窯跡群	33	役の行者古墳群	47	苦木古墳
6	下戸田古墳群	20	大門・煙瀬遺跡	34	井原至山古墳	48	緑風台古墳群
7	上本町大塚古墳群	21	大門1号窯	35	小畠古墳群	49	上ノ段道路(野村庵寺)
8	童子山廻路	22	大伏・北山遺跡	36	黒田・柏木谷古墳群	50	野村佛居跡
9	福地・百合山古墳群	23	大伏窑跡群	37	黒田・中門1号窯跡	51	高松古墳群
10	溝ノ上古墳群	24	大伏・南山古墳群	38	黒田庄中学校遺跡	52	賴政丸古墳
11	岡ノ山西古墳群	25	富吉上道路	39	黒田・大谷1号窯跡	53	石ヶ谷古墳群
12	岡ノ山古墳群	26	市原・新池遺跡	40	前坂・北山遺跡	54	経ヶ古墳
13	岡ノ山古墳	27	野中・ハゼノ木道路	41	前坂・大藏社窯跡	55	八坂庵寺
14	芦谷水塚古墳	28	道の上1号墳	42	喜多城山城跡	56	水尾城跡



第1図 津万遺跡群の周辺の遺跡分布図

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道175号西脇北バイパス事業は西脇市下戸田から西脇市黒田庄村大伏に至る延長5.2kmのバイパス事業として、平成9年度事業化され、平成12年度に用地着手、平成18年度から工事が着手されている。

路線予定地内には、弥生時代後期の堅穴住居跡が検出された上戸田遺跡、近世の窯跡である津万井近世窯跡、大門烟瀬散布地、大伏北山小テラス群等の埋蔵文化財包蔵地が知られていた。

兵庫県教育委員会が平成12年度に路線範囲の分布調査を行ったところ、低地部の水田面などから須恵器・土師器などの土器の小片が採集され、広い範囲で遺跡が広がっている可能性が考えられた。従来、低地部には寺内・中田遺跡、鷺・馬渡り遺跡、西鷺・門遺跡等が路線近辺に知られていたが、その範囲等は不明であった。分布調査の結果を受けて、遺跡の範囲、残存度、時代などの本発掘調査に向けたデータを得るために、確認調査を実施した。

確認調査は、用地の関係で立ち入りができない地点を除いて、平成16年度に開始され、基本的には1m×10mのトレンチを設定し、平地では機械掘削・人力掘削によって、丘陵部は人力掘削によって実施された。トレンチ総数は160本となる。その後、用地等の問題が解決した地点の確認調査も逐次実施した。

一連の確認調査の結果、北から「大伏北山遺跡」「大門烟瀬遺跡」「津万井窯跡」「津万遺跡群（寺内地区・西嶋地区・鷺地区・津万地区）」「上戸田遺跡」の本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は平成18年度より開始され、工事側の進捗状況に応じて路線内各遺跡、各地点を五月雨式に着手し、時には3遺跡を同時に調査する状況になりながら進行した。津万遺跡群寺内地区の本発掘調査は平成18・19年度に実施している。

「津万遺跡群」では、寺内地区を「津万遺跡群1」兵庫県文化財調査報告第526冊、西鷺地区・鷺1～4区を「津万遺跡群2」未刊、鷺5・6区・津万1・2区を「津万遺跡群3」兵庫県文化財調査報告第503冊、津万3区～8区を「津万遺跡群4」兵庫県文化財調査報告第518冊としてまとめている。本報告書は一連の津万遺跡群のもっとも北に位置する寺内地区を取り扱っている。

第2節 各調査の経過と整理作業

津万遺跡群の調査経緯は以下の通り。

①【分布調査】

平成12年度

遺跡調査番号 2000102

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 埋蔵文化財調査事務所 企画調整班 別府洋二

調査第3班 中川 渉、山上雅弘、松岡千寿

実施時期 平成12年4月25日

調査面積 260.000m²

② [確認調査]

平成16年度

遺跡調査番号 2004245 (津万地区) 590m²

遺跡調査番号 2004246 (鷺地区) 310m²

遺跡調査番号 2004247 (西鷺地区) 240m²

遺跡調査番号 2004248 (寺内地区) 280m²

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 埋蔵文化財調査事務所 調査第3班 別府洋二、上田健太郎

実施時期 平成16年12月13日～平成17年3月11日

平成17年度

遺跡調査番号 2005096 (寺内地区・津万地区)

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 埋蔵文化財調査事務所 調査第3班 上田健太郎

実施時期 平成18年3月13日～14日

調査面積 170m²

平成18年度

遺跡調査番号 2006186 (寺内地区・大門烟漬散布地)

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 埋蔵文化財調査事務所 調査第2班 吉誠雅仁、別府洋二

実施時期 平成19年3月19日～20日

調査面積 96m²

③ [本発掘認調査]

平成18年度

遺跡調査番号 2006054 (寺内地区)

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 埋蔵文化財調査事務所 調査第1班 西口圭介、山上雅弘、上田健太郎

調査第2班 吉誠雅仁、別府洋二、篠宮 正、池田征弘

実施時期 平成18年12月1日～平成19年3月23日

調査面積 6,998m²

平成19年度

遺跡調査番号 2007052 (寺内地区・西鷺地区・鷺地区)

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県立考古博物館 調査第2班 渡辺 畏、長瀬誠司、上田健太郎

実施時期 平成19年7月17日～12月12日

調査面積 10,383m²

遺跡調査番号 2008073 (津万地区1東区・1西区・2区・西鷺地区・鷺地区)

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者	兵庫県立考古博物館 調査第2班 渡辺 昇、鐵 英記、上田健太郎
実施時期	平成20年 6月19日～12月2日
調査面積	9,019m ²
平成20年度	
遺跡調査番号	2008197 (津万地区3西区・4東区)
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	兵庫県立考古博物館 調査第2班 渡辺 昇、鐵 英記、上田健太郎
実施時期	平成20年9月8日～平成21年3月10日
調査面積	2,500m ²
平成21年度	
遺跡調査番号	2009189 (津万地区3中央区・4東区・4西区・5東区・5西区・西鷲地区)
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2班 別府洋二、深江英憲、池田征弘
実施時期	平成21年6月29日～平成22年1月22日
調査面積	2,907m ²
平成22年度	
遺跡調査番号	2010137 (津万地区3東区・6西区・6東区・7区・8区)
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第1課 西口圭介、第2課 池田征弘
実施時期	平成22年7月20日～平成22年11月12日
調査面積	2,760m ²
平成30年度	
遺跡調査番号	2018015 (西鷲地区)
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査第2課 岸本一宏 調査第1課 松崎光伸
調査期間	平成30年12月3日～平成31年1月31日
調査面積	896m ²
調査補助員、室内作業員	
	西本寿子、櫻井雅子、野村大作、山本亮司、赤壁千恵子、藤田由美、藤田 泉、 五百歳道代、佐藤朋子、石野照代、森 昌代、森崎由起子、菊島昌子、門田論佳

〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成23年から始まったが、途中、中断の時期を挟んで、平成30年度・平成31（令和元）年度・令和2～4年度に接合・補強・写真撮影・保存処理等、実測・製図・レイアウト等の作業を実施し、分析鑑定を依頼、原稿を揃えた上で報告書を刊行した。

調査担当者：別府洋二、西口圭介、山上雅弘、篠宮一正、上田健太郎

整理保存課：深江英恵、久保弘幸、別府洋二、西口圭介、菱田淳子、大島昭海

眞子ふさ恵、鳥村順子、三好綾子、小野潤子、上田沙耶香、荻野麻衣、奥野致子、遠藤貴子、
佐々木愛、柴崎良樹、菅生真理子、平宮可奈子、前谷幸次、吉田優子、池信和彦、
栗山美奈、友久伸子、大前篤子、池田悦子、高瀬敬子、前田陽子、森本貴子、八木和子、佐伯純子、
柏木明子、川村由紀、佐々木誓子、榎真菜美、山口陽太、桂 昭子、香山玲子、東郷加奈子、
太田泉穂、児玉昌子、藤尾裕子、藤田久範（順不同）

第3章 遺構

第1節 寺内0区の遺構

1. 調査区の概要

津万遺跡群の北端に位置する調査区で、南北約22m、東西約48m、面積約751m²を測る。天神池の東側から南側に細長く伸びる段丘上に立地し、調査区北側には削平が著しく及んでいる。基本層序は、表土ないし現耕作土の直下に遺構面が露出するか、もしくは厚さ10cmに満たない旧耕作土を部分的に介するのみである。遺構検出面の標高は63.8～64.7mで、調査区西半部が高く東端ほど低い。

この地区からは弥生時代後期末の竪穴住居跡1棟、溝1条、中世の掘立柱建物跡1棟、井戸3基、時期不明の土坑2基、不明遺構2基、溝1条を検出した。

2. 遺構

竪穴住居跡（図版7・8、写真図版5）

SH1　調査区南壁付近の中央やや西寄りで検出し、南側約半分が調査区外に及ぶ。北西側の一部では標高64.5m付近まで残存するが、南東側の大部分では深さ20cm余りが削平され旧耕作土層（A層）が覆う。検出できた範囲での長さ6.65m、幅3.47m、検出面からの深さ23cmを測る。埋土は概ねしまりのさほど強くない黒褐色のシルトから細粒砂で構成される。床面中央より西端までの範囲では厚さ4cm程度の貼り床が設けられていた。屋内施設は床面において中央土坑及び主柱穴、東西両端に高床部、壁際に周壁溝を検出したほか、さらに外周の高床部が削平を免れた範囲に認められる。

中央土坑は長さ1.01m、残存幅48cm、床面からの深さ45cmを測る。埋土は黒色のシルトから細粒砂2層で構成され、下層のほうより炭っぽく粘性が強い。周囲に周壁堤の盛り上がりが巡り、上部幅19cm、裾部幅32cm、床面からの高さは4cmを測る。

中央土坑を挟んで東西両脇に1本ずつ主柱穴と考えられる柱穴を配し、両者の間隔は2.27mである。北側にも2本の主柱穴の可能性のある柱穴（P1・P4）を確認した。両者の間隔は2.83mを測る。床面の東西両端に7cmほどの高まりの段差（高床部）が設けられ、東側の高床部と床面との境界付近と床面の周囲の北東側の一部を除いた範囲に周壁溝が巡る。周壁溝の幅は13～22cmで、深さは1～7cmである。さらに外周には床面より25cm程度高い高床部が認められ、削平の及ぶ南西側に続いている可能性が看取される。この高床部の北西側に長さ1.01m、幅54cmの張り出し部が設けられ、周囲の高床部より12cm程度低い。

床面及び外周の高床部から丹波地域の特徴を持つ高坏6や装飾器台8など弥生時代終末期の土器がまとめて出土しているほか、周壁溝からはヤリガンナの柄M2が出土している。

掘立柱建物跡（図版13、写真図版7）

SB1　調査区南壁付近の中央やや西寄りで検出し、SH1を切る。建物の南側は調査区外に延びる可能性がある。規模は南北2間（2.53m）以上×東西4間（6.82m）に復元され、P2-4やSH1内の未検出の柱穴が伴う総柱建物と考えられる。床面積は残存する範囲の13.81m²以上、主軸方向はN 2° Wとは南北正方位を指向する。柱の掘方はP2-4が直径23cmであるほかは直径32～52cm、検出面からの深

さは46～85cmである。検出底が地形に沿って北西側が高く、南東側ほど低い傾向が看取される。東西方向のP 1-1 からP 1-5 の柱間は、P-1・P-2 間が1.36mと短いが、他は平均1.82mとなる。一方、南北方向の柱間はP 2-5 ・P 3-5 間が1.15mと短く、他の平均は1.33mである。

井戸（図版11・12、写真図版8）

SE 1 調査区北壁中央付近で検出した石組の井戸である。掘方の平面形は長軸1.59m、短軸1.42mの梢円形で、断面は垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは2.38mを測る。

長さ75cm程度の丸太木を使用して方形の井桁を組み、その上部から検出面まで10～35cm大のはば規模の壙たたいた亜角礫が積み上げられている。石組の検出上部での内法は長軸1.03m、短軸93cmを測り、底部での内寸径は72cmと若干すばまりつつもほぼ円筒状を呈している。なお、底部において直径約68cmの水溜とみられる痕跡を確認した。

SE 2 調査区北壁東部で検出した素掘りの井戸である。掘方の平面形は長軸1.56m、短軸1.36mの梢円形であり、断面はU字状に掘り込まれ、深くなるにつれやや幅をすばめている。検出面からの深さは96cmを測る。井戸としたが單なる土坑ないし、隣接するSE 3 の水溜であった可能性がある。

SE 3 調査区北東隅付近で検出した石組の井戸である。掘方の平面形は長軸1.66m、短軸1.59mの若干歪な円形であり、断面は垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは80cmを測る。

石組は検出面より底部まで検出し、13～45cm大の亜角礫が積み上げられている。石組の検出上部での内法は長軸98cm、短軸87cmを測り、底部内寸径は約82cmと底部に向かって若干すばまり気味の円筒状を呈している。なお、井戸底において水溜の痕跡は認められなかった。

不明遺構（図版9、写真図版6・8）

SX 1 調査区南壁付近中央やや東寄りで検出し、北西部が確認調査トレンチにより損なわれている。掘方の平面形は長軸3.34m、短軸3.08mのビーンズ状を呈する梢円形であり、検出面からの深さ49cmを測る。断面形は浅いすり鉢状を呈する。底部付近（4・5層）は水成堆積と考えられる黒みを帯びた粘性の強いシルト層であるのに対し、上部（1・3層）は基盤層（8層）をブロック状に含む中粒砂混じりのシルトから細粒砂による緊密度の低い堆積が観察される。

SX 2 調査区南壁付近中央やや東寄りで検出し、南西部約4分の1が搅乱によって損なわれている。東辺のみに石組みを構築した不完全な石組土坑であり、掘方の平面形は長軸4.08m、短軸3.70mの歪な梢円形であり、検出面からの深さ47cmを測る。土坑の東から1/3ほどのところを石垣が南北に分断する。35～67cm大の亜角礫を2～3段積み上げており、石面（いしづら）が西側を向くため東側が裏込めとなる。裏込土は表土とそのほかの土砂を互層に積む。土坑西側は水溜として利用されたためか、水成堆積が顕著であった。裏込めからは15世紀代の土師器鍋片210、石垣の前面、水溜の堆積土からは近世の陶磁器が出土している。

土坑（図版6、写真図版4）

SK 1 調査区西部で検出した。灰黄褐色土とベース土がブロック状に混ざる風倒木痕を切る。平面形は長軸1.54m、短軸97cmの梢円形であり、検出面からの深さ54cmを測る。断面形は逆台形気味のU字形を呈し、埋土は概ね黒褐色の極細砂で構成される。

SK 2 調査区北壁付近中央で検出した。掘方の平面形は長軸1.51m、短軸1.27mの楕円形であり、検出面からの深さ34cmを測る。埋土はよくしまった礫混じりシルト单層で構成される。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

溝（図版9・10、写真図版4・6）

SD 1 調査区南壁付近中央やや東寄りで延長6.24mにわたって検出し、東端は建物基礎によって損なわれている。最大幅36cm、検出面からの深さ12cmを測る。

SD 2 調査区南東部において延長8.2mにわたって検出し、一部を確認調査トレンドによって損なわれる。最大幅85cm、検出面からの深さ14～25cmを測る。北西側の溝底に比べて南東側の溝底が8cm程度低い。埋土はSH 1 埋土に近く、黒褐色の粘性を帯びたシルトから細粒砂で構成され、溝底レベルが低くなる南東側では上下2層に分かれる。シルト質の1層から弥生時代終末期の土器が出土している。

第2節 寺内1区の遺構

1. 概要と層序（図版14・15、写真図版9・10）

寺内1区は東西方向の農道を挟み北側に寺内0区（平成19年度調査）と東西方向の市道と未調査地を挟み南北方向に寺内2区（平成18年度調査）が位置している。東西幅約55m、南北東辺長約41m、南北西辺長約27mの東西に長い台形の調査区で、面積1,870m²を測る。

調査前の現状は圃場整備が行われた水田であり、遺構検出面までの層序は耕作土、床土があり、南東部など部分的に圃場整備以前の擾乱が存在した。床土の下層には圃場整備時の整地層が部分的にあり、その下に耕作土が広がっている。耕作土の下に床土が伴っていないため、畑作の耕作土であると考えられる。圃場整備の整地土や圃場整備前の耕作土によって、本来の遺跡の面は削平されており、黒色土層に黒色系の埋土の遺構であるため、基盤層である黄褐色系の土層までの漸移的な層を除去して遺構検出を行った部分が存在する。したがって、遺構の深さの記述は検出面からである。

全体的な地形は北東方向から南西方向にわずかに傾斜している。

検出した遺構は、西半部は疎らであり、東半部は密集している。弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴建物跡1棟・溝1条、中世の掘立柱建物跡7棟・土坑4基・溝6条、近世の溝1条がある。

2. 弥生時代から古墳時代初頭の遺構

竪穴建物跡（図版16、写真図版11・12）

SH 1 調査区北辺やや東よりで検出した平面形が方形を成す竪穴建物跡である。SD 7と切り合い、古い。全体に後世の削平が著しいため全容は不明であるが、高床部を持つ竪穴建物と考えられ、建物東辺周壁溝の一部が溝SD 9である可能性が高い。低床部は東西3.1m、南北3.9m、検出面からの深さは最大16cm程度残存している。低床部の周間に段および壁溝が存在するため、修復拡張した可能性がある。低床部中央に中央土坑が存在し、南北脇に柱穴（P121・P142）が存在する。低床部四隅には柱穴（P141・P140・P108・P83）が存在する。中央土坑の直径50cm、深さ15cmを測る。中央土坑脇の柱穴の直径28cm、深さ40cm、四隅の柱穴の直径22cm前後、深さ50cm前後を測る。

溝SD 9が建物東辺周壁だとした場合、高床部の幅は1.0mであり、高床部を全周復原した規模は東西

5.1m、南北5.9mと推定できる。さらに溝SD 9の東側に存在する溝SD 8は周堤帯外をめぐる溝の一部と考えた場合、周堤外までの直径は8m程度に復原できる。中央土坑から弥生土器鉢23が、柱穴P141から弥生土器壺22が出土した。

溝（図版17、写真図版13）

SD 2 調査区南半部にあり、東西方向に直線的に縱断し、西に傾斜する溝である。幅1.2m前後、深さ14cmで、断面形は東側が逆台形、西に行くに従い、浅いU字形を呈する。南西部で近世の溝SD 1と重複し、SD 1より古く、東から中央部にかけて溝SD 6・SD 3・SD 4と重複し、古い。遺物は弥生土器壺24・35、壺25～31、鉢32～34、小型丸底壺36、有孔鉢37、高壺38・41～44、器台39・40が出土した。

3. 中世の遺構

溝（図版17、写真図版21）

SD 3 調査区のやや南半部にあり、溝SD 2の北側に位置する東西方向の溝である。幅1～0.4m、深さ0.3～1mで、断面形は浅いU字形を呈する。溝SD 2、土坑SK 2と重複してSD 2より新しく、SK 2より古い。白磁皿232が出土した。

SD 4 調査区の東半部にあり、溝SD 1とSD 5の間に位置する東西方向の溝である。掘立柱建物跡SB 5の辺りで途切れている。幅0.5～0.3m、深さ10cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝SD 2と重複して新しく、溝SD 3、掘立柱建物跡SB 3 柱穴P23と重複して古い。須恵器壺230が出土した。

SD 5 調査区の北半部にあり、溝SD 4の北側に位置する東西方向の溝である。幅4.0～3.5m、深さ0.2～0.1mで、断面形は浅いU字形を呈する。掘立柱建物跡SB 3 柱穴P25・P102と重複して古い。須恵器壺231が出土した。

SD 6 調査区の南東部にあり、溝SD 2の南側に位置する東西方向の溝である。幅8cm、深さ5cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝SD 2と重複して新しく、掘立柱建物跡SB 6 柱穴P119と重複して古い。図示できる遺物は出土していない。

SD 7 調査区の北東部にあり、掘立柱建物跡SB 4の西側に位置する東西方向の溝である。幅40cm、深さ10cmで、断面形は浅いU字形を呈する。堅穴建物跡SH 1と重複して新しい。図示できる遺物は出土していない。

SD10 調査区の南東部にあり、溝SD 2の南側に位置する南北方向の溝である。幅30cm、深さ10cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝SD 2と重複して新しく、掘立柱建物跡SB 2 柱穴P39と重複して古い。図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡（図版18～21、写真図版14～20）

SB 1 調査区南東隅で検出した掘立柱建物跡で、東側および南側は調査区外に広がると考えられる。溝SD 1・SD 2と重複し、SD 1より古くSD 2より新しい。南北方位をN9°Wにとる建物跡である。南北1間（2.6m）以上・東西2間（4.8m）以上である。建物の柱間は、東西1間は2.4mである。柱穴は円形を基本とし掘方径35cm、深さは20cmである。柱穴から図示できる遺物は出土していない。

SB 2 SB 1の西側に位置する掘立柱建物跡で、南辺は調査区外に延びる可能性がある。SD 2と重複

し、新しい。南北方位をN7°Wにとる総柱建物跡である。南北3間（7.8m）以上・東西3間（7.0m）、床面積54.6m²以上の規模である。建物の柱間は、南北は中央が3.0m、両端が2.4m、東西は2.3mである。柱穴は円形で、掘方径40cm、深さは15cmである。柱穴P36から須恵器椀211、柱穴P44から土師器鍋217が出土した。

SB3 調査区北東隅に位置し、ほぼ同位置にSB4が重複して存在しており、SB3 P7がSB4 P51を切り、SB3 P6がSB4 P52を切っていることから、SB3がSB4より新しい。また、溝SD4・SD5と重複し、新しい。南北方位をN1°Eにとる総柱建物跡である。東西5間（10.6m）・南北5間（12.5m）、床面積132.5m²の規模である。建物の柱間は、東西は約2.2m前後で、東端のみ1.8m前後と狭い。南北は2.5～2.7m前後である。柱穴P102の底部には建築部材の端材を利用した礎板W4（ヒノキ属）を敷いている。

柱穴P12・P19から須恵器椀221・222、柱穴P20から須恵器小皿219、柱穴P100から須恵器甕223、柱穴P6から土師器皿216、柱穴P21から白磁碗224が出土した。

SB4 調査区北東隅に位置し、ほぼ同位置にSB3が重複して存在している。SB3 P7がSB4 P51を切り、SB3 P6がSB4 P52を切っていることから、SB4がSB3より古い。また、溝SD5と重複し、新しい。南北方位をN2°Eにとる総柱建物跡である。東西4間（8.6m）・南北4間（9.8m）で、北東部分のみ1間分（1.8m）延びる。床面積93.9m²の規模である。建物の柱間は、東西約2.1mが基本で、2.5mもある。南北2.5m前後である。

柱穴P48・P56から須恵器椀214・213、柱穴P54から土師器鍋212が出土した。

SB5 調査区のほぼ中央に位置する。南北方位をN5°Eにとる総柱建物跡であるが、ややゆがみがある。北東隅柱はSB6と同様に検出できなかった。東西2間（4.0m）・南北2間（5.2m）であるが、西辺柱列に接しても1列存在する。床面積20.8m²の規模である。建物の柱間は、東西は2.0mである。南北は2.6mを基本に2.2m、2.7mである。柱穴P96から土師器鍋218が出土した。

SB6 SB6はSB2の西側、SB5の南側に位置する掘立柱建物跡で、東辺中央柱P119は溝SD6と重複し、新しい。北東隅柱は溝SD2と重複し、切っているはずであるが、検出できなかった。南北方位をN7°Eにとる総柱建物跡である。東西2間（5.0m）・南北2間（5.4m）、床面積27.0m²の規模である。建物の柱間は、東西約2.25mである。南北2.7mである。

柱穴から図示できる遺物は出土していない。

SB7 調査区北辺中央部に位置し、調査区外に延びると考えられる。柱穴4本が東西方向に列をしているのみであり、構の可能性もある。柱列の方位をN89°Wにとる。柱間は、約18m間隔である。柱穴から図示できる遺物は出土していない。

土坑（図版22、写真図版22）

SK1 掘立柱建物跡SB2とSB3の間に位置する土坑である。南端の一部を溝SD1と重複し、新しい。平面形は直径約1.8～2.2mの円形で、深さ30cmを測る。

南側にまとまって川原石とともに土師器小皿225、土師器羽釜226・227が出土した。

SK2 掘立柱建物跡SB2の北側に位置する土坑で、溝SD3と重複し新しい。長軸方位をN80°Wにとる長辺3.6m、短辺1.2m、深さ30cmを測る長辺円形の土坑である。断面形状は浅いU字形を呈する。須恵器小皿228、須恵器椀229が出土した。

SK3 調査区北西隅に位置する土坑である。平面形は東西がやや長い隅丸長方形で、東西12m、南

北1.1m、深さ10cmを測る。埋土には浅黄色の粘土塊を含んでいる。図示できる遺物はない。

SK 4 SK 3 の東側に位置する土坑である。直径1.7m、深さ16cmを測る。断面は浅い逆台形で、平面形が円形の土坑である。図示できる遺物はない。

4. 近世の遺構

溝（図版14）

SD 1 調査区南東角に位置し、L字状に屈折する溝で調査区外南東角方向に伸びている。溝SD 2・SD 3・掘立柱建物跡SB 1と重複し新しい。検出延長は南北方向約17m、屈折して東西方向約12mを測る。最大幅は南東端で約1.3m、深度75cmを測り、北西から南東へ向かって流れている。

遺物は施釉陶器小杯233、染付磁器碗234・235、染付磁器皿236、投弾S 3、砥石S 6、木製有孔円盤W 2、木製桶底板W 3、漆椀W 5が出土した。

5. 小結

寺内1区は大きく分けて、弥生時代から古墳時代初頭の遺構、中世の遺構、近世の遺構を調査した。

弥生時代から古墳時代初頭の遺構は、溝SD 2と堅穴建物跡SH 1（SD 9・SD 8を含む）がある。北側の寺内0区にも同時期の遺構が存在しており、遺物の出土状況から考えると、溝SD 2を南限として遺跡の範囲は北に広がると想定できる。

中世の遺構は、溝、掘立柱建物跡、土坑がある。遺構の重複状況や遺物の時期差を考慮した遺構方位から4期に分けることができる。

溝SD 4・SD 5・SD 6はやや蛇行しながら流れおり、掘立柱建物跡に切られている。

掘立柱建物跡SB 1・SB 2は、ほぼ方位も同じである。

掘立柱建物跡SB 4・SB 3は同じ場所に建ち、N 2° ~ 3° Eと方位も同じであることから、柱穴の先後関係からSB 4からSB 3に建て替えられたと考える。

掘立柱建物跡SB 5・SB 6は、N 5° ~ 7° Eと方位もほぼ同じである。溝SD 3が直交する。

近世の遺構は溝SD 1で土層の観察や周囲の擾乱状況から、江戸時代末期に屋敷地が存在していた可能性があり、溝SD 1は屋敷地を区画する溝の一部であった可能性が高い。

第3節 寺内2区の遺構

1. 調査区の概要

対象地は加古川の旧河道上に位置する。旧加古川が埋没し湿地化した凹部を中心に調査を実施している。南北長約56m・東西幅約20m、面積969m²を測る台形の調査区である。調査区の北半を中心には3時期以上の遺構面を確認した。これは、調査区の大半が、旧河道の凹部にあることに起因する。そのため、調査区の大半では、腐植物を豊富に含んだシルトによって構成される湿地状堆積が出現している。対して、灰白色シルトをベースとする微高地が南東部寄りに出現している。遺構は主に湿地部分より検出した。寺内2区の確認調査時には、土器の出土や堆積状況から旧河道の可能性が考えられた。本発掘調査区の東側に設定したトレンチではベースになるしっかりとした面が確認されていたが、遺構は全く検出されなかった。後世に大きく削平されてしまったことが要因と想定され、本発掘調査対象外とされた。

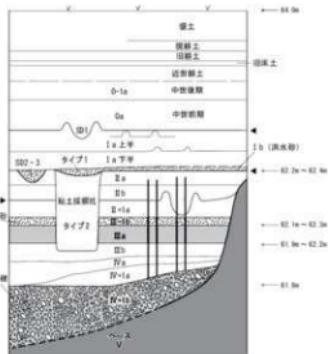
本發掘調査区では湧水とともに非常に柔らかいシルト等の堆積中から木材や比較的大きな破片の土器が出土している。調査の結果、古墳時代前中期から中期にかけての粘土採掘坑、弥生時代中期に遡る可能性のある溝・杭列等を検出している。

2. 基本層序（第2図）

調査区の堆積は、基本的には3・4区と同じであり、上面から①現代の盛土・現耕作土、②旧耕土、③旧床土、④近世耕土、⑤中世後期耕作土（0-1a層）、⑥中世前期の水田土壤（0a層）、⑦奈良時代から平安時代の水田土壤（Ia層）の順に出現する。2区の南東半部では⑦奈良時代から平安時代の水田土壤の層直下から灰白色シルト～粘土（V層）が出現している。これは3・4区において主に遺構を検出したベース面である。これに対して、湿地部分では中世とベースの間に複数の堆積層が存在する。これは埋没した旧河道の窪みに洪水起源の堆積物が入ったためである。

以下、層序と遺構面について述べる。層序の表記については加都遺跡II（兵庫県文化財調査報告第324号）・宮内掘臨遺跡I（同第365号）を参照のこと。

0-1a層 暗赤褐色（7.5YR 3/2）腐植質極細砂 下層より明調	中世後期
0a層 黄灰色（2.5Y 4/1）腐植質シルト鉄分斑あり	中世前期
Ia層 茶褐色腐植質シルト 複数枚の水田土壤 上下2層に分かれる。	平安カ
Ia上半 褐灰色（10YR 4/1）極細砂腐植質シルト	平安カ
Ia下半 褐灰色（10YR 4/1）腐植質シルト～粘土・黒褐色（10YR 3/1）腐植質シルト～粘土 奈良カ	
Ib層（洪水砂起因） 褐灰色（5 YR 4/1）シルト混じり極細砂	
IIa層 褐灰色（10YR 4/1）～黄灰色（2.5Y 4/1）シルト	
IIb層 褐灰色（10YR 5/1）極細砂	
II+1a層 灰黃褐色（10YR 4/2）シルト～灰褐色（7.5YR 4/2）細砂混じり腐植質シルト	
下層水田土壤	
III-1b層 灰白色（2.5Y 7/1）中砂～粗砂 洪水砂	
IIIa層 灰色（N 4/）極細砂質シルト～黒褐色（2.5Y 3/2）粘土 採掘対象層位	
IIIb層 にぶい黄橙色（10YR 7/3）粘土～粘性を持つシルト	
IVa層 黒褐色（5 YR 3/1）～にぶい褐色（7.5YR 5/4）腐植質シルト 植物未分解 ビート層	
IV+1a層 褐灰色（7.5YR 4/1）シルト混じり細砂	
IV+1b層 褐灰色（10YR 6/1）極細砂～砂礫層 径15cm程度の礫含む	
V層 灰黄色（2.5Y 7/2）シルト ベース層	



第2図 基本土層模式図

3. 遺構

寺内2区の遺構は、土坑（粘土採掘坑）及び土坑（粘土採掘坑）群と同じ遺構面で検出された溝

SD 2・SD 3に加え、下層の水田造構及び水田造構に伴うと考えられる溝SD 8・SD 9、さらに粘土採掘坑よりも上層の水田土壤 I a層に伴うSD 1がある。

土坑（粘土採掘坑）（図版26～42、写真図版25～41）

本発掘調査時に機械や人力によって盛土や中世以降の堆積層を除去したところ、大小の土坑が連続・密集して検出された。四周及び中央を通る東西南北にサブトレンチを掘削して、調査の進め方を検討した。造構番号はSK 1から順に配していくが、連続して掘削されたと想定される土坑列については枝番号を付していく。調査は北側と南側の両側から進行したため、北側はSK 1から、南側はSK101から番号を付していく。

最終的に北半ではSK 1からSK 64までを付し、枝番号を含めて100基の土坑を検出した。南半ではSK101からSK 138までを付し、枝番号の土坑を含めて63基の土坑を検出した。土坑の中には調査区畦畔やトレンチを挟んで同一のものと判断されるものに別番号を付したもの、掘削すると非常に浅く消滅したものや、他の土坑掘削中に壁が崩れて形状を失ったものも存在する。これらのものも含めて合計163基の土坑を検出している。

土坑群は調査区の北東から南西に広がっており、基本的には短径2m程度の長円形や円形の土坑を掘削している。北端部や東半部で検出された土坑は単体のものもある。調査区の南西に向かうと円形や楕円形の土坑が繋がっているような不定形のものが多く、平面では切り合いの新旧関係は不明であった。

検出した造構の大半は粘土採掘に伴う土坑と考えられ、II a層上面、もしくは更に上層の洪水砂 I b層が被覆する以前に掘削されている。採掘坑は60～70cmの深さで掘削しているものが多く、大半は、III b層上面まで掘削が及んでいる。

採掘坑のいくつかは、袋状に掘削されている。袋状に掘削された層位は主にIII a層である。このことから、採掘対象とした粘土はIII a層であったと考えられる。同層に当たって、土坑壁を袋状に掘り広げており、下層のIII b層に至って掘削を中止している。また、III b層の洪水砂層が厚い地点については掘削を避ける傾向にある。また、III a層の堆積がない微高地には殆ど土坑は掘られていない。

また、土坑は、掘削と埋め戻しを行い、なお且つ完全に埋め戻さなかった可能性が高い。即ち、埋め戻した採掘坑埋土の多くは上下2層に分かれており、自然堆積の様相を見せるタイプ1（上層）と掘削残土を埋め戻したと考えられるタイプ2（下層）が認められる。

タイプ1：タイプ2によって完全に埋めることができなかつた土坑内に周辺の残土及び洪水砂が流れ込んだものと考えられる。ラミネーションを伴う堆積である。この洪水砂は、調査区内でI a層下半とII a層の間で広範囲で検出されている褐色（5 YR 4/1）シルト混じり極細砂（I b層）である。

タイプ2：すべての粘土採掘坑から検出されている。粘土採掘坑はII a層上面もしくは更に上層のI b層が被覆する以前に掘削されており、タイプ2の埋土はII a層～採掘坑底面までのIII b層上面までの掘削土が含まれる。ここでは主に含まれる層とそのブロックの大小によって埋土を分類した。

- ・ 2-1-A II a・II b層を主とする径3～5cmのブロック（小）で構成 埋土の色調が明調
- ・ 2-1-B II a・II b層を主とする径10～20cmのブロック（大）で構成 埋土の色調が明調
- ・ 2-2-A II + I a～III a層を主とするブロック（小）で構成 埋土の色調が暗調
- ・ 2-2-B II + I a～III a層を主とするブロック（大）で構成 埋土の色調が暗調
- ・ 2-2-C III - I b層をブロックで混入 埋土の色調が暗調
- ・ 2-3 II + I a～III a層による埋土 ブロックがはっきりしない 埋土の色調が暗調

土坑内からは、土師器や器や板材、容器などの木製品が出土している。一部に薄い草本類の繊維の広がりを確認したが、取り上げることができなかった。また、SK 2 のように塊石を底に入れたものもある。土師器は、土坑の上層・中層・下層と様々な層位から出土しており、木器に触れるように出土したものもある。木器は、板材は主に底近くから水平に出土することが多く、6点出土した器は中層・下層から水平に出土している。棒状の木器は斜めに倒れて出土するものがみられる。土師器には別の土坑出土のものと接合するものが確認できた。出土遺物や土坑の概要は表11に一覧を示す。

粘土採掘坑以外の遺構（図版43、写真図版43）

以下、主な遺構として粘土採掘坑検出面の溝SD 2・SD 3について述べ、続いて、下層遺構の溝SD 8・SD 9及び杭列について、更に上層の溝SD 1について述べる。

SD 2・SD 3 共に調査区南半を南北に走り、南壁に消える溝である。SD 2 は幅1.4m前後、検出長12m、行走をN 9° Eに取り、逆台形に近い断面形状を持つ。I a層より下層から検出されており、灰黄褐色（10YR 4 / 2）腐植質シルトによって埋没している。SD 3 は幅2.7m前後、検出長16.5m、行走を南東から屈曲して南南西に取り、U字形に近い断面形状を持つ。I a層より下層から検出されており、I a層の影響を受けた黒褐色（10YR 2 / 2）腐植質シルトによって埋没している。2本の溝は層序からI a層下半とII a層の間にあり、粘土採掘坑を最終的に被覆し、窪みを埋める洪水砂起源の層序 I b層に対応する可能性が高い。SD 2 からは脚付無頸壺45、SD 3 からは須恵器壺胴部242が出土している。

下層水田遺構と溝SD 8～10・杭列（図版44、写真図版42・43）

粘土採掘坑による損壊を免れた部分より溝・杭列などを検出している。下層遺構検出面（IIIa層・III - I b層）を被覆するII a層・II + 1a層が水田土壤であることから推して、検出された溝・杭列は水田に伴う遺構と考えられる。

SD 8～10 SD 8・9・10は調査区東壁北端から出現し弧を描いて北端に消える溝である。このうち南側のSD 8-1は南へ分岐しており（SD 8-2）、分岐部分からは東西方向に打たれた杭列が検出されている。SD 8-1は、幅約1.4m・深さ約40cm、SD 8-2は幅約1.2m・深さ約8cm前後と浅い。SD 8-2は南側で更に分枝するが、東壁に対応する溝が現れず、南側流末は粘土採掘坑群によって不明となっている。SD 9は、SD 8-1と切り合い古く、幅2m以上深さ25cmを測る。SD 10は、SD 8-1・SD 9の間にあり、東壁に明瞭に出ないため不詳な点が多いが、幅1.3m前後・深さ25cm前後を測る。SD 8-1～SD 10は浅い溝状の凹み（SD 5）となって埋没した。第4章ではSD 5の出土遺物に言及している。

遺構の時期は遺物の少なさから詳らかではないが、SD 8 からは弥生時代中期と考えられる脚付無頸壺47・高杯48・壺49・壺底部50・51、チャート片が出土している。SD 9 からは鉢46が出土している。

杭列 粘土採掘坑SK 1-2とSK 4-1の間を中心東西方向に40本以上の杭・矢板が打たれた状況で検出された。これらの杭列は長さ1m前後・幅15cm前後の矢板、長50cm前後、径10cm程度の角材もしくは丸太材から作られた杭で構成されており、大型の杭は下端が砂礫層（IV+1 b層）に届いており、上端がII a層もしくはII + 1a層に届いている。小型の杭はおおむね下端はIVa層中、上端はIII b層上面までにとどまっている。

杭列は南へ分岐するSD 8-2を横断し、SD 8-1の南側に沿って打ち込まれており、SD 8 に伴う水量調節などの機能を負っていた可能性が考えられる。

出土した矢板には、針葉樹のおそらく建築部材等の板材を再加工したものと、シイやクリのような広

葉樹のミカン割り材から板状の材を作り出したものがある。杭には矢板と同様、針葉樹を再加工・再利用した角材の杭が存在している。その他、丸太材の先端を尖らせたものや、太い丸太材を縦に半裁したものがあり、ほとんどがクヌギやクマシデ、ケヤキといった広葉樹を用いている。丸太材は遺跡の周囲に広がる山々から採取したものであろう。周辺の里山の植生の一部が何われる。また、それぞれの先端や表面を加工した刃物は、ほとんどすべて非常に鋭く、鉄器を用いたものと思われる。

上層水田遺構と溝SD 1 (図版23)

上層水田遺構 近世耕作土以下の0~1a層・0a層・1a層は水田土壤と考えられ、断面観察では3面以上の畦畔を伴う水田面が観察できる。これらは概ね古代から中世後期と考えられる。この中で、1a層上面に畦畔を伴うSD 1が認められる。

SD 1 調査区北壁中央から出現し南北に走る溝である。残存する全長5.5m、幅50cm前後、走行をN3°Wに取り、浅いU字に近い断面形状を持つ。粘土探掘坑の検出面(上層遺構面)上から検出したが、北壁1a層上面に畦畔を伴うSD 1が認められる。溝は0a層によって埋没しており、古代から中世前期の時期に機能していたと考えられる。

第4節 寺内3区の遺構

1. 調査区の概要 (図版45・46、写真図版44・47)

調査区は南北約30m、東西約55mを測る。遺構検出面の標高は62.3~62.9mで、調査区東部が高く西ほど低い。基本層序は、表土なし現耕作土以下は谷部埋積以後(中世以降)の旧耕作土層(1~3層)と、旧河道SR 1の形成した谷部内の上部の粘土質の埋積土層と下半部の粘土探掘坑の埋土(7層)、その間層となる擾乱層(5~6層)、谷部埋積以前の基盤層(8層)で構成される。

中世の掘立柱建物跡1棟、詳細な時期の不明の溝6条及び粘土探掘坑約200基を検出した。

2. 遺構

掘立柱建物跡 (図版47、写真図版46)

SB 1 調査区南東隅付近で検出した。規模は東西2間(4.53m)×南北3間(6.82m)に復元される純柱建物である。床面積は30.94m²、主軸方向はN13°Eを指向する。柱の掘方は直径20~48cm、検出面からの深さはP 1が44cm、P 4が45cmと深めである。他は17~36cmと浅く、上面に削平が及んでいる状況が何われる。柱間は梁行方向の平均が2.17m、桁行方向の平均が2.34mと後者が若干広めである。

溝 (図版48、写真図版44・46)

SD 1 調査区東部で延長8.1mにわたって検出し、西端は確認調査トレンチによって損なわれている。SD 2に切られる。最大幅77cm、検出面からの深さ24cmを測る。

SD 2 調査区東部を縦断する。延長約28.6mにわたって検出し、4区南端まで延長83mにわたって続く。3区内での切り合いは認められないが、西側のSD 5に4区で切られている。最大幅144cm、検出面からの深さ31cmを測る。3区内では溝底のレベルにはほとんど差はないが4区南端で22cm低く、南流する溝と考えられる。

SD 5 調査区中央をやや東寄りを縦断する。3区内では延長30.8mにわたって検出し、6区で別の溝

に切られるまで延長173mにわたって続く。SD 8 に切られる。最大幅1.85m、検出面からの深さ26cmを測る。調査区内では溝底のレベルにはほとんど差はないが6区での検出南端は28cm低く、南流する溝と考えられる。SD 8 に切られる南側では溝西側の立ち上がり付近で、溝の横断方向に矢板が打設されていたほか、SD 8 に切られる北側の溝西肩付近で弥生時代後期の甕底部180が出土した。

SD 8 調査区中央を縱断する。3区内では延長30.6mにわたって検出し、4区南端まで延長83m続く。SD 5 を切る。最大幅1.45m、検出面からの深さ28cmを測る。調査区内では溝底のレベルにはほとんど差はないが4区南端で20cm低く、南流する溝と考えられる。

SD20 調査区西部を縱断し、SD21と合流する。3区内では延長30mにわたって検出し、4区南端まで延長73m続く。北端は2区のSD 2 とつながる可能性が想定され、その場合は延長117mとなる。最大幅1.7m、検出面からの深さ27cmを測る。調査区内はもとより4区南西部でも溝底のレベルにはほとんど差はないが、周囲の状況から南流する溝と考えられる。

SD21 調査区西部を縱断する。延長26.2mにわたって検出し、SD20と合流する。最大幅1.19m、検出面からの深さ18cmを測る。溝底のレベルは南側で7cm低い程度だが、周囲の状況からも南流する溝と考えられる。埋土中から8世紀代の須恵器B255が出土している。

不明遺構（図版48）

SX22 調査区南西部の粘土探掘坑群の一角に流路底の幅94cmの箇所の立ち上がり付近から、弥生時代後期の甕182が出土している。人为的に掘削された溝ではなく、旧河道SR 1 底部付近をある時期に開削して流れた流路の深さ15cmの底部に土器が残置ないしは流されて運ばれた可能性が考えられる。

粘土探掘坑

谷西部の検出底の標高62.0～62.3m付近において、約200基の掘方を確認した。直径は概ね50～130cm程度で、深さは5～23cmで谷埋土との判別が困難で上部を検出できていない可能性が残る。

第5節 寺内4区の遺構

1. 調査区の概要（図版48・49、写真図版44）

調査区は南北約49m、東西約52mを測る。遺構検出面の標高は62.0～62.8mで、調査区北東部が高く南西部が低い。基本層序は、表土ないし現耕作土以下は旧河道の形成した谷部埋積以後の砂質の旧耕作土層（1～3層）と、旧河道SR 1 の形成した谷部内の上部の粘土質の埋積土層と下半部の粘土探掘坑の埋土（7層）、その間層となる擾乱層（5～6層）、谷部埋積以前の基盤層（8層）で構成される。この地区では、詳細な時期は不明ながら奈良時代から中世前半期にかけて開削されたと考えられる溝7条、粘土探掘坑約65基を検出した。

2. 遺構

溝（図版51・52、写真図版47・48）

SD 1 調査区東部で延長20.8mにわたって検出し、西端はSD 5 に切られ、東端は調査区外に及ぶ。SD 2 を切る。最大幅27cm、検出面からの深さ22cmを測る。

SD 2 調査区中央付近寄りを縦断する。3区から延長約83mにわたって検出し、SD 1・SD 5・SD 6に切られる。4区では最大幅1.07m、検出面からの深さ20cmを測る。3区北端より4区南端のほうが22cm低く、南流する溝と考えられる。中世の須恵器楕口縁の小片265が出土している。

SD 4 調査区東部で延長9.0mにわたって検出し、東端は調査区外に及ぶ。最大幅65cm、検出面からの深さ9cmを測る。

SD 5 調査区中央を縦断し、SD 1・SD 7を切る。3区北端から6区で別の溝に切られるまで延長173mにわたる。4区では最大幅1.63m、検出面からの深さ29cmを測る。3区北端に比べ6区での検出南端は28cm低く、南流する溝と考えられる。埋土中に8世紀前半代の須恵器杯G蓋266、須恵器楕267を含む。

SD 6 調査区中央やや東寄りを縦断し、SD 2を切り、SD 5に切られる。4区では長さ27mを検出し、6区東壁まで延長100mにわたる。4区では最大幅1.14m、検出面からの深さ32cmを測る。6区で検出された南端まで溝底のレベルにほとんど差はないが、周囲の状況から南流する溝と考えられる。埋土中から8世紀代の須恵器壺268が出土している。

SD 7 調査区北部中央で延長14.1mを検出し、SD 8に直行するが切り合い関係は不明である。最大幅1.11m、検出面からの深さ15cmを測る。埋土中に中世の須恵器小皿269を含む。

SD 8 調査区西部を縦断する。3区北端から4区南端まで延長83mにわたって続く。3区ではSD 5を切る。4区では最大幅1.36m、検出面からの深さ27cmを測る。3区北端に比べて4区南端で20cm低く、南流する溝と考えられる。埋土中より鎌倉時代の須恵器楕270が出土している。

SD 9 調査区北部で延長50mにわたって検出し、北端は調査区外に及ぶ。SD 10を切る。最大幅98cm、検出面からの深さ6cmを測る。

SD 10 調査区北部で延長21mにわたって検出し、北端は調査区外に及ぶ。SD 9に切られる。最大幅98cm、検出面からの深さ6cmを測る。

SD 12 調査区南部で延長10.5mにわたって検出し、南端は調査区外に及ぶ。最大幅56cm、検出面からの深さ7cmを測る。

SD 20 調査区西部を縦断する。3区北端から4区南端まで延長73mにわたって続く。4区では最大幅2.32m、検出面からの深さ17cmを測る。3区でSD 21と合流した後、3区南部のSD 11を4区北端で切る。溝底のレベルにほとんど差はないが周囲の状況から南流する溝と考えられる。

杭列（図版51、写真図版48）

SK 2 SD 20南部で二股に分かれる東側の溝に、溝東肩から中州にかけて2列の杭列が溝の直交方向に打設されている。杭列は延長1.7mに及び、中央付近でわずかに屈曲する。2列の間隔は10～15cm程度である。直径3.5～11cmの丸太材で構成され、わずかに削り材も認められる。材の残存長は11～61cmを測るが、SD 20底部で検出したため本来はより長かったものと思われる。

粘土探掘坑（図版49）

旧河道西部の検出底の標高62.1～62.2m付近において、約65基の掘方を確認した。直径は概ね40～160cm程度で、深さは4～18cmを測る。谷埋土との判別が困難で上部を検出できていない可能性が残る。

第6節 寺内5区の遺構

1. 調査区の概要（図版53、写真図版49・54）

調査区は南北約49m、東西約43mを測る。遺構検出面の標高は62.5～62.8mで、調査区東部が高く西部が低い。基本層序は、表土ないし現耕作土以下は砂質の旧耕作土層と、旧河道SR1の形成した谷部内の上部の粘土質の埋積土層と下部の擾乱層で構成される。この地区では、中世の掘立柱建物跡3棟、詳細な時期の不明な溝5条を検出した。

2. 遺構

掘立柱建物跡（図版54・55、写真図版51・52）

SB1　　調査区北東部で検出した。規模は東西2間（4.89m）×南北4間（9.44m）に復元される側柱建物である。床面積は91.85m²、主軸方向はN21°Eを指向する。柱の掘方は直径27～61cm、検出面からの深さは26～57cmで、柱間は梁行方向の平均が2.38m、桁行方向の平均が2.37mと若干広めである。

SB2　　調査区中央部やや東寄りで検出した。規模は東西3間（3.92m）×南北3間（4.50m）に復元される総柱建物である。床面積は17.64m²、主軸方向はN10.6°Eを指向する。柱の掘方は直径33～73cm、検出面からの深さは10～40cmで、柱間は梁行方向の平均が1.49m、桁行方向の平均が1.30mと全体的に狭めである。

SB3　　調査区北東部で検出した。規模は東西2間（3.12m）×南北2間（2.69m）に復元される側柱建物である。床面積は8.37m²、主軸方向はN13°Eを指向する。柱の掘方は直径17～23cmと小さく、検出面からの深さは13～40cmで、柱間は梁行方向の平均が1.38m、桁行方向の平均より若干狭めである。

溝（図版56、写真図版53）

SD1　　調査区東部を縦断し、SD4を切る。4区のSD6と同一の溝と考えられ、6区東壁まで延長100mにわたって続く。5区では最大幅1.20m、検出面からの深さ24cmを測る。4区から6区までの溝底のレベルにはほとんど差はないが、周囲の状況から南流する溝と考えられる。

SD2　　調査区中央を北西から南東に縦断し、SD4を切る。3・4区のSD5から続くと考えられ、3区北端から6区まで延長1.73mにわたる。5区では最大幅2.12m、検出面からの深さ44cmを測る。3区北端に比べ6区での検出南端は28cm低く、南流する溝と考えられる。

SD3　　調査区西部を北西から南東に縦断する。6区のSD6と同一の溝と考えられ、延長58.7mにわたりて続く。5区では最大幅1.32m、検出面からの深さ34cmを測る。6区までの溝底のレベルにはほとんど差はないが、周囲の状況から南流する溝と考えられる。

SD4　　調査区北部を横断し、東端は調査区外に及ぶ。SD1・2に切られる。延長34.8mにわたり、最大幅48cm、検出面からの深さ16cmを測る。東端より西端の溝底のレベルが10cm低く、周囲の地形の状況からも西流する溝と考えられる。

SD7　　調査区北半から中央にかけて検出した。少なくとも8本の溝が延長22m、幅3.5mの間に密集しておりスキ痕と考えられる。SD7は軸方位をN10°Eにとり、全長17.3m、幅20cm前後、深さ11cm前後を測る。SB2と重複する。SD7からは土師器鍋281が出土している。

第7節 寺内6区の遺構

1. 調査区の概要（図版57・58、写真図版49・55～57）

調査区は南北約51m、東西約40mを測る。遺構検出面の標高は62.2～62.7mで、調査区北東部が高く南西部が低い。基本層序は、表土ないし現耕作土以下は砂質の旧耕作土層（1～3層）とで構成される。旧河道SR1の形成した谷部内の上部の粘土質の埋積土層と下半部の擾乱層（5層）、谷部埋積以前の基盤層（6層）で構成される。この地区では、詳細な時期の不明な溝6条及び粘土探掘坑約65基を検出した。

2. 遺構

溝（図版59、写真図版57）

SD1 調査区北東隅において長さ3.4mを検出したが、4区のSD6と同一の溝と考えられ、延長100mにわたって続く。周囲の状況から南流する溝と考えられる。

SD2 調査区北東部を南北方向に延び、SD5に切られるか合流する。3・4区のSD5と同一の溝と考えられ、3区北端から延長173mにわたる。6区では最大幅1.47m、検出面からの深さ39cmを測る。3区北端に比べ6区での検出南端は28cm低く、南流する溝と考えられる。土師質土鍤292・須恵器輪293が出土している。

SD4 調査区東部で延長8.1mにわたって検出し、東端は調査区外に及ぶ。後述するSD6と同一の溝となる可能性がある。最大幅86cm、検出面からの深さ10cmを測る。

SD5 調査区北部中央付近から東部にかけて南東方向に延び、延長32.1mを検出した。SD2を切る、もしくは合流する可能性がある。最大幅1.83m、検出面からの深さ18cmを測る。溝底のレベルにはほとんど差はないが、周囲の状況から南流する溝と考えられる。

SD6 調査区北部において南東方向に延び、SD4に続く可能性がある。5区のSD4と同一の溝と考えられ、延長58.7mにわたる。6区では最大幅77cm、検出面からの深さ15cmを測る。周囲の地形の状況から南流する溝と考えられる。

粘土探掘坑（図版60～62、写真図版57・58）

谷西部の検出底の標高61.9～62.0m付近で帯状に群構成をなす、約65基の掘方を確認した。直径は概ね40～180cm程度で、深さは4～25cmを測る。谷埋土との判別が困難で上部が未検出の可能性が残る。

第4章 遺物

1. 土器

津万地区からはほぼ同一の遺構面から、弥生時代中期・弥生時代後期から古墳時代初頭・古墳時代と奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の土器が出土している。

以下、弥生時代～古墳時代と奈良時代～江戸時代に分けて、寺内0区から順に寺内6区まで、地区ごとに報告する。

第1節 弥生時代から古墳時代の土器

寺内0区（図版63、写真図版59・60）

・SH1出土土器

1～11は堅穴建物跡SH1出土の土器である。広口壺1は外傾する口縁直下に突帯を貼付け、二重口縁状に作っている。頸部外面はハケ調整の後、縦位のミガキを行い、内面は横位のミガキを行っている。広口壺2は平底の底部に球形の体部を持つ。体部外面はタタキの後、縦位のハケ調整を行い、横位のミガキで仕上げる。肩部斜め方向のミガキを行う。内面下部は縦位のハケ調整を行い、中央以上は一部粘土紐接合痕が残る程度にナデ上げている。

鉢3は小さな平底で、外面はタタキの後、ミガキで仕上げる。内面は縦位と横位のミガキで仕上げる。小形壺4は尖底の体部から大きく外反し上方に拡張して面を作る口縁部を持つ。体部外面はタタキの後、下半部は縦位、肩部は横位のミガキ調整を行う。内面は上半部に粘土紐接合痕跡を残し、下半部はナデ調整で仕上げる。肩部に覆接触黒斑があるが、接地黒斑は存在しない。外面にススが付着する。

小形鉢5は平底で、口縁部に向かって内湾気味に直線的に開く。外面は縦位のミガキ、内面はハケ調整を行う。底部から体部にかけて接地黒斑が残る。

高壺6は壺部が楕形で口縁部は有段である。内外とも、壺部は縦位、口縁部は横位のミガキ調整を行う。一部口縁部の凹にミガキ残しがある。脚7・9は外面縦位のミガキ、内面は横位のハケ調整を行っている。端部は強いヨコナデを行っている。

装飾器台8は受部が外方に直線的に伸び、口縁部を垂下させ、4条の凹線をめぐらす。受部には5方向に円孔を穿つ。円孔と脚との間に透かしのある直立する装飾を貼付ける。全体的に細かいミガキで仕上げている。脚台付無頸壺10は中実の脚台部で脚端部は強くナデて面を作っている。壺部はハケ調整で仕上げている。

土錘11は円柱状の管状土錘で、中軸を外れて孔を穿っており、片面には穿孔しかけた痕跡が残る。

・SD2出土土器

壺12～15と鉢16と高壺17～20がある。壺12は口縁部で、外反して、端部に面を作る。壺13は体部から外反する口縁部を持ち、端部は外方に面を作る。外面は左上がりのタタキの後、縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げる。外面にススが付着している。壺14は平底で、内外ともにハケ調整の痕跡が残る。壺15は平底で外面はタタキの後、縦位のハケ調整、内面は縦位のケズリを行う。体部に黒斑がある。

鉢16は平底で体部から口縁部にかけて直線的に開く。

高壺17は壺部が楕形で口縁部は有段である。内外とも、壺部は縦位、口縁部は横位のミガキ調整を行

う。口縁端部はヨコナデで仕上げる。脚部は継位のミガキで仕上げる。高坏18は坏部から脚部の破片で、円盤充填により接合している。坏部の外面と脚部外面は継位のミガキ調整を行う。脚部内面はシボリ目が残り、下部は横位のケズリを行う。高坏19は脚部で坏部が剥離した痕跡が残る。中実の脚部に直線的に広がる裾部を付け、4方向に円孔を穿つ。外面は継位のミガキで仕上げ、端部は横位のミガキを行う。内面は横位のハケ調整が残る。高坏20は坏部から脚部の破片で、坏部の内外面と脚部外面は継位のミガキ調整を行う。

・包含層出土土器

須恵器杯H21は、左回転クロロで作られており、立ち上がりは直線的に伸び、端部に内傾する面を持つ。底部の回転ケズリの範囲は広い。

寺内1区（図版64、写真図版61～63）

・SH1出土土器

方形堅穴建物跡SH1の主柱穴P141から22、中央土坑から23の土器が出土している。壺22は小さな平底で、底部も含めてタタキを行い、部分的にハケ調整を行う。外面はススが付着し、下部はススが酸化している。鉢23は口縁部に向かって直線的に開き、底部外周を突出させ上げ底にしている。内外面に粗粒圧痕が多数存在する。

・SD2出土土器

SD2からは弥生土器壺24・35、壺25～31、鉢32～34、小形壺36、有孔鉢37、高坏38・41～44、器台39・40が出土した。

広口壺24は口頭部が外反し、口縁端部を拡張させ、凹線を4条施す。頭部外面は継位、内面は横位のミガキを行う。壺35は底部に未調整の窪みが残る。外面はミガキ調整を行う。底側面に接地黒斑があり、対反面に覆接触黒斑がある。内面は火回り不良で暗灰色を呈する。

壺25は長胴の体部にく字に屈曲する口頭部を持つ。口縁端部は上方に拡張し、凹線を3条施す。体部外面はタタキ後、ハケ調整、内面は横位のケズリを行う。内面に薄いコゲが存在する。

壺26は長胴の体部にく字に屈曲する口頭部を持つ。口縁端部は上方に拡張し、面を作る。体部は内外面ともにハケ調整を行う。壺27・28は平底の長壺で、口縁部はく字に外反し28は口縁端部に面を作る。体部外面はタタキ後、ハケ調整を行う。27は底面もタタキを行う。内面は、27がケズリ調整、28がハケ調整を行う。28は底側面に接地黒斑があり、肩部に覆接触黒斑がある。27は体下部がスス酸化しており、一部被熱による剥離がある。壺29・30は平底の壺で、外面はタタキを行う。30の底面は複数の葉脈の痕跡が重なる。側底面に接地黒斑があり、対する内面に鐵溜黒斑がある。小形壺36は底部を欠損し、外反する口縁部を持つ。体部外面は継位のミガキ調整を行い、内面は粘土紐接合痕跡が残る。口縁部内面は横位のミガキ調整を行う。有孔鉢37は小さな平底の中央を外れて一孔を穿つ。

高坏38は坏部が楕形で口縁部は有段で、凹線を4条施す。内外とも、坏部は継位、口縁部は横位のミガキ調整を行う。一部口縁部の凹にミガキ残しがある。

壺31は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面はタタキの後、継位のハケ調整、内面下部は横位のケズリで仕上げている。鉢32は半球形の体部に、外反する口頭部を持つ。内外ともにハケ調整で仕上げる。

鉢33は中央部に窪みがある平底で、外面はタタキ、内面はハケ調整を行う。鉢34は底部外周を突出させ上げ底にしている。外面に接地黒斑があり、対する内面に鐵溜黒斑がある。

器台39は口縁端部を上下に拡張させ、凹線を4条施す。内面に横位のミガキ調整を行う。器台40は細い筒状の脚部を持つ器台で、脚部に5孔を穿つ。外面は縦位のミガキ調整を行い、据部は横位のミガキを重ねる。脚内面中央部は横位のケズリを行い、上下部はハケ調整を行う。

高坏41は椀形の坏部を持ち、脚部に4孔を穿つ。脚外面は縦位のミガキ調整を行い、内面はハケ調整を行う。高坏42は中実の脚部で、ハケ調整で仕上げるが、調整は荒い。高坏43は椀形の坏部で、縦位のハケ調整、内面はミガキ調整を行う。高坏44は脚部に4孔または5孔を穿つ脚部で、外面は縦位のミガキ、内面はハケ調整で仕上げる。

寺内2区（図版65～75、写真図版64～80）

・SD2出土土器

SD2からは脚付無頸壺45が出土している。破片から復原した。内頸する口縁部に凹線を巡らせ、2孔一対の紐穴を穿つ。体部は横位のミガキを行う。脚部との接合は円盤充填の痕跡が残る。脚部は拡張して面を作る。

・SD9出土土器

SD9からは鉢46が出土している。口縁部と底部の破片から復原した。口縁部はく字に屈曲し、口縁端部は上方に拡張する。体部は内外ともにハケ調整を行う。底部内面はケズリを行う。底側面に接地黒斑が残る。

・SD8出土土器

SD8からは脚付無頸壺47、高坏48、壺49、壺50・51が出土している。

脚付無頸壺47は扁平な体部に有段の口縁部を作る。脚部は外反し、端部は拡張する。接合部分は円盤充填を行う。体部はミガキを行い、脚内面は横位のケズリを行う。高坏48は中実の脚部で、内面はケズリを行う。壺49は平底で、葉脈圧痕が残る。体部外面は縦位のミガキ調整、内面はハケ調整を行う。側底面に接地黒斑が残る。壺50・51は小さな平底で、体部外面はタタキを行う。50は外面に接地黒斑が残り、51は内面にコゲが付着する。

・SD5出土土器

SD5からは壺52、壺53が出土している。52は長胴で、口縁部は外反する。口縁端部内面に段を作り、外面に2条の凹線を巡らす。体部外面は縦位のハケ調整、内面は斜め方向のケズリを行うが、上部は粘土紐接合痕が残る。内面の一部にコゲが付着している。SK1出土の破片と接合関係にある。53は平底で、内外ともハケ調整を行っている。

・SD4出土土器

SD4からは壺54が出土している。外反する口縁部を持ち、外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。

・SK1出土土器

SK1からは壺55～61が出土している。55は小形球形の体下半部で、歪みがある。側底面に接地黒斑がある。56は小形球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は縦位のハケ調整の後、横位のケズリで仕上げている。外面にススが付着している。57は外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面にススが付着し、特に頭部は厚く付着している。58は外反する口頭部を持つ。体部内面は斜位のケズリを行う。肩部に覆接触黒斑が残る。59は球

形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は斜位のケズリで仕上げている。外面にススが付着し、肩部内面の部分にコゲが付着する。60は外反する口頭部を持つ。外面は体部を不定方向、口縁部を縦位のハケ調整を行う。内面は体部を横位のケズリ、口縁部を横位のハケ調整で仕上げている。口頭部にススが付着しており、端部が剥離している。61は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面はナデで仕上げている。外面肩部に覆接触黒斑が残り、外面全体にススが付着する。

・SK2出土土器

SK2からは壺62が出土している。直線的に開き、双把手を嵌め込む。底部は半月形の噴気孔を開ける。外面は縦位のハケ調整、内面下半部はケズリを行い、口縁部は横位のハケ調整を行う。62はSK1・SK3出土の破片と接合関係にある。

・SK3出土土器

SK3からは壺63が出土している。球形の体部に外反する口頭部を持つ。内面は横方向のケズリで仕上げているが、部分的にハケ調整や粘土紐接合痕が残る。

・SK4出土土器

SK4からは壺64・65が出土している。長壺でいずれも外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。65の内面は次回り不良で灰色を呈する。

・SK10出土土器

SK10からは壺66・67が出土している。66は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は下部を縦位、上部を横位のケズリで仕上げている。口縁部にススが付着している。67は長壺で、外面は縦位のハケ調整を行い、側底面に接地黒斑が残る。67はSK48出土の破片と接合関係にある。

・SK9出土土器

SK9からは壺68が出土している。球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は体部を不定方向、口縁部は縦位のハケ調整を行う。内面は体部を横位のケズリを行い、口縁部を横位のハケ調整で仕上げている。

・SK16出土土器

SK16からは壺69が出土している。体部から短く外反味に直立する口縁部を持つ。外面は横斜位のハケ調整を行い、内面は縦位のハケ調整の後、横位のケズリを行い、上部は粘土紐接合痕跡が残る。内面に喫水線のあるコゲが残る。

・SK21出土土器

SK21からは壺70が出土している。球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。底面に接地黒斑が残る。70はSK22・SK42・SK44・SK50出土の破片と接合関係にある。

・SK22出土土器

SK22からは直口壺71が出土している。球形の体部に直線的に伸びる口頭部を持つ。

・SK27出土土器

SK27からは直口壺72が出土している。やや扁平な体部で、口縁部を欠く。内面は底面を指押さえ、下半部は横位のハケ調整を行い、上半部は粘土紐接合痕跡が残る。

・SK25出土土器

SK25からは壺73～76が出土している。73は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ

調整、内面は下部を縦位、上部を横位のケズリで仕上げている。外面は一部にススが付着し、多くがスス酸化している。内面全体にコゲが付着している。74は球形の体部に外反する口頭部を持つ。内面は横位のケズリで仕上げている。外面は層状のススが付着している。75は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は下部を縦位、上部を横位のケズリで仕上げている。体部外面に層状のススが付着し、吹きこぼれ痕が残る。下部はススが酸化し、対する内面にコゲが付着している。76は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦斜位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。75はSK28・SK51出土の破片と接合関係にある。

・SK28出土土器

SK28からは直口壺77、壺78～81が出土している。77は扁球形の体部に直立する口縁部を持つ。体部内面は底面に指押痕、上部は指ナデ整形痕が残る。肩部に黒斑が残る。78は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面は剥離部分も含めてススが付着し、下部はススが酸化している。対する内面にコゲが付着している。79・80は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。80の外面には層状のススが付着している。81は長壺で、外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は下部を縦位、最上部を横位のケズリで仕上げている。外面下半部に層状のススが付着している。78はSK44・SK62出土の破片と接合関係にある。

・SK44出土土器

SK44からは壺82が出土している。大きく外反する口頭部の破片である。

・SK49出土土器

SK49からは壺83、壺84が出土している。83は扁球形の体部で、肩部に黒斑がある。84は尖底の球形の体部で外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリ後、下半部に縦位のケズリを行う。

・SK36出土土器

SK36からは壺85が出土している。球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は斜め方向のハケ調整を行い、内面は粘土組接合痕が残る。

・SK45出土土器

SK45からは直口壺86・87、壺88～96が出土している。86は扁球形の体部で口縁部を欠く。体部内面は上部に粘土組接合痕が残る。87は扁球形の体部で口縁部と底部を欠く。体部内面は上部に粘土組接合痕が残る。外面最大径部にはススが付着し、下部はススが酸化している。88は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は斜位のハケ調整を行う。外面にススが付着し、内面に部分的にコゲが付着する。89は外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整を行う。体部内面は横位のケズリを行う。90は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面はススが付着し、部分的にススが酸化している。内面は円形状のコゲが付着している。91は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は斜位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。側底部に接地黒斑が残り、対する肩部に覆接触黒斑がある。側面にススが付着している。92は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定位方向のハケ調整、内面は縦位の板ナデで仕上げている。93は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定位方向のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面にはススが付着しており、下部は層状に付着している。94は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。側面に黒斑がある。95は球形の体部に外反する口頭部を持

つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のハケ調整の後、横位のケズリで仕上げている。外面はススが付着し、内面下部に薄いコゲが付着している。96は外面を縦位のハケ調整、内面は縦位のケズリを行い、内面にケズリ滓が付着している。外面にはススが付着している。

87・89・91・93はSK48出土の破片と接合関係にあり、94はSK24・SK27出土の破片と接合関係にある。96はSK47出土の破片と接合関係にある。

・SK47出土土器

SK47からは壺97～102、粘土塊103が出土している。97・99は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。97の内面は火回り不良で黒色を呈する。98は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面にはススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが厚く付着している。100は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。体部外面に厚くススが付着し、複数の吹きこぼれ痕が残る。下部はススが酸化しており、対する内面の一部にはコゲが付着する。101は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面にはススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着している。102は球形の底部で、外面は縦位のハケ調整、内面は縦斜位のケズリで仕上げている。外面にはススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着している。粘土塊103は表面に皺があり、ケズリ滓を集めた塊の可能性がある。101はSK48出土の破片と接合関係にある。

・SK52出土土器

SK52からは壺104・105が出土している。いずれも外面には不定方向のハケ調整を行い、内面は斜め方向、横位のケズリを行う。104は内面下部にコゲが付着している。105は側底面に接地黒斑が残る。外面にはススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが厚く付着している。

・SK62出土土器

SK62からは壺106が出土している。長壺で、外反する口頭部を持つ。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のケズリで仕上げている。下半部にススが付着しているが、内面にコゲは存在しない。106はSK124・SK44出土の破片と接合関係にある。

・SK48出土土器

SK48からは壺107～110、脚付椀111が出土している。107は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。体部外面にススが付着し、吹きこぼれ痕が残る。内面にはコゲが付着する。108は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は斜位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。109は球形の体部にく字に外反する口頭部を持ち、端部に面を作る。外面は不定方向のハケ調整、内面は斜横位のケズリで仕上げている。ほかの多くの個体とケズリ方向が異なる。肩部に覆接触黒斑がある。内面は火回り不良で灰色を呈する。110は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。体部外面に層状のススが付着し、吹きこぼれ痕が残る。底部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着する。111は半球形の椀に脚部が付くが欠損している。内面はハケ調整、口縁部はヨコナデで仕上げる。外面はススが付着し、下半部はススが酸化している。内面には帯状のコゲが付着する。111はSK44出土の破片と接合関係にある。

・SK50出土土器

SK50からは直口壺112、二重口縁壺113、壺114・115が出土している。112は扁球形の体部に直立する口縁部を持つ。体部内面は底面に指揮痕、上部は粘土接合痕が残る。113は短く外傾する頸部から口縁部が外傾する。114は球形の体部にく字に外反する口頭部を持ち、端部に面を作る。外面は縦位のハケ調整、内面は斜横位のケズリで仕上げている。ほかの多くの個体とケズリ方向が異なる。115は球形の体部に直立気味に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は上部を横位、下部を斜位のケズリで仕上げている。外面にはススが付着し、斜位の吹きこぼれ痕が残る。外面下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着している。113はSK51出土の破片と接合関係にあり、115はSK54出土の破片と接合関係にある。

・SK53出土土器

SK53からは高壺116が出土している。壺部は浅い楕形で脚部は外れている。壺内面に放射状の暗文が存在する。側面に接地黒斑が残る。

・SK54出土土器

SK54からは壺117が出土している。球形の体部に直立する口頭部を持つ。底部に撲糸の圧痕が残る。体部内面は下半部を縦位のケズリ、最大径部を横位のケズリを行う。

・SK29出土土器

SK29からは壺118～121が出土している。いずれも球形の体部に外反する口縁部を持つ。118の体部内面は粘土紐接合痕を残す。119は体部外面を縦位のハケ調整、内面を横位のケズリを行う。外面にはススが付着し、肩部に円形のスス酸化部があり、対する内面にコゲが付着する。120は体部外面を不定方向のハケ調整を行い、内面は粘土紐接合痕跡が明瞭で、横位のケズリを行う。外面に薄いススが付着する。121は外面を不定方向のハケ調整を行い、内面は下半部が縦位、上半部が横位のケズリを行う。119はSK50出土の破片と接合関係にあり、121はSK13・SK57出土の破片と接合関係にある。

・SK51出土土器

SK51からは壺122～127が出土している。122は球形の体部に外反する口頭部を持つ。内面は横位のケズリで仕上げている。内面は火回り不良で黒色を呈する。123は体部外面を不定方向のハケ調整を行い、内面は斜位のケズリを行う。外面にはススが付着している。124は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。肩部内面にはケズリ工具のアタリ痕跡が残る。外面にはススが付着しており、内面の下部にコゲが付着している。125は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。体部下半部および口縁部にススが付着している。126は長壺で、体部外面は不定方向のハケ調整を行い、内面下部は縦位、上位部は横位のケズリを行う。内面は火回り不良で黒色を呈する。口縁部から肩部にかけての2か所に黒吹きこぼれが残る。127は球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横斜位のケズリを行う。外面はススが付着し、内面はコゲが残る。

123はSK47出土の破片と接合関係にあり、124はSK61出土の破片と接合関係にあり、125はSK50・SK48出土の破片と接合関係にあり、126はSK54・SK55出土の破片と接合関係にある。

・SK56出土土器

SK56からは壺128が出土している。球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。肩部に覆接触黒斑が存在する。

・SK57出土土器

SK57からは壺129が出土している。球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。肩部に覆接触黒斑が存在する。

・SK58出土土器

SK58からは壺130が出土している。球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。口縁部に覆接触黒斑が存在する。内面は火回り不良で灰色を呈する。

・SK59出土土器

SK59からは壺131が出土している。球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。口縁部に吹きこぼれ痕跡がある。

・SK61出土土器

SK61からは壺132・133が出土している。132は外反する口縁部を持ち、体部内面は粘土紐接合痕が残り、横位のケズリを行う。肩部に覆接触黒斑が残る。外面にススが付着し、吹きこぼれ痕跡が付着する。133は球形の体部に外反する口縁部を持つ。外面は不定方向のハケ調整を行い、内面下部は縦位、上位部は横位のケズリを行う。最大径部に厚くススが付着する。

・SK108出土土器

SK108からは壺134～139が出土している。134・136は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。134の肩部に覆接触黒斑が残り、内面にコゲが付着する。136の内面は火回り不良で灰色を呈する。135は外反する口頭部を持ち、端部に面を作る。外面は不定方向のハケ調整、内面は斜め方向のケズリで仕上げている。137は球形の体部に外反する口頭部を持つ。口縁部にススが付着する。138は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は斜め方向のケズリで仕上げている。ハケ、ケズリの方向がほかの多くの個体と異なっている。139は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。外面にススが付着し、内面下部にコゲが付着する。138はSK131出土の破片と接合関係にある。

・SK101出土土器

SK101からは高壺140、壺141が出土している。140は小形の有稜高壺である。141は丸底気味の平底で、一部にタタキ調整が残る。

・SK102出土土器

SK102からは直口壺142、壺143が出土している。142は扁平な体部に直立する口頭部を持つ。内面の体部上半には粘土紐接合痕が残る。143は球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面はハケ調整を行なうが、下半部は厚くススが付着している。内面は下半部が縦位のケズリ、上半部は押印痕跡が残る。143はSK128出土の破片と接合関係にある。

・SK109出土土器

SK109からは壺144が出土している。球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整を行なう。内面は下半部が斜め方向、上半部が横位のケズリを行う。

・SK113出土土器

SK113からは壺145・146が出土している。145は外反する口縁部を持つ。体部外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。146内面は縦位のケズリを行う。最大径部に層状のススが付着し、下部はススが酸化し、対する内面に層状のコゲが付着している。145はSK116出土の破片と接合関係に

ある。

・SK119出土土器

SK119からは壺147が出土している。長甕で、外反する口縁部を持つ。外面は縦位のハケ調整を行い、内面は下部を縦位のケズリ、上部を粘土紐接合痕が残る。縦位のナデを行う。体部外側面に黒斑が残る。外面に薄いススが付着する。147はSK120出土の破片と接合関係にある。

・SK124出土土器

SK124からは壺148～150が出土している。いずれも球形の体部に外反する口縁部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。148は外面肩部に層状のススが付着し、下部はススが酸化している。対する内面に薄いコゲがある。上半部には吹きこぼれ痕跡がある。149・150は外面にススが付着し、内面下部にコゲが付着する。

・SK116出土土器

SK116からは壺151～160、鉢161が出土している。151は外反する口縁部である。152は球形の体部で、外面は無文のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。外面最大径部に層状のススが付着し、下部はススが酸化している。対する内面に穀粒コゲが付着している。153～157は球形の体部に外反する口頭部を持つ。153・155の外面は縦斜位のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。153の側底面に接地黒斑があり、内面に鐵溜黒斑がある。156・157は覆接触黒斑が残る。153・157は外面にススが付着している。158～160は球形の体部に外反する口頭部を持つ。外面は不定方向のハケ調整、内面は横位のケズリで仕上げている。158の下半部は斜め方向のケズリを行なう。外面にススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着している。160の内面は火回り不良で灰色を呈する。

鉢161は半球形の体部に外反する口縁部を持つ。外面は斜め方向のハケ調整、内面はケズリ後ナデを行っている。側面に接地黒斑があり、反対面に覆接触黒斑がある。外面にはススが付着するが、内面にはコゲはない。151はSK128出土の破片と接合関係にあり、153はSK121出土の破片と接合関係にある。

・SK130出土土器

SK130からは直口壺162～164、壺165～170が出土している。162は口縁部のみの破片である。163・164は扁球形の体部に外傾する口頭部を持つ。163は外面がハケ調整、内面は横位のケズリを行なう。

165・166は球形の体部に外反する口頭部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面はケズリを行なう。165の外面には薄くススが付着し、166の外面には層状のススが付着している。内面下部にコゲが付着している。167は長甕で外反する口頭部を持つ。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行なう。体部最大径部にススの付着があり、黒の吹きこぼれ痕跡が残る。168は丸底壺の底部で、外面は縦位のハケ調整を行い、ススが付着し、剥離後被熱している。底部外面中心に直径6cmの支脚痕跡が存在する。内面はコゲの痕跡はない。169は球形の体部に外反する口縁部を持つ。体部内面は下半部が縦位、上半部は横位のケズリを行なう。外面はススが付着し、吹きこぼれ痕跡がある。体部下半部はススが酸化しており、対する内面にコゲが付着している。170は小さな平底である。

・SK121出土土器

SK121からは直口壺171、鉢172が出土している。直口壺171は球形の体部に直立する口縁部を持つ。内面上部は指押さえを行なう粘土紐接合痕が残る。肩部に明瞭な黒斑がある。外面下半部にはススが付着し、一部被熱による剥離がある。底面はススが酸化している。172は扁球形の体部に短く外反する口縁部を持つ。内面は下半部を縦位、上半部を横位のケズリを行なう。

・SK128出土土器

SK128からは壺173が出土している。球形の底部である。

・SK135出土土器

SK135からは壺174が出土している。上部に最大径がある体部に外反する口縁部がつく。体部外面は縦位のハケ調整、内面は横位のケズリを行う。外面は部分的にススが付着している。174はSK124・SK134出土の破片と接合関係にある。

・SK134出土土器

SK134からは壺175・176が出土している。175は球形の体部に外形する口縁部を持つ。体部外面は横位のハケ調整を行い、内面は斜位のケズリを行い、下半部はナデ調整を行っている。外面はススが付着しており、下半部はススが酸化しており、内面にコゲが付着している。175はSK135出土の破片と接合関係にある。176は弥生土器で平底である。外面はススが酸化しており、内面にコゲが付着している。

寺内 3 区（図版76、写真図版81～82）

・SD20出土土器

壺177は頸部に2条の断面三角形突帯を持つ広口壺で、口縁は外方に垂下し、3条の凹線を施文する。口縁部内面は段を作り、櫛描波状文を施文する。壺178は縦長の体部に、厚い平底の底部を持ち、口縁を欠く。体部外面はハケ調整が残る。体部外面下半部に接地黒斑あり、外面はススが付着し、下部はススが酸化している。179は平底の壺で、体部外面はタタキ整形を行い、底部はタタキ後、乾かないうちに床置きしている。内面の仕上げは雑である。

・SD 5 出土土器

壺180は上げ底の底部で、体部外面および底部周囲の接地部にタタキ整形を行う。体部外面下半部から底部にかけて接地黒斑がある。

・SD 9 出土土器

壺181は縦長の体部に、く字に外反する口縁を持ち、口縁端部に凹線状の面を作る。体部外面はタタキ後、縦位のハケ調整、内面下半部は縦位にケズリを行い、ナデで仕上げている。外面は層状のススが付着し、内面下半部の一部にはコゲが残る。

・SD21出土土器

鉢183は上げ底気味の底部で、内外ともに縦位のミガキを行う。

・SD23出土土器

壺184は体部上半の破片で、外面は縦位のミガキ、頸部付近は横位のミガキを行う。内面は粘土紐接合痕が残り、横位のハケ調整と指押痕跡が残る。

・SK 4 出土土器

185は小さな平底の壺底部で、外面は縦位の細かいハケ調整を行う。上部は層状のススが付着し、下部はススが酸化している。

・SX22出土土器

壺182は球形の体部にく字に外反する口縁を持つ。体部外面最大径部には厚くススが付着し、下部はススが酸化しており、対する内面にはコゲが付着する。

・落ち出土土器

須恵器杯H193は短く水平に延びる受部を作り、短く三角に内傾する立ち上がりを持つ。

・包含層出土土器

壺186は平底の底部中央に未調整の窪みを残す。体部は球形で、割れ面は水平で、粘土紐接合整形時の痕跡である。体部外面は横位後縦位のミガキを行い、内面は横位のハケ調整を行う。壺187は底部で平底である。壺188は平底の底部から体部の外面にタタキを行い、縦位のミガキを行っている。内面は横位のハケ調整を行う。底部内面に鐵錫黒斑が存在する。外面最大径部に厚くスヌが付着する。下部はスヌが酸化している。189は丸底の壺で、外面はタタキ整形の後、縦位のハケ調整を行う。内面は下部を縦位のケズリ、上部を横位のケズリで仕上げている。外面はスヌが付着し、内面は薄くコゲが付着している。壺190はやや上げ底の平底の底部で、体部は縦位のハケ調整、内面は縦位のケズリを行う。壺191は平底の底部で、段をつくり体部につながる。外面に接地黒斑が存在する。壺192はやや縦長の体部に外反する口縁を持つ。内外とも縦斜め方向のハケ調整を行い、外面の一部はナデている。口縁部はヨコナデを行っている。

寺内 4 区（図版77、写真図版83）

・SD20出土土器

壺194は平底の底部で体部にかけて大きく開く。脚台付無頸壺195は脚台部で直線的に脚裾部が開き、体脚境には2条の突帯を貼り付ける。外面はヘラ描沈線による縦2条の垂線の間を斜格子文で埋めている。

・包含層出土土器

須恵器杯H196は短く水平に延びる受部を作り、短く三角に内傾する立ち上がりを持つ。底部は中央部をケズリ残す、回転ケズリを行っている。

寺内 5 区（図版77、写真図版83）

・SD 2 出土土器

壺197は平底である。

・SD 3 出土土器

鉢198は底部外周を突出させ、上げ底にしている。

・SD 1 出土土器

土師器壺199が出土している。体部は長胴で口縁部は外反する。体部外面は縦位のハケ調整で、内面は横位、斜めのケズリである。口縁部はヨコナデを行う。

寺内 6 区（図版77、写真図版83・84）

・SR 1 出土土器

旧河道SR 1 からは弥生土器壺200と壺201～204、土師器壺205が出土している。200は大形の壺の底部で平底である。201は壺底部で平底の中央部を穿孔している。202は如意形口縁の壺で口縁直下に3条のヘラによる沈線を巡らす。203・204は壺底部で底部外周を高くしている。壺205の底部は丸底で、大形の球形の体部にく字に外反する口縁を持つ。体部外面はハケ調整で仕上げる。肩部内面は粘土紐接合

痕跡が残る。外面の体部最大径部に層状の厚いススが付着し、底部下半はススが酸化している。底部内面の指揮さえの窪みにコゲが残る。

・SD 4 出土土器

甕206・207が出土している。206は口縁部から体部の破片で肩が張った体部に、短く外反する口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみ上げる。207は底部破片で平底である。

・SK 2 出土土器

甕208が出土している。底部は丸底で、大形の球形の体部にく字に外反する口縁を持つ。体部外面はハケ調整で仕上げる。底部内面はケズリ痕跡が残る。外面の体部最大径部と口縁部の一部に濃厚なススが付着し、底部下半はススが酸化している。スス酸化部に対応する内面に厚くコゲが付着している。

・包含層出土土器

209は須恵器甕の体部で、底部および口頭部を欠く。扁平な体部で上部に沈線を這らし、列点を刻み、注口を穿孔する。

第2節 古代から近世の土器

以下、210～318は、古代から近世の土器である。寺内0区から始めて、地区ごとに報告する。

0区の土器（図版78、写真図版85）

・SX 2 出土土器 210は土師器羽釜である。口縁部は内傾し、端部直下に上面が水平となる短い三角形の鉢が付く。兵庫津編年羽釜タイプA系列1C類に相当する。15世紀後半～16世紀初頭と考えられる。

1区の土器（図版78・79、写真図版85～88）

・SB 2（P36・P44）出土土器 211は須恵器碗である。P36より出土した。底部は右回転糸切りを施し、若干突出する。体部から口縁部は外方へ開き、口縁端部は心持ち外反する。口縁端部付近で筋錐形に肥厚する。内面見込みは若干窪む。底径は口径の4割ほどの大きさである。11世紀代か。217はP44から出土した土師器底部である。筒状の形状を持つ。底部は糸切りが施されている。托の底部か。

・SB 3（P 6・P12・P19・P20・P21・P100）出土土器 216はP 6から出土した手捏ね整形の土師器皿である。口径が四寸程、器高がやや低い個体である。底部内面はやや盛り上がる、体部との境は丸く、体部は直線的に外方に立ち上がり口縁部に至る。口縁部はヨコナデを施す。以下はナデを施す。219はP20から出土した須恵器小皿である。底部内面はやや盛り上がる。口縁部との境はロクロナデによって若干窪み、口縁部は内湾気味に立ちあがる。端部は丸く収める。221はP12から出土した須恵器碗である。口径に対し、底径の割合が若干高い製品である。底部は平底、無高台である。底部は回転の糸切り離しを施す。体部は外方に開き、口縁部は徐々に肥厚する。端部は丸く収める。内面見込みは心持ち窪みを見せる。222はP19から出土した。221と類似する器形。底部を欠くが、若干、器高が低い製品と考えられる。223はP100から出土した須恵器壺である。口縁部から肩部が残る。口縁端部の外側に面を持つ。体部外面には平行タタキ、内面はナデ調整を施す。224はP21から出土した白磁玉縁碗底部である。外面は露胎、内面は施釉されているが、見込み部分に焼成時の融着防止のため陶片などを端ませたと考えられる方形の露胎部分（目痕）が2か所存在する。配置から4か所に施したものと考えられる。大宰府編年碗IV-1a類、11世紀後半～12世紀後半の時期である。

- ・ **SB 4 (P54・P56・P48) 出土土器** 212～214はSB 4を構成する柱穴から出土した。212はP54より出土した土師器椀底部である。底部は回転糸切りを施し、若干突出する。213はP56より出土した。須恵器椀底部である。底部と体部の境は丸く、径6cmほどが接地面である。糸切りが施されている。214はP48から出土した。底部を欠く。体部から口縁部は外方へ開き、口縁端部は心持ち外反、丸く収める。器壁は薄い。
- ・ **SB 5 (P96) 出土土器** 218はP96から出土した土師器鍋である。口縁部は頸部からくの字に屈曲し、端部は内傾する面を持つ。口縁部にはユビオサエ痕が顕著、口縁部・体部共に内面には横ハケ調整を施す。兵庫津編年V類に相当する。15世紀後半～16世紀前半と考えられる。
- ・ **その他の柱穴出土土器** 215・220は建物として復元できない柱穴から出土した。215はP143から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。底部内面はユビオサエ痕後ナデ、口縁部はヨコナデ調整を施す。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸く収める。220はP77から出土した須恵器小皿である。口縁部内面との境部分に強いロクロナデを施し、底部内面はやや盛り上がる。口縁部は心持ち外反し端部は丸く納める。右回転糸切りを施す。
- ・ **SK 1 出土土器** 225～227を図示した。225は手捏ね整形による土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い平底から内湾して立ち上がる口縁部を持つ。口縁部はヨコナデを施し、端部は弱い稜を持つが、整形は粗く、口縁部は歪みが激しい。226・227は土師器羽釜である。共に、口縁部は内傾し、端部は内傾して丸く肥厚する。端部直下に短い三角形の鋲が付く。腹径を体部下半に持つ。226は兵庫津編年羽釜タイプB系列1C類に相当する。16世紀初頭前後。227は兵庫津編年羽釜タイプB系列1A類に相当する。15世紀前半と考えられる。
- ・ **SK 2 出土土器** 228・229を図示した。228は須恵器小皿口縁部、口縁部が外方に立ち上がり、端部は丸くおさめている。器高は低い。229は須恵器椀口縁部、低く外方に立ち上がり口縁端部は丸く収める。
- ・ **SD 4 出土土器** 230は突出した平高台を持つ須恵器椀である。内湾して立ち上がり、口縁端部が外反する。底部は右回転の糸切り離しを施す。見込みは段を有して窪む。体部は内外面ともにロクロ目が顕著で、特に中位に目立つ。東播北部古窯址群の2段階後半（11世紀後半～12世紀前半）の時期が考えられる。
- ・ **SD 5 出土土器** 231は須恵器椀である。底部は平底、体部との境は丸く、口縁部は心持ち内湾し、端部は丸く収める。見込みは段を持たない。底部は右回りの回転糸切り離し、見込みに仕上げナデを施す。
- ・ **SD 3 出土土器** 232は白磁皿である。底部外面は露胎、口縁部は外反し、水平に伸びる。内面中位に沈線を巡らせる。見込みの軸を蛇の目状に剥ぎ取っている。大宰府編年皿III-1類、12世紀中頃の時期である。
- ・ **SD 1 出土土器** 233～236が出土している。何れも近世の陶磁器である。233は施釉陶器小杯である。234は染付丸碗である。退化した雪輪草花文を描く波佐見産。1820年～1860年代の製品である。235は波佐見産の高い高台を持つ染付碗、いわゆる広東碗である。外面に仙芝文を描く。1820年～1860年代の製品である。236は波佐見産くわんか手の染付深皿である。見込みに退化したコンニャク印判五弁花文を押す。18世紀後半から19世紀初頭の時期と考えられる。
- ・ **包含層出土土器** 237～241が出土している。237は包含層の上面から出土した。突出した平高台を持つ須恵器椀である。底部は回転糸切り離しを施し、突出している。内面見込みは、段を持って窪む。体部下半から大きく内湾して立ち上がり、口縁端部は心持ち外反する。内外面ともにロクロ目が非常に顕著である。

著である。全体に器壁は薄い。体部から口縁部は緩やかに内湾して全体にロクロ目が顕著で、器壁が薄い。238は須恵器捏ね鉢である。体部は外方へ直線的に開き、口縁端部は直口気味、上端面は角頭を呈し、外側に面を持ち、内面は心持ち窪む。神出窯跡Ⅱ 鉢DII-2類などに類型がある。12世紀初頭頃と考えられる。239は片口を持った丹波焼小壺、攪乱から出土した。胴が心持ち張り出し、口縁部は短く立ち上がる。240・241は対になった蓋付の染付碗である。蓋240は笠形の体部に外反気味の口縁部が付く。241は体部下半が丸みを帯び、口縁部は心持ち外方へ開く。文様は240・241共に外面は波に千鳥・陸地に樓閣が描かれる。内面は山と雲か。口縁部内面には蔓・波などの文様帶を巡らす。

2区の土器（図版79、写真図版89）

・**SD3出土土器** 242は須恵器壺胴部片である。下半と考えられる。外面は平行タタキ、内面は同心円あて具痕をすり消している。

・**包含層出土土器** 243～252が出土している。243は手捏ね整形の土師器小皿である。丸い底部に口縁端部が心持ち外反する。外面は口縁端部を残しユビオサエ痕が残る。内面はナデ調整を施す。全体に器壁が厚い。244は、手捏ね整形の土師器小皿。底部の大半を欠く。口縁部はナデ、底部外面はユビオサエ整形後ナデ。245は手捏ね整形の土師器小皿、底部の大半を欠く。平らな底部に内湾して立ち上がる口縁部を持つ。端部は紡錘形に肥厚する。底部内外面はナデ、口縁部外面はヨコナデ調整を施す。246は須恵器杯G蓋口縁部片である。7世紀代と考えられる。247は須恵器杯Aである。調査区南東部から出土した。底部外面はロクロヘラ切り、杯部内外面・底部内面は右回転のロクロナデを施す。内面に漆様の付着物が残る。248は須恵器杯B、調査区南東部から遺構検出時に出土した。底部・杯部境近くに低い高台を貼り付ける。杯部外面下半にロクロ目が認められる。249は調査区南東端から出土した須恵器皿である。底部外面はヘラ切り後ナデ。内面は窪む。底部と杯部との境は丸く、口縁部は外反し上部に面を持つ。志方窯跡に類型があり、9世紀代と考えられる。250は調査区北西端、Ia層茶褐色腐植質シルトから出土した。須恵器椀である。突出した平高台を持つ。底部は回転糸切り離しを施し、突出している。内面見込みは、段を持って窪む。230・237と比べ、体部は直線的に外方へ開き、口縁部は外反する。内外面ともにロクロ目が非常に顕著である。全体に器壁は薄い。底部径は口径の1/2近くある。藏谷1号窯に類例がある。時期は10世紀後半と考えられる。251は須恵器椀である。底部を欠く。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は若干外反する。体部中位にロクロによるヘラ描き沈線3条が巡る平野東1号窯に近く、時期は10世紀末頃か。252は須恵器椀である。底部を欠く。体部は外方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面見込みは平坦と考えられる。時期は中世前期に下ると考えられる。

3区の土器（図版80、写真図版89・90）

・**ピット出土の墨書き土器** 253は東半部のピットから出土した須恵器小皿である。底部は回転糸切を施し、場所によっては若干突出する。口縁部との境はロクロナデによって若干窪み、口縁部は外方に心持ち内湾気味に立ち上がる。端部は丸く収める。底部外面に「×」状の墨書きが認められる。

・**SK5出土土器** 254は土師質カマド片である。焚口左側の鋤部分と考えられる。

・**SD21出土土器** 255は須恵器杯Bである。低い高台が杯部との境よりも内側に張り付けられている。杯部は真直ぐ立ち上がり、口縁部は外反する。

・**谷部（落ち）出土土器** 256～264は谷状の落ち部から出土している。256・257は中世の土師器である。

258～261は古代、262～264は中世前期の須恵器である。

256は手捏ね整形の土師器小皿である。底部はユビオサエ整形後、外面はナデ、口縁部・底部内面はヨコナデ、底部内面に仕上げナデ調整を施す。口縁部は短く内湾して立ち上がり、端部は丸く収める。257は土師器鍋口頭部、口縁部は外方へ開き気味となり、端部は外方に摘みだされる。兵庫津変形タイプII類、14世紀前半代と考えられる。258は須恵器杯B蓋である。天井部は笠形、ボタン形の摘みを持つ。天井部は回転ヘラケズリを施す。口縁端部は折曲げられ、外側に面を持つ。259は須恵器皿Aである。平坦な底部に短く外方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部付近は心持ち外反する。底部外面はヘラ切り離し後ナデ調整を施す。260は須恵器皿Aである。底部は右回転のヘラ切り後板ナデ調整。261は須恵器杯Aである。平坦な底部に外方に立ち上がる口縁部を持つ。杯部と底部の境は丸く仕上げる。底部外面はヘラ切り後一部に回転ヘラケズリが認められる。262・263は須恵器椀である。262は回転糸切りの平坦な底部から体部は内湾気味に外方に立ち上がり、口縁部は心持ち外反する。端部は厚みを持ち、丸く収める。蒲江大谷1号窯に類例がある。263は回転糸切りの平坦な底部から体部・口縁部は低く内湾気味に外方に立ち上がる。端部は厚みを持ち、丸く収める。器壁は薄い。264は須恵器捏ね鉢である。体部は外方へ直線的に開き、口縁端部は上方に拡張し、外側に面を持ち、内面は窪む。兵庫津C類、13世紀後半～14世紀代前半代と考えられる。

4区の土器（図版80、写真図版90・91）

- ・SD 2 出土土器 265は須恵器椀口縁部である。口縁部は外方に開き、端部は丸く収める。
- ・SD 5 出土土器 266は須恵器杯B蓋である。扁平な笠形の形状を持つ。平坦な天井部から屈曲せずに口縁部に至る。口縁端部は、断面は矩形、外側に面を持つ。硯に転用したと考えられる。267は須恵器椀である。器高は低い。底部外面にロクロケズリを施す。体部は外方に開き口縁部は若干外反、端部は丸く収める。底部と口縁部の境にロクロケズリを施し、極低い高台が認められる。口縁部は外方に開き、紡錘形を呈する。
- ・SD 6 出土土器 268は須恵器高台壺である。張り出した肩部以下が残存している。輪高台は大きく外側に踏ん張り、高台疊付きの外側は接地していない。
- ・SD 7 出土土器 269は須恵器小皿である。底部は回転糸切りを施す。口縁部との境は丸みを帯び、口縁部は短く外方に開く。端部は丸く収める。
- ・SD 8 出土土器 270は須恵器椀である。口縁端部を欠く。底部は回転糸切りを施し平底。体部との境は丸みを持つ。
- ・包含層出土土器 271～280が出土している。271・272は手捏ね整形の土師器小皿である。271はユビオサエ整形の後ナデ調整。全体に歪みが激しい。272はユビオサエ整形の後外面はナデ調整。内面はヨコナデ調整。273は表採された土錐である。274～278は須恵器である。274は須恵器杯Bもしくは稜碗の蓋と考えられる。摘み部分を欠く。扁平な笠形の形状で、天井部はロクロヘラケズリ、口縁部は若干屈曲し、端部は丸く収める。端部内側は心持ち凹むが沈線は持たない。275は須恵器皿A、平坦な底部から口縁部が外方に開く。底部との境は丸く、ナデ調整、内面及び外面口縁部は回転ナデ調整を施す。口縁端部に重ね焼き痕、外面体部に墨書きがある。金城池1号窯に類似した採取品がある。10世紀後半～11世紀前半か。276は須恵器杯Aと考えられる。底部外面は回転ヘラ切り。底部内面と体部外面は回転ナデ。277は須恵器椀底部である。平底で、回転糸切りを施す。外面体部と底部の境は未調整である。

278は須恵器壺等の体部である。内面はナデ調整、外面には格子タタキが施される。279は丹波焼壺の口縁部から体部中位の破片である。最大径を腹囲に持つ個体と考えられる。口縁部は頸部から屈曲し、水平に伸び、紡錘形の端部を持つ。端部上面に凹線が巡る。長谷川編年壺B2類　IV期　14世紀中頃から後半の時期が考えられる。280は平瓦片である。凹面には布目が残る。凸面はタタキのち版ナデを施す。

5区の土器（図版81、写真図版92）

・SD7出土土器 281は土師器鍋である。短い口縁部が外方に開く。端部は摘み出され肥厚する。体部外面には平行タタキを施す。

・谷部（SR1）出土土器 282～291は谷部（SR1）から出土している。282は須恵器杯Gである。底部は平底、右回転のヘラケズリを施す。体部は外方に直線的に開き、口縁部は直口し、端部は丸く收める。底部内面には仕上げナデを施す。283は須恵器杯A。杯部内外面にロクロの凹凸が目立つ個体である。底部は平底、右回転のヘラ切りを施す。杯部は外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。底部と杯部の境は丸みを持つ。底部内面には仕上げナデを施す。284～291は中世土器である。284・285は土師器である。284は土師器小皿である。底部は回転糸切り。口縁部は短く外方に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。285は手捏ね整形の土師器皿である。ユビオサエ整形の後、口縁部をヨコナデ調整。口縁端部は外側に内傾する面を持つ。体部下半にはユビオサエ痕が目立つ。286～291は須恵器である。286は須恵器小皿もしくは小椀。底部を欠く。口縁部は底部との境に棱を持ち、外方に開く。端部は心持ち肥厚し丸く收める。287は須恵器碗。底部を欠く。体部下半から底部との境にかけては内済し、口縁端部に向かっては外方に開く。端部は丸く收める。体部外面に墨書きがある。意味は不明である。288は須恵器碗底部である。回転糸切り離しを施し、突出した平高台を持つ。内面見込みは、段を持って窪み平坦である。東播北部古窯址群の第1段階10世紀後半～11世紀前半の時期と考えられる。289は須恵器碗底部である。288と比べ高台の径がやや小さく、内面の窪みが乏しい。底部外面は回転糸切りの後板状工具でナデを施す。290は須恵器碗である。底部は平底、体部は内済して立ち上がり、口縁部は外反して丸く收める。蒲江大谷1号窯に類例がある。291は須恵器捏ね鉢である。体部下半・底部を欠く。体部は外方に直ぐ開き、口縁端部は上方に拡張し、やや外側に傾斜する外側面を持つ。外面にはコケが付着している。兵庫津編年B3類、14世紀後半～15世紀前半代と考えられる。

6区の土器（図版81、写真図版93）

・SD2出土土器 292・293を図示した。292は土師質の土鍤である。293は底部を欠く須恵器碗である。体部は内済して立ち上がり、口縁部は外反し、端部は僅かに内済し丸く收める。290に近く蒲江大谷1号窯に類例がある。

・旧流路（SR1）出土土器 294～303は旧流路（SR1）から出土した。294は北部の流路から出土した須恵器杯Aである。回転ヘラ切りを施した平底から、斜め上方に杯部が直線的に立ちあがる。器壁は薄く端部はやや尖る。295以下は西半部の旧流路から出土した。295は手捏ね整形の土師器小皿である。底部は平たく、口縁部は低く斜め外方へ延びる。器壁は厚く、端部は丸く收める。296は手捏ね整形の土師器小皿である。底部はやや丸みを帯び、口縁部との境に屈曲がある。口縁部は低く斜め外方へ延びる。端部は丸く收める。297～299は土師質土鍤である。297は円筒状、299は中位に最大径を持つ。298は上端から中位にかけて残存する。紡錘形と考えられる。300～303は古代の須恵器杯蓋・杯身・皿を上げ

た。300・301は須恵器杯B蓋である。共に摘みを欠く。300は平坦な天井部から屈曲して口縁部端に至る。口縁部は短く折り曲げられ、外側に凹みのある面を持つ。内面は平滑で、墨痕が認められる。転用視と考えられる。301は300に比べ天井部が広く、口縁部は緩やかに屈曲し、端部は丸く収める。内面は平滑で、硯に転用された可能性がある。302は須恵器杯A。回転ヘラ切りを施した平底から、斜め上方に杯部が直線的に立ち上がる。器壁は294に比べやや厚く端部も丸みを帯びる。底部外面は回転ヘラ切り後一部ナデを施し、杯部との境はやや丸みを帯びる。303は須恵器皿である。平坦な底部から短い口縁部が心持ち外反して立ち上がる。端部は丸く収める。底部外面は、回転ヘラケズリ後ナデ、口縁部は回転ナデを施し、底部と口縁部の境は内外面とも明瞭で、段を持つ。

・包含層出土の土器 304～318は包含層及び機械掘削時採取の土器を上げた。304は土師器杯脚部である。脚部は大きくハの字に開き、脚端は外反し丸く収めている。脚の内外面はナデ調整、残存する底部はナデ調整を施し、平坦と考えられる。この土師器杯は曾我井・堂ノ元遺跡において出土例があり『足高高台杯』として詳述されている。時期は11世紀代と考えられる。305は須恵器杯Aである。丸みを帯びた底部から内湾して杯部が立ち上がる。端部は丸く収める。底部は回転ヘラ切りの後ナデ、杯部は回転ナデ、内面に仕上げナデが認められる。全体に器壁が厚い。306～314は須恵器杯A、底部は平底である。306は302に近い形状。回転ヘラ切りを施した平底から、斜め上方に杯部が直線的に立ち上がる。器高はやや高い。底部と杯部の境はやや丸みを帯びる。回転ヘラ切り後粗いナデ。307は294に近い器形。器壁は薄い作り。回転ヘラ切り後ナデ。一部ヘラ状工具痕が認められる。口縁部に重ね焼き痕。308～313は杯部が低く、皿に近い。309は回転ヘラ切り後ナデ。310は回転ヘラ切り後粗いナデ。311は回転ヘラ切り。杯部外面に土器片が融着している。312は回転ヘラ切り後ナデ。313・314は回転ヘラ切り後一部ナデ。共に器壁が薄い。314は底部外面がやや丸みを帯びる。315・316は須恵器接椀の蓋と身である。315は摘み部分を欠く。笠形の形状を持つ。やや丸みを持った天井部から屈曲せずに口縁部に至る。口縁端部は、断面は三角形、外側に面を持つ。316は輪高台の底面はやや丸みを持ち、内側に拡張する。椀の体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部との境に、下方に拡張した断面三角形の凸帶を作りだしている。317は土師器鍋である。口縁部はほぼ直立し、端部は外側に拡張し、稜を持つ。最大径は中位にある。内面の當て具痕はナデ消されている。兵庫津編年IV類に相当する。15世紀前半～中頃と考えられる。318は土師質土錘である。中位に最大径を持ち紡錘形と考えられる。中世と考えられる。

参考文献（古代から中近世土器）

- 神野 恵 2005「第3章 出土遺物」『平城宮発掘調査報告書XVI』奈良文化財研究所学報第70号
九州近世陶磁学会 2000.2 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会 10周年記念
長谷川 真 2005.9 「月波」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相』資料集
太宰府市教育委員会 2002.3 「太宰府多坊跡 XV－陶磁器分類編－」太宰府市文化財第49集
西脇市教育委員会 2005.3 「西脇市窯跡調査集報」西脇市文化財調査報告書第15集
日本中世土器研究会 2015.12 「中近世土器の基礎研究 26 東播系須恵器－編年と分布から考える－」
兵庫県教育委員会 2003.3 「志方窯跡群！」－中谷支群－」兵庫県文化財調査報告第203号
兵庫県教育委員会 2004.3 「兵庫津遺跡Ⅱ 津崎・七宮地区の調査」兵庫県文化財調査報告第220号
兵庫県教育委員会 2006.3 「板塙町遺跡」兵庫県文化財調査報告第294号
兵庫県教育委員会 2012.3 「曾我井・堂ノ元遺跡 曾我井・野入遺跡 曾我井・沢田遺跡」兵庫県文化財調査報告第434号

第3節 木製品

津万遺跡群の調査範囲内は、微高地と旧河道や湿地が交互に出現する地形であり、湿地や旧河道は時代によって水田などに利用されている。今回、報告する寺内地区も同様であり、木製品は流路や溝、井戸等からの出土である。その中で津万遺跡群の調査中、最も多数の木製品を出土したのは、本報告書に掲載されている寺内2区検出の粘土探掘坑群からである。

寺内2区の粘土探掘坑から出土したW8～W62は、古墳時代中期頃に属するものである。粘土探掘坑に切られるように検出された溝SD8や水田面で検出された杭・矢板（W63～W83及び写真掲載のW95～W104）はその下層に作られた弥生時代中期以降の水田に伴うものと思われる。その他の地区から出土した木製品は古代末から近世にかけてのものである。

木製品に利用された樹種は、第5章第2節のパリノ・サーヴェイ株式会社報告による。木製品の分類、各部名称は、奈良国立文化財研究所「木器集成図録 近畿古代篇」、「木器集成図録 近畿原始篇」に準拠する。

1. 寺内0区出土の木製品（図版82、写真図版94）

W1は、0区の井戸SE3から出土した。年輪界の狭い針葉樹の芯近くの板目材で、小さな曲物底板と思われるが、正円ではない。周縁部を薄く作る。風化が著しい。

2. 寺内1区出土の木製品（図版82、写真図版94）

W2～W6は、1区出土のもので、W2・W3・W5は1区の溝SD1から出土した。

W2は、直径12.2cm、厚さ1.6cmのヒノキ属の板目材を用いた円盤で、中央に直径1.7cmの円孔を穿つ。木取りもあり良くなく、角の面取りも見られない。

W3は、直径26.3cm、厚さ1.6cmのスギの板目材を用いた半円形の円盤で、弦面に小孔2ヶ所が見られ、同様の半円形の板を2枚、木釘を用いて円盤状に接合されていたものであろう。年輪界が曲がっている部位を用いており、良い木取りではない。器表面はあまり平滑ではないが、角の面取りは施している。曲物や桶の底板であろう。

W4は、柱穴P102から出土したヒノキ属のミカン削材で、節孔が抜ける。切り落とされた材木の端材を利用して柱礎盤にした可能性がある。樹芯部側を2～3面に割り取り、先端部を斜めに落とす。木表側は粗面を残す。

W5は、漆器椀の底部で、底径5.1cmの低く細い輪状の高台を削り出している。内外面が赤色の漆で仕上げており、その下層には黒色の薄層が観察できる。底部裏の高台内中央に黒色の漆で点を打つ。広葉樹散孔材を用いている。

W6は、攪乱から出土した漆器椀である。端部を欠損するが、細く踏ん張った高台を有し、底部から後をもって屈折して立ち上がる体部へと続く。口縁端部は失うが外反して広がっている。内外面赤色の漆を施している。底面高台内中央に三本線が観察できるが、焼いて付けられたものようだ。広葉樹（散孔材？）を用いている。

3. 寺内2区出土の木製品（図版82～102、写真図版94～105）

W7は、2区北半の機械掘削の際に出土しており、他に一端の焼け焦げた付け木なども見られる。針葉樹の薄板の下端を細く削って尖らせ、上端は3～4回刃物を入れて、中央に後の丸い形状に成形している。上半は側面が薄くなるように削っている。側面には切込みは見られず、表裏面とも墨痕は確認できない。C I型式の斎串と思われる。

粘土探査坑出土の木製品（図版82～99、写真図版94～102）

W8～W62は、粘土探査坑と思われる土坑群から出土した木製品である。掘削に用いたと思われる掘り具などを除けば、粘土探査作業時にぬかるんだ足元に置いて足場としたらしい板材が多く、そのほとんどが再利用品で、本来別の用途のために作られたものである。本来の用途別に記述する。

容器

W8は、SK1-2から出土した。ケヤキを横木取りした割物の四脚槽である。わずかに広がる鳥尾状の端部が斜めに上がるよう作り、側面は丸く仕上げる。容器部となる上面の繰り込みは約7cmの深さに抉られ、幅2cmほどの刃物の痕跡が残っている。底面は5×25cm、高さ2～3cmの隅丸長方形を呈する脚を彫り出しており、幅0.7cmの細かい刃物痕を残して仕上げられている。端部の厚さは2.5cmあるが、容器部の厚さは1.0cmまで削っている。脚の位置等から全容を復元すると、長さ44cm、幅37cm、高さ12.5cmとなり、繰り込みも直径33cm程の円形を呈するものとなる。繰り込み内面が一部黒くなっている。

大阪府の四ツ池遺跡（5世紀）、滋賀県服部遺跡（6世紀前半）出土のものに形態が類似する。二脚と一端部、一側面を失っており、破損した容器を足場か運搬に再利用したものであろう。

机部材

W9は、SK25から出土した。机の天板と思われる。長さ84.3cm、厚さ18cm、現存の幅23.6cmのヒノキ属板目材を用いており、表裏面ともヤリガンナ様工具を用いて2cmまでの幅で丁寧に平坦に整形している。下面には幅2cm、深さ1cm程のわずかに湾曲した溝を、両短辺から17cmの位置に長辺と直交して2本彫り、残存部では一方の長側辺まで彫り抜いている。溝の偏った位置に方形の枘穴を穿孔して、追い入れ継ぎと枘接合による脚材の装着・固定に備えている。2ヶ所の枘穴は位置をずらして設けてある。両小口面は丁寧に面取りし、長側面も平滑に仕上げている。表面の一部に細かい刃物傷がみられる。SK25からはW10・W53も出土している。

農具（掘り具）

農具としての鋤などは、ここでは土木具の掘り具として用いられていた。

W10は、SK25から出土したコナラ属アカガシ亜属の板目材を用いた全長87.4cmの一本鋤で、柄端部の把手まで作り出している。検出当初は柄の一部にサクラの皮の樺巻が残存していた。長さ41.4cmの平鋤身の下面（前面）は中央がふくらみ湾曲させて作るが、上面（後面）はほぼ平坦である。最大幅16cmの身の断面形は、柄の後面下端が刃部上端まで延び突出するII'式となる。肩部は水平で、後面側に一段厚く作られ、その側辺に小さな抉入部を有する。一旦くびれた後、下で再度ふくらんでから刃先に至る「角肩4種」或いは緩やかに刃先に至る「角肩2種」に分類できる。

柄は身後面中央から後面側へと突出させ、さらに緩やかにS字状に湾曲して把手に続く。把手も前面側を削って上げている。掘りは直径3.8cmの断面円形に作られる。削り残した把手は、一旦板状に成形し、装飾的に外形や穿孔部を成形する。直径3cmの断面円形の把手の横木は、11.4cmの幅に広がり、端部を湾曲させている。Vb型の把手に分類できる。柄の長さは45.5cmを測り、非常に短い。刃部両側辺には先

端部から6cmの位置に段を有し、金属製の歎先を装着したものと思われる。完形品で、ほとんど破損していない反面、歎先は見つかっていないため、歎先を外した後の意図的な埋置が考えられる。SK25からはW9・W53も出土している。

W11は、SK19から出土したコナラ属アカガシ亜属を用いた一本歎である。全長87.8cm、幅16.2cmと、W10とはほぼ同じ大きさを持つ。長さ48.5cmの身の前面は湾曲して作るが後面は平坦である。身の後面には肩に沿って一段高く削り残しており、また柄から続くように長さ13cmの突起部を作り出していることから角肩2種のII式に分類される。身と柄は直線的に続き、柄の断面は基部付近では方形、端部では円形に作る。前面から緩やかに高くなるように削り、末端では後面から削って扁平に尖らせる。柄部の先端には別作りの把手を取り付けたもの(Ta型)であろう。柄の長さは38cmを測る。刃部先端から11cm上の両側面に小段が作られており、金属製の歎先の装着に備えている。別部材は失われているが、ほぼ完形品であり、W10とも長さがほぼ一致することから、粘土採掘用に通常の歎よりも小型品を作ったものかもしれない。

W12は、SK29から出土したコナラ属アカガシ亜属を用いた一本歎である。刃部先端は肩より広がり二股に分かれて股歎になる。先端近くでは内外に刃を設けている。金属製歎先の装着痕跡は不明である。身の片側を失うが、全長95.9cm、復元した肩部の幅16.5cmを測る。肩部から柄部はW11同様の作りであり、角肩2種のII式に分類される。身後面の突起は7cmとやや短い。柄の長さは46.3cmを測る。やや反った柄の上端は四方から削って、内一側面は端から2.3cmの位置に小段がつく。別作りの把手を装着したTa型であろう。SK29からはW50も出土している。

W13は、SK10-12出土のコナラ属アカガシ亜属を用いた一本歎である。柄端や身先端を失っている。復元した肩部の幅15cmを測る。肩部や柄部の作り出しはW10と同様であるが、身後面の突起は8.8cmの長さで三角形状を呈している。柄の断面は手元側は円形であるが、刃部近くは隅丸方形を呈している。SK10-12からはW32も出土している。一連のSK10-2からはW14とW44^a、SK10-4からはW38とW57が出土している。

W14は、SK10-2出土の一本歎状の木製品である。ヒノキ属の板目材を用いており、通常のコナラ属アカガシ亜属を用いた掘り具とは異質のものであるが、刃部先端から16cm上まで全面にわたって薄く仕上げ、先端から8cm上の側面に小段を作り出している。これは金属製の歎先を装着する仕様であるため、粘土採掘用の道具として作られたものと判断した。

刃先装着部分の加工は他の部分の加工とは異なって不明瞭であり、柄が長いことから、漁労具の檣を転用したものかもしれない。但し、表面と一側面に刃物傷があり、表裏の仕上げが異なることは他の建築部材と共に、建築部材を再加工した可能性もある。

身の基部は緩やかに幅を減じて柄部に移行しており、他の歎とは異なっている。幅13cm、厚さ3.8cmの身の表面はヤリガンナ様の刃物の痕跡を残して丁寧に整形している。裏面の整形は粗い。両側面には面を残す。柄は、当初別製品として扱っていたが、同じ造構、同じヒノキ属を用いていることから接合できることが判明した。断面長方形を呈し、丁寧に面取りを行っている。復元できる全長は132.0cm。柄の上端部は、表面からは5cmと大きく、裏からは2.5cmと小さく削って片刃状にしている。把手の装着に備えたものであろう。

この他にもSK1-1からも一本歎状の破片が出土したが(写真図版25)、状態が悪く保存できなかった。

W15は、SK64出土のコナラ属コナラ亜属クスギ節のミカン割り材を用いた板材で、当初、粘土採掘

用の股筋成形は同未成品の可能性を考えたが、厚さが整っておらず、コナラ属アカガシ亜属を用いていないことから不明である。残存全長は71.1cm、幅は14.8cmを測る。表面には成形痕と思われるはつり痕や斜め方向の擦痕が見られ、1ヶ所釘孔と思われる孔が認められる。SK64からはW62も出土している。

W16～W23は棒状の木製品で、柄成形は掘り棒の可能性がある。針葉樹を削って断面方形成形は円形にしており、一端を細く作っている。

W16は、SK121-1から出土した。ヒノキ属の板材を用い、上半部は角を面取りして断面隅丸長円形に、下半部は両側面から削って粗く成形している。下端部を尖うが、上端部は丸く成形している。

W17は、SK116-6出土。スギを用いた棒状を呈するもので、下端部を欠損しているものの、表面を丁寧に面取りして断面円形に加工している。下半部では裏側を扁平に削り断面隅丸方形を作る。上端部は丸く仕上げている。SK116-6からはW20やW30も出土している。

W18は、SK28出土。ヒノキ属を用いており、下端部を欠く。上端部は1方向から大きく斜めに削り、表面からもし削って切断している。折損部には斜めに刃が打ち込まれる。手斧様工具によって断面隅丸方形に仕上げた基部から、下半部はさらに削り込んで断面円形に成形している。

W19は、SK50出土。ヒノキ属を用いた全長60cmの棒状のもので、上端も表面から斜めに切断している。図の表裏面には手斧様の工具痕が残り、一側面は削り取ったままの面を残す。下端部は削り取った面を残した3方向から削り込んで細く尖らせている。

W20も、SK116-6出土のもので、ヒノキ属を用いた長さ130.9cmの断面隅丸方形の棒状木製品であるが、一部は当初から欠落している。先端を斜めに削って尖らせている。直径3cm前後と細いが、掘り棒や先端に鈎身などの別部材を取り付けた柄としての掘り具、或いは建築部材の垂木の可能性もある。

W21は、SK12出土のもので、ヒノキ属の棒状角材の一端を徐々に削って尖らせ、全長は134.1cmを測る。表面と一長側面は平滑に整形しているが、他面は削ったままか、或いはほとんど整形していない。板材を再利用して柄として作られたものか。

W22は、SK131-4出土。年輪界の密な針葉樹柾目材の角材であり、表面及び一側面は丁寧に仕上げており、他面は丸くなっている。両端部先を欠くが、両端部とも周囲から削って細くしており、刃部成形は抉りを作る意図が見られ、尖らせて掘り棒として利用したものと考えた。表面の長側面の角に各々抉りを入れている。

W23は、SK62出土のヒノキ属を用いた柾目材を用いた角材で、表面は平らに作り、一方の長側面も面取りするが、裏面は粗い。端部は一方は表面から直角に刃を入れて折り取っており、もう一方は裏面から刃を入れて折り取っている。SK62からはW26やW36が出土している。

運搬具

W24～W28は、板材や丸太材の一端に切り欠きを施した部材である。天秤棒などの用途が考えられる。

W24は、SK36出土。ヒノキ属板目材の幅6.35cm、厚さ25cmの板目材の一端に両側面から切り欠きを入れたもので、切り欠きは端部側が直角に近く、反対側はやや斜めに入れている。一方の切り欠きの上方にも刃物を入れた痕跡があるが、抉られていない。下端部は二次的に斜めに切り落としている。板材側面は角を面取りしている。

W25は、SK47出土。ヒノキ属角材を用いた長さ72.3cmのやや湾曲した棒状の製品で、表面は面取りして丸く作るが、裏面は全体が割り裂かれている。一端から3cmの位置に両側面から切り欠きを入れて頭部を作り、表面はその位置から削って薄くしている。一方の切り欠きのすぐ下も削っている。下端

部は面取りして納めている。SK47からはW33・W45・W46が出土している。

W26は、SK62出土。直径5.2cmほどの丸太材を利用。下端部を欠くが、89.5cm残存する。上端部はまっすぐ切断後、一側面から斜めに切っている。直下の表裏面に幅7.5～8.5cmのL字状の切り欠きを入れ、裏面にはさらにその下方にも切り欠きを入れている。

W27は、SK46出土。直径4.9cmの丸太材で、表面を削っている。下端部に一部切り欠きが残存する。W26に類するものか。

W28は、SK48出土。ヒノキ属の角柱状の成品で、一端を欠くが、42.6cm残存する。上端部は面取りを施して丸く仕上げており、上端部から2.5cmの位置から斜めに切り込みを入れ、下端は直角に刃を粗く入れて抉っている。SK48からはW51も出土している。

建築部材

W29～W56は、粘土探掲坑内の足場材や作業台として用いられたと思われる板材である。建築部材などを転用、再利用したものが多い。

W29は、SK5-9出土のヒノキ属の板目板材で、幅21.8cm、厚さ5.6cmと厚みのある板材の一端を40度の角度で斜めに切って成形する。斜めに切った短辺の一部は折り取られている。もう一端は粗く直角に切られており、当初の加工ではないかもしれない。残存長103.5cmを測る。表面は手斧様の工具により平滑に整形するが、刃物の食い込んだ痕跡も残っている。裏面の工具痕は一部残存するものの粗く、厚さも均質には作っていない。長側面の長い側は端部以外は丸く削って仕上げ、反対側は斜めに削って尖らせている。斜めに切られた端部近くの偏った位置に5.5×18cmの橢円形の穿孔が穿たれ、裏面にはその穿孔から長側辺に向かう溝状の繰り込みやあたりが観察できる。穿孔の内面は滑らかである。また中央に近い部分の穿孔は7.5×3.8cmの方形に穿たれ、表面から裏面に向けて斜めに抜けている。内面の角部は滑らかに摩滅している。裏面のその周辺は隆起しており、意図的に器壁を厚くしている。妻壁材や破風材などの建築部材の転用であろう。斜めに開けた孔など養父市高柳ナベ遺跡の粘土探掲坑出土例や、豊岡市出石町の袴狭遺跡確認調査（旧坪井地区12トレンチ）出土例に類する。

W30は、SK116-6出土のヒノキ属の板材である。長さ98.3cm、幅16.3cm、厚さ18cmを測る。表裏面とも粗く、部分的にしか面を整えていないが、長側面は整形している。一方の長側面は手斧様工具で側辺に向かって薄くなるように削って成形しており、工具痕は一部表面にも及んでいる。この長側面はほぼ中央で幅を減じており、その部分も斜めに削っている。中央の幅を減じた部分の斜めに成形した側面側に偏って、3.5×1.7cmの長方形の穿孔を通してしている。さらにこの穿孔を挟んで長側面に沿って2ヶ所、1.5×1.0cm小型の長方形の穿孔を入れている。もう一方の長側面はほぼ直角に成形し、中央に表面からの不整形な抉りが入る。短辺はやや斜めに粗く切断面を残す。蹴放ち材などの建築部材であろう。

W31は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の角材或いは板材で、ほとんどを欠失しているが、平滑に仕上げた表面から方形の穿孔或いは切り欠きを施したもので、建築部材の一部であろうか。

W32は、SK10-12出土の針葉樹板目板材で、残存長132.2cm、幅23.7cm、厚さ5.2cmとW29に次いで厚い。表面は刃幅5cm前後の手斧様の工具により平滑に整形するが、裏面は工具痕は観察できるが粗く、厚さも均質には作っていない。側面も一方は真直ぐ、もう一方は少し薄く丸棟に整形している。一方の端部は斜めに切るが、切断面は粗く、再利用の際の加工と思われる。付近の裏面の一部に刃物痕が残る。もう一方の端部は弧状に成形しており、中央に5.5cm方形の穿孔とそれに続く切り込みを端部まで入れているが、大きく失われている。建築部材の転用であろう。

W33は、SK47の南側から出土した針葉樹板目板材で、一端は折り取られている。もう一端は角を落として弧状に切断している。偏った位置に20×1.5cmの梢円形の穿孔を施す。下端部にもう一孔あったかもしれないが不明である。残存長137.5cm、幅11.8cm、厚さ1.9cmを測る。

W34は、SK124-1出土の年輪界の詰まった針葉樹板目板材で、残存長121cm、幅17cm、厚さ1.5cmを測る。一方の長側辺が薄く作られる。表面は平滑に整形するが、裏面は粗い加工痕を残す。両端部と中央に横方向のわずかなあたりが残る。壁材か。

W35は、SK13出土の針葉樹板目材を用いた板材で、残存長54.0cm、幅7.5cm、厚さ3cmを測る。両側面は直に面を作る。一端は折れて失われるが、もう一端は幅の三分の一を12.5cmにわたって切り取る。切断部は粗く斜めに走る。床材か。

W36は、SK62出土のヒノキ属を用いた板目板材で、残存長70.5cm、幅16cm、厚さ3.1cmを測る。一端は折れて失われるが、もう一端は一方の角を切り落として長側辺を薄く作っており、その部分の摩滅がみられる。床材か。表面にはあまり鋭くない刃幅3.5cmまでの直線的な刃物傷痕がいくつか残る。傷の幅は2mmで、両側の切れ目の間は材本体が残存している。直線的に走り、両端が浅く細くなっている。ほぼ垂直から打ち込まれているが、位置や方向、分布には切断や切削といった意識的なものではなく、例えば粘土探掘作業中に足元の木材に鎌の鉄製刃先を突き立てた痕跡が思い浮かばれる。

W37は、SK138出土の針葉樹を用いた板目板材で、長さ69.9cm、幅7.6cm、厚さ2.4cmを測る。表面は手斧様の工具痕を残して平滑に整形するが、裏面は整形していない。長側面は一部分のみ整形している。一方の端部近くは側面を斜めに削って幅を減じている。もう一方は風化が著しい。床材か。

W38は、SK10-4出土の針葉樹を用いた板材で、残存長80.7cm、幅8.1cm、厚さ1.9cmを測る。残存する端部はほぼ直角に成形されており、一端から3cmの位置に端部に並行したあたりが見られ、端からその部分までは風化が少ない。表面は加工痕を残して平滑に仕上げるが、裏面はほとんど整形していない。長側面は一部には加工痕が見られるが、削ったままの部分も残存している。

W39は、SK130-2出土の針葉樹を用いた板材で、残存長84.3cm、幅12.7cm、厚さ2.0cmを測る。表面は手斧様の工具痕を残して平滑に整形するが、裏面は粗い。両面に傷が入っている。一方の長側面は丸く仕上げており、もう一方は直角に面を作る。短辺は直線的に切断している。床材か。SK130-2からはW40が、SK130-3からはW42、SK130-4からはW41・W49、SK130-8からはW52が出土している。

W40は、同じくSK130-2出土で、年輪界の密な針葉樹板目材を用いた板材である。残存長60.5cm、幅13.6cm、厚さ2.4cmを測る。表面は平滑に整形するが、裏面は粗く整形していない。長側面の一方は直角にやや丸く仕上げているが、もう一方は半分を斜めに削って薄くしている。短辺は粗くはあるが、一方の角を落として弧状に成形する。壁材か。

W41は、SK130-4出土の針葉樹を用いた板材で、残存長73.8cm、幅11.5cm、厚さ2.2cmを測る。表面は一部に手斧様の直線的な工具痕を残して平滑に整形するが、一部の刃幅4.8cmの刃先が食い込んだ痕跡も残る。裏面は器表面が粗く、整形していない。長側面はほぼ直角に整形されている。残存する端部は直線的に切断してほぼ直角に成形されている。床材か。

W42は、SK130-3出土のヒノキ属を用いた板目板材で、残存長44cm、幅5.6cm、厚さ0.9cmを測る。残存する端部はほぼ直角に成形されている。

W43は、SK119-2出土のヒノキ属を用いた板材で、残存長74.4cm、幅19.1cm、厚さ3.1cmを測る。表面は刃幅4cm手斧様の痕跡を残して平滑に整形するが、裏面は粗く整形していない。長側面は一方は年輪

界に沿って斜めに成形するが、もう一方は丸く丁寧に仕上げる。一方の短辺は粗く切断痕を残すが、もう一方には直線的な彫引き刃物痕が残され、その外側を両面から斜めに切断している。床材か。

W44は、SK10-2出土のヒノキ属を用いた板目板材で、残存長72.5cm、幅17.1cm、厚さ2.8cmを測る。残存する端部はほぼ直角に成形されている。表面はヤリガンナ様の道具で丁寧に成形している。裏面は刃物痕は残るが整形は不十分である。両側面にも加工痕が見られる。一方の短側面は粗く切断しているが、もう一方は丸みを帯びている。表面には不定方向の細い傷が見られ、W36で見られたものと同様の直線的な厚い刃を浅く打ち込んだだけのものである。傷の幅は2.5mm程度、刃長はやや広く4.8cmまでのものである。傷の両端が浅く薄くなっている、先の丸い刃物が復元される。床材か。

W45は、SK47出土の針葉樹を用いた板目板材で、残存長99.2cm、幅14.6cm、厚さ3.5cmを測る。表面には一部手斧様の工具痕を残して整形するが、裏面や両側面は割ったままで整形を行っていない。端部の切断は粗いが両面から斜めに刃を入れている。表面の一部には刃物傷や穿孔しようとした痕跡が残る。床材か。

W46は、同じくSK47出土のヒノキ属を用いた板材で、残存長69.5cm、幅19.9cm、厚さ2.5cmを測る。器壁が荒れているため、工具痕が観察しにくいが、表面は平滑に仕上げているが、裏面はほとんど整形していない。端部は切断しているようだが、不明瞭な弧状を描く。床材か。

W47は、SK52出土のヒノキ属を用いた板材で、残存長64cm、幅25cm、厚さ3.2cmを測る。表面は平滑に整形しているが、裏面は凹凸が目立つ。両側面にはあまり加工痕は観察できないが、整形している。両端部は粗く切断したままである。一方の端部近くの表面の状態は良いが、中央部付近はあたりがあり傷んでいる。床材か。SK52からはW61も出土している。

W48は、SK22出土のヒノキ属を用いた板目板材で、長さ34.2cm、幅18.1cm、厚さ2.1cmを測る。一部に工具痕が残存し、長側辺に偏った位置に表裏に抜ける釘孔状の小穿孔が2ヶ所認められるが、根によるものかもしれない。両端部は粗く切断されたままである。

W49は、SK130-4出土のヒノキ属を用いた板材で、残存長52.3cm、幅15.2cm、厚さ1.2cmを測る。表面は手斧様の工具痕を残して平滑に整形するが、裏面は整形不十分である。長側面の加工は不明瞭であるが、丸く作られている。短辺の一方は直線的に切断しており、もう一方はやや湾曲している。

W50は、SK29出土の針葉樹を用いた板材で、残存長83.5cm、幅7.1cm、厚さ1.7cmを測る。表面は平滑に整形しているが、裏面はほとんど整形していない。上端部端を薄く作っている。側面の一部は整形している。

W51は、SK48-1出土のヒノキ属を用いた板目板材で、残存長103.1cm、幅11.2cm、厚さ2.3cmを測る。下端部は裏面から斜めに切断しており、もう一端は表面から途中まで斜めに切れ目を入れて切断している。表面には概3列にわたって手斧様の刃物痕を残して整形するが、裏面は整形していない。一方の側面にも工具痕が観察でき、一部整形しているが、下半は割り取られている。もう一方の側面も割り取られている。

W52は、SK130-8出土の針葉樹を用いた板目板材で、残存長96.4cm、幅13.2cm、厚さ2.3cmを測る。表面は一部に手斧様の工具痕を残して平滑に整形するが、裏面は粗く整形していない。長側面は丸く作っている。一方の短辺は直線的に切断しており、もう一方は折損している可能性がある。厚さは一定していない。上端部にあたりがあり、やや窪んでいる。

W53は、SK25出土の針葉樹を用いた板材で、残存長124.3cm、幅16.6cm、厚さ3.1cmを測る。端部はやや偏っ

た綴やかな弧状を描いて成形される。表面は平滑に仕上げられるが、裏面はあまり整形していない。長側面は一方は丸く仕上げているが、もう一方は割り裂いている。一方の短辺は面を削って尖らせており、もう一方は裏面側を強く削って斜めにしている。表面の一部に長さ4.5cm程度の直線的なくぼみとなる刃物痕が見られる。床材か。W9・W10の机天板や一本彫もSK25から出土している。

W54は、SK136出土の年輪界が密な針葉樹を用いた板目板材で、残存長124.7cm、幅は13.7～19.3cmと一方が広い。厚さは3.8cmを測る。端部の一方は直線的に切断し、もう一方は表裏面から斜めに刃を入れて尖らせて切断している。表面は平滑に成形するが、裏面は粗く整形を施していない。長側面は一方は斜めに成形するが、もう一方は削った面のまま残す。斜め成形部の2ヶ所には裏面にかけて刃を入れた抉りが入る。表裏面には直線的に押圧されてくぼむ刃物痕が残る。床材か。

W55は、SK135出土の針葉樹を用いた板材で、残存長143.8cm、幅19.9cm、厚さ2.6cmを測る。端部は一方は直線的に粗く切断し、もう一端は裏面から刃幅4.8cmほどの刃を斜めに何度も入れて粗く切断している。二次的なものか。長側面は一方を直角に、もう一方は丸く成形する。床材か。

W56は、SK26-h出土のヒノキ属を用いた板材で、残存長176.2cm、幅19.4cm、厚さ5cmを測る。一方の端部は裏面から斜めに刃を入れて直線的に粗く切断され、もう一方は刃物を入れて折り取っている。表面の整形は施されているがあまり平滑ではない。裏面は不調整である。長側面は一方がやや丸みを帯びるように、もう一方は斜めにまっすぐ仕上げている。表面には刃物痕が残る。床材か。

W57は、SK10-4出土のコナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太材を縦に半削したもので、芯去り材である。残存長43.8cm、幅17.2cm、厚さ7.0cm。下端は切断され、上端は欠損が著しい。上端直下を幅5.5cm、深さ0.8cmにわたって溝状に切り込む。木表面は樹皮が除かれ、一部に刃物痕を残している。裏面は削れのままである。鼻継り材か。

W58は、SK44-ア出土。コナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太材を縦に半削したもので、芯去り材である。表面側の木表は手斧様工具の痕跡を残して一部整形するが、裏面は削ったままで整形していない。両側面の下半分を削って細くし、段を作っている。下端はまっすぐ切断され、上端は表面側から斜めに削って尖らせている。残存長55.7cm、幅20.9cm、厚さ10.6cmを測る。当初、唐物の未完成と考えていたが、コナラ属アカガシ亜属を用いていないことから不明である。

W59・W60は、SK4-3出土の針葉樹を用いた細い角棒状を呈したもので、両者とも一端を尖らせている。W60は一端が焼け焦げている。松明などの付け木であろう。

W61は、SK52出土。ヒノキ属板材を加工したもので、一端を尖らせ、側面の角は面取りを施している。横方向のあたりが観察され、縄などで縛った痕跡かもしれない。

W62は、SK64出土のモミ属を用いた板目板材の矢板である。幅15.4cm、厚さ3cmの板材の一端を側面から細かく削って尖らせている。表面は平滑に整えるが、側面は削れのままである。残存長57.7cmを測る。

粘土探掘坑周辺に打たれた杭・矢板

W63は、針葉樹角材を用いた矢板で、SK123の横に打たれていた。幅6.3cm、厚さ2.4cm、残存長49.3cmで、先端部は3方向から削って尖らせているが、一長側面からのみ大きく削る。

W64は、SK19とSK20の間に打たれていた杭で、次のSD 8出土のW65～W80と同様、粘土探掘坑以前の水田や溝に伴う可能性が高く、弥生時代中期以降のものと思われる。針葉樹角材の先端を概6方向から面取り状に削って尖らせた杭で、裏面は刃が当たっていない。上半の角に打ち込まれた刃物痕は直

線的で鋭いことから、鉄器を用いたものと思われる。幅5.7cm、厚さ3.4cm、残存長71.6cmを測る。

SD 8に伴う木製品（図版100～102、写真図版103～105）

W65～W80及び、写真のみを掲載したW95～W104は、SD 8の南に沿って打ち込まれていた杭・矢板列の一部である。SD 8は調査区の北東端から南西方向に走り、この杭列付近で西へと向きを変えている。その部分から南に分岐する溝がSD 8-2である。この杭列はSD 8-2を横断するように打たれており、SD 8からSD 8-2に流れる水流を調節する井堰や、SD 8を護岸するために設けられたものであろう。SD 8は粘土採掘坑によって分断されており、出土した土器から弥生時代中期以降のものと思われる。

ほとんどの杭・矢板を削った刃物痕は幅が4cm以上あり、鋭く大きく削っている。刃物先が食い込んだ痕跡を見ても刃は厚くではなく、形状は不明ながら金属器を用いた痕跡に近い。

W65は、クリを用いた柾目板の矢板で、残存長80.3cm、幅10.9cm、厚さ4.3cmを測る。先端部は両側面から手斧或いは鉈状工具で大きく削って尖らせている。表裏面は平滑である。

W66は、シイ属の柾目ミカン割り材を用いた矢板で、残存長56.9cm、幅10.7cm、厚さ4.5cmを測る。先端部は両側面から削り、表裏面も小さく削って尖らせている。表面から側面に抜ける横向方向の穿孔が残るが、当初のものは不明である。また一方の側面中央に切込みが見られる。建築部材等の再加工の矢板かもしれない。

W67は、シイ属の丸太半裁芯去り材を用いた杭で、残存長55.8cm、幅7.4cm、厚さ3.8cmを測る。先端部は5方向から大きく削って尖らせている。

W68は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太材を用いた杭で、4方向から3回程度刃物を入れて尖らせている。節の部分にも刃物の痕跡を残しているが、完全には打ち落としていない。先端部以外にも側面を削っている。

W69は、直径11cmほどの丸太材を半裁して用いた杭で、下端部は半裁した角を35.5cm上から削り、先端はさらに2方向から削って細く尖らせている。

W70は、広葉樹ミカン削材の先端を4方向から削って尖らせた杭である。風化が著しい。

W71は、クリ丸太材を用いた杭で、節を落とし、樹芯近くまで半裁したのち、その両角を削って尖らせている。柱材等の再利用の可能性もある。

W72は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太材を用いた杭で、先端を8方向から11回にわたって刃物を入れて尖らせている。

W73は、直径7.3cmほどの広葉樹丸太材を用いた杭で、節も粗く残る。先端部は8方向から大きく削って尖らせている。

W74は、直径7.5cmほどの丸太材を用いた杭で、粗く枝を落としたままで節も削っていない。先端部の加工幅は14cmと狭く、対面する2方を大きく半分まで削り、直交方向の2面は少しだけ削っている。用いられた刃の幅は2.5cm程度である。

W75は、針葉樹角材を用いた杭で、一端を削って尖らせているが、幅は狭い。残存する上端にも削った痕跡が残る。

W76は、幅6.1cm、厚さ3.2cmの針葉樹板目角材を用いた杭或いは矢板で、一端の両側面から削って尖らせている。建築部材等の再利用かもしれないが、やや曲がっている。

W77は、最大幅5.1cmの広葉樹ミカン割り材を用いた杭で、先端部は概6方向から削って尖らせている。

W78は、ヒノキ属の角材を用いた杭で、残存長83.5cm、幅4.2cm、厚さ3.3cmを測る。先端部は概5方向から削って尖らせている。一表面のみを平滑に加工しており、建築部材などの再加工であろう。

W79は、針葉樹板目板材或いは角材を用いた杭或いは矢板で、残存長90.4cm、幅5.9cm、厚さ2.4cmを測る。先端部は概4方向から削って尖らせている。材の一面のみ平滑に整形しており、建築部材などの再利用であろう。

W80は、年輪界の密な針葉樹板目板材或いは角材を用いた杭で、残存長88.8cm、幅5.8cm、厚さ3.6cmを測る。先端部は大きく削って尖らせている。上端部は風化するが、横方向のあたりが観察できた。側面などを削て断面は長方形を呈すが、やや湾曲している。建築部材などの再利用であろう。

この他、写真を掲載したW95～W104もSD8に伴う杭列を構成するものである。

W95は、長さ59.0cm、幅9.0cm、厚さ1.5cmのヒノキ属の薄い板目板材で、表面は整形するが、裏面は粗いままである。一端は不整だが、面取りを施している。

W96は、クリの丸太材を半裁したもので、一端を側面から削って尖らせている。一部に樹皮が残る。

W97は、シイ属のミカン割り材を用いた板状の材で、先端を樹芯側から斜めに削り矢板状にしている。

W98は、直径11cmほどのコナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太を半裁し、一端の両角を大きく斜めに削り尖らせている。木表や半裁面は少しだけ削っている。木表の一部が焼け焦げており、先端部の制作時に削られている。丸太の時に表面が焼けたものである。

W99は、クリのミカン割材を用いた矢板で、先端は4方向から複数回にわたって削り尖らせている。樹芯側からが大きく削られている。両長側面を最長23cm削っているが、表裏面はあまり削っていない。

W100は、直径4cmほどの広葉樹散孔材の丸太材の一端を1方向から尖らせた杭である。

W101は、クリを用いており、幅9.2cm、厚さ2.3cm板材の一端を裏面と両長側面から削って尖らせ、矢板状にしている。一方からの削りが大きい。

W102は、クマシデ属の樹皮を残した丸太材の一端を6方向から削って尖らせた杭である。

W103は、直径4cmほどのコナラ属コナラ亜属クヌギ節の丸太材の一端を概5方向から削って杭にしている。

W104は、直径5cmのケヤキの丸太材の一端を概3方向から削って杭としている。

W81・W82は、SD8最下層出土。針葉樹の小角材で、W81は上半部で、W82は両端の一部の面が焼け焦げている。下端部を尖らせており、松明などに用いた付け木であろう。

W83は、SD8北側の杭列を構成していた。残存長56.2cm、幅2.7cm、厚さ1.7cmを測る。針葉樹角材を用いているが、先端部の加工はほとんど認められない。

2区その他出土の木製品

W84は、SD9-3出土の板状の小片である。幅2cm弱の針葉樹の薄い板目板で、両端部を粗く刃物で斜めに削り落として刃を付け、鎧状にしている。樹芯側の上下端近くがややくぼんでおり、削っているのかもしれない。

写真掲載のW105は、下層水田に伴うと思われるSD1出土。マツ属を用いた板状を呈したもので、側面は削れのままで、調整されていない。

4. 寺内3区出土の木製品（図版103、写真図版104）

W85は、寺内2区中央付近の茶褐色腐植質シルトから出土した。同層は粘土探掘坑の上面を覆うものである。針葉樹半柾目の板材で、下端部を欠くが、残存長96.5cm、幅23.4cm、厚さ2.9cmを測る。表面にはやや弧状をなす刃をもつ手斧様工具の痕跡が残るが、仕上げは粗い。裏面・両側面は粗く削ったままで、整形痕はほとんど観察できない。

W86は、3区SD23出土のもので、ヒノキ属板目材を用いた曲物底板或いは蓋板である。直径25cm程の円盤の過半を失うが、残存径24.7cm、厚さ0.85cmを測る。表裏に抜ける孔が12ヶ所、不規則に穿たれており、そのさらに外側には1ヶ所、櫛皮綴じが残存していた。穿孔は大小がある。表裏面には細かい刃物傷が残されており、別用途に再利用されたものかもしれない。

W87は、3区のSD8合流部出土のヒノキ属板目材を用いた矢板である。残存長49.2cm、幅15.6cm、厚さ2.1cmを測る。先端部の両側面から7～9回削って尖らせている。表面は整形しているが、裏面は粗い。建築部材の再利用か。

W88～W91は、3区中世水田面の落ち部の機械掘削時に出土した。W88は、針葉樹角材の一端を表裏面から扁平に削って尖らせたもので、楔や木栓として使われたものであろう。長さ18.8cm、幅3.2cm、厚さ2.1cmを測る。

W89は、針葉樹板目材を加工したもので、一方の長側面を薄く丸く整形し、直径1.3cmほどの半円形の抉りを入れているが、火きり臼として使用したものではない。もう一方の長側面には刃物が斜めに入る部分が見られる。表裏面は粗く、仕上げを施していない。上端部を失い、残存長26.8cm、幅3.9cm、厚さ1.4cmを測る。

W90は、直径2.5cmほどの細い針葉樹の丸太材の一端を2方向から斜めに刃を入れて切断したもので、他端を失い、一部刃物で削っている。

W91は、年輪界の粗い針葉樹を直径1.3cmほどの棒状に削り出したもので、両端を失う。風化が著しいが、表面を丁寧に削っており、断面は概九角形となる。

5. 寺内4区出土の木製品（図版103、写真図版104）

W92は、4区SD20から出土した。年輪界の粗い針葉樹を用いた細い棒状を呈したもので、一方の端部を欠損するが、もう一方を尖らせている。表面の調整はほとんど見られない。

6. 寺内6区出土の木製品（図版103、写真図版104）

W93は、6区SD2から出土した。針葉樹板目材の細い棒状を呈したもので、断面は1.5×0.9cmの長方形で、長側の角は面取りを行っている。一端は失うが、残存する一端は表面及び両側面の3方向から削りこんで、断面隅丸方形の柄を作り出している。柄の先端は失われている。組み合わせの糸巻き等の部品か。

W94は、6区の人力掘削時に黒色シルト層から出土した。針葉樹板目材の直径17.1cm以上の円盤破片で、厚さ0.7cmほどの曲物底板である。表面の外周近くには異描線（直径16cm程度）を刻み、線上の木目を外した位置に一部櫛皮綴じの桟の皮が表裏に抜けている。中央には3.7cmの幅で方形の切り欠きが開けられているが、切断面が粗く、刃物痕が表面にまで及んでいることから二次的なものであろう。その横や外周に小円孔が2ヶ所ある。

第4節 石製品（図版104、写真図版106）

S1は楔形石器で、サヌカイト製。図上下端部に微細な階段状剥離が顯著で左右両側に剪断面を有する。

S2は磨製石庵丁で、緑色片岩製。直線的な背部に緩い弧を描く両刃の刃部をもつ外湾刃半月形で、背部と刃部の中間に両面側から穿孔される。

S3は投弾であろうか。直径3.4cm前後の球形の円礫で掌に収まりやすい規模・形状であり、重量は55.2gと規模に比して比重が高くずっしりしている。

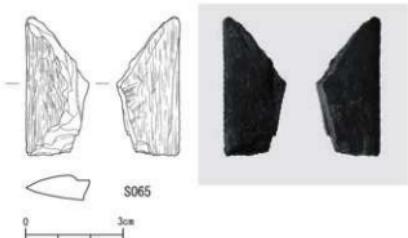
S4～S8は砥石で、規模や形状からS4～S6が手持ち砥石、S7・S8が置き砥石と考えられる。S4は図正面及び右側面の2面を砥面とする。粒子の極めて細かい珪質頁岩を用いる。S5は図左側面が本来の主要な砥面で図裏面側も使用されるが、最終的には折損した剥離面となる図正面が最もよく使用されている。非常に粒子の細かい砂岩を用いる。S6は図正面及び裏面、左右両側面の4面に砥面を形成する。とりわけ図正面のみが凹面となり最もよく使用されるが、両側面は平滑でかなり目の細かい研ぎに使用されている。図上端部は斜め方向からの擦り切り溝により素材となる石材が切断された痕跡を留める。細粒砂岩製。S7・S8は花崗岩を用い、S7は図正面に、S8は図正面及び裏面を砥面として使用している。S8の図正面には幅6～8cm程度の浅い凹み状の範囲が3ヶ所以上認められ、台石として使用された可能性も考えられる。

（捕獲）大門烟瀬遺跡出土の磨製石剣

S065は、大門烟瀬遺跡のB地区に設定した確認調査（遺跡調査番号2006206）トレーナー4の暗褐色中砂～シルトの落ち込みから出土した。このトレーナーでは漆状のSR01や堅穴住居SH04が検出されている。「大門烟瀬遺跡・大伏北山遺跡」兵庫県文化財調査報告第486冊掲載の大門烟瀬遺跡出土石器の続き番号を付した。

粘板岩製の磨製石剣である。残存長4.8cm、残存幅2.2cm、厚さ0.7cmを測る。全体的に擦過痕が細かく非常に丁寧に研磨されている。横断面形はレンズ状を呈し、図右側の研磨面がやや平滑気味であるのに対し図左側の研磨面は顯著な曲面に研ぎ出される。残存範囲内に鏽は認められず、横断面形の形状からも、本来の幅は4.0cm以上あったと推定される。図左側の研磨面の右端に一見溝状に剃り込まれたかの

ような形状の箇所が見てとれるが、よく観察すると研磨の及ばない欠損箇所であり、銅劍形磨製石剣の柄のような加工には該当しない。刃部は残存範囲全体にわたって鋭利に研ぎ出されており、握り研磨面のような刃端の研磨面は作り出されていない。刃部の平面形は直線的であり、カーブを描き出す箇所が見いだせないことから、磨製石剣の中央付近の刃部片と考えられる。



第3図 大門烟瀬遺跡出土磨製石剣

第5節 金属製品（図版104、写真図版106）

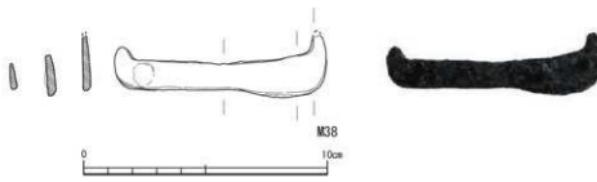
M1は、寺内0区石組出土の銅製品で、江戸時代の寛永通寶である。直径2.3cmを測り、X線写真では縁が多く見られるが、状態は良好である。

M2は、寺内0区SH1東区出土の鉄製品で、 $5.3 \times 0.8 \times 0.5$ cmの細い板状のもので、断面は長方形を呈している。上端は失われているが、刀子・ヤリガンナなどの柄であろう。

写真掲載のM3～M5は、スラグである。寺内3区東半の柱穴出土のM3は、 $3.8 \times 2.4 \times 2.8$ cmの大きさのものである。寺内1区P143出土のM4は、 $3.6 \times 2.6 \times 1.3$ cmの大きさを持つ。同P143出土のM5は、 $2.1 \times 1.6 \times 1.4$ cmの大きさである。P143からは土師器の手捏ね整形の小皿215が出土しており、中世以降のものと思われる。

（補遺）津万地区出土の鉄製品

M38は、津万遺跡群の確認調査時に津万4西地区に設定したトレンチ25の礫混じり灰色粘土中から出土している。一長辺の両角を上方に突出させた板状を呈するもので、長さ8.7cm、幅2.55cmで厚さは0.3cmしかない。刃部側が厚く、両端の突出部に木柄を装着した火打ち金であろう。金属器の番号としては「津万遺跡群4」兵庫県文化財調査報告第518冊掲載の金属器の続き番号を探った。



第4図 津万遺跡群4の鉄製品

第5章 分析

第1節 胎土分析（薄片分析法）

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

西脇市寺内に所在する津万遺跡群（寺内地区）は、加古川中流域右岸の平地に位置する。調査区のうち、北部の1区は段丘上に位置し、その南側の2区以下は沖積低地上に位置する。これまでの発掘調査により、1区からは弥生時代後期末とされる竪穴住居跡や、平安時代～鎌倉時代とされる掘立柱建物跡などの遺構と、それらに伴う土器などの遺物が確認され、2区では古墳時代中期とされる粘土探掘坑などが検出されている。

今回の分析調査では、調査区内より出土した弥生土器および土師器の材質（胎土）の特性を明らかにし、調査区内の堆積物および周辺地質との比較から、各時期の土器の生産について検討する。

2. 試料

試料は、津万遺跡群寺内地区より出土した弥生土器片3点と土師器片18点および比較対照試料として調査区内より採取された堆積物6点の合計27点である。各試料には、試料番号1～27が付されており、試料番号1～21は土器片、試料番号22～27は堆積物である。

各試料の種類、器種、出土地区や出土遺構などは、一覧にして表1（巻頭写真図版16）に示す。

3. 分析方法

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断（堆積物については樹脂で固化した後に切断）、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成等を明らかにした。

なお、土器胎土および赤玉の薄片のデータの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細縫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

4. 結果

結果を表4、第5～7図に示す。胎土中の碎屑物について、鉱物・岩石の種類構成、粒径組成、碎屑物の割合の順に述べる。

1) 鉱物・岩石

土器試料21点のうち、6区出土の弥生土器の裏の試料番号21を除いた20点は、ほぼ類似した組成を示す。共通する特性としては、鉱物片では石英と斜長石が多く、試料によっては微量の角閃石を含むことであり、岩石片では凝灰岩と変質岩および珪化岩を比較的多く含むことである。ここでは、この特性を有する20点の試料の胎土をA類とし、試料番号21の胎土をB類とする。

A類の試料の組成をさらに詳細にみると、少量の火山ガラスを伴う組成と少量のチャートや頁岩などの堆積岩類を伴う組成を見出すことができる。これらをそれぞれAb類とAc類とし、他の試料をAa類とする。Ab類に分類される試料は、ともに2区出土の弥生土器である脚付無頸壺と鉢の試料番号6と7およびいすれも2区出土の土師器の壺の試料番号8、直口壺の試料番号9、壺の試料番号12と14の計6点の試料である。Ac類に分類される試料は、ともに2区出土の土師器の壺である試料番号15と20である。

B類の特徴は、多量の火山ガラスを含むことである。火山ガラスはバブルウォール型を主体とする。さらに、A類との違いとしては、凝灰岩が計数されずにかつ石英が極めて微量しか含まれないことが斜長石が比較的多く含まれることなどがあげられる。

堆積物試料のうち、試料番号24と26以外の4点については、上述した土器試料のA類と共通した特性が見出せる。それらの中で試料番号23、25、27の3点については、土器試料のAa類とはほぼ同様の組成とみることができる。試料番号22については、少量のカリ長石の鉱物片と少量の花崗岩類および花崗斑岩の岩石片を作うことから、上述したA類からさらに細分してAd類とする。堆積物試料の試料番号24と26は、炭質物や植物片を多く含むなど土器試料には認められない組成であることから、C類とする。

以上述べた土器試料および堆積物試料の分類結果を一覧にして表3に示す。

2) 粒径組成

最も高い割合（モード）を示す粒径は、試料によって粗粒砂から粗粒シルトまで様々である。ここでは、その粒径によって、粗粒砂を1類とし、5類までの分類を行った。各試料の分類結果は、表3に併記する。

土器試料では、粗粒砂をモードとする1類が最も多く8点を占め、次いで板細粒砂をモードとする4類が多く7点を占める。中粒砂をモードとする2類と細粒砂をモードとする3類はそれぞれ3点ずつである。

堆積物試料では、1類と2類が2点ずつであり、土器試料には認められなかった粗粒シルトをモードとする5類や細粒砂と粗粒シルトが同程度に割合の高い3~5類とすべき分類も認められた。

3) 砕屑物の割合

土器試料のほとんどは、砕屑物の割合が10~20%の範囲にあり、特に集中する割合は認められない。堆積物試料についても試料番号24と25を除いては、土器試料と概ね同様に10~20%程度を示す。試料番号24については、砕屑物の割合が5%未満と特に低く、試料番号25については、試料自体が砂であることから包埋した樹脂の部分を孔隙として計数したために他の試料とは異なる組成となっている。

5. 考察

1) 土器胎土と地質学的背景

試料番号21以外の土器試料の胎土のA類と同様の鉱物・岩石組成は、調査区内で採取された堆積物試料6点のうちの4点の試料にも認められた。このことから、試料番号21以外の土器の材料となった堆積物は、調査区周辺域で採取された可能性が高いと考えられる。調査区周辺域の地質については、栗本ほか（1993）や吉川ほか（2005）などにより詳細に記載されているが、これらを参照すれば、A類の岩石

表3 胎土分類結果

試料番号	報告番号	種別	部類	胎土 鉱物 岩石 組成
1	2	土師器	壺	Aa 3
2	23	土師器	鉢	Aa 4
3	28	土師器	壺	Aa 2
4	31	土師器	壺	Aa 4
5	40	土師器	鉢	Aa 4
6	45	弥生土器	脚付無頭壺	Ab 4
7	46	弥生土器	鉢	Ab 4
8	62	土師器	壺	Ab 1
9	72	土師器	直口壺	Ab 4
10	98	土師器	壺	Aa 1
11	112	土師器	直口壺	Aa 4
12	125	土師器	壺	Ab 1
13	126	土師器	壺	Aa 1
14	134	土師器	壺	Ab 3
15	147	土師器	壺	Ac 1
16	160	土師器	壺	Aa 1
17	165	土師器	壺	Aa 1
18	167	土師器	壺	Aa 2
19	171	土師器	直口壺	Aa 1
20	175	土師器	壺	Ac 2
21	206	弥生土器	壺	B 3
22	-	土サンブル	-	Ad 1
23	-	土サンブル	-	Aa 3~5
24	-	土サンブル	-	C 5
25	-	土サンブル	-	Aa 2
26	-	土サンブル	-	C 2
27	-	土サンブル	-	Aa 1

片の特徴である凝灰岩は、周辺山地に広く分布する後期白亜紀火山岩類に由来すると考えられる。また、変質岩や珪化岩は、かつて後期白亜紀火山岩類中の各所に散在した金属鉱床やロウ石鉱床などを形成した珪化岩や変質岩に由来すると考えられる。さらに、堆積物試料に認められたAd類の特徴である花崗斑岩や花崗岩類は、加古川の左岸側の山地内や支流の門柳川左岸の山地内に岩脈として分布している。

土器胎土のAb類の特徴とされる火山ガラスは、加古川右岸の山地縁辺に分布する山麓緩斜面堆積物中に挟在するテフラ層に由来する可能性がある。これについては、上述した地質記載にはないが、山元ほか（2000）により、姫路市背後の丘陵縁辺に分布する山麓緩斜面堆積物中に始良Tnテフラ（AT：町田・新井、1976）などが確認されている。調査区周辺における山麓緩斜面堆積物も、形成時期および形成過程がほぼ同様であることから、テフラ層の挟在は十分に考えられることである。土器胎土のAc類の特徴である堆積岩類は、加古川上流域の山地に丹波帯と呼ばれる中生代三疊紀後期からジュラ紀のチャートや頁岩などの堆積岩類からなる地質が広く分布していることから、調査区周辺の堆積物中にもこれらの岩石に由来する碎屑物は混入していると考えられる。

本分析調査結果からみれば、調査区内の堆積物と同様とされたAa類の胎土の土器の材料採取地は、おそらく調査区に最も近い周辺域であり、実際に今回の試料である試料番号23、25、27の粘土や砂およびシルトは土器の材料として使用された可能性はあると考えられる。ただし、粒径組成の違いや碎屑物の割合の違いなどから、それら堆積物が単味で材料となったのではなく、材料の一部として使用されたと考えられる。Ab類やAc類の胎土の土器の材料採取地は、Aa類の材料採取地からは若干離れた位置であるかもしれない。特に堆積岩類が特徴のAc類の材料採取地は、今回の調査区よりも堆積岩類の影響のより強いと考えられる上流側の地域である可能性が考えられる。

B類の胎土については、周辺の主要な地質である凝灰岩を含まないことから、周辺域の堆積物には由来しない可能性がある。現時点では、その地域性を見出すことはできないが、斜長石が比較的多いことと微量ながらも流紋岩・デイサイトの岩石片が認められていることから、背後に流紋岩・デイサイトからなる地質が分布する地域であると考えられ、さらに多量の火山ガラスを含むことも考慮すれば、段丘や丘陵の縁辺地であるとも考えられる。B類の地域性については、今後のこの地域における弥生土器の考古学研究事例も含めた検討が必要であると考えられる。

2) 土器胎土と土器の種類・器種との関係

土器の種別および器種と胎土分類との対応関係を見ると、最も試料数の多い土師器の壺11点中半数を超える7点がAa類であり、ほかにAb類とAc類が2点ずつという構成である。また、Aa類の中には土師器の壺や鉢、器台、直口壺も含まれており、これらの結果から、津万遺跡群寺内地区出土土師器の胎土の主体はAa類であると言える。

一方、土師器の壺の一部に認められるAb類の胎土は、土師器では壺や直口壺など壺以外の器種にも認められるが、注目されるのは弥生土器試料3点のうちの2点までがAb類であることである。前述したように、のこる1点の弥生土器試料の胎土はB類であったことも考慮すれば、出土地が同じでも、土師器と弥生土器との間には、原材料の選択など製作に関わる事情の違いがあったことが推定される。

引用文献

- 栗本史雄・松浦清久・吉川敏之、1993、羅山地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、85p。
町田・洋・新井房夫、1976、広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－、科学、46、339-347。
松田順一郎・三輪着業・別所秀高、1999、糸生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－、日本文化財学会第16回大会発表要旨集、120-121。
山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和、2000、龍野地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、66p。
吉川敏之・栗本史雄・青木正博、2005、生野地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1図幅）、産総研地質調査総合センター、48p。

表4 薄片觀察結果(2)

表4 薄片觀察結果(1)

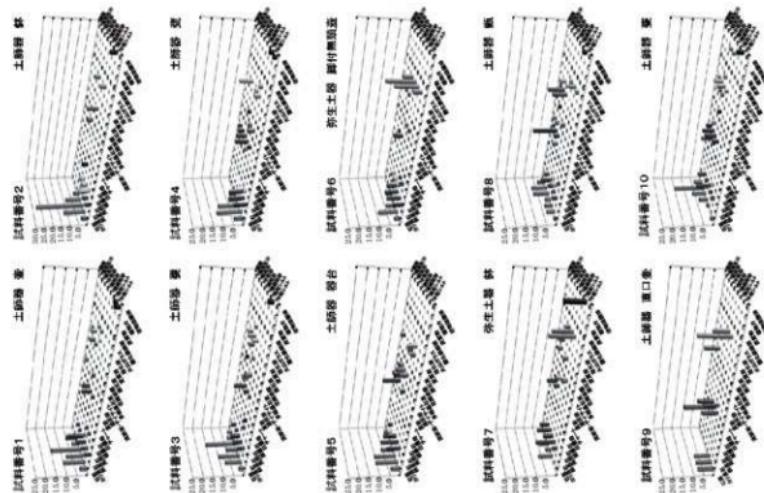
表4 薄片觀察結果(4)

表4 薄片觀察結果(3)

表4 薄片觀察結果(6)

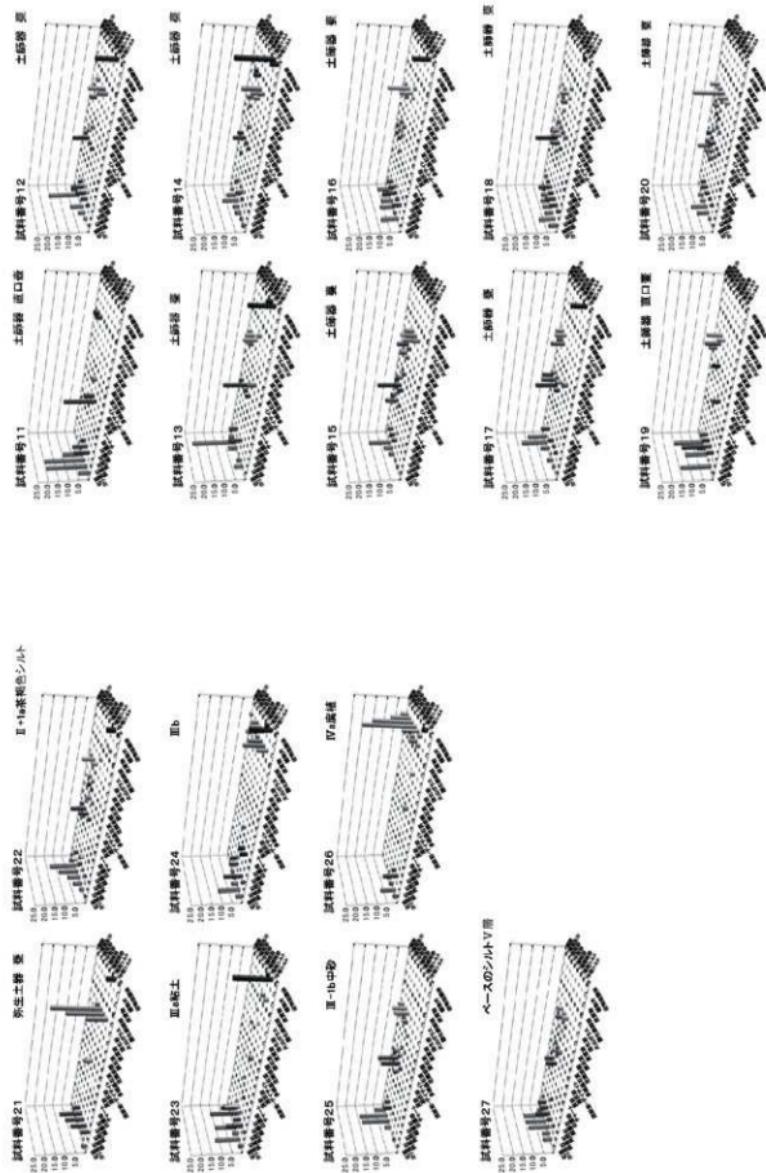
表4 薄片觀察結果(5)

表 4 薄片觀察結果 (7)



第5図 胎土中の碎屑物の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)

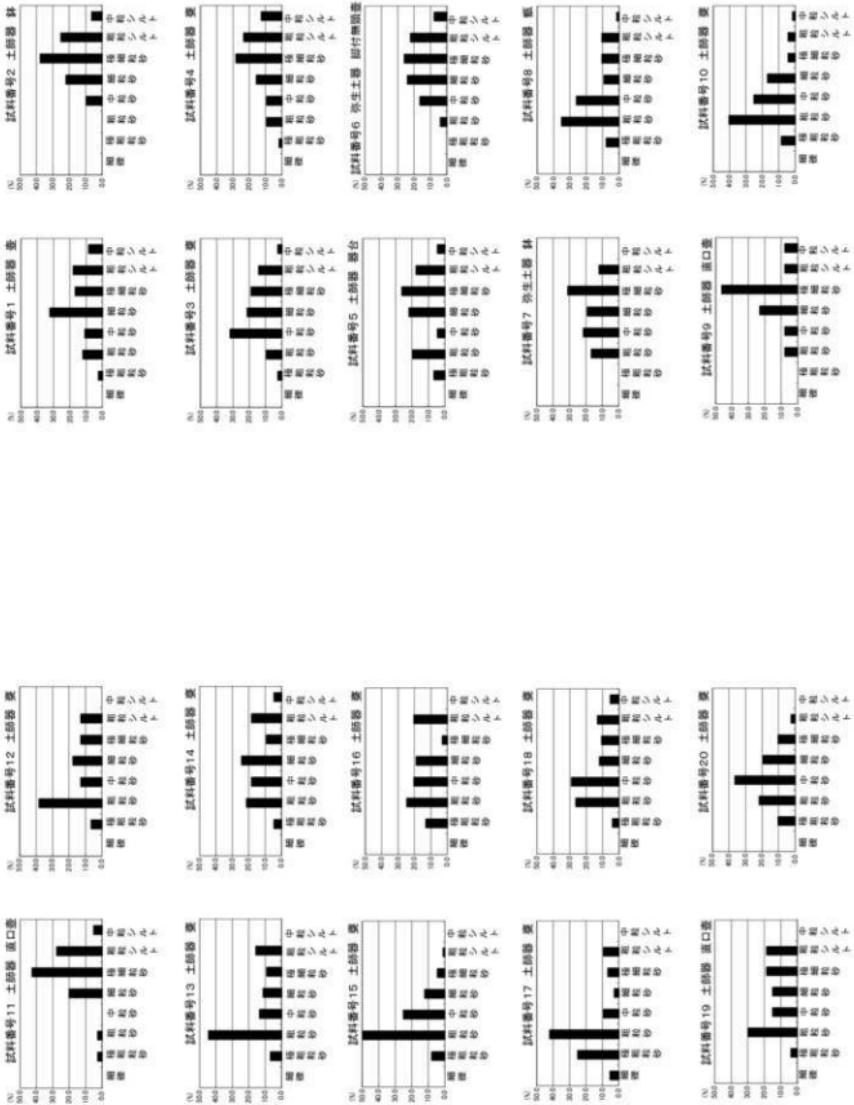
第5図 胎土中の碎屑物の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)

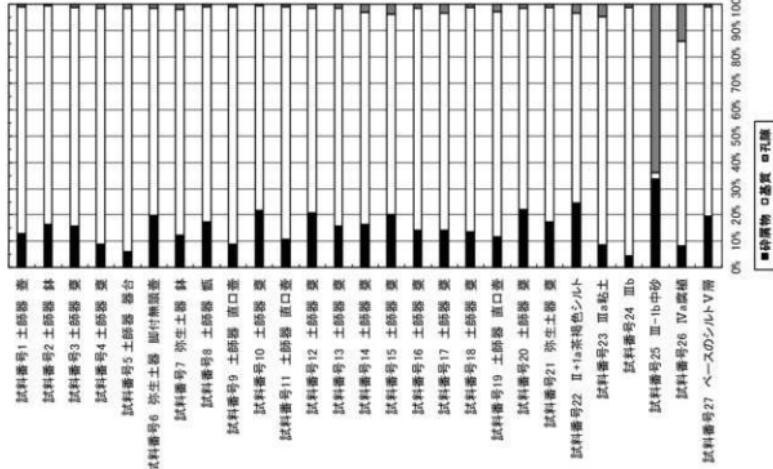


第5図 胎土中の碎屑物の各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)

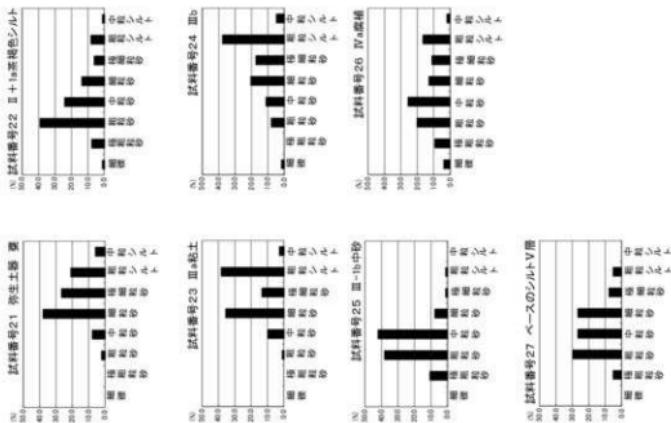
第6図 土中の中性物の粒径組成(1)

第6図 土中の中性物の粒径組成(2)





第7図 砂層物・基質・孔隙の割合



第6図 地下中の砂層物の粒径組成(3)

第2節 津万遺跡群1の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

津万遺跡群1は兵庫県西脇市寺内に所在し、弥生時代から中世の遺構、遺物が確認されている。本分析調査では、各遺構から出土した木製品を対象に樹種同定を実施し、木材利用について検討する。

1. 試料

試料は、津万遺跡群1より出土した木製品61点である。

2. 分析方法

資料の木取りを観察した上で、剥刀を用いて木口（横断面）、柵目（放射断面）、板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）、Wheeler et al. (1998)、Richter et al. (2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995;1996;1997;1998;1999）を参考にする。

3. 結果

結果を表5に示す。出土した木製品は、針葉樹4分類群（マツ属、モミ属、スギ、ヒノキ属）と広葉樹6分類群（クマシデ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属、クリ、シイ属、ケヤキ）に同定された。なお、収縮劣化していた報告番号W5、W100は広葉樹散孔材に、報告番号W6は広葉樹（散孔材？）までしか同定できなかった。

各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急～緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は保存状態が悪く観察できない。放射組織は単列で1～15細胞高であるが、多くは10細胞高以下である。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は通常単列。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野2個が基本。放射組織は単列。

表5 津万遺跡群1の樹種同定結果

報告番号	器種など	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	樹種
W 2	円盤状製品	12.5	12.0	1.3	板目	ヒノキ属
W 3	底板	27.3	14.2	0.8	板目	スギ
W 4	柱材	15.5	7.8	5.2	板目	ヒノキ属
W 5	漆椀	5.2	5.2	1.0	横木地	広葉樹散孔材
W 6	漆椀	10.5	9.0	5.0	横木地板目	広葉樹(散孔材?)
W 8	盤	35.0	22.5	3.5	横木地板目	ケヤキ
W10	刷	87.0	16.2	3.5	板目	コナラ属アカガシ属
W11	刷	87.6	17.0	3.2	板目	コナラ属アカガシ属
W12	刷	96.0	10.0	3.2	板目	コナラ属アカガシ属
W13	刷	32.8	12.5	2.5	板目	コナラ属アカガシ属
W14	板材	46.5	6.0	2.5	板目	ヒノキ属
W14	櫛	91.5	13.0	2.5	板目	ヒノキ属
W15	板材	70.7	14.5	3.5	板目	コナラ属コナラ属クヌギ節
W16	板材	49.5	5.5	2.0	板目	ヒノキ属
W17	棒状製品	51.3	2.7	2.3	分割	スギ
W18	板材	61.0	4.0	3.5	分割	ヒノキ属
W19	棒状製品	60.0	3.5	2.3	分割	ヒノキ属
W20	棒状製品	130.8	3.7	2.8	分割	ヒノキ属
W21	棒状製品	134.0	5.0	2.8	分割	ヒノキ属
W23	板材	15.5	4.7	2.5	板目	ヒノキ属
W24	板材	42.8	6.3	2.5	板目	ヒノキ属
W25	棒状製品	72.0	3.0	1.7	分割	ヒノキ属
W28	棒状製品	42.0	3.5	2.2	板目	ヒノキ属
W29	板材	103.0	21.5	5.0	板目	ヒノキ属
W30	板材	98.3	16.3	1.8	板目	ヒノキ属
W31	板材	21.5	4.5	1.7	板目	コナラ属コナラ属クヌギ節
W36	板材	70.0	15.5	2.5	板目	ヒノキ属
W42	板材	44.0	5.5	1.0	板目	ヒノキ属
W43	板材	74.0	19.0	2.2	板目	ヒノキ属
W44	板材	72.0	17.0	2.3	板目	ヒノキ属
W46	板材	69.0	19.5	2.0	板目	ヒノキ属
W47	板材	64.0	24.5	3.5	板目	ヒノキ属
W48	板材	34.0	17.8	2.0	板目	ヒノキ属
W49	板材	52.0	15.5	1.0	板目	ヒノキ属
W51	板材	102.5	11.0	2.5	板目	ヒノキ属
W56	板材	75.0	19.8	4.0	板目	ヒノキ属
W57	丸太	45.0	18.0	6.8	板目	コナラ属コナラ属クヌギ節
W58	柱材	57.5	23.5	7.0	分割	コナラ属コナラ属クヌギ節
W61	棒状製品	33.0	4.2	2.0	板目	ヒノキ属
W62	矢板	58.0	16.0	3.0	板目	モミ属
W65	杭	80.0	11.8	3.8	板目	クリ
W66	杭	57.5	10.8	3.5	板目	シイ属
W67	杭	59.6	7.5	3.3	半裁	シイ属
W68	杭	44.5	6.5	5.5	芯持丸木	コナラ属コナラ属クヌギ節
W71	杭	42.0	8.0	5.5	半裁	クリ
W72	杭	34.5	5.0	5.5	芯持丸木	コナラ属コナラ属クヌギ節
W78	杭	83.5	4.2	3.3	分割	ヒノキ属
W86	曲物底板	24.5	10.0	0.5	板目	ヒノキ属
W87	矢板	49.0	16.0	2.1	板目	ヒノキ属
W95	板材	59.0	9.0	1.5	板目	ヒノキ属
W95	板材	87.5	24.0	1.8	板目	ヒノキ属
W96	杭	47.0	7.0	3.5	板目	クリ
W97	杭	61.3	9.0	2.8	板目	シイ属
W98	杭	62.0	11.0	5.5	半裁	ヒノキ属
W99	杭	52.8	10.0	5.0	ミカン剤	クリ
W100	杭	19.0	4.0	3.2	芯持丸木	広葉樹散孔材
W101	杭	44.5	9.2	2.3	板目	クリ
W102	杭	48.0	6.5	4.7	芯持丸木	クマシデ属
W103	杭	21.2	4.0	2.8	芯持丸木	コナラ属コナラ属クヌギ節
W104	杭	22.0	5.0	4.8	芯持丸木	ケヤキ
W105	板材	19.5	6.2	2.3	板目	マツ属

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

仮造竈の早材部から晩材部への移行は緩やか～や急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型で、1分野2個が基本。放射組織は通常單列。ヒノキと思われる個体が多い。

・クマシデ属 (*Carpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が主として放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～3細胞幅、1～40細胞高。クマシデ節に似る。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔團部は1～3列、孔團外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔團部は3～4列、孔團外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列。

・シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

環孔材～放射孔材で孔團部は3～4列、孔團外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では梢円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った梢円形～多角形。ともに管壁厚は中庸～薄い。道管の穿孔は單穿孔であるが、小道管には階段穿孔が現れることがある。放射組織は同性、單列、1～20細胞高。柔組織は散在状および短接線状。年輪界は明瞭。複合放射組織がみられないため、スダジイに似る。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔團部は1～2列、孔團外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、細胞幅は1～数列。

4. 考察

木製品の木材には、合計10種類が認められた。各種類の材質等についてみると、針葉樹のマツ属は二次林等に生育する常緑高木で、木材は針葉樹としては重硬な部類に入り、強度と保存性が高い。モミ属は山地・丘陵地に生育する常緑高木で、木材は木理が直通で割裂性は高いが、強度と保存性は低い。スギは適湿地に生育する常緑高木、ヒノキ属は山地に生育する常緑高木で、木材はいずれも木理が直通で割裂性、耐水性、防虫性が高い。

一方、広葉樹のクマシデ属は日当たりの良い山地に生育する落葉高木で、木材はやや重硬～重硬で、弾力性があり、加工はやや難しい。コナラ亜属クヌギ節は、二次林や河畔林を構成する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。アカガシ亜属は、暖温帶性常緑広葉樹林の主要な構成種となる常緑高木で、木材は重硬で強度が高い。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。シイ属もアカガシ亜属とともに暖温帶常緑広葉樹林の主要構成種であり、木材はやや重硬で、割裂性が高く、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。ケヤキは谷沿いの肥沃地などに生育する落葉高木で、木材はやや重硬で、強度、耐朽性が高く、木理が美しい。

表6 津万遺跡群1の器種別種類構成

分類群\器種	板材	杭	柱材	丸太	矢板	櫛	錐	棒状 製品	漆椀	曲物	円盤状 底板	盤	合計
針葉樹													
マツ属	1												1
モミ属				1									1
スギ													2
ヒノキ属	19	2	1		1	1		6		1	1		32
広葉樹													
クマシデ属		1											1
コナラ亜属クヌギ節	2	3	1	1						4			7
アカガシ亜属													4
クリ		5											5
シイ属		3											3
ケヤキ		1										1	2
広葉樹		1							2				3
合計	22	16	2	1	2	1	4	7	2	1	1	1	61

機種別種類構成を表6に示す。部材のうち、板材はヒノキ属を主体として、マツ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。伊東・山田(2012)のデータベースで、兵庫県内の遺跡から出土した木製品の木材利用をみると、板材ではスギとヒノキの利用が圧倒的に多く、モミ属、ツガ属、コウヤマキなどの針葉樹、アカガシ亜属などの広葉樹も多く利用されている。マツ属やクヌギ節の利用も報告されており、本分析調査の結果と調和的である。杭は、特に多産する種類ではなく、針葉樹のヒノキ属、広葉樹のクマシデ属、クヌギ節、クリ、シイ属、ケヤキに同定された。いずれも重硬で強度が高い種類であることから、周辺で入手しやすい木材から選択していたと思われる。また、柱材はヒノキ属、クヌギ節に、丸太はクヌギ節に、矢板はモミ属、ヒノキ属にそれぞれ同定された。前述のように県内で広く利用されている種類であり、周辺で入手もしやすかったと考えられる。

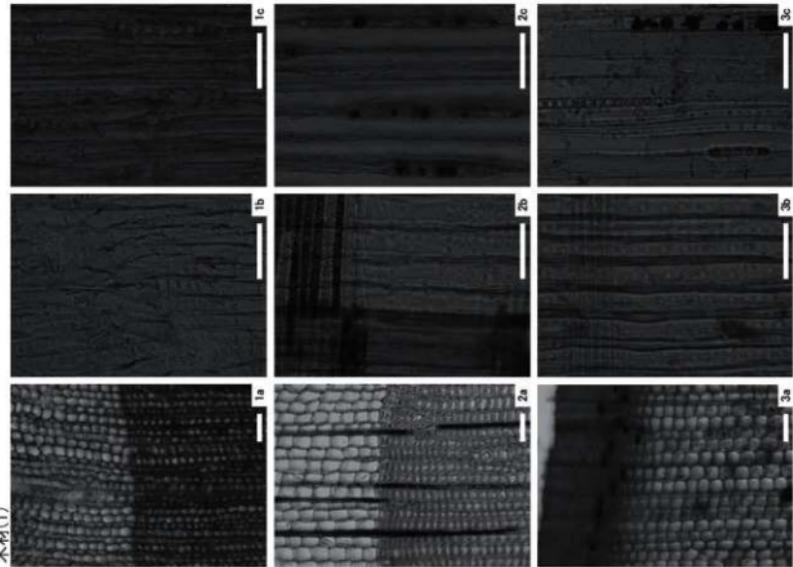
用具についてみると、櫛はヒノキ属、錐はいずれもアカガシ亜属、棒状製品はスギ、ヒノキ属に同定された。前述のデータベースで県内における櫛の事例をみると、針葉樹のスギ、ツガ、ヒノキ、広葉樹のヤマグワの4例が報告されている。錐はアカガシ亜属が圧倒的に多く、棒状製品ではスギとヒノキが圧倒的に多い。本分析調査は、このような過去の調査事例と矛盾しない。アカガシ亜属は硬い木材で、今日でも農具に用いられることが多い。また、櫛は耐水性のある針葉樹材を用いており、材料の特性を生かした選択を行っていたことが窺える。

容器などに分類される種類をみると、漆椀はいずれも広葉樹散孔材(?)を含む)であった。前述のデータベースで県内の漆椀の事例をみると、散孔材ではブナやトチノキが多く利用されている。曲物底板と円盤状製品はヒノキ属、底板はスギ、盤はケヤキに同定された。前述のデータベースで県内における曲物など底板の事例をみると、ヒノキとスギが主体で、わずかにサワラなどを伴う。盤ではスギ、ヒノキ、コウヤマキ、ケヤキなどが多く用いられている。本分析調査結果は、このような過去の調査事例と矛盾しない。

引用文献

- 林 昭三. 1991. 日本産木材 跳微鏡写真集. 関西大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫. 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載I. 木材研究・資料. 31. 京都大学木質科学研究所. 81-181.
- 伊東隆夫. 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載II. 木材研究・資料. 32. 京都大学木質科学研究所. 66-176.
- 伊東隆夫. 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載III. 木材研究・資料. 33. 京都大学木質科学研究所. 83-201.
- 伊東隆夫. 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載IV. 木材研究・資料. 34. 京都大学木質科学研究所. 99-166.
- 伊東隆夫. 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載V. 木材研究・資料. 35. 京都大学木質科学研究所. 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編). 2012. 木の考古学. 出土木製品用データベース. 海青社. 449p.
- Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E. (編). 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部一内海泰弘(日本語版監修). 海青社. 70p. [Richter, H. G., Grosser, D., Heinz, I. and Gasson, P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 鳥居 謙・伊東隆夫. 1982. 国説木材組織. 地球社. 176p.
- Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (編). 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・佐野智之(日本語版監修). 海青社. 12p. [Wheeler, E. A., Bass, P. and Gasson, P. E. (1989) IAWA List of Macroscopic Features for Hardwood Identification].

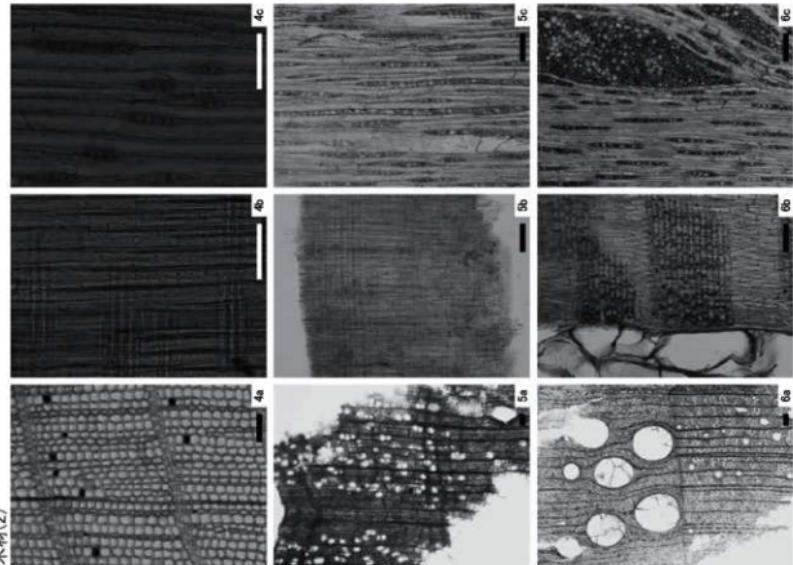
木材(1)



スケールは100 μ m
a:木口 b:径目 c:板目

1. マツ属(津万道跡群:W105)
2. モミ属(津万道跡群:W62)
3. スギ(津万道跡群:W17)

木材(2)

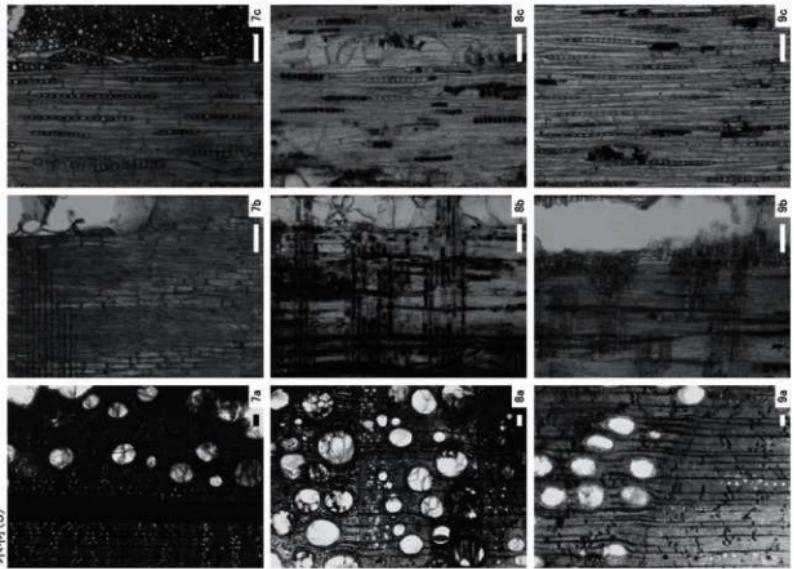


スケールは100 μ m
a:木口 b:径目 c:板目

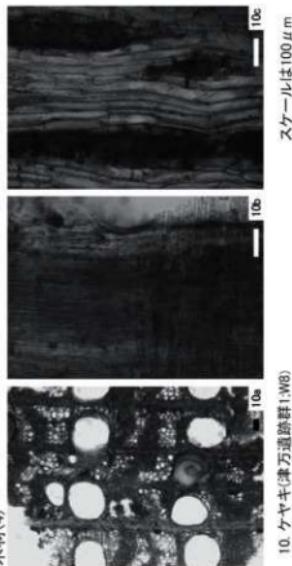
4. ヒノキ属(津万道跡群:W20)
5. クマシテ属(津万道跡群:W102)
6. コナラ属(コナラ垂クヌキ節)(津万道跡群:W57)

第8図 木材写真(1) (2)

木材(3)



木材(4)



第8図 木材写真 (3) (4)

第6章 考察

第1節 粘土採掘坑について

兵庫県内検出の粘土採掘坑

津万遺跡群では、今回報告した寺内2区(163基)・3区(約200基)・4区(約65基)と6区(65基)の他に、南部の津万6西区でも中世(14世紀)の粘土採掘坑が約100基検出されている。

粘土採掘坑の特徴として、微高地から旧河道に下っていく水田等にしか利用できない地形に形成され、礫を含まない、均質なシルト層を掘り広げていることがほとんどである。土坑の壁が垂直に近く、横方向への掘削(壁をえぐる)が行われていることや、土坑底のレベルがほぼ一定であることなどが挙げられる。また、入為的に埋め戻されており、中世以降の例では瓦や櫻を埋め込んで、事後の利用のためにもともと水はけの悪い土地を改良する意図がうかがえる例もある。また、砂利層が検出され、シルト層が広がっていない周辺には試掘坑と思われる浅く、規模の小さな土坑が検出されることもある。櫻などの掘り具や梯子、板状の木製品が出土することも粘土採掘坑の特徴といえる。

関東地方では古く縄文時代からの粘土採掘坑が見つかっており、多摩ニュータウンN248遺跡では5,500mに及ぶ粘土採掘がおこなわれていることが判明している。また、古代寺院に用いられた瓦焼成の窯跡周辺から発見された例もある。

兵庫県内でも多くの粘土採掘坑が検出されている。赤穂城で用いられた瓦用の粘土を採掘したとされる17世紀から現代に至る粘土採掘坑が検出された相生市福井池の下遺跡。東播系須恵器や瓦類を制作した神戸市神出・田井遺跡でも粘土採掘坑が見つかっている。そのなかで津万遺跡群寺内2区検出の粘土採掘坑の時代に近い遺跡を紹介する。

丹波市の「板井寺ヶ谷遺跡」では、弥生時代後期から古墳時代前期の土坑が約100基検出されている。土坑からは土師器が少なからず出土しており、甕が主体となる。甕以外には鉢・壺が見られ、わずかに高壺や器台が含まれる。出土した木製品には土坑内への昇り降りに用いた可能性のある一本梯子や、足場に使った可能性のある板材や角材がある。これには建築部材の再利用が行われている。また先を尖らせた板状あるいは棒状の製品も存在する。容器では削り抜きの桶が出土している。

養父市の「高柳ナベ遺跡」では、古墳時代から中世までの粘土採掘坑が検出され、古墳時代のものとしては長さ213cmの一本梯子や、扉材などの板材・先を尖らせた棒状の製品が出土している。この遺跡の南の谷には古墳時代の米里窯跡があり、この窯で焼成された須恵器に用いた粘土もここで採掘されたのであろう。

朝来市の「筒江浦石遺跡」では、弥生時代後期末～庄内併行期、もしくは布留古段階の粘土採掘坑182基を検出している。土坑からは土器が少なからず出土しており、甕が主体となる。甕以外にはわずかに鉢・壺・高壺が含まれる。木製品は弥生時代末～古墳時代初頭のもので、掘り具としては一本鉤や鉤柄、掘り棒が出土している。木製槌摘み具も出土しているのは粘土をえぐるためか。また先を尖らせた板状あるいは棒状の製品も存在する。梯子や足場に使った可能性のある板材や角材がある。これには扉材など建築部材の再利用が行われている。机天板や脚部、腰掛の脚部なども再利用されている。容器も舟形の削物片口が出土している。また、角枠型田下駄脇木が出土している。

第2節 寺内2区検出粘土採掘坑出土の遺物について

1. 土器

寺内2区で検出された163基の粘土採掘坑からは木製品及び土器などが出土しているが、土器については土師器のみが出土している。土師器の時期は古墳時代中期頃のもので、須恵器が流布している時期である。津万遺跡群の周囲には須恵器窯跡が多く分布しており、加古川左岸の前坂・大歳神社窯跡や黒田・大山谷1号窯跡のように古墳時代にまで遡る窯跡も存在している。津万遺跡群のある加古川右岸では、寺内のすぐ北側の山麓に蒲江・大谷窯跡群が分布し、さらに北側の丘陵には大門1号窯跡、大伏1号窯跡、畠瀬末谷1号窯跡などの須恵器窯跡群が分布しているが、これらは奈良から平安時代以降のものである。ちなみに寺内で検出された粘土採掘坑の粘土と調査区内の中砂をこねて焼き物を作ったところ、これらの土坑から出土した土師器と色調・風合いが非常に類似したものが焼きあがった。憶測ではあるが土師器用の粘土を採掘したものとしておきたい。胎土分析結果とも矛盾しない。

土器の接合

土坑内からは土師器や木製品が出土している。土器では別の土坑のものとの接合も試みた。すると、

- ①隣同士ではあるが独立した土坑間で接合関係がある例や、
- ②第三の土坑が間に存在するなどのやや離れた位置関係にある独立した土坑間での接合関係のある例が認められた。

①の例としては、土器62 (SK1-1・SK2・SK3)、土器87 (SK45-45-3・SK48)、土器89 (SK45・SK48-1)、土器91 (SK45-1・45-3・45-4・SK48-1)、土器93 (SK45-4・SK48-1)、土器113 (SK50・SK51)、土器126 (SK51-2・SK54・SK55)、土器124 (SK51-2・SK61)、土器145 (SK113・SK116-6)、土器151 (SK116-3・SK128-2)、土器147 (SK119-1・SK120) が確認できた。

②の例としては、土器112 (SK21・SK50) 両土坑の中央間の距離が約5m、土器119 (SK29・SK50) 8m、土器70 (SK42・SK44・SK50) 11m・10m、土器123 (SK47・SK51-2) 9m、土器125 (SK48・SK50・SK51-2) 6m・5m、土器67 (SK48・SK10-11・10-12) 10m、土器138 (SK108・SK131-4) 12m、土器153 (SK116-6・7間・SK121) 5m、土器150 (SK124-3・SK125) 5mなどがあり、10m以上離れた土坑から出土した土器の破片が接合できたものも認められた。

土坑内の土器では、調査中に水没や壁が崩れるなどしたため、取り上げに誤錯が生じた可能性もあるが、以上に挙げた接合例の多さから、明らかに別の土坑から同一個体の土器破片が出土しており、しかもその距離が非常に離れている例も多いことが判明した。

同時に複数の土坑の掘削、埋め戻しが行われ、その際に同一の土器の破片が別々の土坑に埋められたのか、あるいは一旦土器とともに埋め戻された土坑が再び掘削され、その土に含まれた土器片とともに別の土坑の埋め戻しで埋められたのか、その理由は不明である。詳細な埋め戻し状況の観察や、土器の破損状況の観察等さらに調査段階での慎重な取り扱いと、より推し進めた研究が必要であろう。

2. 木製品

(1) 板材

古墳時代に属する粘土採掘坑から出土した木製品の多くは掘り具や板材で、板材はぬかるんだ土坑内での足場材として用いられたものと思われる。同様に指物の机天板や容器の四脚檣も、壊れて本来の用

途での使用が不可能になったものを足場材や粘土運搬などに再利用したものであろう。

出土した板材には穿孔が施されたものもあり、その大きさから建築部材と思われる。また、単なる板材も多く出土しているが、そのほとんどが一方の面のみ丁寧に整形してあり、他方は割り取って粗いまに近い器表面であることから、一方の面のみが触れられたり、見られたりする性格をもったものであることがわかる。これらもその大きさから建築部材であるとすると、床材・壁材・天井材あるいは屋根材などが考えられる。屋根材や外壁材のような風雨にさらされた痕跡を持つものは見られなかつたことから、床材・壁材・天井材に用いられたものがほとんどなのであろう。用いられた材は針葉樹であり、樹種同定されたものはすべてヒノキ属である。

そこで報告した23点の板材の厚さに注目した。厚さは、A. 1cm前後（0.9～1.2cm）、B. 2cm前後（1.6～2.4cm）、C. 3cm前後（2.5～3.1cm）、D. 3.5cm以上に分かれ、特にB・Cに集中している。

現在の労働安全衛生法によると、合板でできた足場板は厚さ25mm以上、幅240mm以上が必要とされている。そこで足場板としての強度が必要な床材は、天井材や壁材よりは厚く、厚さ2.5cm以上と想定し、C・Dを床材に、それより薄いA・Bを壁材・天井材に当てはめることを想定した。

ちなみに別部位で用いたと思われる穿孔のある材の厚さは、W29で5.6cm、W30で2.5cm、W32で5.2cm、W33で1.9cmを測る。

全長が残存するものは少なく、建築部材で使用したのちに切断されたものも多いと思われる。124～125cmに一つのピークがみられる。また、70cm前後（64.0～75.0cm）にも集中しており、厚さで床材と判断したものが多くがここに含まれている。

板材の幅は6.0～8.0cmに一つのピークがあり、11.0～13.6cmに次のピークが、14.6～18.0cmでもピークがあり、19cm周辺にも集中がみられるが、何らかの規格があるようには見えない。

短辺の一方を少し斜めに削って薄くしているものが数点確認できる。また、長辺の一方は直角に落としているが、もう一方は表面に調整を施した面側から斜めに削っているものが数点みられ、多くは丸棒に仕上げている。床や壁として組み上げた際の仕口かもしれない。

(2) 板材に残された傷

これらの板材の表面に残された傷跡が非常に特徴的である。SK62出土のW36、SK10-2出土のW44、SK25出土のW53、SK136出土のW54等で確認することができたこの傷跡は、板材の表面を丁寧に整形した側の面に見られ、裏面にはほとんどない。傷跡が残る板材は、厚さ28～38cmのもので、床材に分類できる。

この傷跡は板材の表面の不規則な位置に、不規則な方向に残される。一部は近接した位置に同方向に複数回にわたって残されている。わずかに湾曲したるものも見られるが、ほとんどが直線的である。あまり鋭い刃物ではなく、幅2mmほどの固いものを真上から打ち込んだような痕跡である。そのため、平行した直線的な切れ目が2mm幅で走り、その間の木材は崖んではいるが残存している。長さは長いもので4.8cm程度であり、両端は浅くなっている。

遺跡から出土する木材につけられた傷跡では、鋭い刃物でつけられた細く直線的な切り傷はよく見られる。同じ場所に何度もつけられていることから、鋭い刃物で何かを切る際の作業台ではないかとの推測が考えられる。今回観察されたような傷跡は、あまり他では観察したことがない。

このような傷跡は、建築部材の床材として作られたときや、使用したとき、粘土採掘以前に別用途として再利用されたときに付けられた可能性もあるが、使用された最終段階である粘土採掘時に付けられ

たものとして考えてみる。

このような特徴をもつ傷跡を、使用痕として粘土探掘という作業中の行動に当てはめると、使用目的として土坑内の不安定な足もとの足場として置かれた板材に、粘土を掘削する道具としての鉄製の刃先を装着した鋤を打ち込んだ様子が浮かび上がる。複数回の傷は刃先にこびり付いた粘土を落とす行為だったのかもしれない。板材の滑らかに調整された面にのみ観察できることから、さらに想像を重ねれば、多くの粘土探掘の労働者は、踏んでも足が痛くないよう、板材の滑らかな面を上にして足場としたのであろう。

この想定が当たっているのであるなら、少なくともこの傷がついた板材が出土したSK62・SK10-2・SK25・SK136を掘削した作業には、鉄製刃先を装着した鋤が使用されたと考えられ、実際にSK25からW10が、SK10-2からW14の一木鋤が出土している。

逆にこのような傷跡がついた木材の出土は、鋤を用いた（粘土探掘）作業がおこなわれた証拠といえるかもしれない。



第9図 板材に残された傷

(3) 挖り具

鋤などの土掘り具のほとんどが前代からの適用材であるコナラ属アカガシ亜属を用いているが、先を尖らせた掘り棒状のものやヒノキの鋤(W14)が1点出土している。これは櫂などの転用の可能性もあるが、鉄製刃先の装着に備えた加工が準備されていたことから、鋤として用いられたものであろう。掘削する土の状態をよく知ったものが用意した様子がうかがわれる。鉄製の刃先を付ければ、土をまっすぐ掘り進む作業にはコナラ属アカガシ亜属の鋤との差は自重が軽い以外はほとんど遜色ない働きをするであろう。但し、土を起こしたり、持ち上げたりする作業にはめつきり弱く、実際に作業中に折れてしまつたのを廃棄した可能性がある。やはり鉄製刃先は取り外している。

6点出土している鋤類はどうして土坑内から出土したのであろうか、もちろん粘土探掲作業時に折損し、使用に耐えられなくなったものを廃棄したのかもしれない。特に針葉樹であるヒノキ属を用いた鋤W14は、コナラ属アカガシ亜属に比べて強度的に劣る針葉樹を、加工しやすいという理由で採用したものかもしれない。これは柄の部分で見事に折れており、廃棄せざるを得なかつたのであろう。

コナラ属アカガシ亜属を用いた柄付きの鋤W10はほぼ完形で出土しており、なぜ廃棄したのかわからない。これも他遺跡出土のものに比してやや短く土坑内で横方向に掘削する作業のために作成されたものかもしれない。そのために意図的に埋められたのかもしれない。但しやはり貴重であった鉄製刃先は持ち去っている。

土器が数点出土している点からも、粘土探掲にかかる埋め戻しの祭祀を想定することはできないであろうか。

(4) 木製鋤

寺内2区で検出された粘土探査坑からは少なくとも6点の木製鋤が出土している。先端が残る4点のうち3点に、鉄製刃先を装着したと思われる小段が残されていた。この着装部は組合せ鋤では見られないと言う。

土坑内から出土した土器は土師器のみではあるが、すでに須恵器の出現以降のものであり、5世紀の後半から6世紀にかけてのものである。この時期には一般的に鉄製鋤歫先が広まっている。

実物の鉄製刃先はこの地区からは出土していないが、共伴した土器の示す時期。装着の痕跡を残す木製鋤本体。足場材に残された鉄製刃物の傷。これらの証拠から鉄製の刃先を装着した鋤を用いて粘土が探査されたことが証明された。次にその刃先の形状はどのようなものであろうか。5世紀から出現するU字形鋤歫先なのか、それよりやや古く出現し、同時期にも存在した方形鋤歫先なのか。

(5) 鉄製鋤歫先について

出土した木製鋤には刃部側面に小段を作り出したものがあり、この小段に鉄製刃先の風呂の基部があたり、装着されると判断した。この着装部は組合せ鋤には見られないらしい。小段部分の幅（風呂幅と呼称する）と小段から先端までの長さ（風呂長と呼称する）を計測する。また、鉄製品の方形鋤歫先、U字形鋤歫先では、風呂部上端のV字溝底間の幅（風呂幅）と、風呂部上端から刃部先端側のV字溝底までの長さ（風呂長）としてその数値の比較を行う。

これによって木製の一木鋤と鉄製刃先を同じグラフ上に乗せることが可能となる。また、この計測値は、鉄製刃先の使用による摩耗・変形による影響が想定される刃先部分の数値を使用しないで済む。

但し、水漬けであった木製品の性質や、錆を帯びた鉄製品の性質上から、その数値は数cm前後の誤差は認めざるを得ない。実際、装着された状態で出土した静岡県伊場遺跡の木製鋤と鉄製歫先の間には風呂幅で1cm近い誤差が生じているようで、木製品と鉄製品の保存状態・保存処理の差かもしれない。

兵庫県内から出土した木製鋤や鉄製歫先及び、県外や半島出土のものも含めて、数値的な傾向を見てみると、いくつかのグループに分かれることが判明した。

(D) 風呂幅11cm以上、風呂長12cm以上のものは、古代以降のもの、或いは半島で出土したU字形鋤歫先が占めている。これらは他のものより群を抜いて大きなものである。

逆に小さなものの中には、鍛造刃先を模倣して造られた我が国独自の鉄器とされる方形鋤歫先がある。これは4世紀から6世紀前半にかけての限定された時期にのみ存在するが、その間に小型の副葬用儀器なども発生している。(A) これは風呂幅4~10.5cm、風呂長3~8.5cmの中に納まり、U字形鋤歫先よりも小型であることがわかる。

木製鋤では、(b) 風呂幅9~12.5cm、風呂長7~9cm周辺に集中しており、またそれより大きい(c) 風呂幅9.5~13.5cm、風呂長9.5~11cmにも集中が見られる。U字形鋤歫先では、(b') 風呂幅7.5~12cm、風呂長6~8.5cmに集中し、また、(c') 風呂幅9~14cm、風呂長9~11cmにも集中が見られる。

木製品と鉄製刃先では少し数値がずれるが、(b)・(b') = (B) とし、(B) は小型U字形鋤歫先に、(c)・(c') = (C) は、中型U字形鋤歫先として分類できそうである。

大きさの順に (A) 方形鋤歫先、(B) 小型U字形鋤歫先、(C) 中型U字形鋤歫先、(D) 特大U字形鋤



第10図 鋸計測部位名

鍔先（風呂彫含む）となる。

これを寺内2区出土の木製鋤に当てはめてみよう。

W10は、風呂幅9.3cm、風呂長5.7cmを測り、(A)の数値に近く、これに装着された鉄製刃先は方形彫先の可能性が高い。

針葉樹で作られたW14は、風呂幅10.4cm、風呂長7.8cmで、(A)の方形彫先でも(B)の小型U字形彫先でも可能性はある。

W11は、風呂幅11.9cm、風呂長10.2cmで、(C)の中型U字形彫先が装着されていた可能性が高い。

以上のように古墳時代の北播磨で粘土を採掘していた彫の先には様々な鉄製彫先が装着されていたらしい。鉄製彫先は、古代に入り律令制が確立するにつれて規格化が進んだものと想定されるが、研究の進んでいる東国地方では、古代にも地域色が見られるといった特徴も指摘されている。

(6) 粘土採掘坑と鍔

津万遺跡群寺内2区で検出された粘土採掘坑からは掘り具（掘削道具）として鍔が6点出土している。鍔の出土は見られない。筒江浦石遺跡の粘土採掘坑でも同様で、アカガシ亜属を用いた一本鍔が3点出土しているが、スギなどを用いた掘り棒以外には鍔などは出土していない。土を掘り出す行為にはもっぱら鍔を用いたものであろうか、あまり鍔の出土は見られない。他遺跡の例を見ても鍔の出土が多い。未報告ではあるが、福井池の下遺跡からは近代の瓦粘土採掘坑から鉄製のスコップの先が出土している。その点では鍔は農具に分類され、鍔は土木具の掘り具に分類されるのかもしれない。筒江浦石遺跡の木製品は弥生時代末から古墳時代初頭に限定されているためか、金属製の刃先を受ける細工は見られない。

多くの粘土採掘坑検出遺跡で掘り具である鍔の出土はみられるが、今回のSK25やSK128-3出土のW10やW11のように破損がないまま出土している例は稀である。装着されていたであろう鉄製鍔先は外されており、出土していない。

完形のままの鍔を、但し鍔先は取り除いて、埋めてしまうのは、意図的な行為であろう。その意団はやはり祭的なものであろう。弥生時代の方形周溝墓の周溝内に鍔が埋められている例が神戸市の玉津田中遺跡などで確認されている。また鉄製鍔先が周溝や埴丘から出土した古墳も知られている。おそらくその墓を作る際に使った道具を主体部の外に埋めたものであろう。副葬品として鍔先が埋葬施設内から出土することもあるが、その場合の多くは他の鉄製工具とともに出土しており、より生前の被葬者の身近にあったものであろう。その点では主体部の外に埋められた鉄製鍔先は、粘土採掘坑等の生産遺跡からの出土に近いものである。墓址からの出土と生産遺跡からの出土は、意味合いが微妙に異なるのであろうが、大地や土に対しておこなった行為に伴う点では一致している。地下にあるものを地上へ迎える意識であり、それは亡くなったものの復活や、無機質な土から有用な土器への再生産といった願いかもしれない。

3. SD 8に伴う杭・矢板について

弥生時代に属すると考えている寺内2区SD 8に伴う杭・矢板列では、長さ20cmから98cm以上のものまで残存しており、非常に密に打たれていることが特徴である。それは一時に打たれたものではなく、複数年にまたがり、数次にわたって打たれた可能性もあるが、非常に細いSD 8に伴っていることから、あまり長期の年数をまたいだものではないと判断される。また、それぞれの先端や表面を加工した刃物は、ほとんどすべて非常に鋭く、おそらく鉄器を用いたものと思われる。

出土した矢板には、針葉樹のおそらく建築部材等の板材を再加工・再利用したものと、シイ属やクリのような広葉樹のミカン割り材から板状の材を作り出して矢板にしたものがある。

杭には矢板の前者と同様、針葉樹を再加工・再利用した角材の杭が存在している。その他、丸太材の先端をとがらせたものや、太い丸太材を縦に半裁したものがあり、ほとんどがコナラ属クヌギやクマシデ属、ケヤキといった広葉樹を用いている。丸太材は遺跡の周囲に広がる山々から採取したものであろう。周辺の里山の植生の一部が何われる。

矢板・杭は以上のように弁別されるが、この差は打たれた時期が異なるのかもしれない。打たれている位置等による差異はうかがわれない。

第3節 寺内地区の弥生時代から古墳時代

1. 弥生時代から古墳時代の遺構の変遷

津万遺跡群のうち今回報告する寺内地区の弥生時代から古墳時代の遺構・遺物について概観する。今回の調査で出土した弥生時代から古墳時代の遺物は寺内6区SR1出土の弥生時代前期後半の甕202であり、一番新しい土器は寺内3区落ち出土の7世紀前半須恵器杯H身193である。特に出土量が多いものは古墳時代中期の土器であり、ほかに、弥生時代中期後半、弥生時代後期後半、古墳時代初頭、古墳時代前期の遺物がある。

以下に遺物から時代が特定できる遺構・遺物について概観する。

(1) 弥生時代前期から中期

弥生時代前期から中期にかけての遺物は、寺内6区の河道SR1で出土している。後に堆積土が粘土採掘の対象となる土坑群があり、寺内地区の微高地の西側を流れていた河道がある。この河道は寺内2区→寺内3区の西端→寺内4区西北端→寺内5区西南端→寺内6区西北端に続く。

弥生時代中期後半の遺構は、古墳時代の土坑と重複しており複雑であるが、寺内2区SD9→SD8-2→SD2→寺内3区SD20→寺内4区SD20と続く溝があり、微高地の縁辺に掘削されている。

(2) 弥生時代後期後半

弥生時代後期後半の遺構は、寺内3区SD5→寺内4区SD2→寺内5区SD3→寺内6区SD6→SD4と続く溝があり、微高地の縁辺を弥生時代中期の溝と交錯しながら流れている。

(3) 弥生時代後期末

弥生時代後期末の遺構には、溝と竪穴建物跡がある。溝は寺内0区の南北溝SD2と寺内1区の東西溝SD2がある。竪穴建物跡は寺内0区のSH1と寺内1区SH1の2棟がある。寺内1区と2区の間が未調査であるが、この間で弥生時代後期末の様相が大きく異なっている。したがって、寺内1区の溝SD2を南限として北側に集落が広がっているものと考えられる。

上記遺構から出土した土器のうち、壺・鉢・高坏・器台から後期末の地域性を見る。壺は瀬戸内タイプの比率が高く、北近畿タイプも存在する。鉢は瀬戸内のタイプである。高坏・器台は口縁部や全体の形態から北近畿のタイプである。ただし、限られた数ではあるが、胎土分析をした結果、すべて津万周辺の胎土で作られている。のことから、地域・時期、あるいは個人によって器種の選択的採用を行っていた可能性が考えられる。ここで述べた北近畿系土器は高野陽子によってまとめられており、西谷2式に該当する。

寺内0区SH1から装飾器台が出土しており、北近畿地域を中心に分布していることが、すでに岸岡貴英によって明らかにされているが、兵庫県内では今回報告する寺内0区SH1以外に、豊岡市妙楽寺墳墓群、立石墳墓群、丹波市七日市遺跡旧河道2、丹波市横田遺跡SD1009、丹波市犬岡遺跡旧河道、丹波篠山市すえが谷遺跡周溝墓、多可町荒田神社裏遺跡SH01、加古川市美乃利遺跡堅穴建物4に出土しており、但馬地域と丹後地域から瀬戸内海地域に通じる最低分水界の由良川流域と加古川流域に分布している。全容がわかる資料はないが、それぞれ細部の形態、施文は異なっている。

(4) 古墳時代前期・中期

古墳時代前期の遺構は、寺内6区土坑SK2がある。寺内6区のほかの多くの土坑は遺物が出土していないため時期は不明であるが、同時期の可能性が高い。

古墳時代中期の遺構は、寺内2区の土坑群はか多层次見つかっている。しかし、土坑を複雑に掘り返しているため、遺構の切り合い関係だけでは新旧は決められない。また出土した土器は壺がほとんどであり、形態や製作技法などから分類は可能であるが、高坏や須恵器が全く共存していないため、ここでは詳細な変遷は述べない。ただし、遺物全体を見たとき、平底の壺は存在せず、タカ基成形のものは存在しない。形態や技法などから布留壺の様相を見せるものが存在する。新しいほうは瓶が存在していることから須恵器を伴う時期まで継続していることが見受けられる。

したがって、寺内6区から寺内2区にかけての土坑群の形成時期は、古墳時代前期から古墳時代中期にかけて下流から上流にかけて広がっていったと考えられる。

2. 寺内2区土坑群出土土器について

寺内2区の土坑群から出土した土器のうち、図化した土器は122点である。出土遺物の時期は前述したとおり、古墳時代前期から中期である。出土状況は、土器単体で出土する場合もあるが、多くの場合は破損して出土した。また、多くの個体が第4章第1節で述べたとおり、複数の遺構間で接合関係が認められた。

(1) 器種構成

今回、寺内2区の土坑群から出土した土器の種別は土師器のみである。器種構成は、壺102点、壺14点、鉢1点、高坏2点、瓶1点、脚付碗1点、粘土塊1点であり、須恵器は出土していないため土師器の比率は100%であり、このうち壺が84%と際立って比率が高い。

(2) 土器に残された使用痕跡

以上見てきたように、土師器の壺の比率が極めて高い。これらの土器使用痕跡はシルト層に埋蔵されていたため、残りが良い。外面にススが付着したものが多く、下半はススが酸化している。これらのスス酸化部に対応する内面にコケが付着しているものが多く、42点に及ぶ。このうち、98・105・111・152はコケが厚く付着しており、特に152は穀粒コケが明瞭に確認できる。また11点は吹きこぼれ痕跡が確認でき、うち167は黒吹きである。

通常、先に述べたとおり古墳時代前期～中期を中心とした時期なので、かまどが出現し、米蒸調理をするための機種構成になるはずであるが、瓶は1点のみであり、壺は球胴壺が主体である。全容は不明であるが、湯沸かし用鍋として使用され、内面にコケの痕跡がなく、外面に支脚の痕跡が残る壺は168の1点のみである。したがって、この土坑群で出土している壺の機能は炊飯用が多い。

(3) 粘土塊

土器製作にかかる遺物や痕跡は、SK47からケズリ滓を集めた塊の可能性がある粘土塊103が出土して

いる。また、SK45出土の壺96の内面はケズリを行った際のケズリ津が残存し、付着している。

(4) 近接のほかの同時期の遺跡・遺構との検討

今回調査地点の東約900mに位置する大垣内遺跡との比較を行う。溝SD1からは弥生時代中期の土器も出土しているが、本来の遺構の時期は古墳時代である。溝SD1から出土した土器には須恵器と土師器があり、91点が図化されている。須恵器は20点が図化されており、杯蓋・杯身・高杯・轍・壺・器台の器形がある。土師器は71点が図化されており、椀14点・壺10点・高环12点・壺35点・瓶1点・甕1点がある。したがって土師器の壺の比率は38%である。

粘土採掘土坑と言われている遺跡との比較検討を行ってみる。寺内2区と類似する土坑を多数調査している遺跡に、時期は異なるが姫路市池ノ下遺跡や加西市丸山ノ下遺跡や朝来市筒江浦石遺跡、丹波市板井寺ヶ谷遺跡等がある。いずれも壺の比率が極めて高く、同様の傾向を示している。

(5) 胎土分析

今回、土坑群出土土器を中心とする胎土分析と土坑群が存在する地点の各土層から採取したサンプルとの比較分析を実施した。この結果、サンプル粘土は鉱物・岩石組成や粒径組成、碎屑物の割合によっていくつかのパターンに分かれるものの、この粘土採掘土坑の堆積土の特性を表しているものである。時期が異なる寺内0区や寺内1区なども粒度構成を除けば、同類であり、在地の胎土であると捉えて問題ない。資料No22の分類Adとしたものは上層の堆積土層であり、土器素材として意識的に採掘していない可能性が高い。

実際の土器胎土Aa以外のAb・Acはサンプル粘土の鉱物・岩石組成や粒径組成が微妙に異なっているが、ここで採取した堆積土は水簸したり、混和材を添加調合して土器素地を作ったと考えられる。その場合も混和材の採集地は加古川流域の近接域である。また、形式学的に明らかに異なり、胎土も肉眼で明らかに異なる壺206は粘土採掘土坑サンプルと別分類とされたことは当然である。

(6) 土坑群の性格

以上、土器の出土状況や出土器種構成、土器に残された使用痕跡、胎土分析からこの土坑群は粘土を採掘するための土坑であることが検証できた。これはすでに別稿で地形や遺構の状況・木器の出土状況などから粘土採掘土坑であると検討された結果を追認したことになる。

以上、寺内2区の土坑群は古墳時代中期を中心とした粘土採掘のための土坑であることを検証したが、この粘土を採掘して、土器を焼いたムラはどこにあったのかを検討しなければならない。今回事業を行っている津万遺跡群からは当該時期の遺構は見つかっていない。削平されて遺構が残っていない可能性もあるが、遺物自体の出土量が少ない。事業自体南北に長い調査であったので東西方向へ遺跡がどれだけ広があるのにもよるが、粘土採掘地に近接して土器製作のムラがあるのではなく、この地点の場合はやや離れた存在の可能性もある。今後の課題といえる。



第11図 壺96 ケズリ津付着内面

【参考文献】

- 松井和幸 1987 「日本古代の鉄製鍬先・鍬先について」『考古学雑誌』72-3
- 高野陽子 2002 「北近畿の土器」『考古資料大観』2 小学館
- 岸岡貴美 1991 「京都府出土の黄海帯台について」『京都府埋蔵文化財論集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奈良国立文化財研究所 1985.3 「木器集成図録 近畿古代編」奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊
- 奈良国立文化財研究所 1993.3 「木器集成図録 近畿原始篇」奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊
- 神戸市教育委員会 1989 「神戸市神出田井遺跡」
- 加古川市教育委員会 2018.3 「溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅳ 美乃利遺跡発掘調査報告書Ⅰ」加古川市文化財調査報告 29
- 加西市教育委員会 2016.3 「丸山ノ下遺跡・丸山ノ下古墳群」加西市埋蔵文化財報告 75
- 農岡市教育委員会 2002.3 「妙楽寺塚原群」農岡市文化財調査報告 32
- 兵庫県教育委員会 1990.3 「七日市遺跡Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第 72-2 冊
- 兵庫県教育委員会 1992.3 「板井・寺ヶ谷遺跡」兵庫県文化財調査報告第 96-2 冊
- 兵庫県教育委員会 1992.3 「明石城武家屋敷跡」兵庫県文化財調査報告第 109 冊
- 兵庫県教育委員会 1996.3 「玉津田中遺跡」第 5 分冊 兵庫県文化財調査報告第 135-5 冊
- 兵庫県教育委員会 1995.3 「大岡遺跡」兵庫県文化財調査報告第 147 冊
- 兵庫県教育委員会 2001.3 「荒田神社裏遺跡」兵庫県文化財調査報告第 221 冊
- 兵庫県教育委員会 2006.3 「横田遺跡・横田北古墳群」兵庫県文化財調査報告第 303 冊
- 兵庫県教育委員会 2007.3 「筒江浦石遺跡」兵庫県文化財調査報告第 316 冊
- 兵庫県教育委員会 2012.3 「池ノ下遺跡」兵庫県文化財調査報告第 435 冊
- 兵庫県教育委員会 2013.3 「高柳ナベ遺跡」兵庫県文化財調査報告第 441 冊
- 兵庫県教育委員会 2013.3 「三帆瀬山北麓遺跡群」兵庫県文化財調査報告第 453 冊
- 兵庫県教育委員会 2018.10 「福井・池の下遺跡」平成 29 年度兵庫県埋蔵文化財調査年報】

表7 寺内地区出土土器一覧表(1)

報告 番号	田園 番号	写真 番号	種別	器種	法量(cm)(g)			残存残存			出土地区	出土遺構	層位	
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
1	63	59	弥生土器	広口壺	(138)	31+		1/9				寺内0区	SH1	
2	63	59	弥生土器	壺		207+	6.6			口縁完存	体部1/3	寺内0区	SH1	
3	63	59	弥生土器	鉢		77+	3.9			2/3		寺内0区	SH1	
4	63	59	弥生土器	小形壺	(9.7)	10.6	1.8	1/8			ほぼ完形	寺内0区	SH1	
5	63	59	弥生土器	小形鉢	6.3	5.0	2.8	1/3		完存		寺内0区	SH1	
6	63	60	弥生土器	高環		21.8	9.2+			1/2	环底部 完存	寺内0区	SH1	
7	63	60	弥生土器	高環		7.5+	(120)			1/4		寺内0区	SH1	
8	63	60	弥生土器	黃銅器台		67+					下段受部 径239	寺内0区	SH1	
9	63	59	弥生土器	高環		40+	(140)			1/3		寺内0区	SH1北側高床部	理土中
10	63	60	弥生土器	台付無蓋壺		73+	8.9			3/4		寺内0区	SH1	床面
11	63	59	土製品	土鍤	長 5.9	径 2.9	孔径 0.8	565			完形	寺内0区	SH1西部	理土中位
12	63	-	弥生土器	壺	(18.0)	27+				1/6		寺内0区	SD2南	
13	63	59	弥生土器	壺	19.1	82+				1/2弱		寺内0区	SD2南	
14	63	59	弥生土器	壺		31+	4.4			2/3		寺内0区	SD2南	
15	63	59	弥生土器	壺		5.4+	3.2			完存	体部若干	寺内0区	SD2南	
16	63	59	弥生土器	小形鉢	(7.2)	4.9+	3.1	1/6		完存		寺内0区	SD2北	
17	63	60	弥生土器	高環		23.7	13.0+			1/3		寺内0区	SD2北	
18	63	60	弥生土器	高環		7.5+					脚柱部 1/2弱	寺内0区	SD2北	
19	63	60	弥生土器	高環		11.5+	(136)				脚柱部(ほぼ)完存 底部1/6	寺内0区	SD2北	
20	63	60	弥生土器	高環		8.5+					脚柱部 完存	寺内0区	SD2北	
21	63	59	須恵器	杯	(10.1)	4.5					口縁～底部1/12	寺内0区		横出面
22	64	61	弥生土器	壺		64+	3.7			1/2強		寺内1区	P141(SH1内)	
23	64	61	弥生土器	鉢	12.6	8.5+		5/8		(11)完存		寺内1区	SH1中央土坑	西半
24	64	61	弥生土器	壺	13.8	5.2+		1/2弱				寺内1区	SD2	
25	64	61	弥生土器	壺	16.8	6.4+		1/4				寺内1区	SD2西端	
26	64	61	弥生土器	壺	(14.8)	5.6+		1/6			脚部 1/3	寺内1区	SD2	
27	64	61	弥生土器	壺	16.2	23.2	3.5				ほぼ完形	寺内1区	SD2	
28	64	61	弥生土器	壺	17.7	27	4.5			完存	口縁～脚部1/2弱	寺内1区	SD2	
29	64	62	弥生土器	壺		6.8+	3.1				ほぼ完存	寺内1区	SD2	
30	64	62	弥生土器	壺		6.7+	5.2			完存		寺内1区	SD2	
31	64	62	弥生土器	壺	15.9	15.1+		1/4				寺内1区	SD2	
32	64	62	弥生土器	鉢	(24.7)	9.8+		1/7			脚部1/4強	寺内1区	SD2	
33	64	62	弥生土器	鉢	(10.9)	8.0	4.7			1/2	口縁～体部1/5	寺内1区	SD2西半	
34	64	62	弥生土器	鉢	13.4	8.2+	4.2	1/3		完存		寺内1区	SD2	
35	64	63	弥生土器	壺		5.6+	2.0				約4/5	寺内1区	SD2	
36	64	62	弥生土器	小形壺	(10.9)	7.8+	(11.2)	1/4			体部上半1/5	寺内1区	SD2	
37	64	-	弥生土器	有孔鉢		3.3+	2.4				完存	寺内1区	SD2西半	
38	64	63	弥生土器	高環	(15.0)	5.2+				若干		寺内1区	SD2	
39	64	63	弥生土器	器台	(24.0)	19+		1/8				寺内1区	SD2	
40	64	63	弥生土器	器台		6.1+	17.8				脚柱部(ほぼ)完存 底部1/4	寺内1区	SD2	
41	64	63	弥生土器	高環	(14.8)	13.7	15.8	1/12			脚柱部完存 底部1/4	寺内1区	SD2西端	
42	64	63	弥生土器	高環		7.3+	(10.2)			1/4		寺内1区	SD2	
43	64	63	弥生土器	高環	(13.3)	3.9+		1/7				寺内1区	SD2西端	
44	64	63	弥生土器	高環		10.0+	15.7			1/2		寺内1区	SD2	
45	65	64	弥生土器	脚付無蓋壺	17.2	12.6+	(13.6)	1/2弱		若干	脚柱部 若干	寺内2区南端	SD2	
46	65	64	弥生土器	鉢	(17.4)	15.0+	(7.4)	1/6		3/4		寺内2区	SD9-(4) (II+la)	
47	65	64	弥生土器	脚付無蓋壺	14.1	17.1	11.9	1/2			脚部 完存	寺内2区	SD8-2	
48	65	64	弥生土器	高環		5.9+					脚柱部のみ	寺内2区	SD8-2	
49	65	64	弥生土器	壺		4.5+	(6.3)			1/4		寺内2区	SD8	最下層
50	65	64	弥生土器	壺		3.1+	(4.2)			1/4		寺内2区	SD8-1古	
51	65	64	弥生土器	壺		4.4+	3.4			2/5		寺内2区	SD8-1古	
52	65	64	弥生土器	壺	(16.0)	13.5+		1/4弱			体部 約1/8	寺内2区北端	SD5	
53	65	64	弥生土器	壺		4.2+	3.6			1/2強		寺内2区北端	SD5	
54	65	65	土脚器	壺	(15.9)	7.5+		1/6				寺内2区	SD4	

表7 寺内地区出土土器一覧表(2)

報告 番号	出 土地 区番 号	写真 図版 番号	種別	器種	法量(cm)(g)			残存状況			出土地区	出土遺構	層位		
					口径	器高	底径	重量	口縁	底					
55	65	65	土師器	甕		115+				ほぼ完存	体部 約1/6	寺内2区	SK1-1		
56	65	65	土師器	甕	120	104+		2/5				寺内2区北東	SK1-3	上層	
57	65	65	土師器	甕		143	51+		1/4			寺内2区	SK1-1		
58	65	65	土師器	甕		154	75+		1/3			寺内2区	SK1-⑤		
59	65	65	土師器	甕	(156)	166+		1/24		体部 約1/8		寺内2区北東	SK1-1		
60	65	65	土師器	甕		158	93+		2/3			寺内2区	SK1-2~		
61	65	65	土師器	甕		160	140+		1/2弱		体部 着干	寺内2区	SK1-1		
62	65	66	土師器	瓶		268	229+			口縁~底部1/2弱		寺内2区北東	SK2		
63	66	65	土師器	甕		168	110+		1/2弱		体部 着干	寺内2区北東	SK3		
64	66	65	土師器	甕		142	66+		1/3			寺内2区	SK4-2		
65	66	66	土師器	甕	(130)	136+		1/4弱		体部上半1/4		寺内2区	SK4-4A		
66	66	66	土師器	甕	(162)	200+		1/6		体部約1/8		寺内2区	SK10-4		
67	66	66	土師器	甕		207+				1/2強	体部1/2強	寺内2区	SK10-11		
68	66	66	土師器	甕		143	87+		1/4			寺内2区	SK9		
69	66	66	土師器	甕		113	63+		1/4		体部上半1/3	寺内2区	SK16		
70	66	67	土師器	甕		268+				瓶部~底部1/2弱		寺内2区	SK21	上層	
71	66	67	土師器	直口甕	104	16.0				ほぼ完存		寺内2区	SK22		
72	66	67	土師器	直口甕		109+				完存	体部11/12	寺内2区	SK27-2		
73	67	67	土師器	甕	(140)	13.5		1/9		体部上半1/3		寺内2区	SK25		
74	67	66	土師器	甕		154	49+		1/4			寺内2区	SK25		
75	67	67	土師器	甕		159	209+		1/2		体部 上半2/3	寺内2区	SK25		
76	67	68	土師器	甕		166	81+		1/2			寺内2区	SK25		
77	67	68	土師器	直口甕	99	13.7		1/4		体~底部完存		寺内2区	SK28		
78	67	68	土師器	甕		153	19.4			ほぼ完存	体部1/2強	寺内2区	SK28-1		
79	67	68	土師器	甕		146	86+		3/4			寺内2区	SK28-62周辺		
80	67	68	土師器	甕		171	180+		5/6		体部 約1/9	寺内2区	SK28		
81	67	68	土師器	甕		154	196+		1/2		体部1/2	寺内2区	SK28-62周辺		
82	67	68	土師器	甕		15.8	42+		1/3			寺内2区	SK44		
83	67	68	土師器	甕		108+				体部~底部1/2強		寺内2区	SK49		
84	67	69	土師器	甕		153+				体部2/3		寺内2区	SK49-A		
85	68	69	土師器	甕	(178)	105+		1/8				寺内2区	SK36		
86	68	69	土師器	直口甕		97+				体部~底部1/3		寺内2区	SK45-3		
87	68	69	土師器	直口甕		123+				体部 約1/3		寺内2区	SK45		
88	68	69	土師器	甕	95	11.7				ほぼ完存		寺内2区	SK45-1		
89	68	69	土師器	甕		144	49+		3/4		肩部1/2	寺内2区	SK45		
90	68	69	土師器	甕		154	90+		1/3		体部若干	寺内2区	SK45-3		
91	68	69	土師器	甕		164	162+			口縁~肩部 ほぼ完存		寺内2区	SK45-4		
92	68	70	土師器	甕		155	110+		1/4		肩部1/6	寺内2区	SK45-5		
93	68	70	土師器	甕	(156)	224+		1/8		体部1/4		寺内2区	SK45-4		
94	68	70	土師器	甕		162	265		1/2弱		体部~底部1/2	寺内2区	SK45-3		
95	68	70	土師器	甕		178	17.2+		1/4		体部上半1/4	寺内2区	SK45-3		
96	68	70	土師器	甕		83+				1/2		寺内2区	SK45-3		
97	69	70	土師器	甕	(155)	79+					肩部1/2弱	寺内2区	SK47		
98	69	70	土師器	甕		140	25.2				体部1/2	寺内2区	SK47		
99	69	71	土師器	甕		163	76+		4/5		肩部1/2	寺内2区	SK47		
100	69	71	土師器	甕	(168)	221+					体部1/2	寺内2区	SK47		
101	69	71	土師器	甕		155	22.6		3/4		体部1/2弱	寺内2区	SK47		
102	69	71	土師器	甕		137+					体部 下半 1/4	寺内2区	SK47		
103	69	71	土師器	粘土塊	長7.4	幅4.1	厚2.0				小片	寺内2区	SK47		
104	69	71	土師器	甕		11.6	129+				口縁~体部1/2弱	寺内2区	SK52-3		
105	69	71	土師器	甕		138+					完存	体部1/2弱	寺内2区	SK52南東	
106	69	71	土師器	甕		155	28.6		1/4		肩部1/2 体部1/2弱	寺内2区	SK62		
107	70	72	土師器	甕	(135)	114+			1/6		体部上半1/4	寺内2区	SK48-1		
108	70	72	土師器	甕		151	63+		1/2			寺内2区	SK48-1		

表7 寺内地区出土土器一覧表(3)

報告 番号	団体 番号	写真 番号	種別	器種	法量(cm)(g)			残存状況			出土地区	出土遺構	層位
					口径	器高	底径	重量	口縁	底			
109	70	72	土師器	甕	16.2	26.5+		1/2		体部1/5	寺内2区	SK48タ	
110	70	72	土師器	甕	(18.0)	29.7		1/4		体部1/4	寺内2区	SK48サ	
111	70	72	土師器	脚付甕	14.9	10.6+		1/3			寺内2区	SK48-1	
112	70	72	土師器	直口甕	(9.2)	14.9				口縁1/2以外完存	寺内2区	SK50	
113	70	73	土師器	二重口縁甕	(14.4)	58+		1/4強			寺内2区	SK50	
114	70	72	土師器	甕	16.1	17.6+		1/3		体部 上半1/3	寺内2区	SK50	
115	70	72	土師器	甕	15.4	28.1+		1/3		体部1/3	寺内2区	SK50	
116	70	73	土師器	高环	(13.4)	53+			端部わずか	杯部4/5	寺内2区	SK53	
117	70	73	土師器	甕	10.8	17.6		1/4	完存	体部1/2	寺内2区	SK54	
118	71	73	土師器	甕	16.1	7.4+		1/4			寺内2区	SK29-1	
119	71	73	土師器	甕	17.5	16.6+			完存	体部1/3	寺内2区	SK29-1	
120	71	73	土師器	甕	19.6	19.5+		1/2弱		体部上半1/3	寺内2区	SK29	
121	71	73	土師器	甕	17.5	26.5+			?		寺内2区	SK29	
122	71	73	土師器	甕	(19.3)	54+			若干	側部1/6	寺内2区	SK51-2	
123	71	73	土師器	甕	16.9	9.1+			ほぼ完存		寺内2区	SK51-2	
124	71	74	土師器	甕	16.7	15.8		1/3		体部 上半3/4	寺内2区	SK51-2	
125	71	74	土師器	甕	18.4	23.2		1/4		体部 上半1/4	寺内2区	SK51-2	
126	71	74	土師器	甕	15.8	25.9+		1/2		体部1/2	寺内2区	SK51-2	
127	71	74	土師器	甕	17.8	21.5+			完存	体部1/2	寺内2区	SK51	
128	72	74	土師器	甕	18.0	17.5+		1/4		体部わずか	寺内2区	SK56	
129	72	74	土師器	甕	(15.0)	21.0+		1/10		体部1/3	寺内2区	SK57(B)	上面
130	72	74	土師器	甕	13.7	9.8+			ほぼ完存		寺内2区	SK58-2	
131	72	75	土師器	甕	17.0	5.8+			ほぼ完存		寺内2区	SK59	
132	72	75	土師器	甕	13.1	7.6+		1/3		体部わずか	寺内2区	SK61	
133	72	75	土師器	甕	17.0	16.0+		2/3		体部1/3	寺内2区北	SK61	
134	72	75	土師器	甕	(14.6)	15.0+			1/6		寺内2区	SK108	上層
135	72	75	土師器	甕	16.2	9.5+			1/3弱		寺内2区	SK108	
136	72	75	土師器	甕	(16.0)	7.8+			1/6		寺内2区	SK108	上層
137	72	75	土師器	甕	16.3	10.4+		2/3		側部2/3	寺内2区	SK108	
138	72	75	土師器	甕	17.3	16.3+		1/3			寺内2区南西	SK108南端壁	
139	72	76	土師器	甕	18.7	14.6+		1/3		体部 上半1/3	寺内2区	SK108	上層
140	73	64	陶生土器	高环	(13.4)	33+			わざか		寺内2区	SK101	
141	73	76	陶生土器	甕		3.8+	4.0		完存		寺内2区	SK101	
142	73	76	土師器	直口甕	8.5	13.3+				口縁～体部1/2	寺内2区	SK102	
143	73	76	土師器	甕	15.6	19.6+			完存	体部1/3	寺内2区	SK102	
144	73	76	土師器	甕	13.8	16.7+		1/2		体部2/3	寺内2区	SK109	
145	73	76	土師器	甕	(17.0)	9.0+		1/18			寺内2区	SK113	
146	73	76	土師器	甕		14.2+				体部のみ若干	寺内2区	SK113	
147	73	77	土師器	甕	15.4	30.3		ほぼ完存	1/2	体部2/3	寺内2区	SK119-1	
148	73	77	土師器	甕		17.2+				体部上半1/2	寺内2区	SK124-1	
149	73	77	土師器	甕	17.3	18.9+			1/4強	体部上半1/4	寺内2区	SK124	
150	73	77	土師器	甕	18.7	14.3+		1/2		体部上半2/5	寺内2区	SK124-3	
151	74	77	土師器	甕	13.8	3.7+		5/6			寺内2区	SK116-3	
152	74	77	土師器	甕		17.5+			ほぼ完存	体部下半 ほぼ完存	寺内2区	SK116-6	
153	74	77	土師器	甕	17.2	24.3		1/2		体部3/5	寺内2区	SK116-6-7	
154	74	78	土師器	甕	15.4	11.2			完存	体部上半1/3	寺内2区	SK116-2	
155	74	78	土師器	甕	19.2	17.2+		3/5		側部3/5 体部3/5	寺内2区	SK116-2	
156	74	78	土師器	甕	(16.0)	10.6+		1/18			寺内2区	SK116-6-7内 土坑	
157	74	78	土師器	甕	12.7	9.2+		3/4			寺内2区	SK116-6	
158	74	78	土師器	甕	17.5	26.2+			完存		寺内2区	SK116-1	
159	74	78	土師器	甕	17.1	11.1+			完存		寺内2区	SK116-3	
160	74	78	土師器	甕	(17.2)	21.2+		1/5		体部上半1/4	寺内2区	SK116-2	
161	74	79	土師器	鉢	25.2	17.2				ほぼ完形	寺内2区	SK116-6-7	
162	75	79	土師器	直口甕	9.9	4.5+			1/3弱		寺内2区	SK130-4	
163	75	79	土師器	直口甕	10.5	14.0+			1/4強	体部1/3強	寺内2区	SK130-10	
164	75	79	土師器	直口甕		12.1+			わざか	体部ほぼ完存	寺内2区	SK130-3	

表7 寺内地区出土土器一覧表(4)

報告 番号	西暦 年号	空真 回数	種別	器種	法量(cm)(g)			残存残存			出土地区	出土遺構	層位	
					口径	器高	底径	重量	口縁	底	他			
165	75	79	土師器	甕	15.7	121+		1/3		体部わずか		寺内2区	SK130-2	
166	75	79	土師器	甕	16.0	145+		1/4				寺内2区	SK130-10	
167	75	79	土師器	甕	12.2	140+		完存		体部上半完存		寺内2区	SK130-10	
168	75	80	土師器	甕		124+				完存		寺内2区	SK130-3	
169	75	80	土師器	甕	17.8	28.4		14.4	14.4	14.4完存		寺内2区	SK130-10	
170	75	64	土師器	甕		29+	2.8			1/4		寺内2区	SK130-10	
171	75	80	土師器	直口壺	9.2	14.7		3/4		体部9/10		寺内2区	SK121-1	
172	75	80	土師器	鉢	(14.8)	137+		若干	体部2/3			寺内2区	SK121-2	
173	75	80	土師器	甕		78+				完存		寺内2区	SK121-2	
174	75	80	土師器	甕	15.7	134+		2/3		体部わずか		寺内2区	SK135	
175	75	80	土師器	甕	15.0	19.5		完存		体部わずか		寺内2区	SK134	
176	75	64	弥生土器	甕		4.6+(7.1)				1/4弱		寺内2区	SK134	
177	76	81	弥生土器	甕	(19.5)	7.3+		1/4弱				寺内3区	SD20	黒褐色土
178	76	81	弥生土器	甕		160+	4.1			完存	頭部～体部1/2	寺内3区	SD20	黒褐色土
179	76	82	弥生土器	甕		6.7+	5.2			完存		寺内3区	SD20	
180	76	81	弥生土器	造		7.7+	6.5			完存		寺内3区	SD5	埋土中底部付近
181	76	81	弥生土器	甕	(13.5)	12.4		1/5				寺内3区	SD9より南側	
182	76	81	弥生土器	甕	(17.1)	18.6+		1/5弱				寺内3区	SX22	底部(黒褐色シルト)
183	76	82	弥生土器	鉢		5.0+	5.5			完存		寺内3区	SD21北部	上～下層
184	76	-	弥生土器	甕		10.5+				体部1/8		寺内3区	SD23	底部
185	76	82	弥生土器	甕		5.6+	3.7			1/2		寺内3区	SK4	
186	76	-	弥生土器	甕		9.7+	6.7			体部下半1/6	寺内3区 南端		擾乱層	
187	76	-	弥生土器	甕		3.8+	10.3			14.4完存		寺内3区 南端		擾乱層
188	76	81	弥生土器	甕		10.1+	4.5			完存		寺内3区 南端		擾乱層
189	76	81	土師器	甕		12.2+	4.0			14.4完存	体部下半1/4	寺内3区北半		擾乱層 下層泥路
190	76	82	弥生土器	甕		4.5+	4.4			完存		寺内3区南半		擾乱層 下層泥路
191	76	82	弥生土器	甕		3.5+	5.1			完存		寺内3区南半		擾乱層 下層泥路
192	76	82	土師器	甕	14.2	136+	1/3			体部上半1/3		寺内3区		黒褐色土(南端)
193	76	82	須恵器	杯H	(9.9)	23+		1/8				寺内3区	落ち	暗褐色粘土
194	77	83	弥生土器	甕		3.4+	5.7			3/4		寺内4区	SD20	
195	77	83	弥生土器	鬱台付 圓底壺		9.3+(11.9)				1/12		寺内4区	SD20	
196	77	83	須恵器	杯H	(11.5)	3.3		1/3		体部～底部 先存		寺内4区		
197	77	83	弥生土器	甕		18+	4.1			完存		寺内5区	SD2	
198	77	83	弥生土器	鉢		2.7+	5.4			1/2強		寺内5区	SD3南半	
199	77	83	土師器	甕	(14.8)	9.1+		1/4				寺内5区	SD5南端	上層
200	77	83	弥生土器	甕		5.2+	13.3			1/4強		寺内6区	北半田河道	
201	77	83	弥生土器	甕		3.5	5.6			完存		寺内6区	SR1	
202	77	84	弥生土器	甕		7.9+				若干		寺内6区	北半田河道	
203	77	83	弥生土器	甕		7.2+	10.6			1/3強		寺内6区	北半田河道	
204	77	83	弥生土器	甕		8.0+	11.3			1/4		寺内6区	北半田河道	
205	77	84	土師器	甕	13.1	20.9		14.4完存		体部3/4		寺内6区	II河道	
206	77	84	弥生土器	甕	15.6	8.3+		1/4弱				寺内6区	SD4	
207	77	84	弥生土器	甕		2.5+	6.4			1/3		寺内6区	SD4	
208	77	84	土師器	甕	(17.2)	21.3				体部～底部 先存		寺内6区	SK2	
209	77	-	須恵器	甕		5.8+(11.5)				体部1/4		寺内6区		機械掘削中
210	78	85	土師器	羽釜	(24.1)	52+(27.6)		1/10				寺内8区	SX2裏込め	黒褐色シルト (レギ混じり)
211	78	85	須恵器	甕	(16.8)	4.5	6.5	1/3	1/2			寺内11区	P36(SB2)	
212	78	85	土師器	輪(底部)		0.9+	5.3			完存		寺内11区	P54(SB4)	
213	78	85	須恵器	甕		1.6+(5.7)				1/4		寺内11区	P56(SB4)	
214	78	85	須恵器	甕	(15.9)	4.2+				1/7		寺内11区	P48(SB4)	
215	78	85	土師器	小皿	8.2	1.9		5/6		体部～底部完存		寺内11区	P143	

表7 寺内地区出土土器一覧表(5)

報告 番号	出 版 年 度 番 号	種別	器種	法量(cm)(g)			残存 底			出土地区	出土遺構	層位	
				口径	器高	底径	重量	口縁	底				
216	78	85	土師器	皿	(137)	21			口縁～底部1/7	寺内1区	P6(SB3)		
217	78	85	土師器	托(底部)		37+	4.9		完存	寺内1区	P44(SB2)		
218	78	85	土師器	鍋	(236)	70+		1/5		寺内1区	P96(SB3)		
219	78	85	須恵器	小皿	(7.6)	14	(5.1)	1/7	1/3	寺内1区	P20(SB3)		
220	78	85	須恵器	小皿	8.1	18	5.3	1/2	完存	寺内1区	P77		
221	78	85	須恵器	碗	(154)	48	6.9	1/9	2/4	寺内1区	P12(SB3)		
222	78	85	須恵器	碗	(157)	37+		1/7		寺内1区	P19(SB3)		
223	78	86	須恵器	甕	(257)	92+			口縁～肩部1/7	寺内1区	P100(SB3)		
224	78	85	白磁	碗		34+	6.7	1/2弱		寺内1区	P21(SB3)		
225	78	86	土師器	小皿	9.7	2.2		1/2弱		寺内1区	SK1		
226	78	86	土師器	羽釜	21.4	11.5+		4/5	1/2	寺内1区	SK1		
227	78	86	土師器	羽釜	21.0	12.4+		5/6	1/2	寺内1区	SK1		
228	78	86	須恵器	小皿	(7.8)	11+		1/9		寺内1区	SK2		
229	78	86	須恵器	碗	(156)	21		1/10		寺内1区	SK2		
230	78	86	須恵器	碗	16.0	6.4	6.6	2/3	ほぼ完存	口縁～底部2/3	寺内1区	SD4	
231	78	86	須恵器	碗	16.3	4.9	6.5	3/4	完存	寺内1区	SD5		
232	78	86	白磁	皿	(9.7)	2.7	5.0	1/3	完存	寺内1区	SD3		
233	79	87	施釉陶器	小杯	(7.7)	45+	(3.9)	2/5	2/5	寺内1区	SD1		
234	79	87	施付磁器	碗	9.4	4.7	4.1		ほぼ完形	寺内1区	SD1		
235	79	87	施付磁器	碗	10.3	6.3	5.4	3/4	ほぼ完存	寺内1区	SD1		
236	79	87	施付磁器	皿	13.1	4.6	8.0		完形	寺内1区	SD1		
237	79	87	須恵器	碗	(15.6)	6.1	5.9	1/9	完存	寺内1区		包含層上面	
238	79	88	須恵器	捏ね鉢	(28.6)	11.1	10.4	若干	1/2弱	寺内1区		包含層	
239	79	87	丹波燒	甕(片口)	(6.4)	6.5	6.6	1/3	1/2	寺内1区			
240	79	88	染付磁器	蓋	9.0	2.6			完形	寺内1区			
241	79	88	染付磁器	碗	(10.3)	5.8	4.5	2/5	2/3	寺内1区			
242	79	89	須恵器	甕(体部)		9.2+			体部 破片のみ	寺内2区	SD3		
243	79	89	土師器	小皿	4.3	1.3			口縁～底部1/3	寺内2区北半			
244	79	89	土師器	小皿	(7.1)	15+		1/5		寺内2区北半			
245	79	89	土師器	小皿	(7.7)	1.3		1/4		寺内2区南半			
246	79	89	須恵器	杯G蓋	(9.7)	12+		1/12		寺内2区北半			
247	79	89	須恵器	杯A	(12.8)	35	(10.1)	若干	1/8	寺内2区南東端			
248	79	89	須恵器	杯B	(13.8)	31	(10.5)	1/6	1/6	寺内2区南東端			
249	79	89	須恵器	皿	(13.5)	31	(5.8)	若干	1/5	寺内2区南東端			
250	79	89	須恵器	碗	13.6	4.9	(6.5)		口縁～底部1/4	寺内2区北半		1a褐色褐色斑痕 黄シルト	
251	79	89	須恵器	碗	(14.8)	5.5		1/5弱		寺内2区	サブトレ(北東)		
252	79	89	須恵器	碗	(15.5)	45+		1/5弱		寺内2区北半			
253	80	89	須恵器	小皿(墨書き)	8.4	1.5	5.8	1/3	ほぼ完存	寺内3区東半	pit		
254	80	89	土師質	カマド	長44+ 厚4.8	幅3.2				寺内3区	SK5		
255	80	90	須恵器	杯B	13.9	37	10.9	1/8	若干	寺内3区	SD21北部	上～下層	
256	80	90	土師器	小皿	8.0	1.1	6.6		口縁～底部3/4	寺内3区西半		水田土壤、暗褐粘土	
257	80	90	土師器	鍋	(25.6)	48+		1/12		寺内3区	董前遺		
258	80	90	須恵器	杯B蓋	(16.3)	26		1/6		寺内3区	落ち	暗褐粘土	
259	80	90	須恵器	皿A	(16.0)	20	(13.9)	1/9	1/6	寺内3区西半	落ち	水田土壤、暗褐粘土	
260	80	90	須恵器	皿A	(14.3)	27+		1/4		寺内3区	-3		
261	80	90	須恵器	杯A	(14.7)	35+		若干	1/2弱	寺内3区	落ち		
262	80	90	須恵器	碗	(15.4)	48+	(5.9)	1/12	1/5	寺内3区	落ち	暗褐粘土	
263	80	-	須恵器	碗	(17.5)	4.3	(9.0)	1/18	若干	寺内3区西半		中世水田	
264	80	90	須恵器	捏ね鉢	(22.6)	35+		1/8		寺内3区	落ち	暗褐粘土	
265	80	90	須恵器	碗		23+		若干		寺内4区	SD2		
266	80	90	須恵器	杯B蓋	(14.0)	16+		1/9		寺内4区	SD5		
267	80	90	須恵器	碗		28+		若干		寺内4区	SD5		
268	80	91	須恵器	高台盤		103+	9.1		2/3	寺内4区	SD6		

表7 寺内地区出土土器一覧表(6)

報告 番号	出 版 年 度 番 号	種別	器種	法量(cm)(g)			残存状況			出土地区	出土遺構	層位	
				口径	器高	底径	重量	口縁	底				
269	80	90	須恵器	小皿	(8.1)	14	(6.2)	1/6	若干		寺内4区	SD7	
270	80	90	須恵器	碗		23+	5.5		1/4		寺内4区	SD8	
271	80	91	土師器	小皿	7.0	17			口縁～底部2/3	寺内4区	Nd4+8	黒褐色土	
272	80	91	土師器	小皿	7.4	16		1/2	ほぼ完存		寺内4区	Nd4(50)~30→ M1(30)+8(Nd50)~ (30) Nd7	包含層
273	80	91	土製品	土鍤	長 5.5	径 1.4	孔径 (0.4)	9.3		ほぼ完形	寺内4区		表様
274	80	91	須恵器	蓋	(14.6)	21+			1/6		寺内4区	Nd4+8付近	黒褐色土
275	80	91	須恵器	皿A	(14.8)	32+			1/9		寺内4区東半		微高地から落ち
276	80	91	須恵器	杯A		21+			1/5		寺内4区		擾乱層
277	80	91	須恵器	碗底部		0.8+	(6.0)		1/4強		寺内4区	Nd4+8付近	黒褐色土
278	80	91	須恵器	壺等体部		6.1+				体部若干	寺内4区東半		微高地から落ち
279	80	91	舞踏陶器 月波鏡	壺		137+		若干		破片	寺内4区南半		微高地上
280	80	91	瓦	平瓦	長 6.2+	幅 5.5+	厚 1.8			狹端部若干	寺内4区		微高地上
281	81	92	土師器	鍋	(25.5)	36+			1/8		寺内5区	SD7	
282	81	92	須恵器	杯G	11.2	3.8			口縁1/4以外完存	寺内5区	谷部		
283	81	92	須恵器	杯A	(12.1)	42+		1/3	4/5		寺内5区	谷部	
284	81	92	土師器	小皿	(8.0)	12+	(6.0)	1.9	1/4		寺内5区	谷部	最上層
285	81	92	土師器	皿	(13.8)	37+			1/4強		寺内5区	谷部	最上層
286	81	92	須恵器	小皿	(8.8)	18+			1/5		寺内5区	谷部	最上層
287	81	92	須恵器	壺(墨書き)	(13.3)	33+		1/9			寺内5区	谷部	最上層
288	81	92	須恵器	壺		19	(6.0)		1/4強		寺内5区	谷部	最上層
289	81	92	須恵器	壺		20+	(5.7)		1/3		寺内5区	谷部	最上層
290	81	92	須恵器	壺	(15.2)	50+	(5.0)		口縁～底部若干	寺内5区	谷部	最上層	
291	81	92	須恵器	投ね鉢	(27.1)	46+			1/10		寺内5区	谷部	最上層
292	81	92	土製品	土鍤	長 7.8	径 2.5	孔径 0.6	49.3		ほぼ完形	寺内6区	SD2	検出面
293	81	92	須恵器	壺	(15.8)	35+			1/8		寺内6区	SD2	
294	81	93	須恵器	杯A	(13.2)	33+		若干	1/4弱		寺内6区	北部流路	
295	81	92	土師器	小皿	(7.2)	14+			1/3		寺内6区	西半部田流路	
296	81	92	土師器	小皿	(8.7)	15+			1/4		寺内6区	西半部田流路	
297	81	92	土製品	土鍤	長 4.5	径 1.4	孔径 (0.5)	7.3		ほぼ完形	寺内6区	西半部田流路	
298	81	92	土製品	土鍤	長 (4.1)	径 1.8	孔径 (0.4)	9.3		3/4	寺内6区	西半部田流路	
299	81	92	土製品	土鍤	長 7.8	径 2.7	孔径 (0.5)	52.0		ほぼ完形	寺内6区	西半部田流路	
300	81	93	須恵器	杯B蓋	(11.9)	16+			1/3		寺内6区	西半部田流路	
301	81	93	須恵器	杯B蓋	(13.7)	15			1/4		寺内6区	西半部田流路	
302	81	93	須恵器	杯A	(13.2)	34+		若干	2/5		寺内6区	西半部田流路	
303	81	93	須恵器	皿	(16.4)	29+			1/6		寺内6区	西半部田流路	
304	81	93	須恵器	杯脚部		24+	(8.7)		1/9		寺内6区		人力掘削
305	81	93	須恵器	杯A	(12.3)	49+			1/4弱		寺内6区		人力掘削
306	81	93	須恵器	杯A	(12.1)	38	(8.8)	若干	1/3弱		寺内6区		機械掘削前
307	81	93	須恵器	杯A	(13.2)	32+		若干	1/4弱		寺内6区		人力掘削
308	81	93	須恵器	杯A	(13.6)	23+			1/12	1/7	寺内6区		機械掘削前
309	81	93	須恵器	杯A	(13.8)	29+			1/12弱	1/6	寺内6区		人力掘削
310	81	93	須恵器	杯A	(14.1)	25	(10.8)	1/12	1/4		寺内6区		機械掘削前
311	81	93	須恵器	杯A	(14.6)	26	(11.1)		口縁～底部1/6		寺内6区		機械掘削前
312	81	93	須恵器	杯A	(13.7)	26+			1/7弱	1/7	寺内6区		人力掘削
313	81	93	須恵器	杯A	(14.1)	29+			1/9	1/4	寺内6区		人力掘削
314	81	93	須恵器	杯A	(14.2)	28+			1/5	1/4強	寺内6区		人力掘削
315	81	93	須恵器	蓋	(18.4)	23+			1/5		寺内6区		人力掘削
316	81	93	須恵器	棱碗	(15.8)	6.4	8.6		1/4強	2/7	寺内6区		人力掘削
317	81	93	土師器	鍋	(15.5)	50+			小片		寺内6区		機械掘削前
318	81	93	土製品	土鍤	長 6.6	径 2.5	孔径 (0.6)	31.4		ほぼ完形	寺内6区		人力掘削

表8 寺内地区出土木製品一覧表(1)

出土地区	番号	種別	器種	法量(cm)			出土遺構	樹種
				長さ	幅	厚み		
寺内1区	W1	容器	曲物底板	(8.2)	(7.2)	0.6	SE3	
寺内1区	W2	容器?	有孔円盤	122	孔径 17	1.6	SD1	ヒノキ属
寺内1区	W3	容器	曲物・柄底板	263	(14.2)	1.6	SD1	スギ
寺内1区	W4	建築部材	端材利用檻板	(15.3)	11.8	54	P102(SB3)	ヒノキ属
寺内1区	W5	容器	漆器碗	器高 20	底径 5.1		SD1	広葉樹散孔材
寺内1区	W6	容器	漆器碗	器高(4.8)	底径(5.1)		複数	広葉樹散孔材?
寺内2区北半	W7	祭祀具	斎串	(14.9)	2.7	0.4		
寺内2区	W8	容器	四脚桶	(34.1)	(21.5)	(12.1)	SK1-2q	ケヤキ
寺内2区	W9	部材	机天板	85.0	24.3	2.1	SK25	ヒノキ属
寺内2区	W10	耕具	一本鎌	87.4	16.0	4.6	SK25	コナラ属アカガシ属
寺内2区	W11	耕具	一本鎌	87.9	16.2	2.1	SK19	コナラ属アカガシ属
寺内2区	W12	耕具	一本鎌	(95.9)	(8.9)	1.4	SK29	コナラ属アカガシ属
寺内2区	W13	耕具	一本鎌	(32.6)	(12.6)	3.3	SK10-12	コナラ属アカガシ属
寺内2区	W14A	耕具	柄	(46.8)	5.7	(2.7)	SK10-2	ヒノキ属
寺内2区	W14B	耕具	一本鎌	(91.7)	13.1	3.8	SK10-2	ヒノキ属
寺内2区	W15	部材	板材	(71.1)	最大(14.8)	4.1	SK64	コナラ属コナラ垂属クヌギ
寺内2区	W16	部材	柄	(49.5)	5.5	2.2	SK12-1	
寺内2区	W17	部材	柄	(51.6)	2.7	2.6	SK16-6	スギ
寺内2区	W18	部材	柄	(61.5)	4.0	3.4	SK28	ヒノキ属
寺内2区	W19	部材?	柄	(60.0)	(3.3)	2.4	SK50	ヒノキ属
寺内2区	W20	部材	柄	130.9	2.9	3.4	SK11-6	ヒノキ属
寺内2区	W21	角材	柄	134.1	4.6	2.7	SK12-7	ヒノキ属
寺内2区	W22	角材	握り棒	(31.6)	4.7	2.9	SK131-4	
寺内2区北西	W23	角材		(15.8)	4.8	2.4	SK6	ヒノキ属
寺内2区	W24	運搬具	担ぎ棒	(42.7)	6.4	2.6	SK36	ヒノキ属
寺内2区	W25	運搬具	担ぎ棒	72.3	2.9	1.8	SK47	ヒノキ属
寺内2区	W26	運搬具	担ぎ棒	(89.6)	5.3	5.2	SK62	
寺内2区	W27	運搬具	担ぎ棒	(65.1)	4.7	4.9	SK46	
寺内2区	W28	運搬具	担ぎ棒	(42.6)	(34)	(1.6)	SK48	ヒノキ属
寺内2区	W29	建築部材	妻壁・破風板	(103.5)	(21.8)	5.6	SK59	ヒノキ属
寺内2区	W30	建築部材	蹴放ち材	99.0	15.9	2.5	SK116-6	ヒノキ属
寺内2区南西	W31	建築部材	はざ穴材	(21.0)	(40)	(2.0)	SK7-121か	コナラ属コナラ垂属クヌギ
寺内2区	W32	建築部材	はざ穴材	(32.2)	(23.7)	5.2	SK10-12	
寺内2区	W33	建築部材	はざ穴材	(37.5)	11.8	1.9	SK47-19	
寺内2区	W34	建築部材	壁材	(12.3)	16.9	1.9	SK124-1	
寺内2区	W35	建築部材	床材	(53.5)	7.8	3.0	SK13	
寺内2区	W36	建築部材	床材	(70.5)	16.0	3.1	SK62	ヒノキ属
寺内2区	W37	建築部材	板材	(69.9)	(7.6)	(2.4)	SK138	
寺内2区	W38	建築部材	板材	(80.7)	8.1	1.9	SK10-4	
寺内2区	W39	建築部材	板材	(84.3)	(12.6)	2.0	SK130-2	
寺内2区	W40	建築部材	板材	(61.5)	(13.6)	(2.4)	SK130-2	
寺内2区	W41	建築部材	板材	(73.8)	(12.0)	(2.2)	SK130-4	
寺内2区	W42	建築部材	板材	(44.0)	(5.6)	(0.9)	SK130-3	ヒノキ属
寺内2区	W43	建築部材	床材	(74.4)	19.1	3.1	SK119-2	ヒノキ属
寺内2区	W44	建築部材	床材	(72.5)	17.1	2.8	SK10-2	ヒノキ属
寺内2区	W45	建築部材	床材	(99.2)	14.6	3.5	SK47	
寺内2区	W46	建築部材	床材	(69.5)	19.9	2.5	SK47	ヒノキ属
寺内2区	W47	建築部材	床材	(64.0)	(25.0)	(3.2)	SK52	ヒノキ属
寺内2区	W48	建築部材	板材	(34.2)	17.9	2.1	SK22	ヒノキ属
寺内2区	W49	建築部材	板材	52.3	15.2	1.2	SK130-4	ヒノキ属
寺内2区	W50	建築部材	板材	83.5	(7.1)	1.7	SK29	
寺内2区	W51	建築部材	板材	103.1	11.2	2.3	SK45-5	ヒノキ属
寺内2区	W52	建築部材	板材	(96.4)	13.2	2.3	SK130-8	
寺内2区	W53	建築部材	床材	(124.3)	(16.6)	3.1	SK25	
寺内2区	W54	建築部材	床材	(124.7)	19.3	3.8	SK136	
寺内2区	W55	建築部材	床材	(143.8)	19.9	2.6	SK135	
寺内2区	W56	建築部材	床材	(176.2)	19.4	5.0	SK26-b	ヒノキ属
寺内2区	W57	建築部材	鼻緒丸	(43.8)	17.2	7.0	SK10-4	コナラ属コナラ垂属クヌギ
寺内2区	W58	部材?	荷勘?未成品	55.7	最大(20.9)	10.6	SK44-7	コナラ属コナラ垂属クヌギ
寺内2区	W59	松明	付け木	(15.2)	0.8	0.5	SK4-3	
寺内2区	W60	松明	付け木	(17.5)	0.7	0.4	SK4-3	
寺内2区	W61	部材	丸太加工材	(33.2)	(4.3)	(2.0)	SK57	ヒノキ属
寺内2区	W62	土木材	矢板	(52.7)	(15.4)	(3.0)	SK64	モミ属
寺内2区南西	W63	土木材	矢板	(49.3)	最大(6.3)	2.4	SK12の種	
寺内2区	W64	土木材	杭	(71.6)	5.7	3.4	"SK19.30の間"	
寺内2区	W65	土木材	矢板	(80.3)	10.9	4.3	SD8	クリ
寺内2区	W66	土木材	矢板	(56.9)	(10.5)	4.5	SD8	シイ属
寺内2区	W67	土木材	杭	(55.8)	7.4	3.8	SD8	シイ属

表8 寺内地区出土木製品一覧表（2）

出土地区	番号	種別	器種	法量(cm)			出土遺構	樹種
				長さ	幅	厚み		
寺内2区	W68	土木材	杭	(42.9)	4.7	5.8	SD8	コナラ属コナラモ属クヌギ属
寺内2区	W69	土木材	杭	(98.1)	10.8	6.5	SD8	
寺内2区	W70	土木材	杭	(69.2)	(7.7)	9.9	SD8	
寺内2区	W71	土木材	杭	(41.8)	最大(8.4)	(4.9)	SD8	クリ
寺内2区	W72	土木材	杭	(34.3)	最大5.8	5.2	SD8	コナラ属コナラモ属クヌギ属
寺内2区	W73	土木材	杭	(53.4)	6.8	7.3	SD8	
寺内2区	W74	土木材	杭	(95.0)	最大11.5	7.4	SD8	
寺内2区	W75	土木材	杭	(40.9)	最大3.8	2.6	SD8	
寺内2区	W76	土木材	矢板・杭	(46.0)	6.1	3.2	SD8	
寺内2区	W77	土木材	杭	(57.0)	5.1	2.8	SD8	
寺内2区	W78	土木材	杭	(83.9)	3.9	3.2	SD8	ヒノキ属
寺内2区	W79	土木材	矢板・杭	(90.4)	5.9	2.4	SD8	
寺内2区	W80	土木材	杭	(88.8)	5.8	3.6	SD8	
寺内2区	W81	松明	付合本	20.9	12	0.9	SD8 最下層	
寺内2区	W82	松明	付合本	24.0	13	1.1	SD8 最下層	
寺内2区	W83	土木材	杭	(56.2)	2.7	1.7	SD8北斜机列	
寺内2区	W84	部材片		(26.7)	2.1	0.5	SD9-3	
寺内3区	W85	部材	板材	(96.3)	23.4	2.9	茶褐色施質シルト	
寺内3区	W86	容器	曲物 底板	24.7	(10.3)	0.9	(仮)SD23	ヒノキ属
寺内3区	W87	部材	矢板	(49.2)	15.6	2.0	SD8(合流部)	ヒノキ属
寺内3区	W88	部材	横(木栓)	18.8	32	2.1	落ち 中世水田	
寺内3区	W89	板状の加工材		(26.7)	最大3.9	1.4	落ち 中世水田	
寺内3区	W90	部材	木杭	(39.5)	2.4	2.5	落ち 中世水田	
寺内3区	W91	棹状木製品		(16.2)	1.3	1.1	落ち 中世水田	
寺内4区	W92	土木材	杭?	(20.2)	1.4	1.5	SD20	
寺内6区	W93	防護具	糸巻	(7.9)	1.5	0.9	SD2	
寺内6区	W94	容器	曲物底板	(17.1)	(4.8)	0.7	黒色シルト	
刀真御軋								
寺内2区	W95	土木材	板材	59.0	9.0	1.5	SD8	ヒノキ属
寺内2区	W96	土木材	杭	(47.0)	7.0	3.5	SD8	クリ
寺内2区	W97	土木材	杭	(61.3)	9.0	2.8	SD8	シイ属
寺内2区	W98	土木材	杭	(62.0)	11.0	5.5	SD8	コナラ属コナラモ属クヌギ属
寺内2区	W99	木杭	矢板	(52.8)	10.0	5.0	SD8	クリ
寺内2区	W100	土木材	杭	(19.0)	4.0	3.2	SD8	広葉樹散孔材
寺内2区	W101	土木材	矢板	(44.5)	9.2	2.3	SD8	クリ
寺内2区	W102	土木材	杭	(48.0)	6.5	4.7	SD8	クマシテ属
寺内2区	W103	土木材	杭	(21.2)	4.0	2.8	SD8	コナラ属コナラモ属クヌギ属
寺内2区	W104	土木材	杭	(22.0)	5.0	4.8	SD8	ケヤキ
寺内2区	W105	土木材	杭?	(19.5)	6.2	2.3	SD1	マツ属

表9 寺内地区出土石製品一覧表

番号	図版 番号	写真図版 番号	種別	器種	法量(cm)			重量	出土地区	出土遺構	層位
					長さ	幅	厚み				
S1	104	106	石器	楔形石器	34	3.5	1.0	156g	寺内1区		包含層上面
S2	104	106	石製品	石臼丁	(7.6)	4.7	0.7	39.6g	寺内6区		機械掘削中
S3	104	106	石製品	投彈	3.6	3.3	3.5	55.2g	寺内1区	SD1	
S4	104	106	石製品	砥石	4.5	2.5	0.4	6.1g	寺内2区南半		
S5	104	106	石製品	砥石	5.9	3.4	1.0	26.0g	寺内1区	P14	
S6	104	106	石製品	砥石	7.4	7.3	2.0	129.9g	寺内1区	SD1	
S7	104	106	石製品	砥石	16.4	18.9	3.5	1450g	寺内3区	SD5	
S8	104	106	石製品	砥石	38.1	14.6	8.0	5560g	寺内1区	SD2	

表10 寺内地区出土金属製品一覧表

番号	図版 番号	写真図版 番号	種別	器種	法量(cm)			重量	出土地区	出土遺構	層位
					長さ	幅	厚み				
M1	104	106	銅製品	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	19g	寺内0区	石組	
M2	104	106	鉄製品	ヤリガシナ	(5.2)	0.8	0.3		寺内0区	SH1東区	
M3	-	106	スラグ		3.8	2.8	2.4		寺内3区東半	pit	
M4	-	106	スラグ		3.6	2.6	1.3		寺内1区	P143	
M5	-	106	スラグ		2.1	1.6	1.4		寺内1区	P143	

表 11 寺内2区土坑別出土遺物一覧表(1)

遺構名	報告番号		土器(ゴチックは複数遺構出土)	土坑規模		
	木器			長辺(m)	短辺(m)	深さ(cm)
SK1-1		57-52-61-55-59-62		2.00	1.90	60
SK1-2	W8	60		2.00	1.70	51
SK1-3		56		2.50	1.40	52
SK1-4		47		2.00	1.70	55
SK1-5		58-61		1.55	(1.10)	52
SK2		62		0.95	0.70	72
SK3		63-62		2.50	1.70	53
SK4-1				1.50	1.45	39
SK4-2		64		3.30	(1.30)	49
SK4-3	W59-60			2.60	0.95	40
SK4-4		65		2.40	1.30	48
SK5	W29			0.90	0.65	33
SK6				0.60	0.60	-
SK7				1.05	1.00	34
SK8				0.60	0.35	52
SK9		68		0.60	0.55	19
SK10-1				1.40	0.95	43
SK10-2	W14-44			2.45	1.80	57
SK10-3						
SK10-4	W38-57	66		(2.00)	(1.20)	42
SK10-5		66		1.65	(0.95)	31
SK10-6				1.05	0.50	16
SK10-7				1.30	(1.00)	53
SK10-8				1.40	0.75	19
SK10-9				1.00	(1.00)	34
SK10-10				3.00	1.50	54
SK10-11		67		2.00	1.00	50
SK10-12	W13-32	67		2.50	1.50	52
SK11				1.50	(1.10)	49
SK12	W21			4.00	(1.60)	36
SK13	W35	121		(1.50)	(1.30)	46
SK14				1.35	0.80	36
SK15				(1.10)	1.60	35
SK16		69		-	-	-
SK16-1				2.00	1.40	60
SK16-2				2.00	1.60	63
SK17				0.70	0.60	19
SK18	W18			(0.70)	0.90	5
SK19-1	W11			(1.80)	1.75	40
SK19-2				1.90	1.40	41
SK20				(1.50)	1.20	42
SK21		70-112		1.20	0.90	44
SK22	W48	70-71		(1.70)	(1.00)	54
SK23				1.10	0.90	35
SK24		94		3.30	1.95	42
SK25	W9-10-53	74-73-76-75		(3.30)	3.50	60
SK26		W56		4.70	3.30	38
SK27-1				(1.50)	1.20	42
SK27-2		72-94		1.80	1.20	55
SK28		81-79-77-80-75-150		2.30	1.90	44
SK28-1		79-78		1.35	1.10	46
SK29		120-121		(2.60)	(2.00)	29
SK29-1	W12	118-119		1.45	1.05	32
SK29-2	W50			(0.90)	(0.80)	28
SK30				0.80	0.75	42
SK31				0.35	0.30	18
SK32				0.50	0.45	31
SK33				0.45	(0.35)	11
SK34				2.10	(1.10)	29
SK35				1.60	1.35	42
SK36	W24	85		2.10	(1.10)	45
SK37				0.50	0.45	33
SK38				1.50	(0.90)	51
						61.80

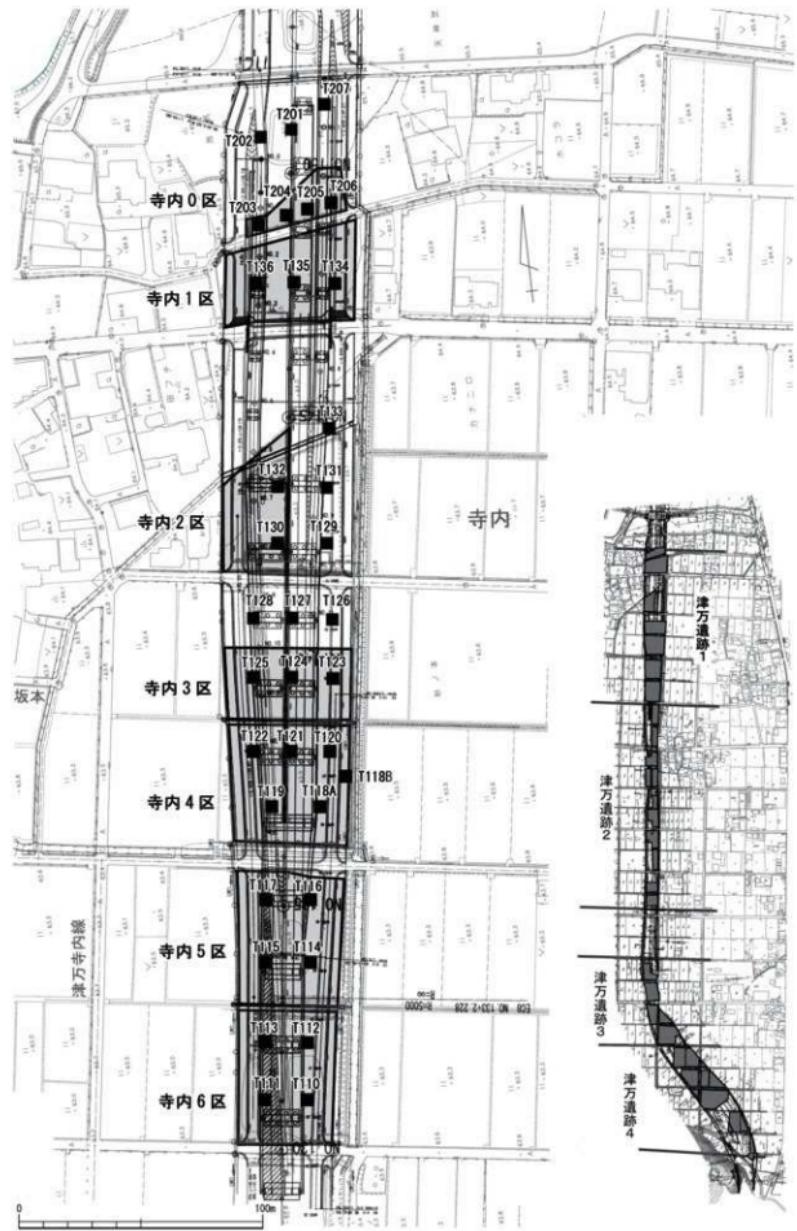
表11 寺内2区土坑別出土遺物一覧表(2)

遺構名	報告番号		土坑規格				
	木器	土器(ゴチックは複数遺構出土)		長辺(m)	短辺(m)	深さ(cm)	底の標高
SK39				(0.90)	1.10	44	61.93
SK40				1.00	1.00	47	61.87
SK41				2.90	(0.90)	48	61.70
SK42		70		1.75	1.50	50	61.70
SK43				(1.45)	2.05	41	61.82
SK44	W58	70-111-82-106		—	—	—	—
SK44-1				2.30	(1.80)	58	61.64
SK44-2		78		0.80	0.50	50	61.69
SK45		87-89		—	—	—	—
SK45-1		88-91-94		2.50	1.50	32	61.78
SK45-2				1.20	1.20	47	61.85
SK45-3		95-90-86-87-91-94-96		1.30	(0.95)	41	61.83
SK45-4		93-91		1.50	1.50	32	61.73
SK45-5		92		1.50	1.30	46	61.82
SK46		W27					
SK47		W25-33-45-46	102-123-99-97-103-100-98-101-96	(2.00)	2.35	59	61.67
SK48		W28	125-67-111-109-87-107-108-110-101	—	—	—	—
SK48-1			111-89-93-91-110	3.30	4.50	51	61.69
SK48-2				—	—	45	61.88
SK48-3				—	—	54	61.70
SK48-4				1.80	1.00	46	61.81
SK48-5	W51			—	—	—	—
SK49		84-83		1.20	0.75	45	61.80
SK50	W19		125-70-114-113-112-119-115	(2.80)	2.75	54	61.86
SK51			113-75-127	—	—	—	—
SK51-1				(3.30)	(1.40)	35	61.76
SK51-2			125-123-122-126-124	(3.30)	(2.50)	19	61.71
SK52				3.55	2.40	29	
SK52-1							61.82
SK52-2	W61						61.78
SK52-3	W47	104					61.77
SK52南東		104-105					
SK53		116		1.25	0.85	50	61.72
SK54		126-115-117		3.20	1.60	58	61.64
SK55		126		3.00	2.00	42	61.78
SK56		128		2.50	(1.80)	26	61.78
SK57		121-129					
SK58-1				2.00	1.40	49	61.74
SK58-2		130		(2.30)	(2.00)	35	61.78
SK58-3				(1.20)	1.20	28	61.84
SK59		131		(1.50)	(0.60)	16	62.03
SK60				(1.00)	0.80	34	61.83
SK61		132-133-124		(1.00)	(0.55)	26	61.79
SK62	W23-26-36	78-106		1.90	1.45	41	61.75
SK63				2.20	1.20	22	61.85
SK64		W15-62		1.00	0.85	18	61.85
SK101		140-141		3.60	(1.80)	14	62.15
SK102		142-143		1.90	1.80	45	61.81
SK103				2.50	0.80	12	62.17
SK104				1.00	1.00	17	62.16
SK105				1.25	0.95	17	62.18
SK106				2.20	1.40	23	62.15
SK107				0.70	0.65	35	61.98
SK108		135-137-139-136-134-138		9.30	(3.80)	16	61.84
SK109		144		2.90	1.60	50	61.79
SK110				(2.00)	1.85	38	61.85
SK111				0.95	0.70	38	61.86
SK112				0.60	(0.50)	33	61.96
SK113		146-145		2.80	(1.90)	48	61.72
SK114				1.00	0.95	51	61.78
SK115				(0.80)	0.70	44	61.77
SK116-1		161-158		(1.60)	(1.20)	37	61.87

表 11 寺内2区土坑別出土遺物一覧表（3）

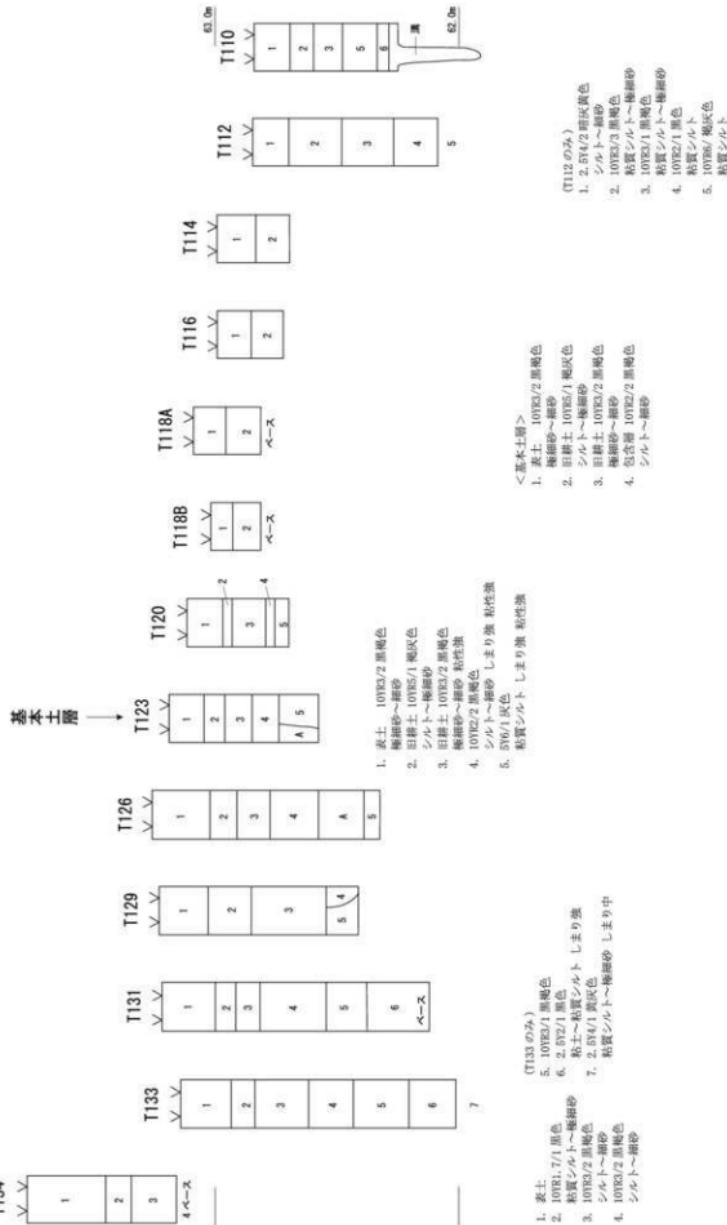
遺構名	報告番号 木器	報告番号 土器(ゴチックは複数遺構出土)	土坑規模		
			長辺(m)	短辺(m)	深さ(cm)
SK116-2		154-155-160	1.50	1.50	33 61.84
SK116-3		159-151	—	—	37 61.88
SK116-4			2.00	—	35 61.89
SK116-5			1.50	1.10	24 61.84
SK116-6	W17・20・30	152-145-157-156	2.80	2.00	42 61.80
SK116-6・7間		153-161-156	—	—	—
SK116-7			2.50	1.30	34 61.74
SK117			1.95	1.60	40 61.83
SK118			(1.60)	1.60	35 61.88
SK119			(3.80)	1.70	79 61.82
SK119-1		147	2.30	1.00	34 61.82
SK119-2	W43		1.80	2.00	27 61.90
SK120		147	(2.90)	1.85	37 61.80
SK121	W31	153	—	—	—
SK121-1	W16	171	3.80	(2.75)	42 61.75
SK121-2		172	4.50	2.50	39 61.81
SK122			(2.00)	1.00	42 61.78
SK123	W63		1.40	1.05	43 61.78
SK124		174	—	—	—
SK124-1	W34	106-149-148	4.00	3.00	38 61.78
SK124-2			2.00	0.90	33 61.83
SK124-3		149-150	—	—	61.81
SK125		150	1.10	0.90	32 61.87
SK126			1.00	0.75	15 62.08
SK128		143	4.50	1.00	28
SK128-1		173	—	—	22 61.91
SK128-2		173-151	1.50	0.80	18 62.07
SK128-3			2.80	1.50	33 61.95
SK129			3.00	2.00	29 61.87
SK130-1			4.00	1.10	69 61.82
SK130-2	W39-40	165	2.10	1.80	36 61.85
SK130-3	W42	169-164-165-168	1.80	1.80	38 61.84
SK130-4	W41-49	169-168-162	1.00	0.80	48 61.75
SK130-5			—	—	22 61.94
SK130-6			2.70	1.10	60 61.61
SK130-7			2.70	2.10	30 61.81
SK130-8	W52		4.60	1.00	28 61.88
SK130-9			1.00	0.80	16 61.78
SK130-10		167-169-164-166-170-162-163	4.20	—	19 61.86
SK131-1			1.60	1.20	19 62.11
SK131-2			3.60	1.60	31 61.95
SK131-3			4.00	—	48 61.90
SK131-4	W22	138	3.00	1.50	43 61.85
SK131-5			—	—	34 61.86
SK132			1.30	1.00	24 61.82
SK133			0.80	0.60	28 61.79
SK134		175-174-176	—	1.20	16 61.78
SK135	W55	174-175	—	1.50	20 61.85
SK136	W54		1.80	(1.10)	48 61.70
SK137			(1.20)	(0.90)	35 61.81
SK138	W37		1.10	0.75	35 61.83

図 版



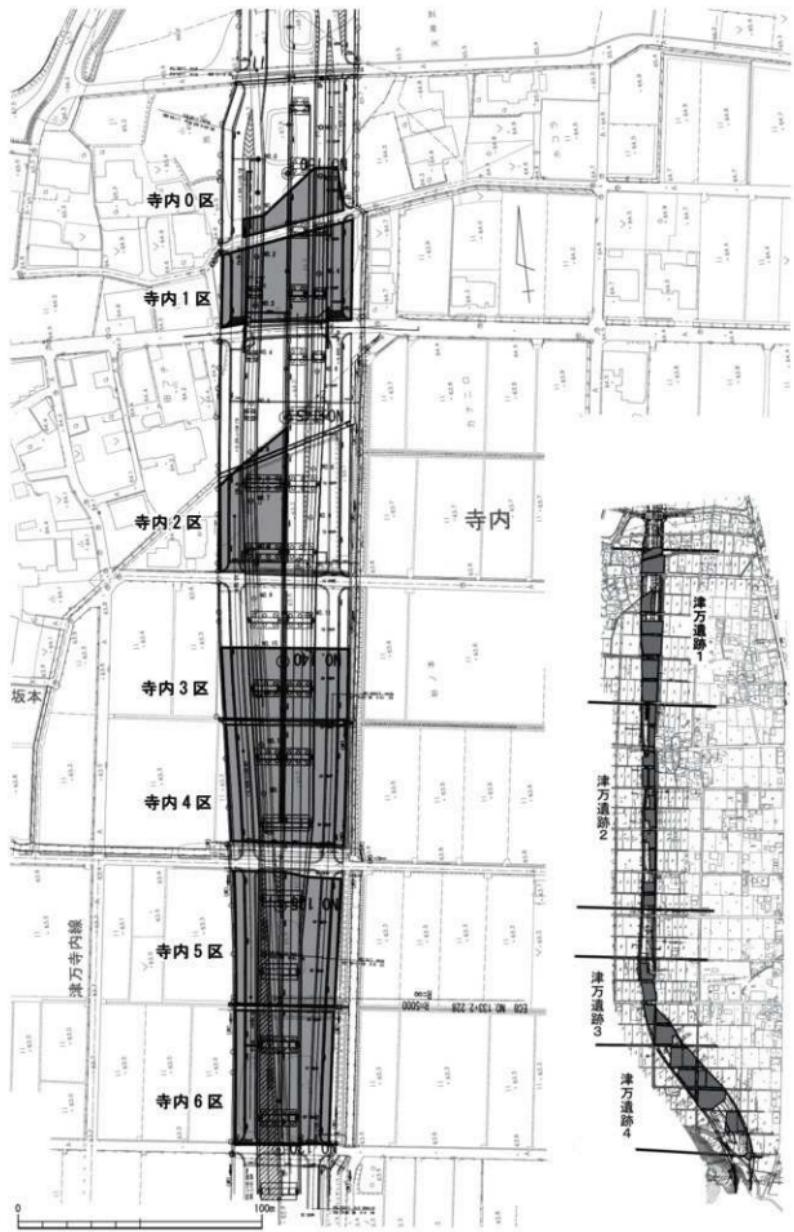
津万遺跡群 1 トレンチ配置図

640



津万遺跡群 1 トレンチ土層断面柱状図

津万遺跡群1



図版 4

津万遺跡群 1

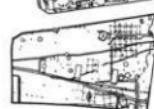


Y-59950

Y-59950

Y-59950

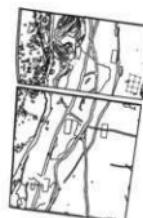
X-110650



X-1106100



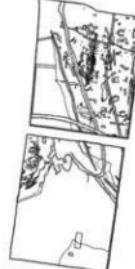
X-1106200



X-1106300



X-1106350



X-1106400



X-1106450



津万遺跡群 1 寺内地区造構全体図

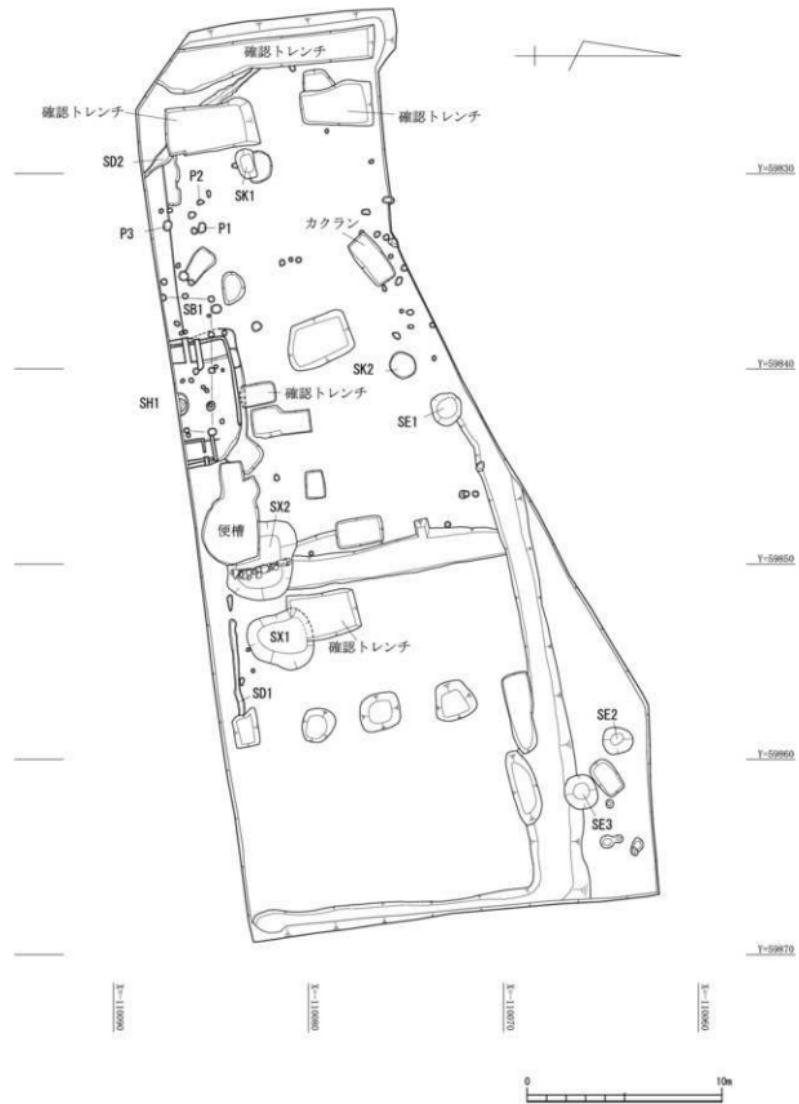
津万遺跡群 1



津万遺跡群 1 寺内地区遺構配置図

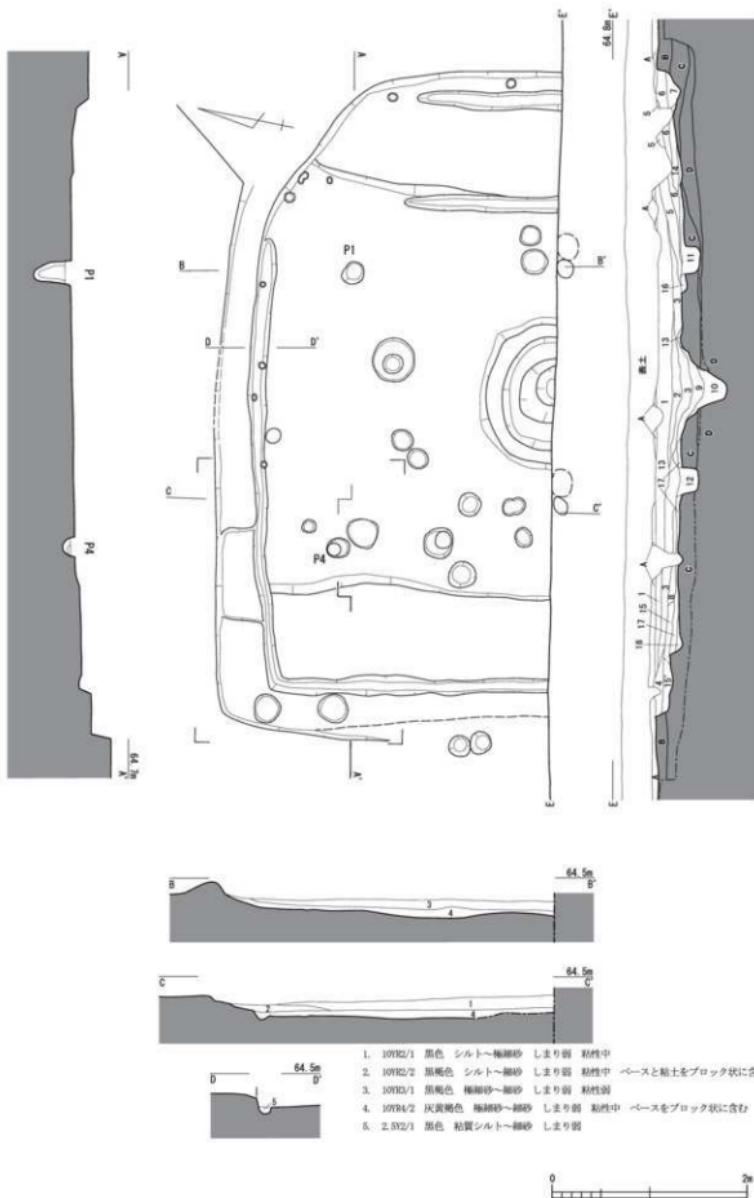
図版 6

寺内〇区



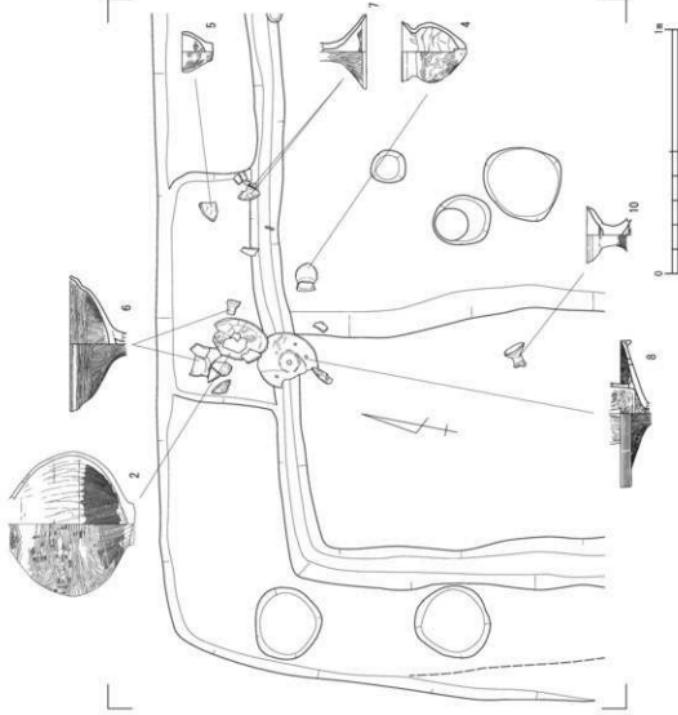
寺内〇区 全体図

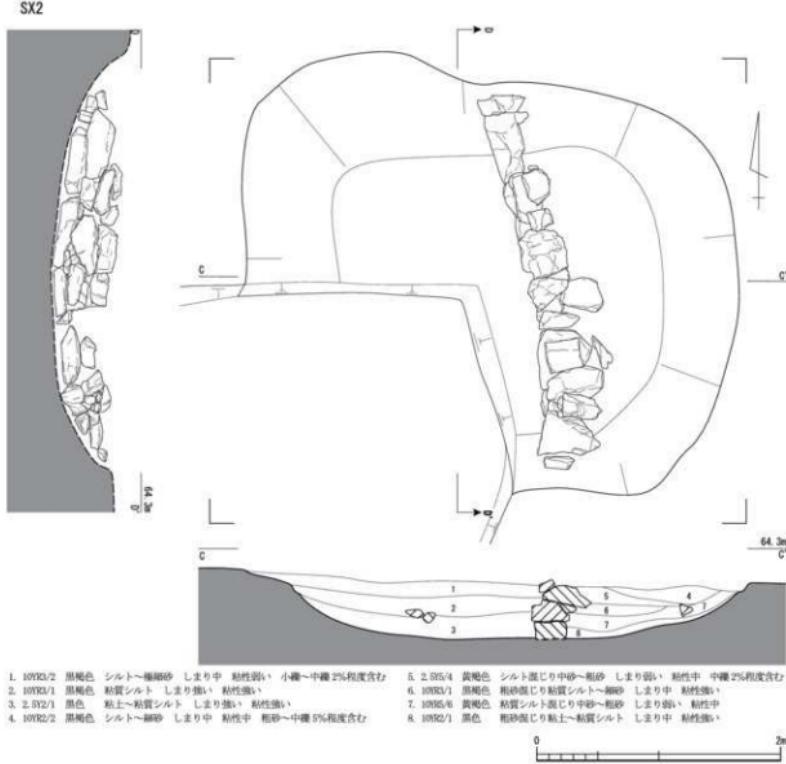
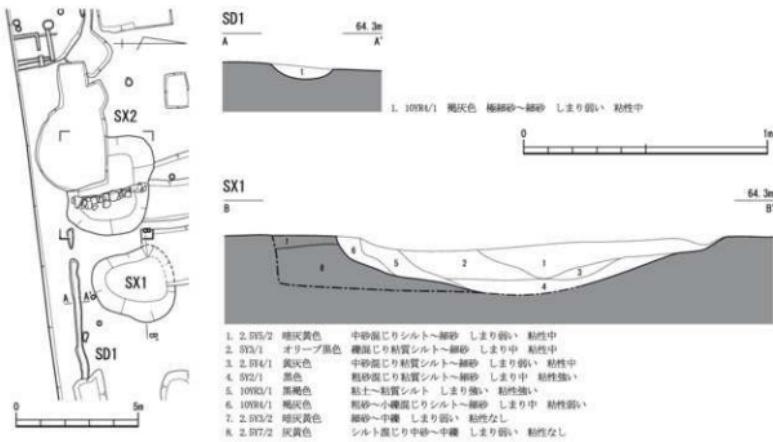
寺内〇区

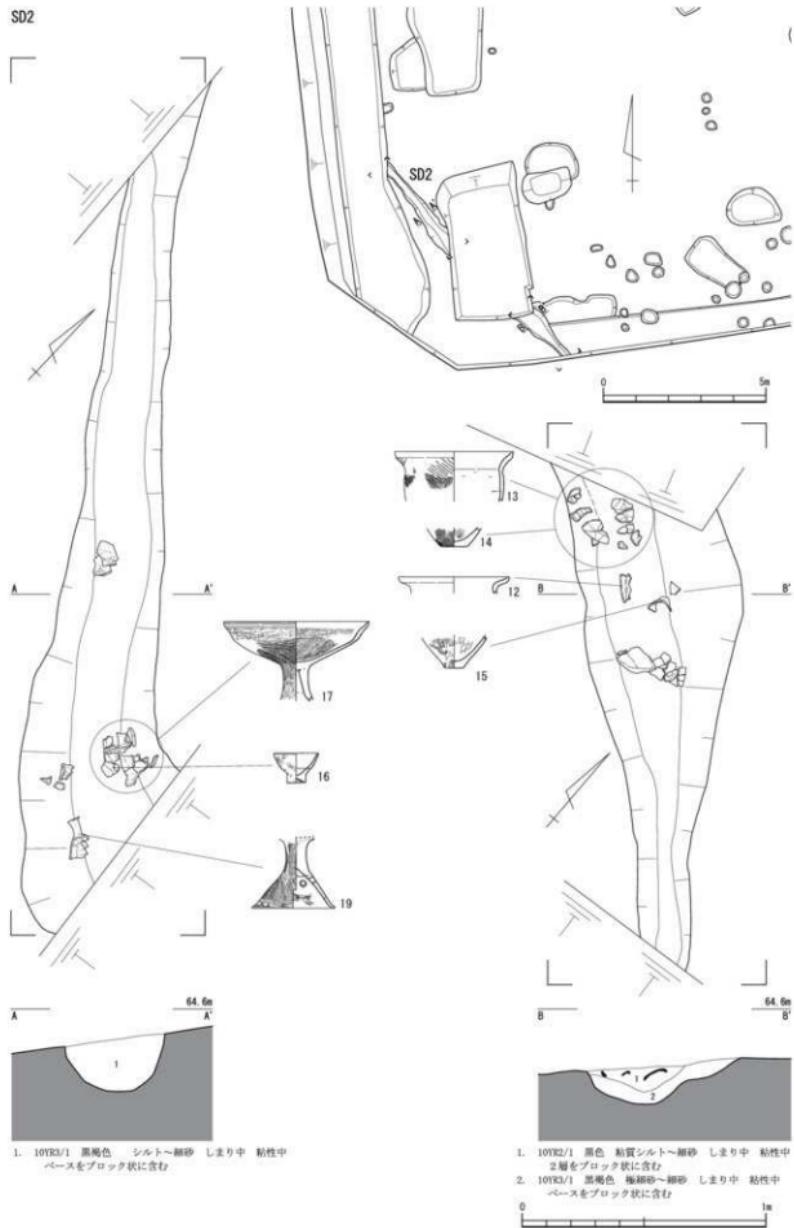


寺内〇区 SH1 ①

鋼板7 E 斷面土層





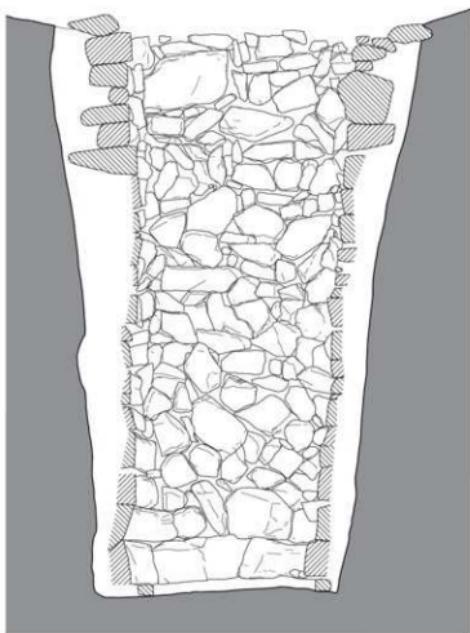


寺内〇区

SE1



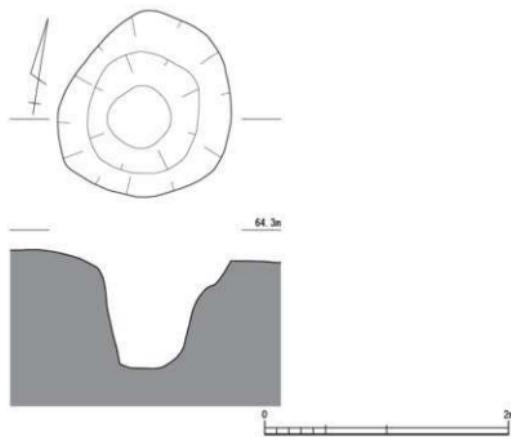
64.6m



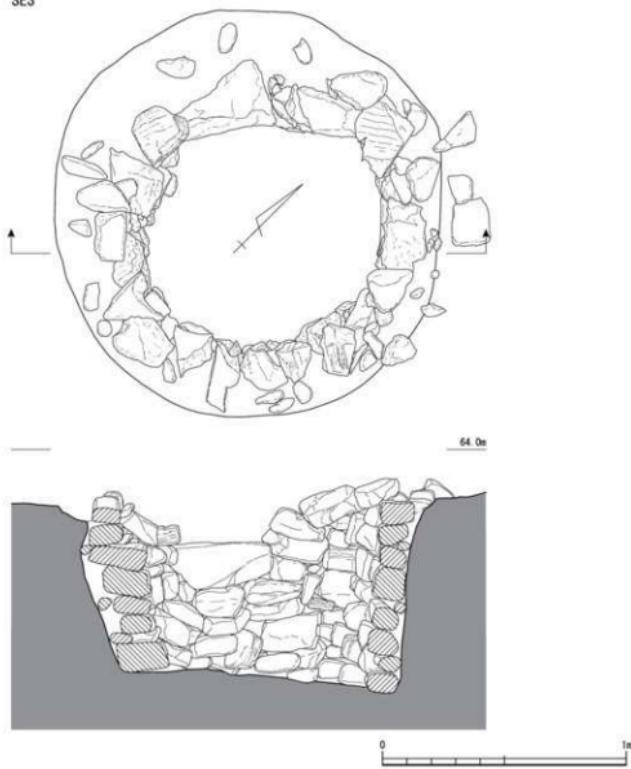
0 1m

寺内〇区 SE1

SE2

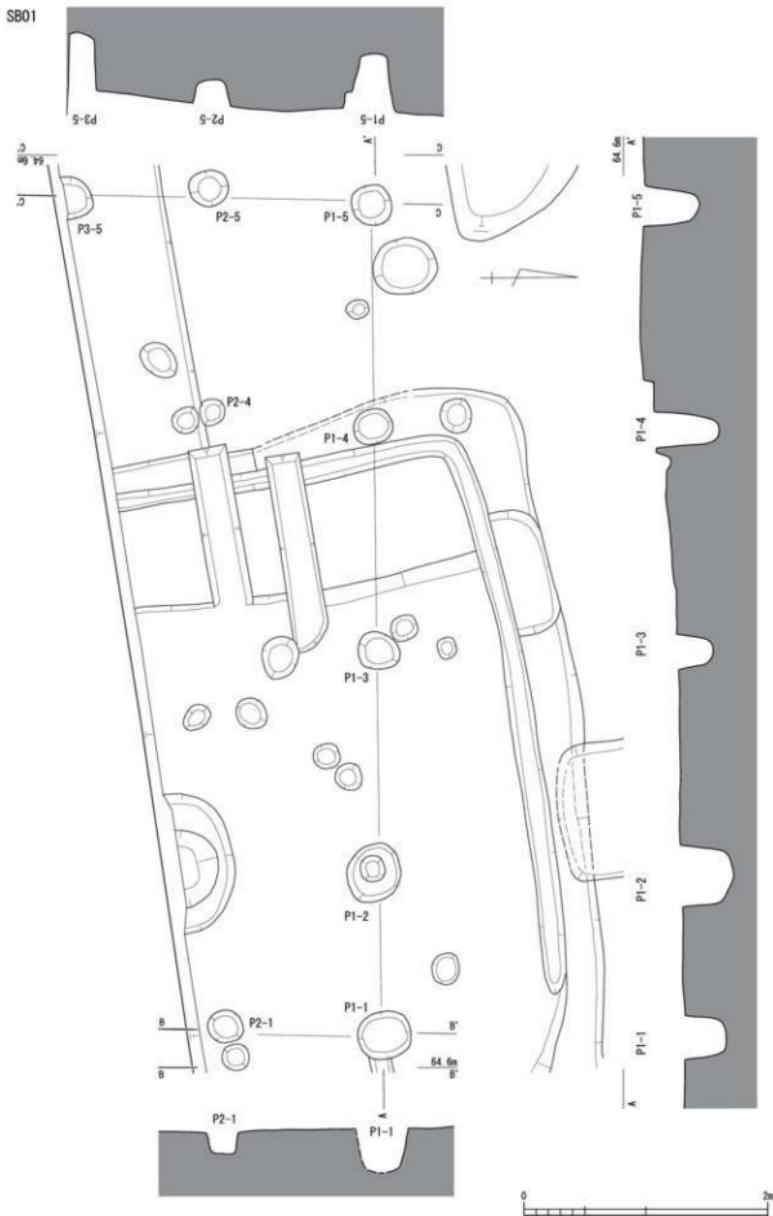


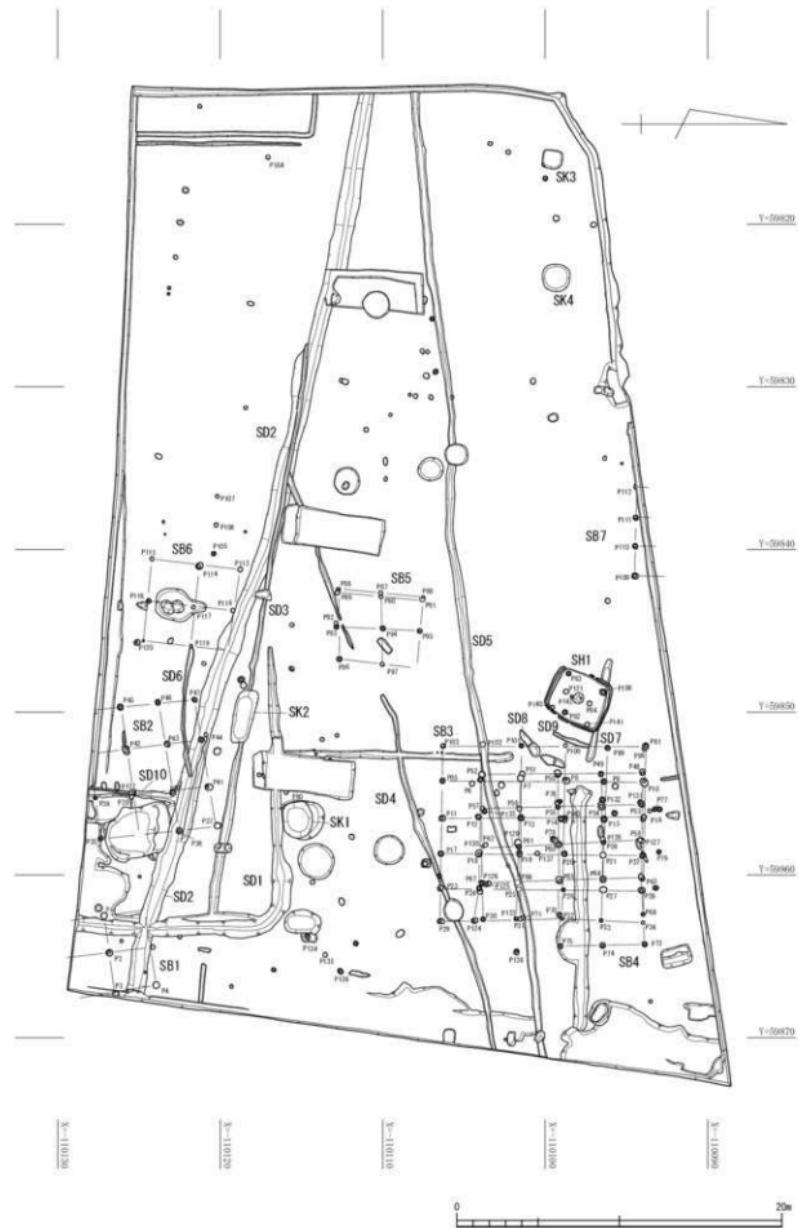
SE3



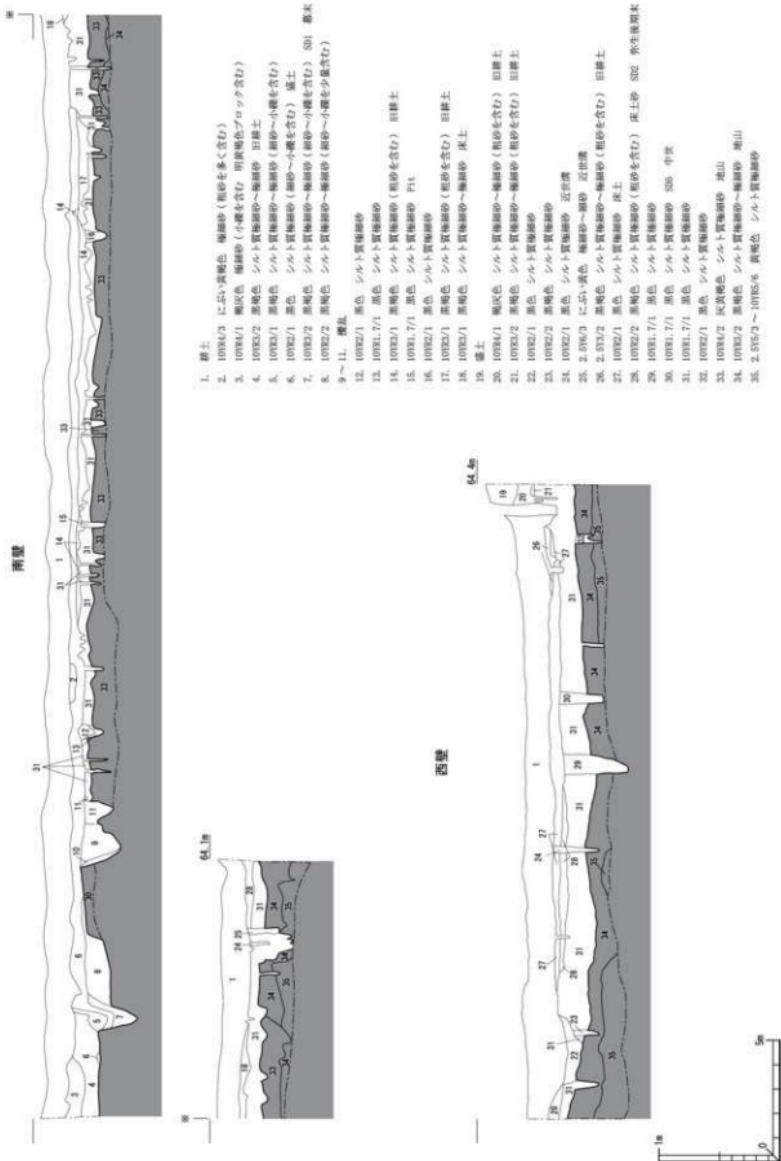
寺内〇区 SE2・SE3

寺内〇区



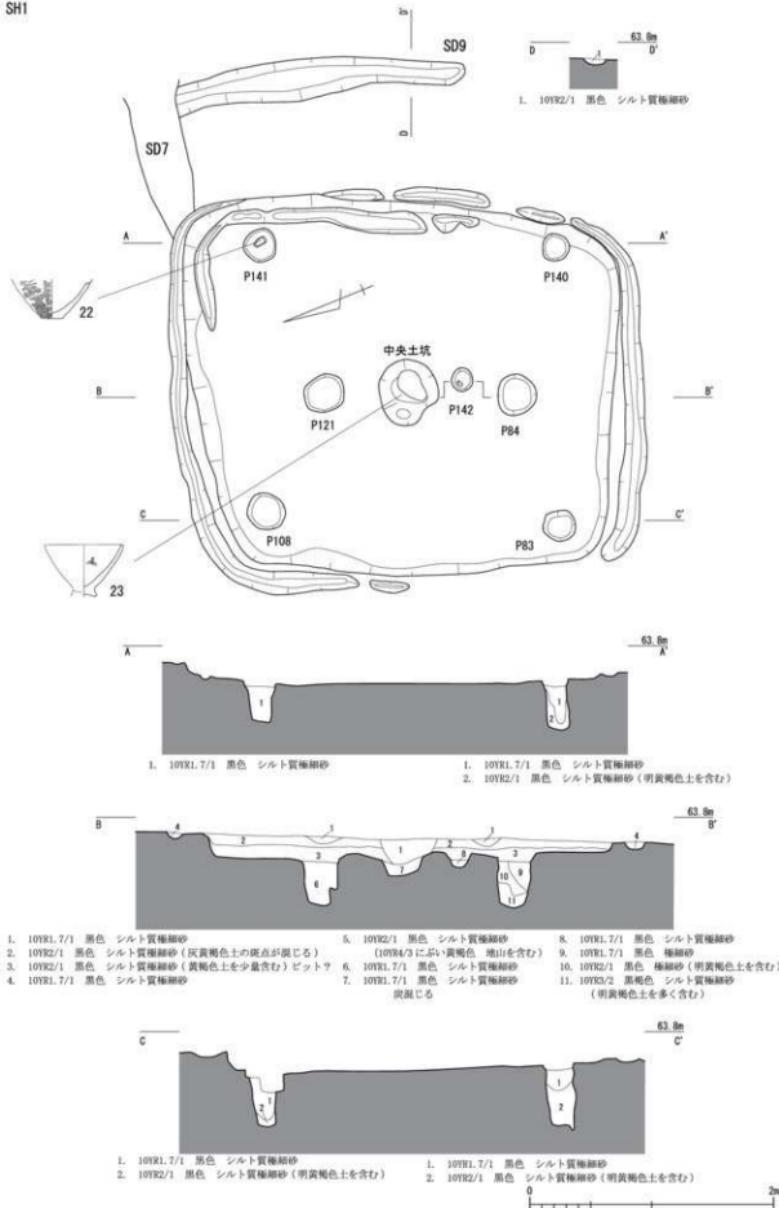


寺内1区 全体図

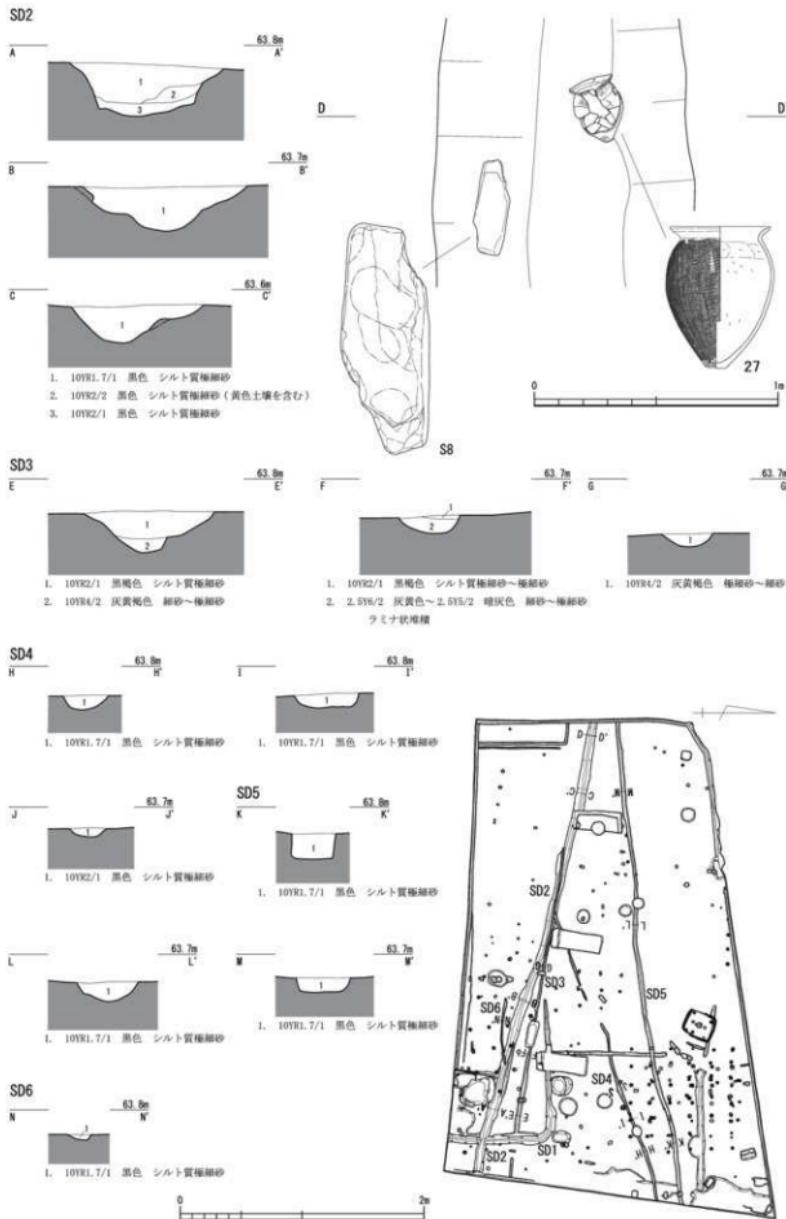


寺内1区 南壁・西壁土層断面図

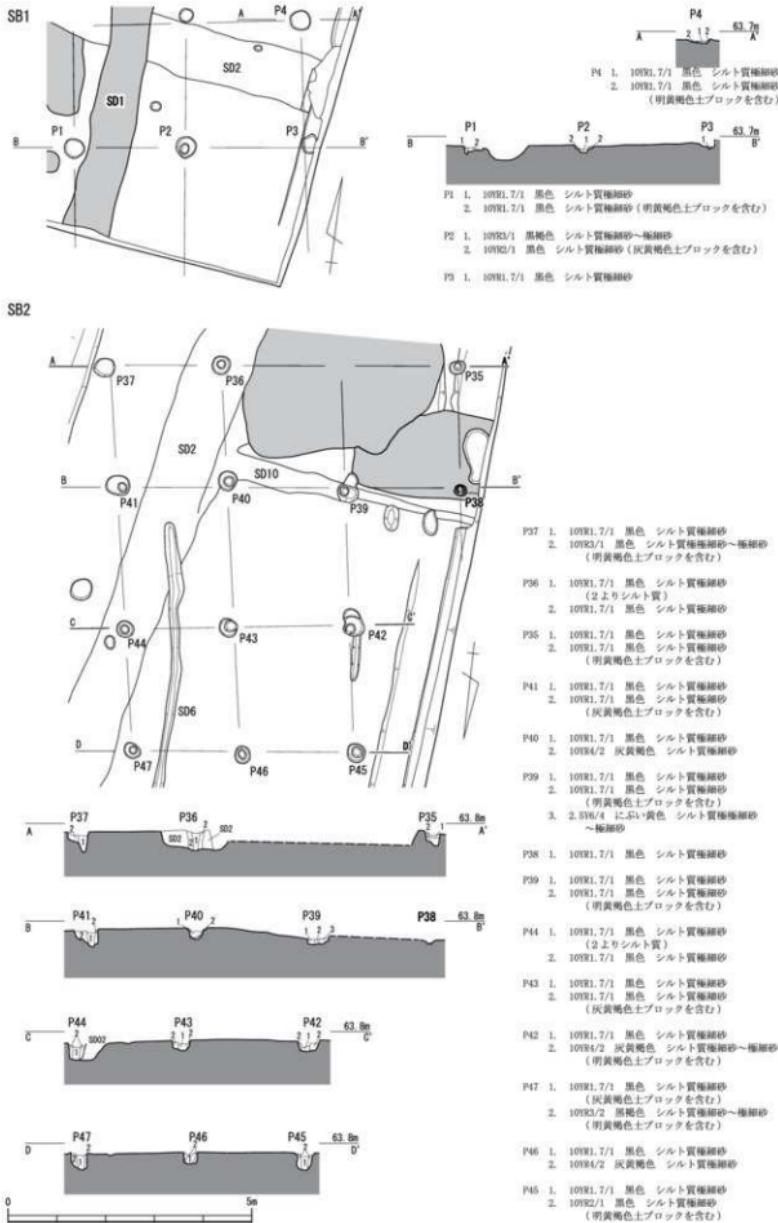
SH1



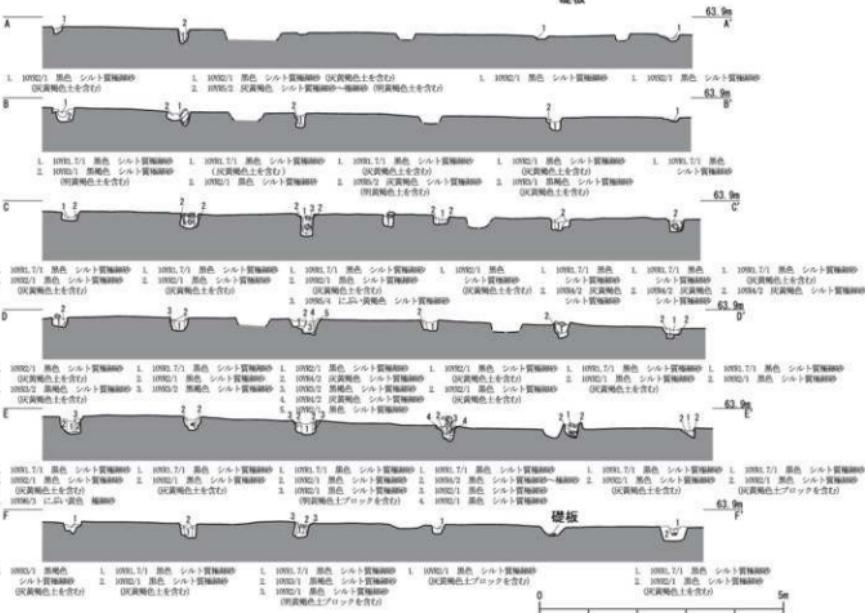
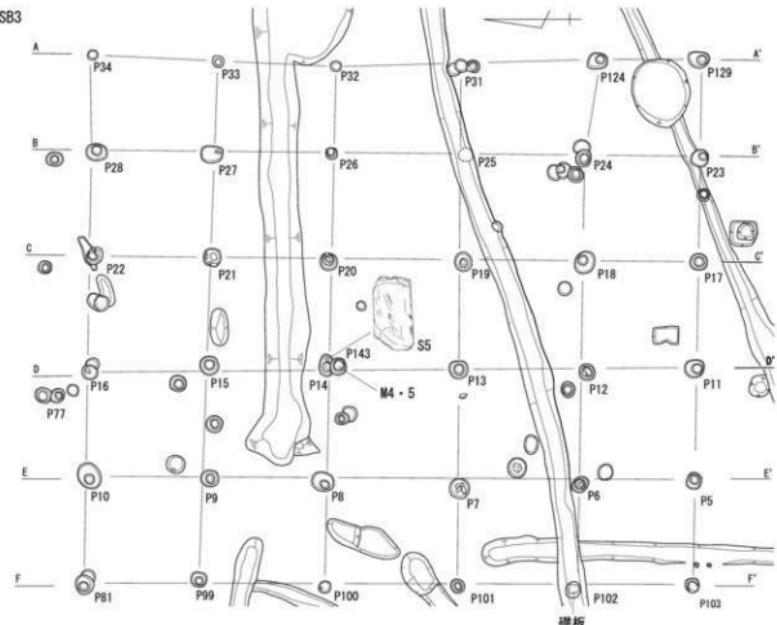
寺内1区

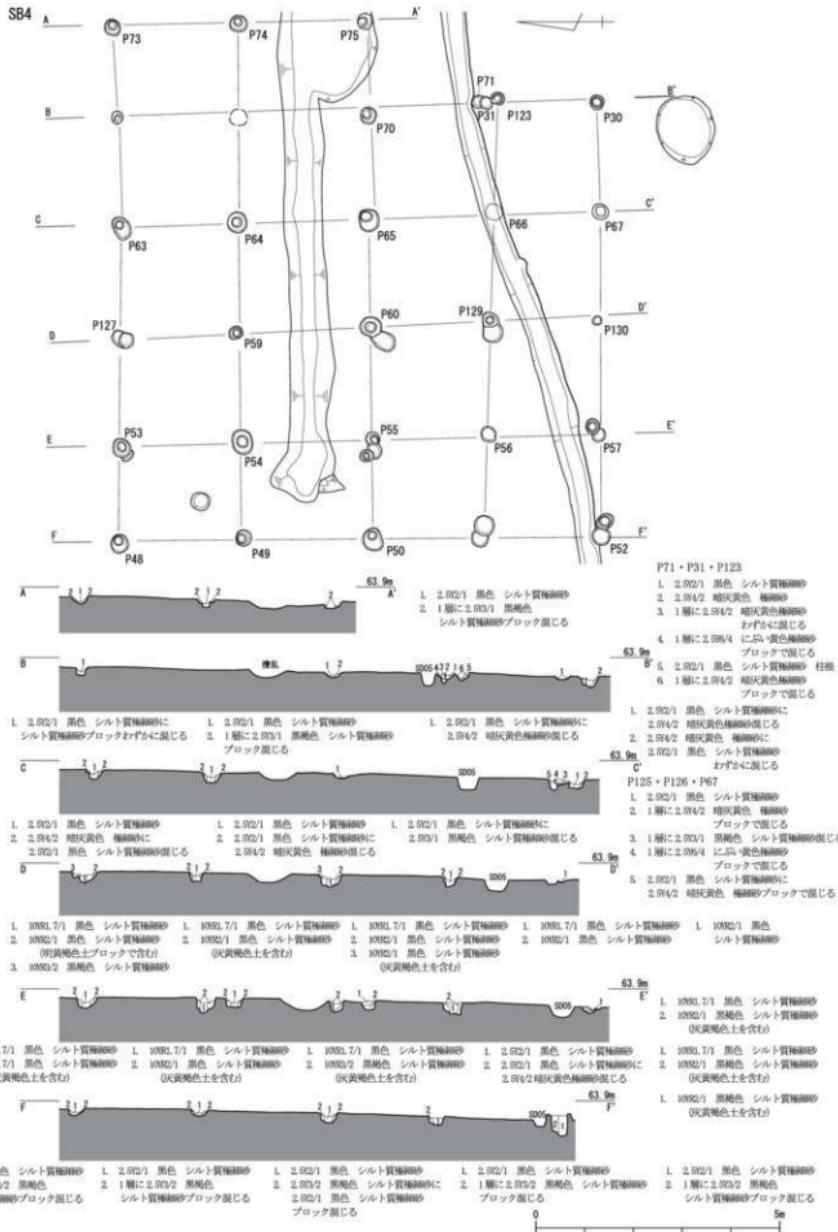


寺内1区 SD2 ~ 6

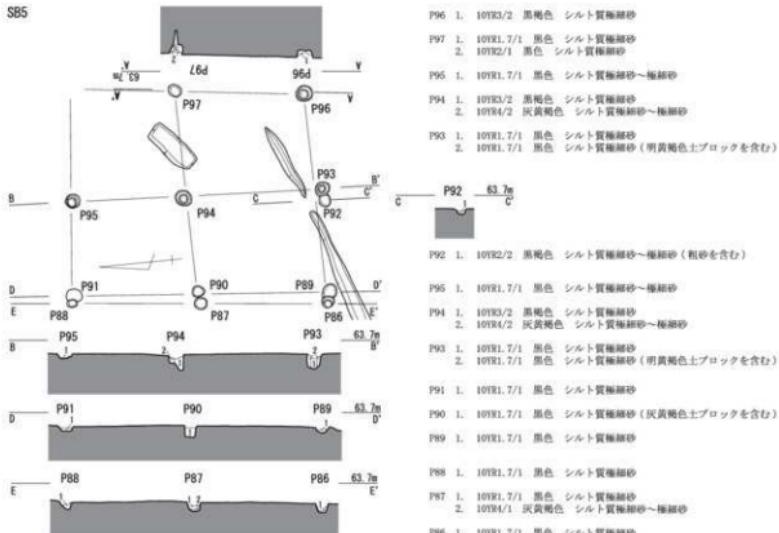


SB3

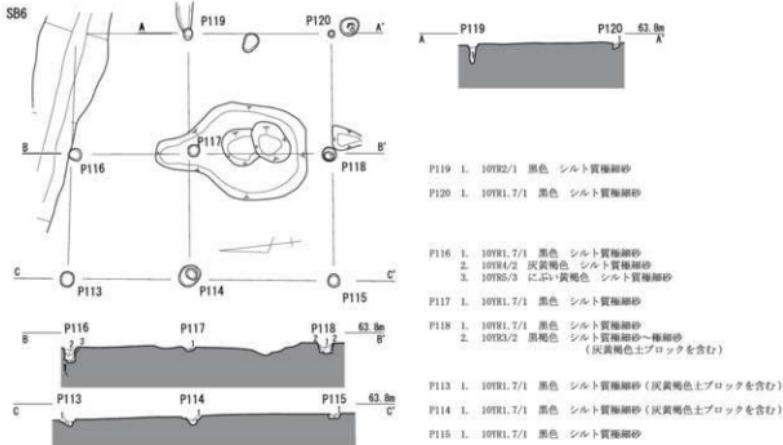




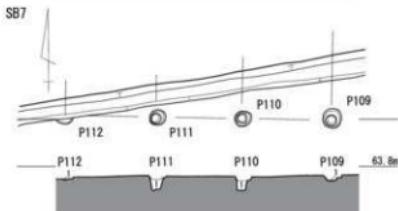
SB5

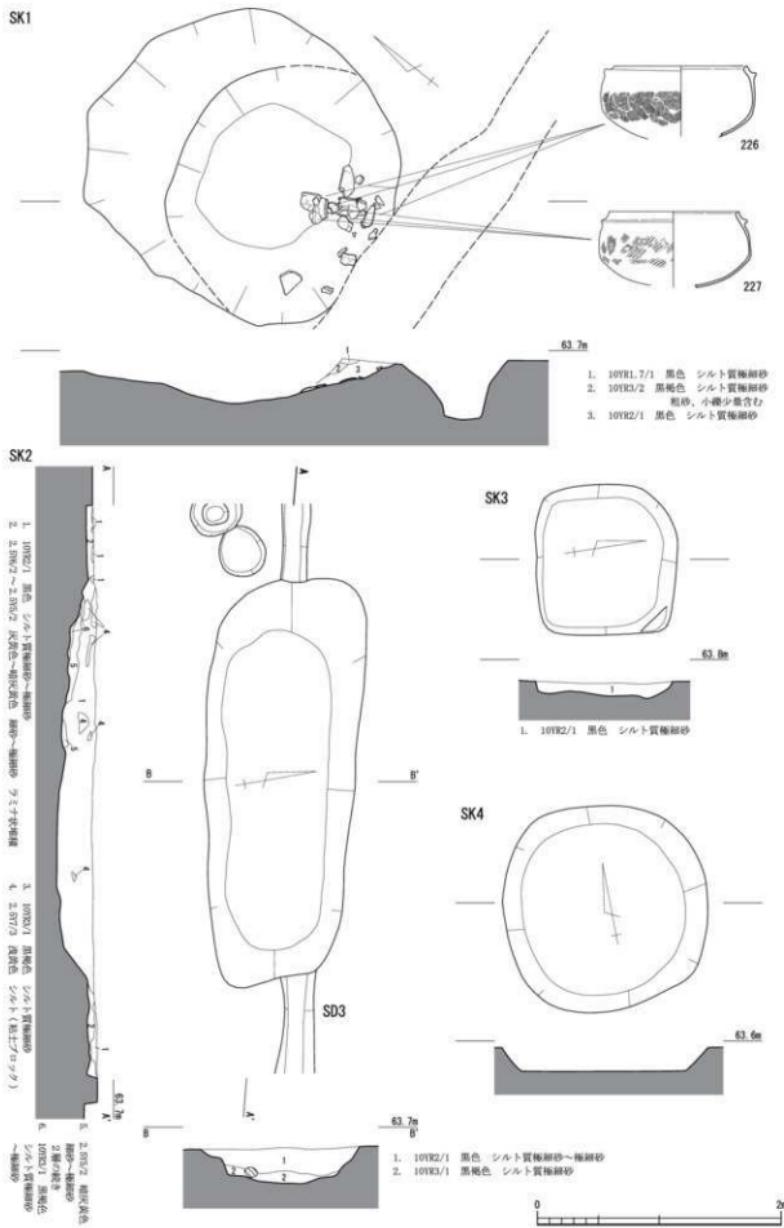


SB6



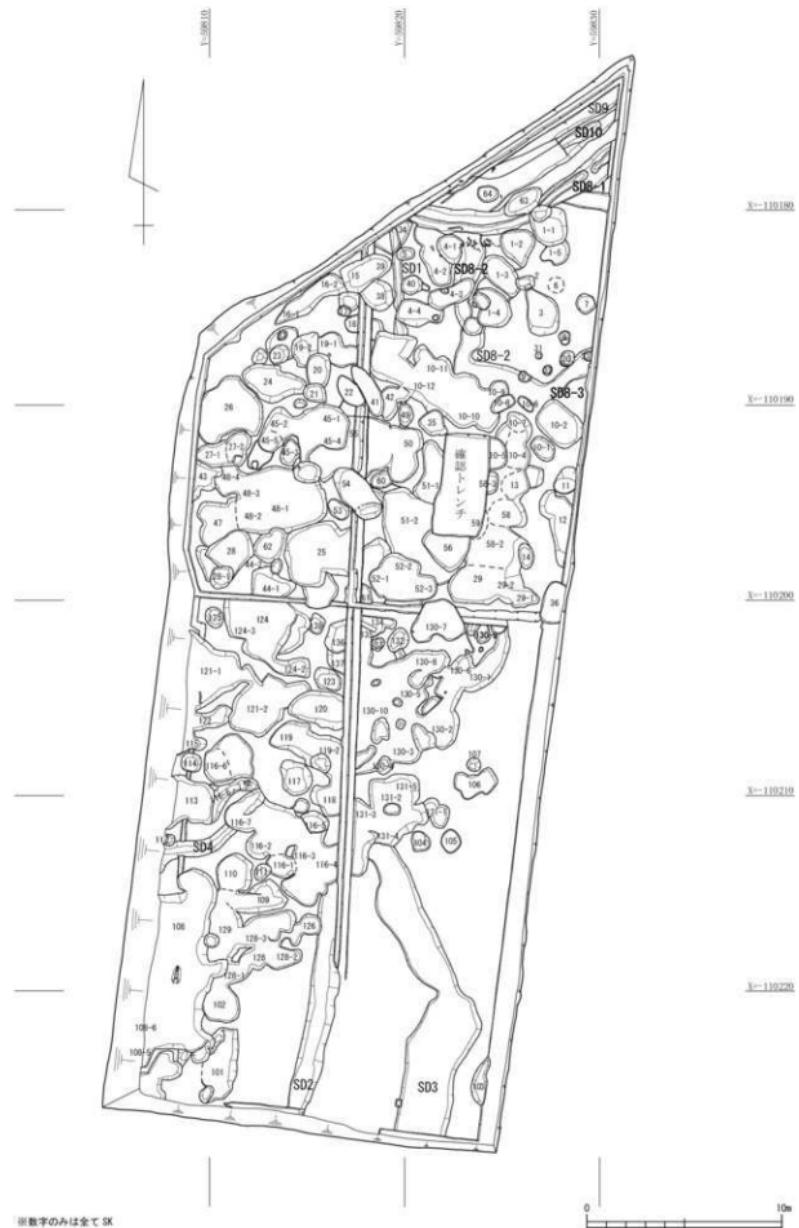
SB7





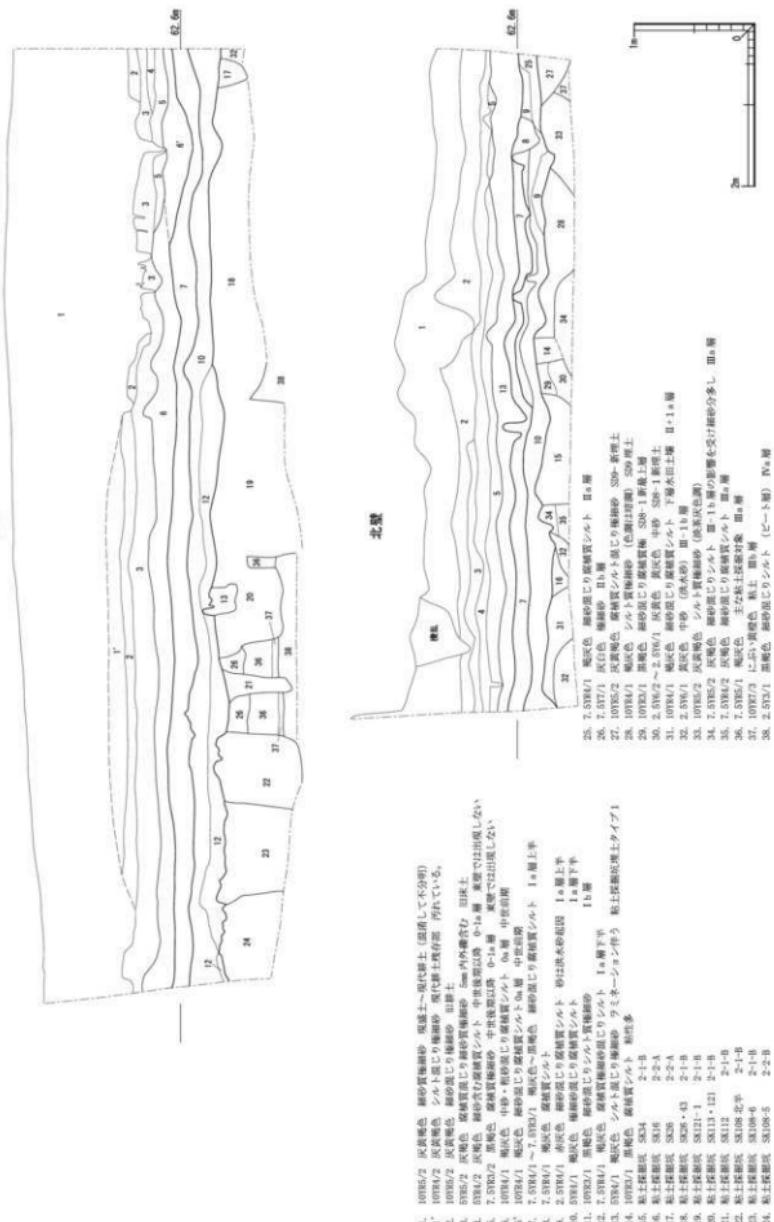
寺内1区 SK1~4

寺内2区

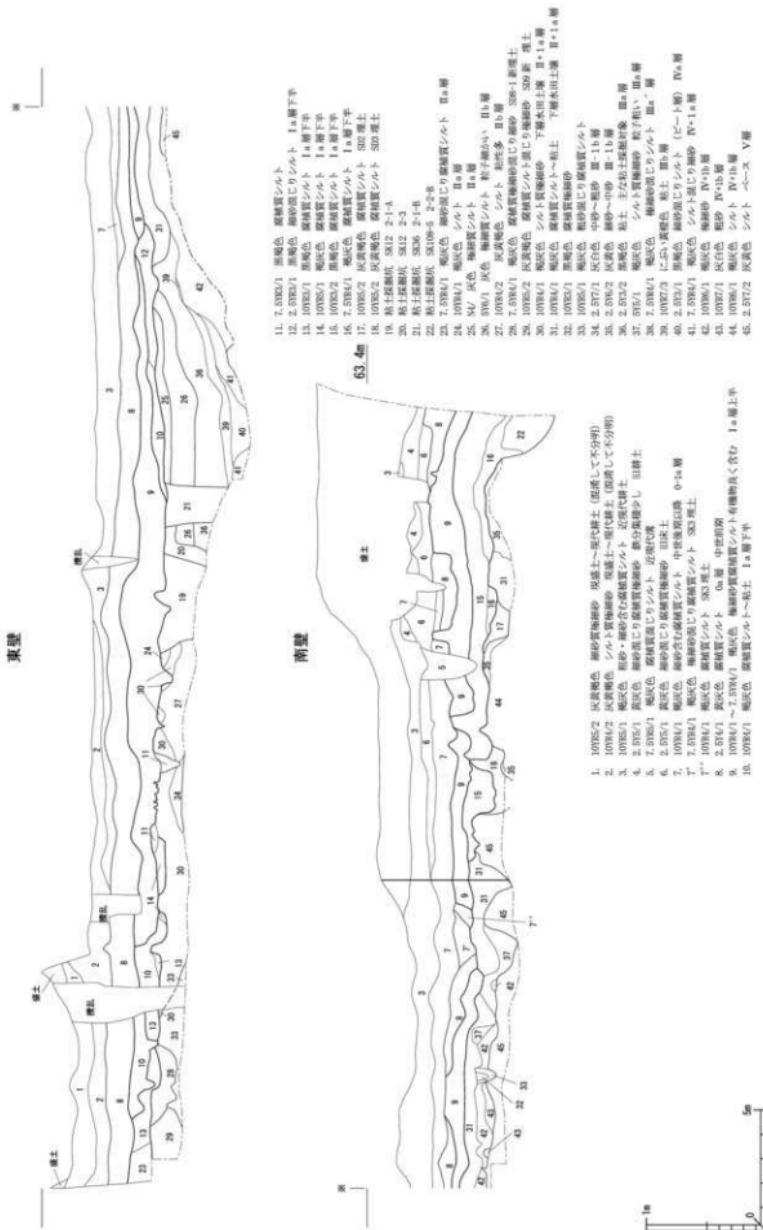


寺内2区 全体図

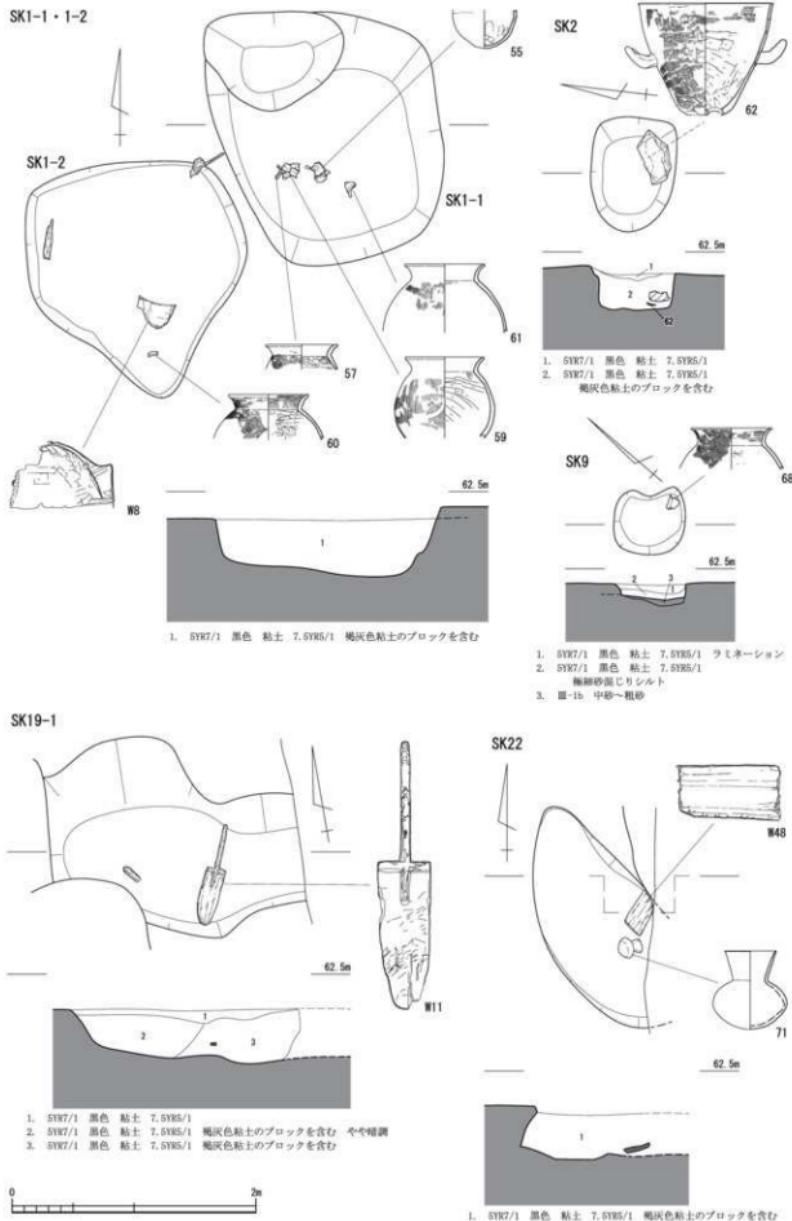
寺内2区



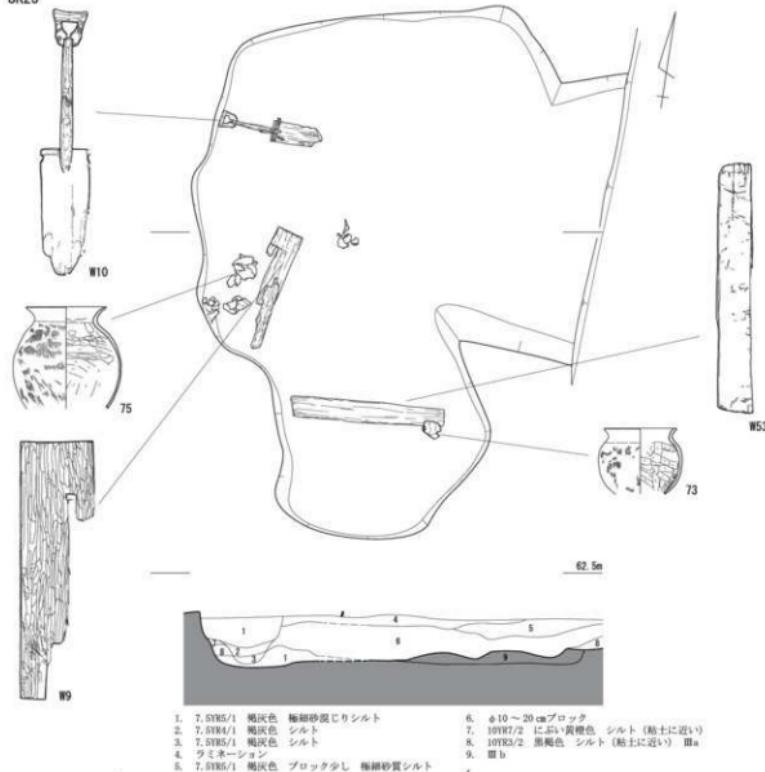
寺内2区 北壁・西壁土層断面図



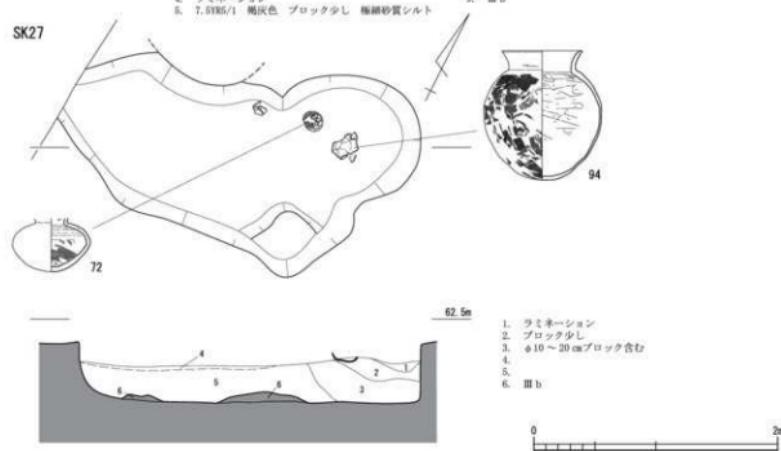
寺内2区 東壁・南壁土層断面図

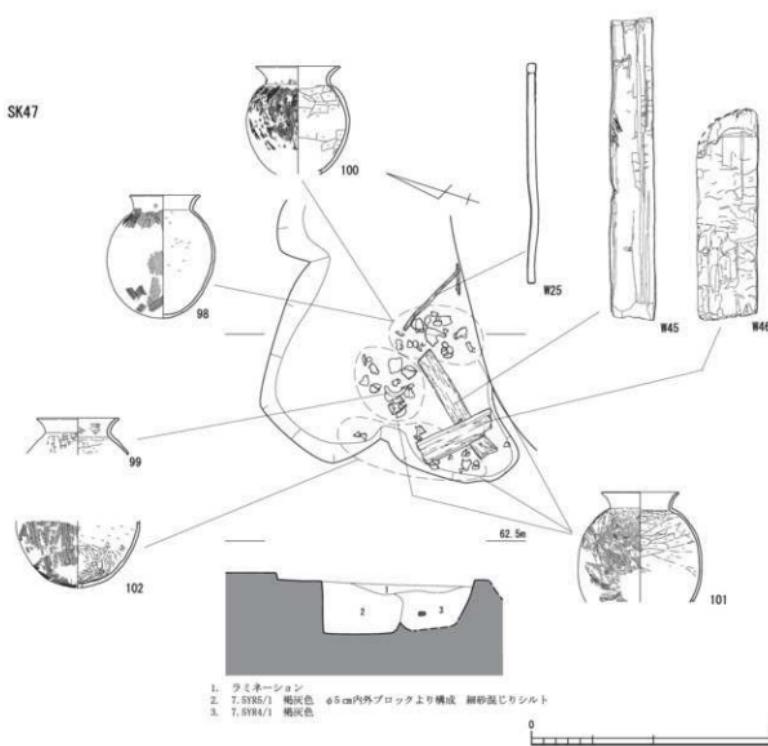
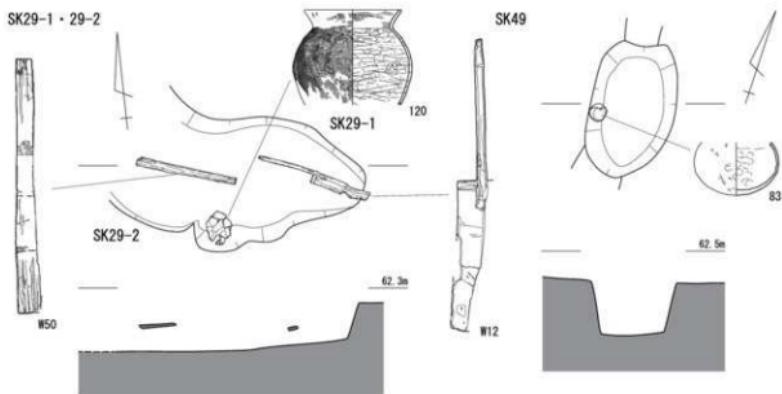


SK25

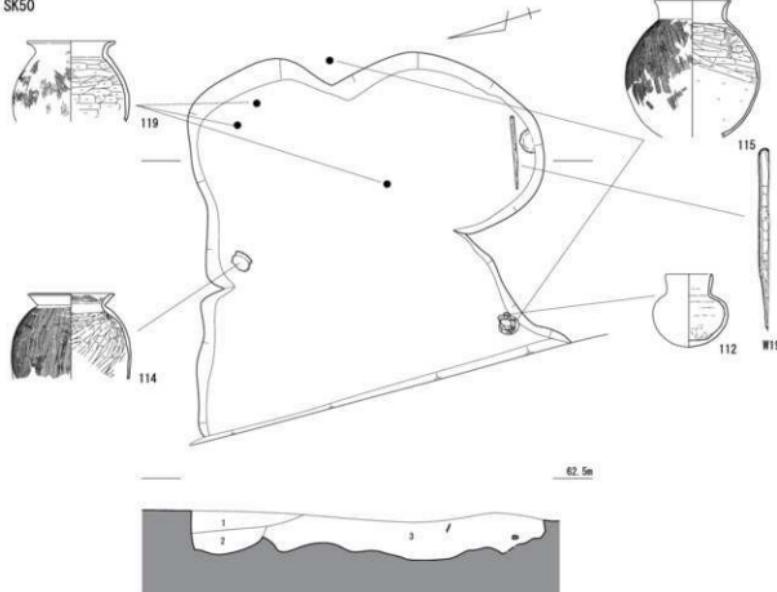


SK27



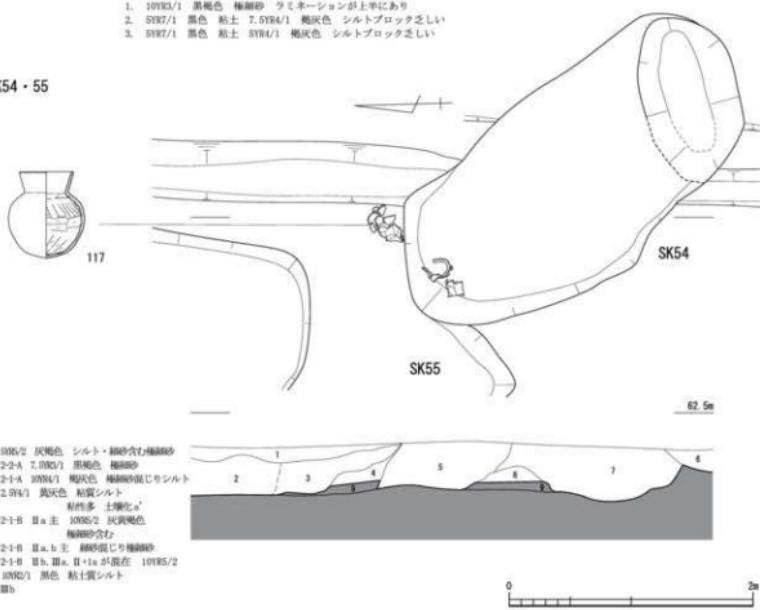


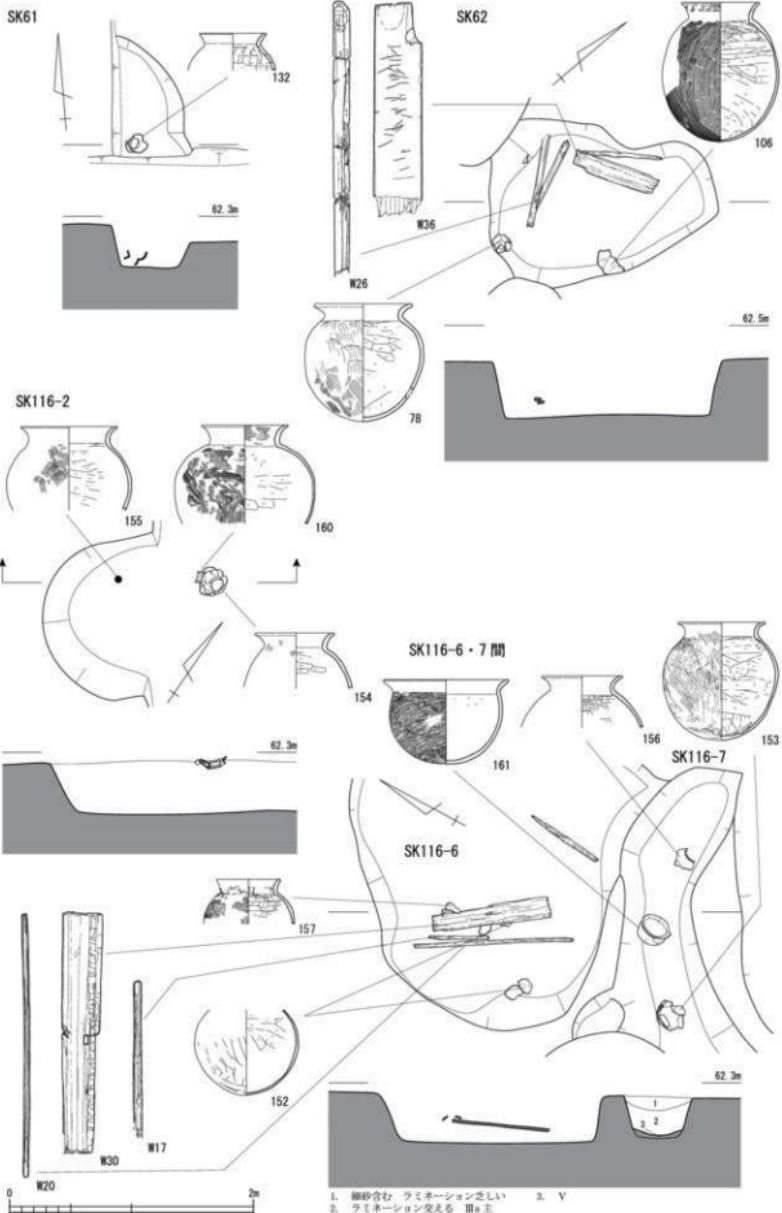
SK50

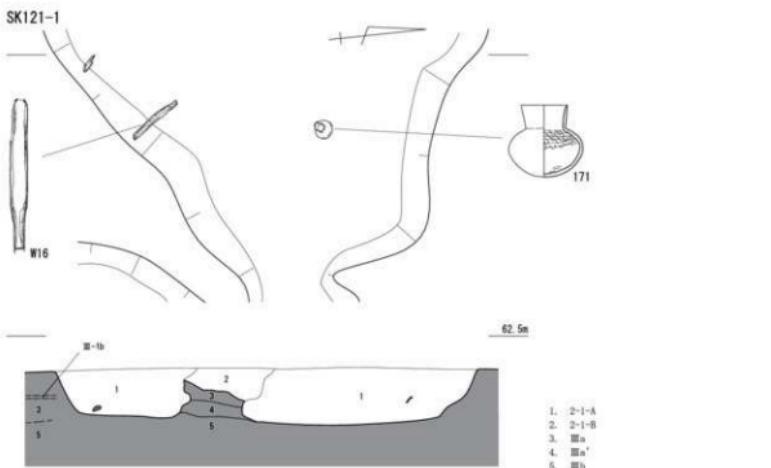


寺内2区

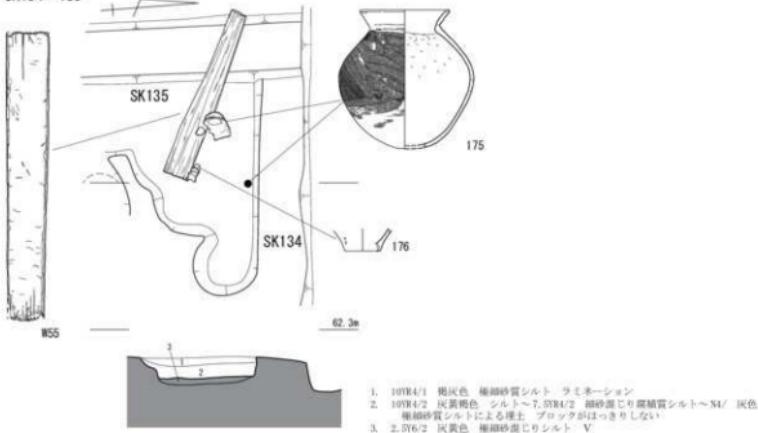
SK54・55

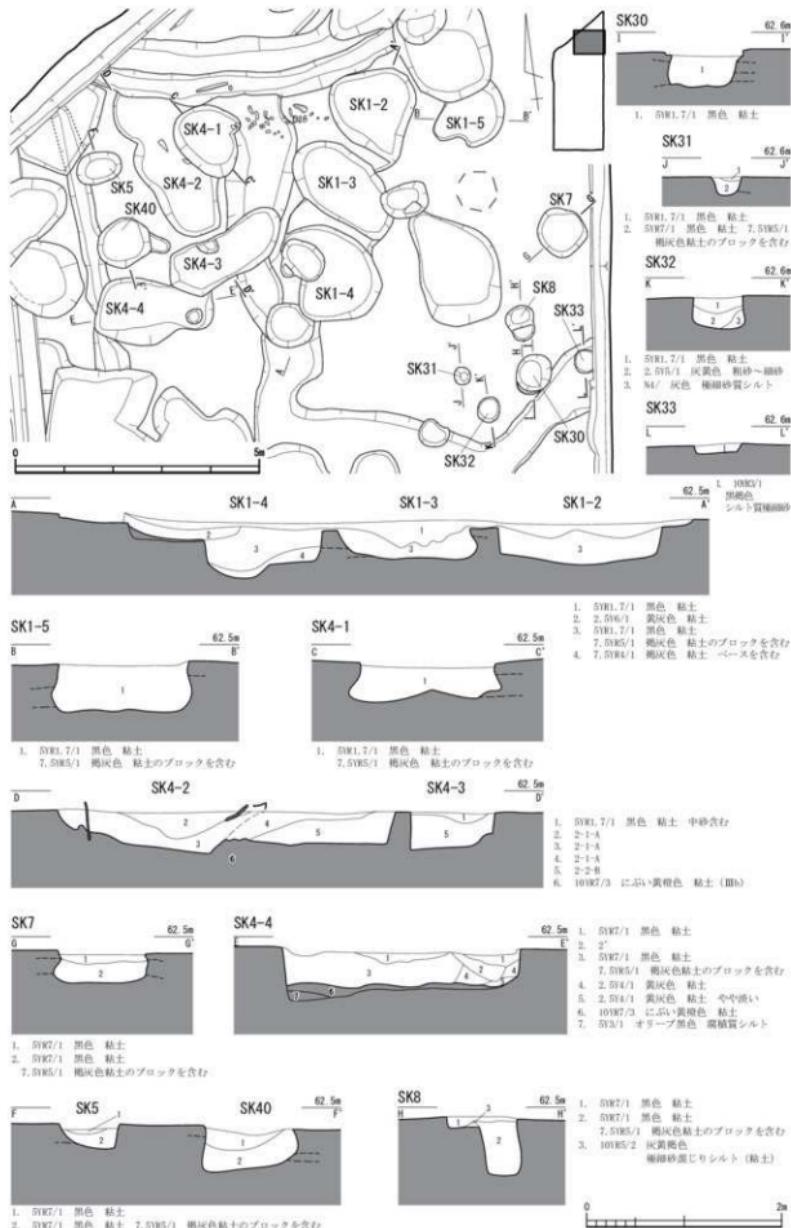


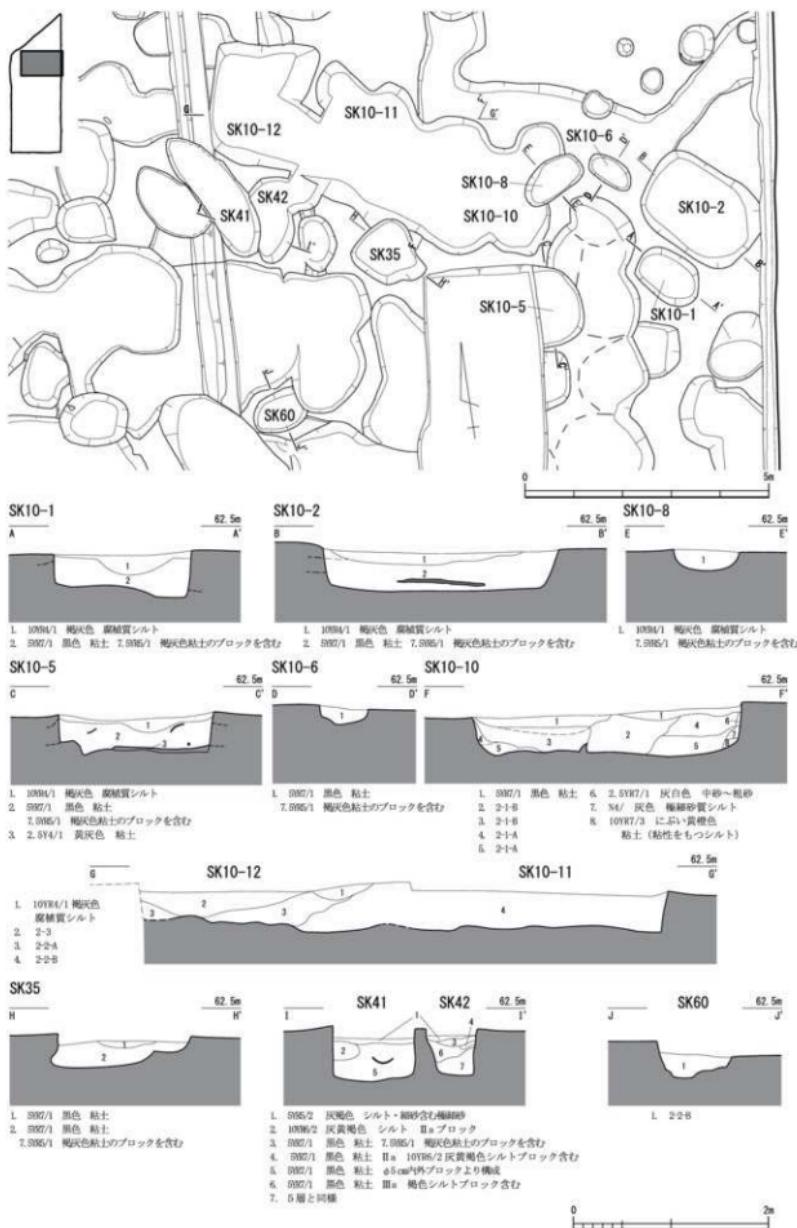


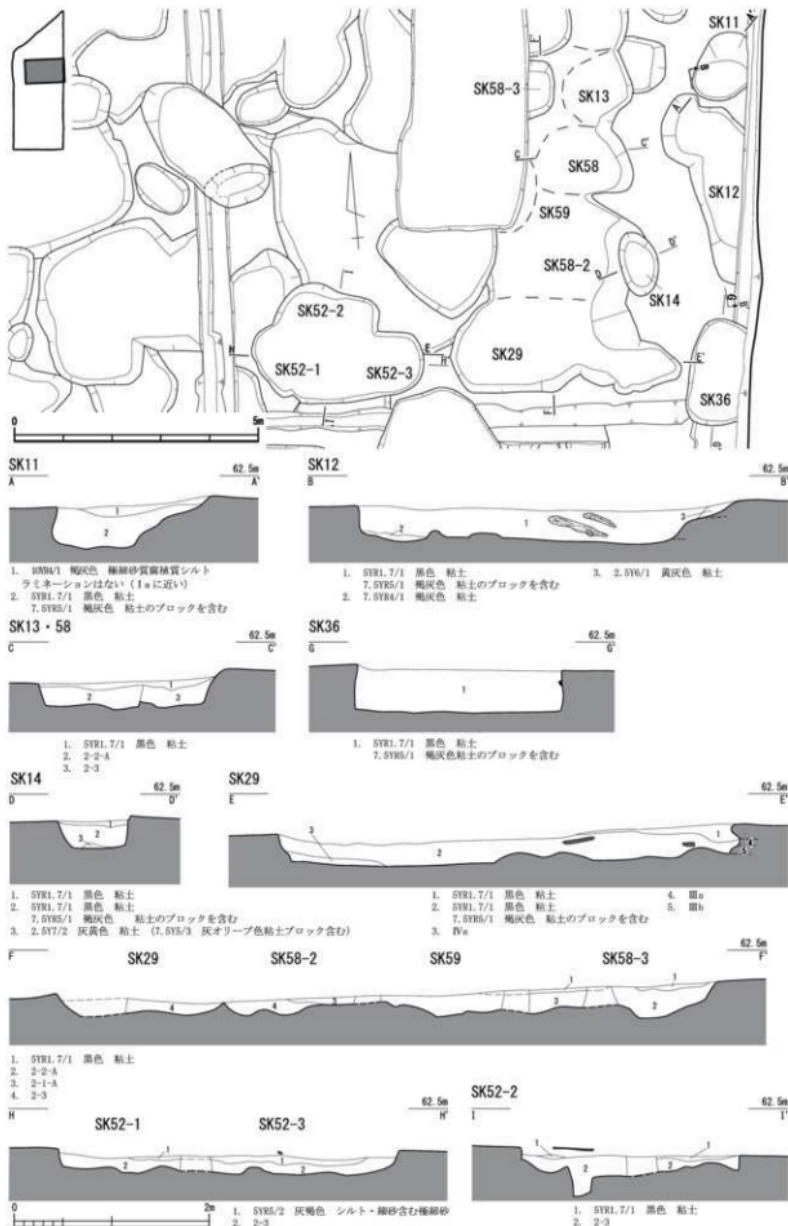


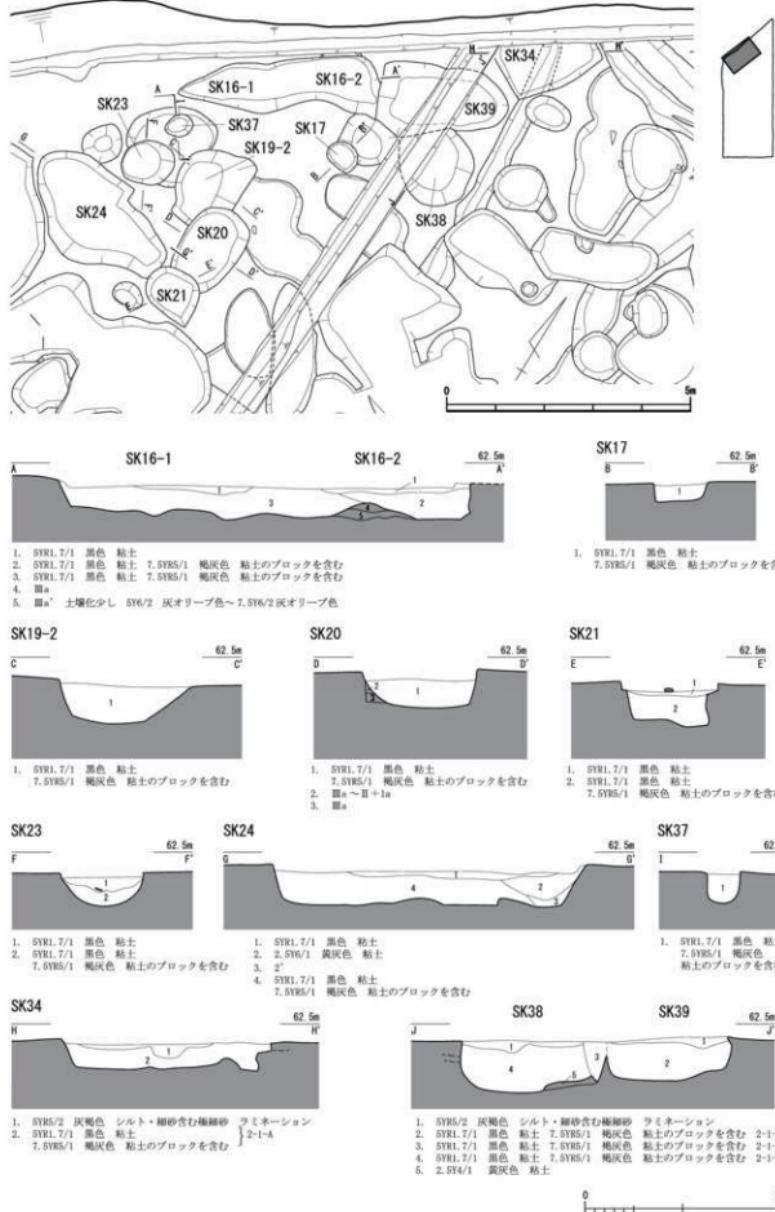
SK134 + 135

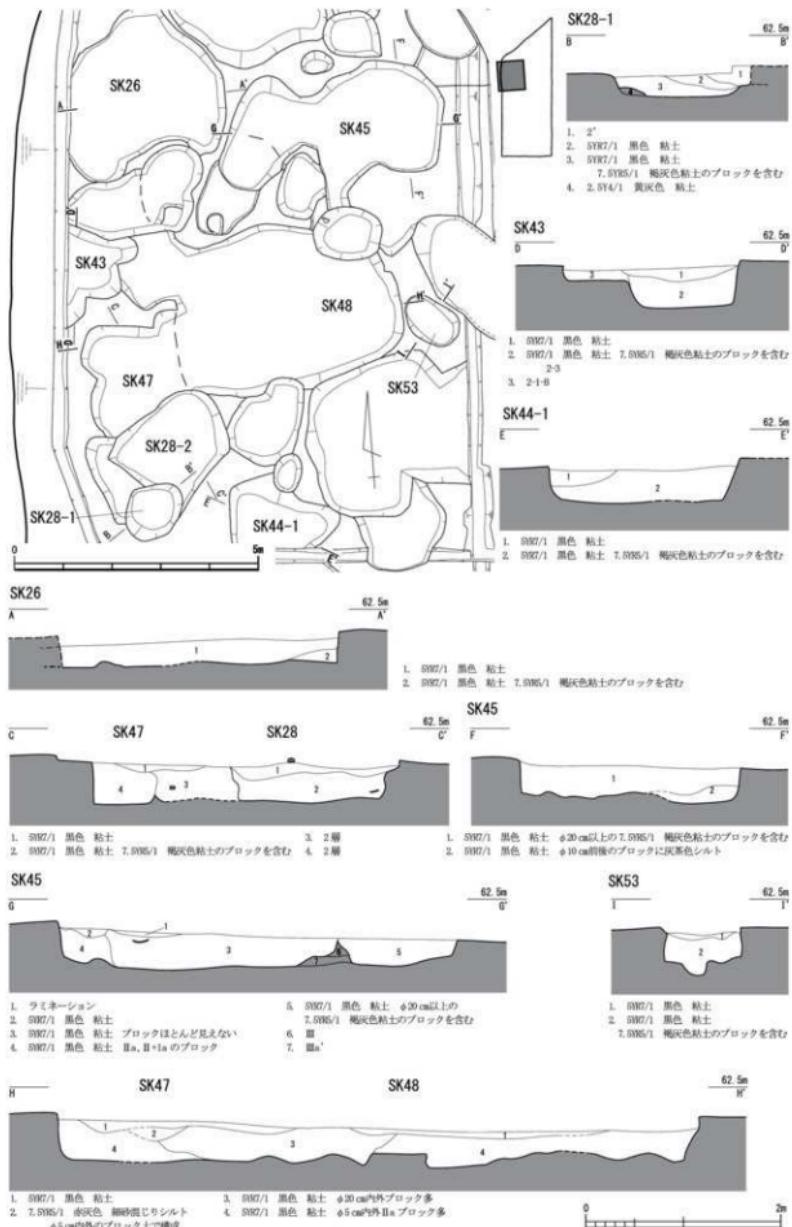


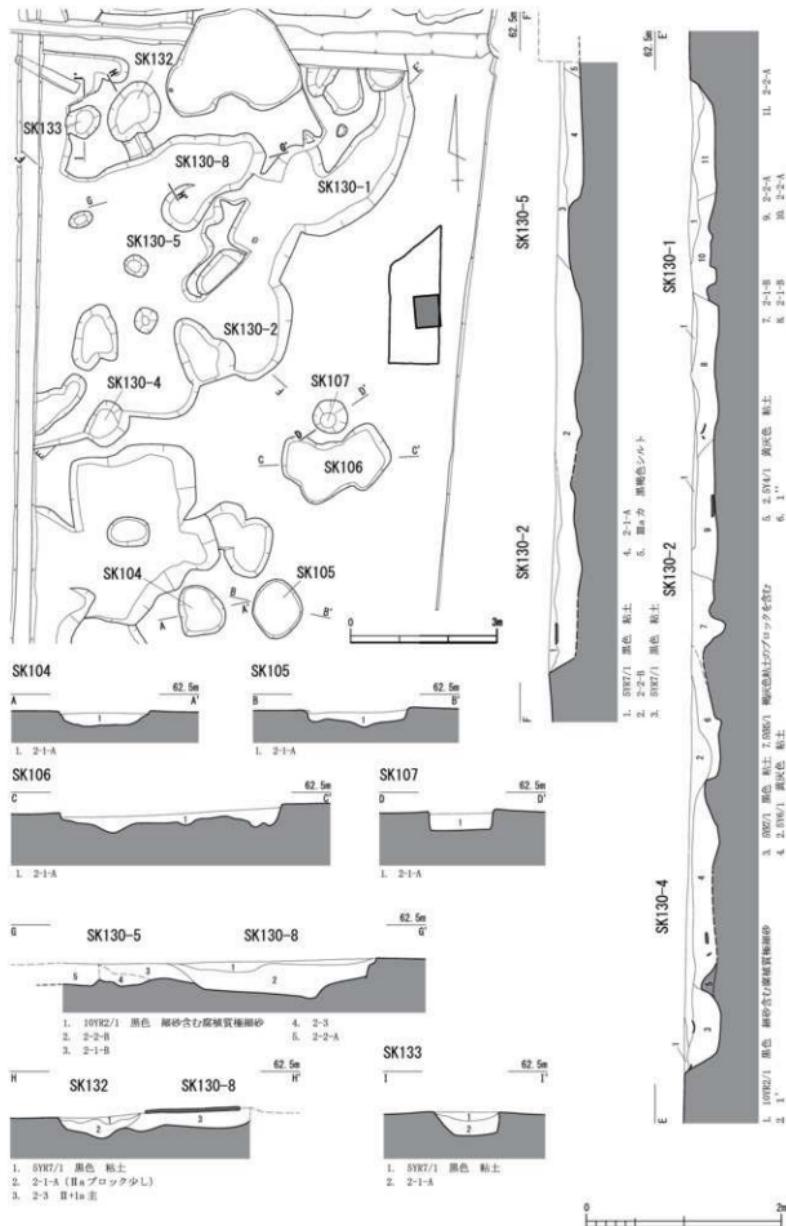


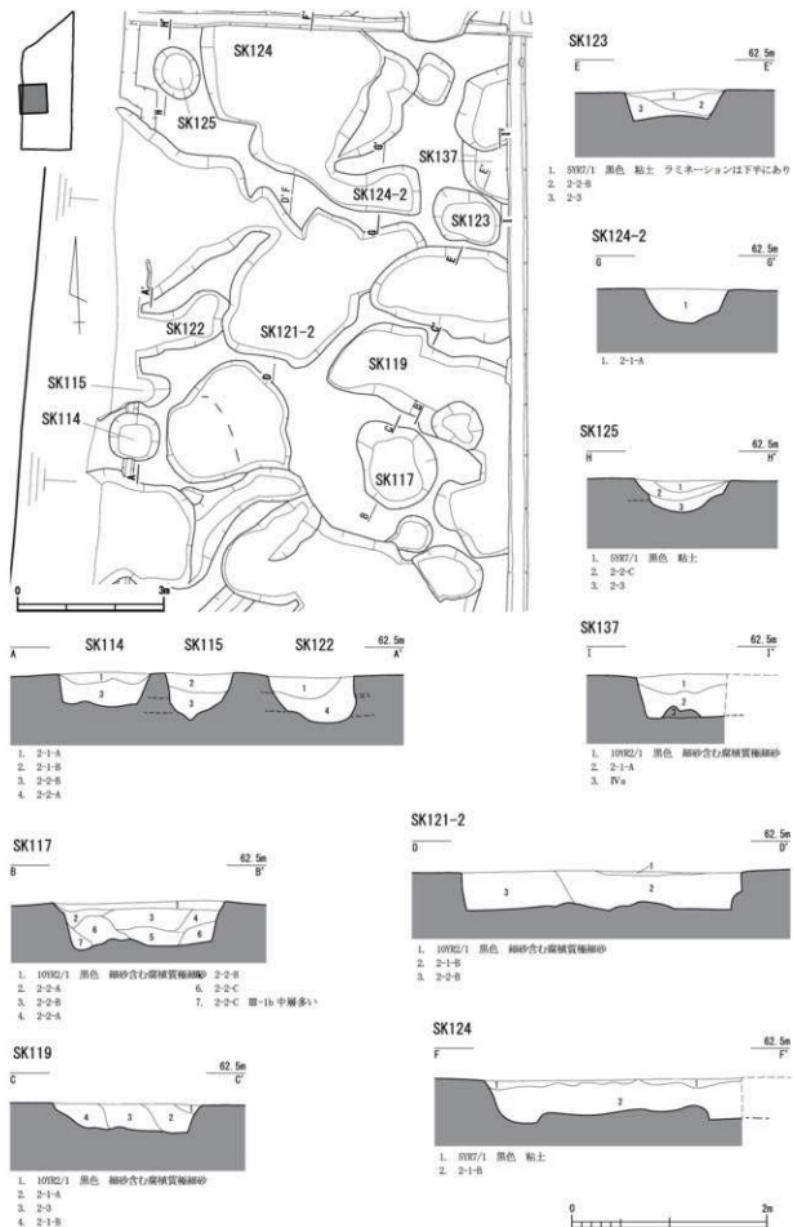


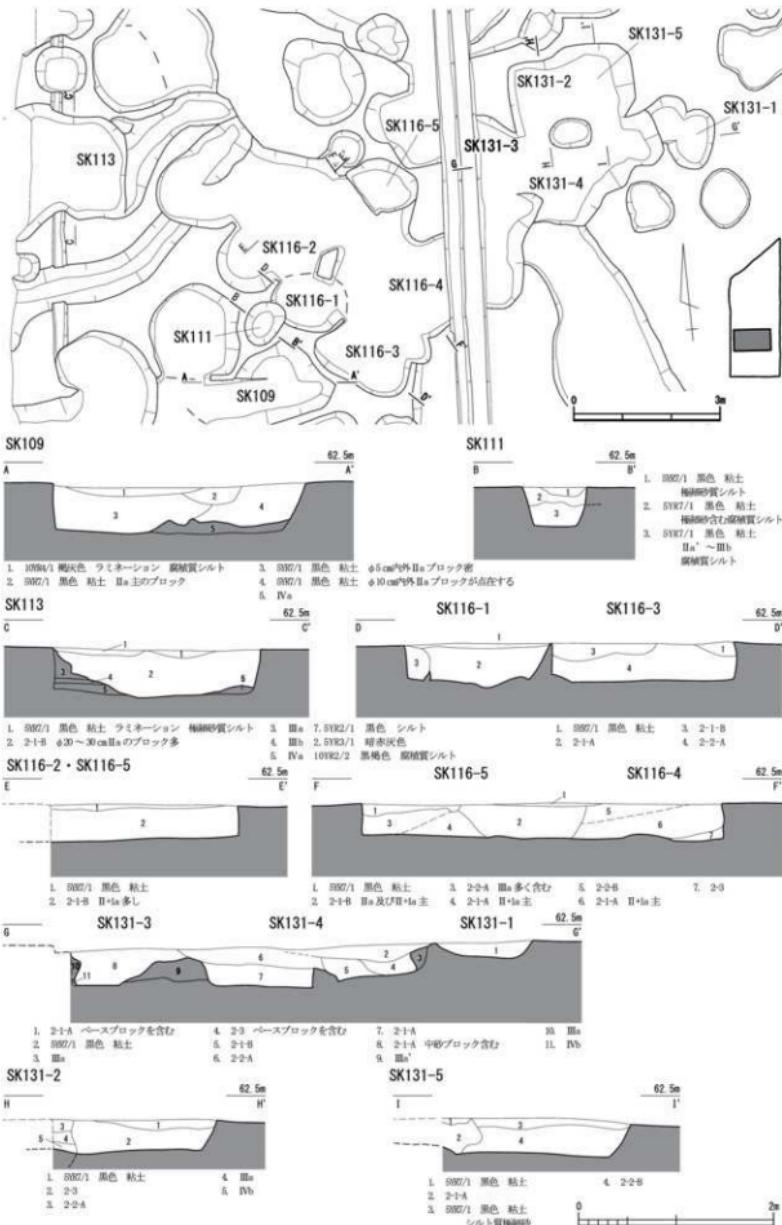


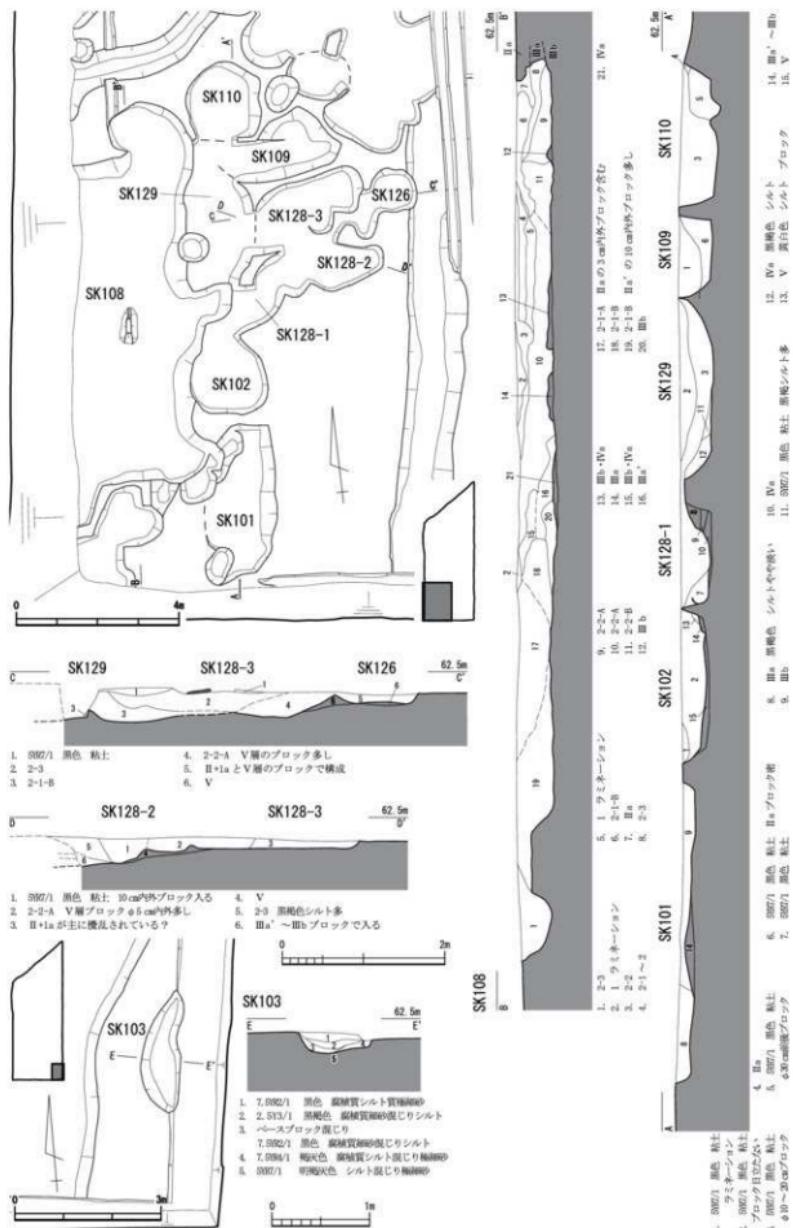


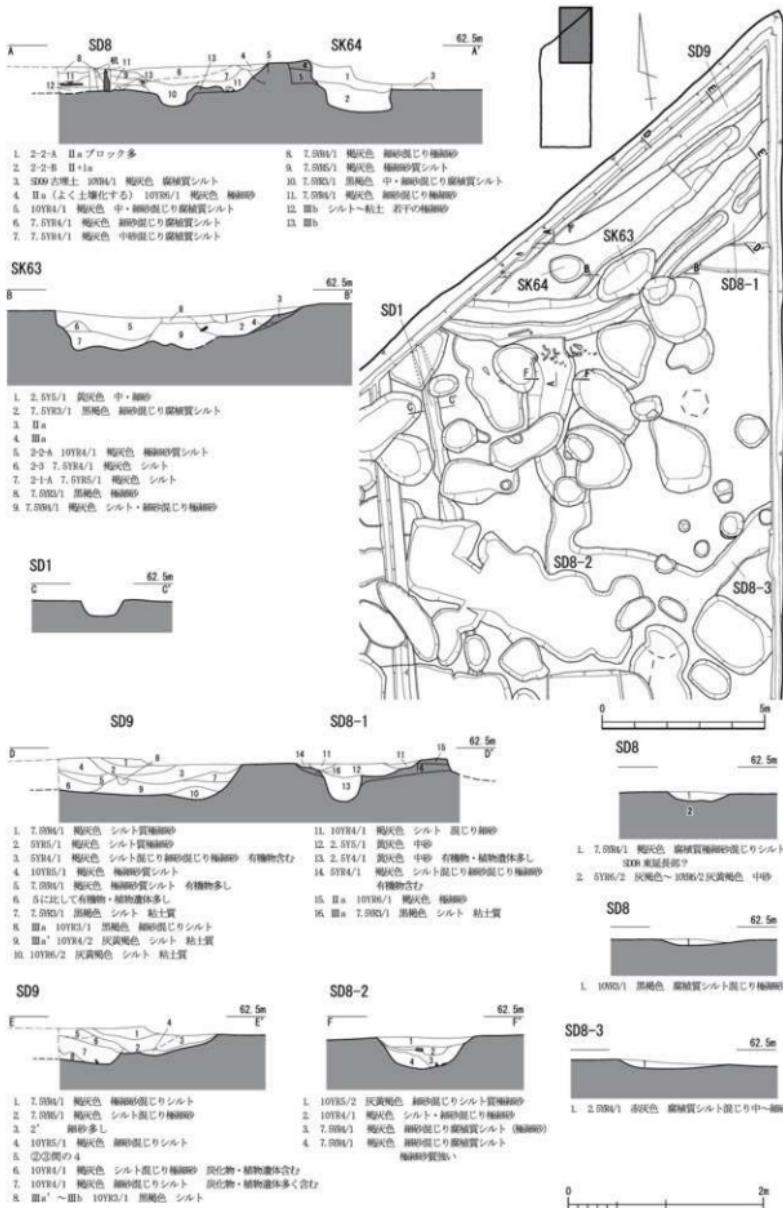


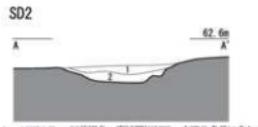






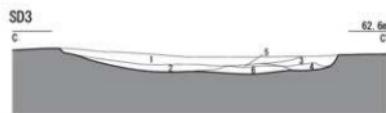




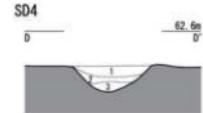


L. 10YR4/2 灰黄色色 蘆竹質細砂 有機多量に含む
2. 7.5YR6/1 灰灰色 蘆竹質シルト

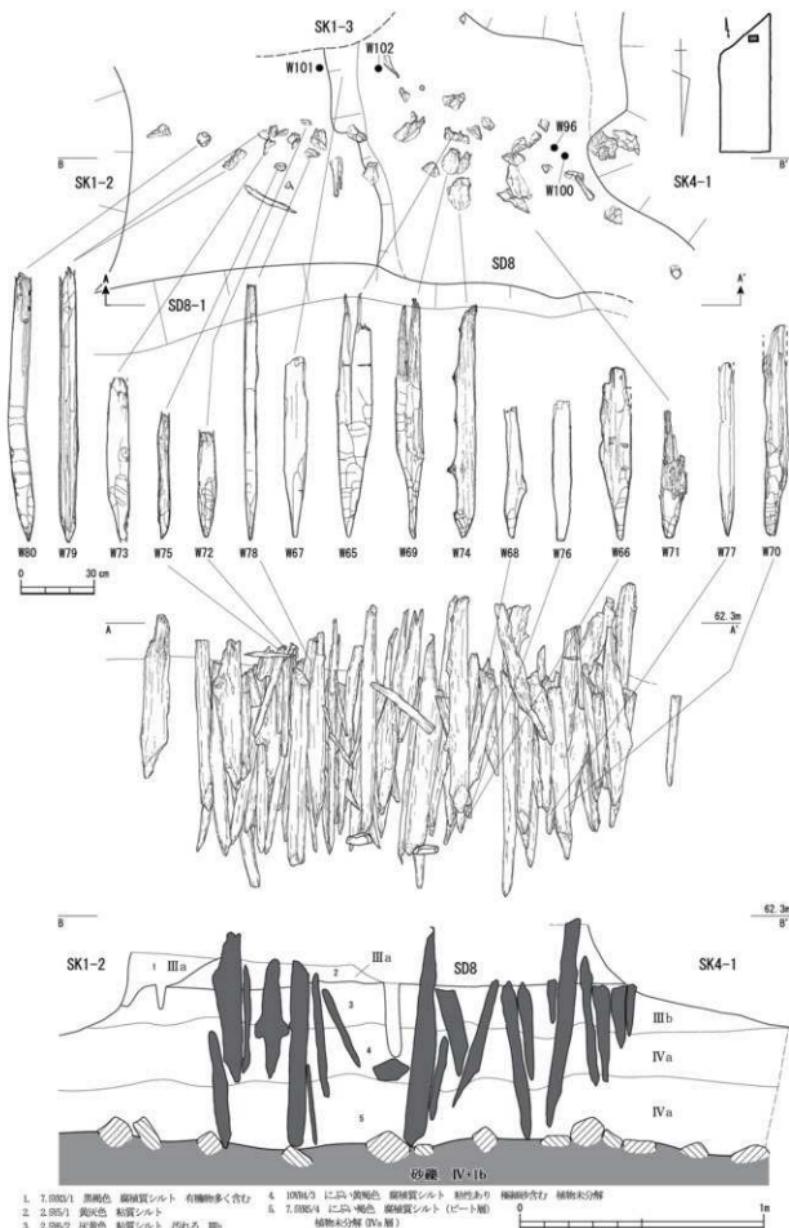
1. 2. 8YR4/2 灰水火色 蘆竹質細砂
2. 7.5YR2/1 赤褐色 蘆竹質シルト混じり細砂
3. 2. 8YR2/1 赤褐色 蘆竹質シルト
4. 2. 8YR4/1 灰灰水色 蘆竹質シルト混じり中・細砂
5. SY6/1 黄灰水色 中・粗砂



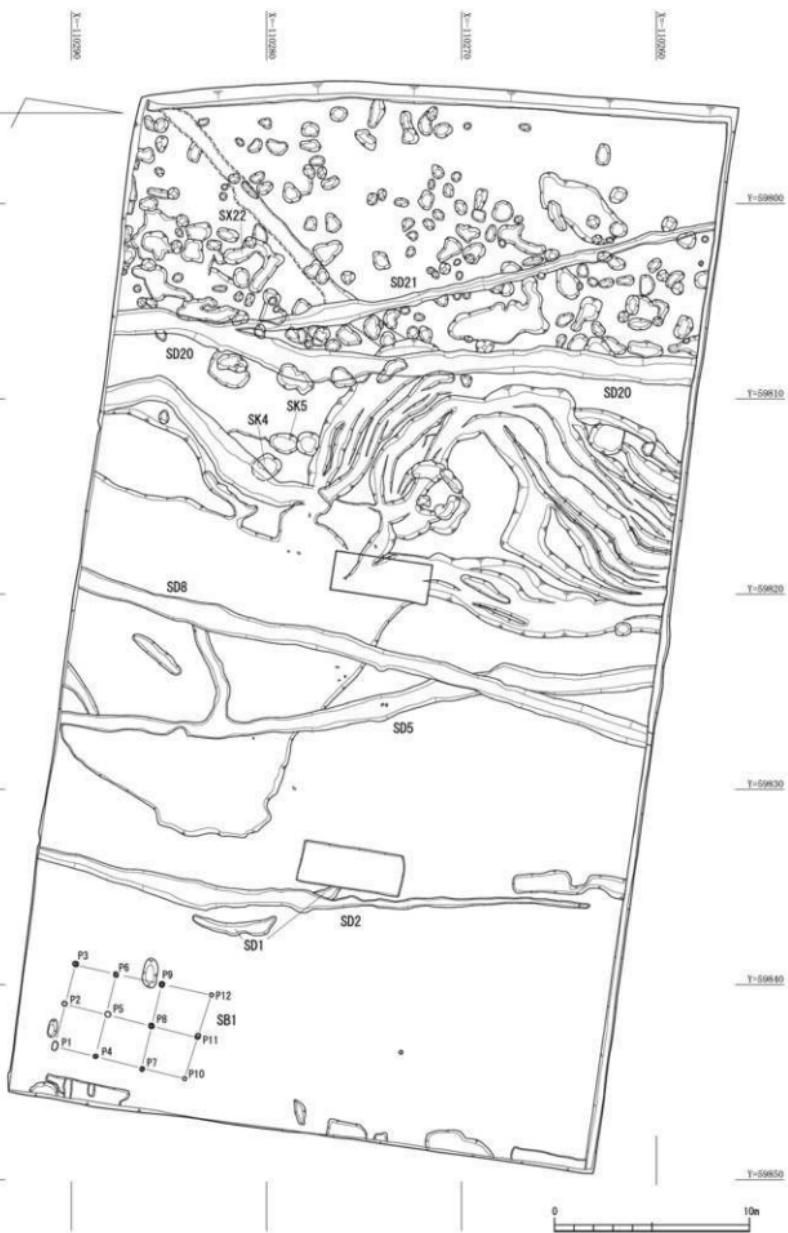
1. 2. 8YR4/2 灰水火色 蘆竹質細砂
2. 7.5YR2/1 赤褐色 蘆竹質シルト混じり細砂
3. 2. 8YR2/1 赤褐色 蘆竹質シルト
4. 2. 8YR4/1 灰灰水色 蘆竹質シルト混じり中・細砂
5. 7.5YR7.7/1 黑色 シルト混じり細砂～粗砂
6. SY6/1 灰色 中砂



1. 2-1-A 楊柳樹少混じりシルト II-a 塗膜ブロックあり
2. 7.5YR4/1 黑褐色 楊柳樹少混じりシルト 粒物あり
3. 2-2-A 7.5YR2/1 黑色 楊柳樹少混じりシルト
やわらかい

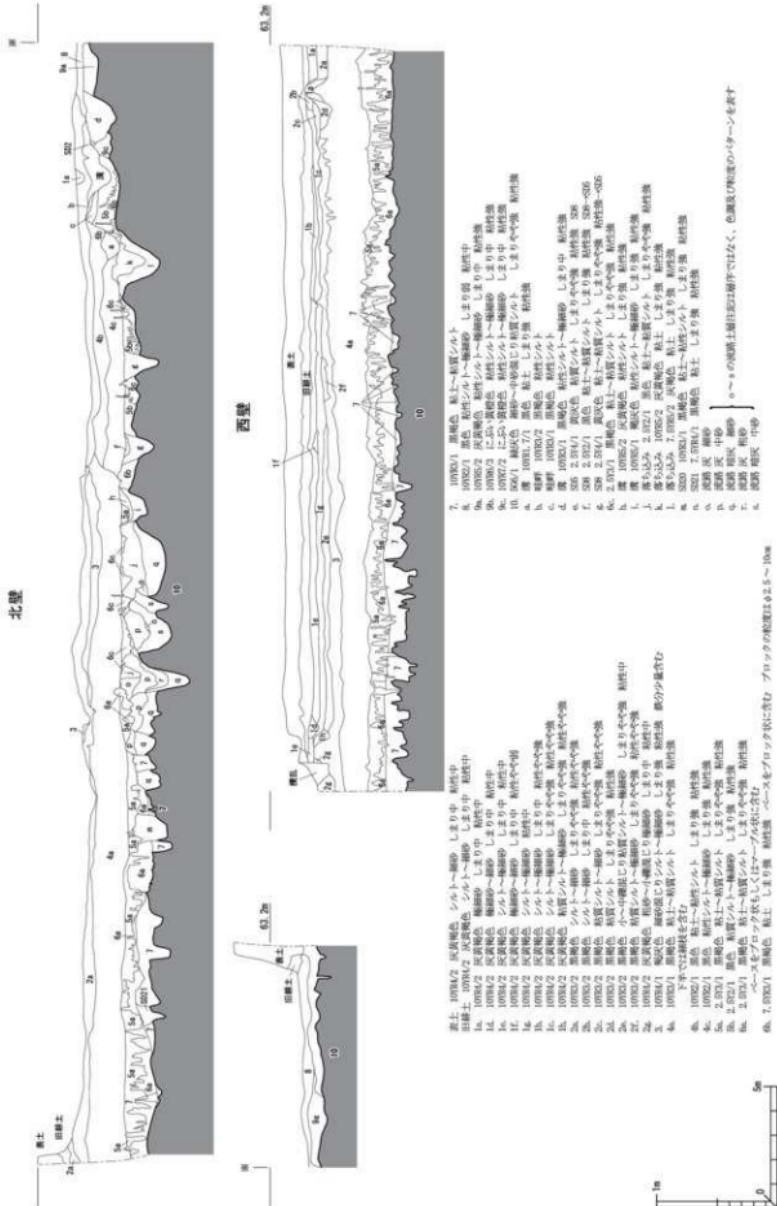


寺内 2 区 杠列



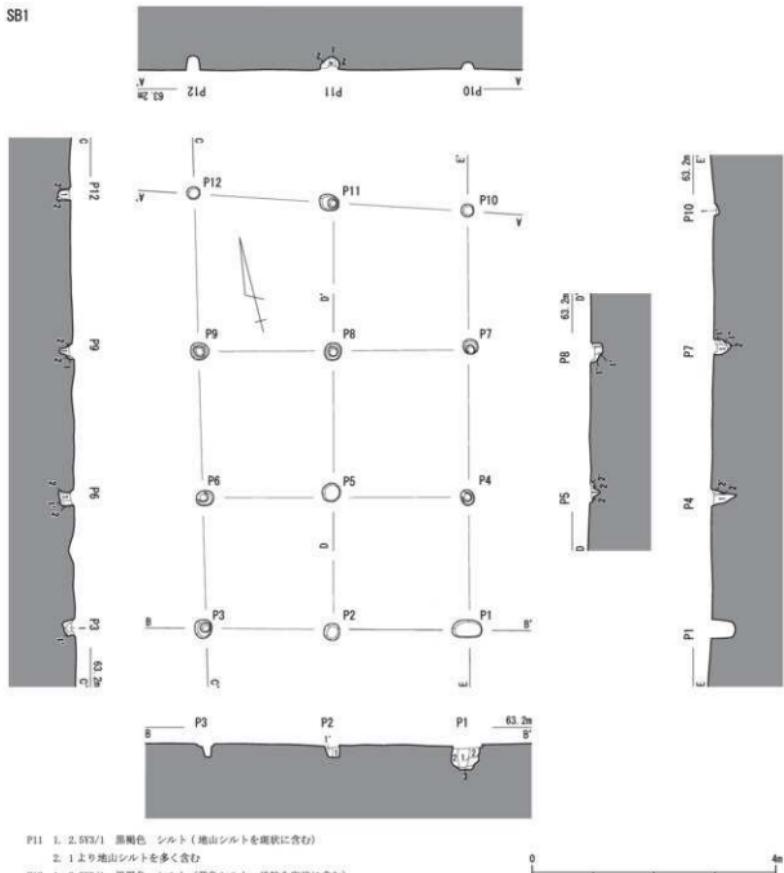
寺内3区 全体図

寺内3区



寺内3区 西壁・北壁土層断面図

SB1



P11 1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（地山シルトを斑状に含む）

2. 1より地山シルトを多く含む

P12 1. L. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

2. 10Y5/1 黄灰色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

P9 1. L. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

2. 10Y5/1 黄灰色

P6 1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

1' 2.5Y3/1 黑褐色 シルト（1より纏りが少ない）

2. 10Y5/1 黄灰色 シルト（7 黄色シルトなどを斑状に含む）

P3 1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

1' 2.5Y3/1 黑褐色 シルト（1より纏りが少ない）

P9 1. L. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

2. 10Y4/1 黄灰色 シルト

P1 1. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト（黄色シルトを斑状に含む）

2. 10Y5/2 黑褐色 シルト（少し黄色シルトを含む）

3. 2.5Y4/1 黑褐色 シルト（地山シルトとクロボクの混った上）

P5 1. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト

2. 5Y5/1 灰色 シルト（地山シルトが若干混じる）

3' 2 よりやや明るい色調

P8 1. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト（地山シルトを斑状に含む）

1' 1 よりやや明るい

P4 1. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト（黄色シルト・砂粒を斑状に含む）

2. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト

2' 2.5Y4/1 黄灰色 シルト 2 よりやや明るい色調

P7 1. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト（地山土を斑状に含む）

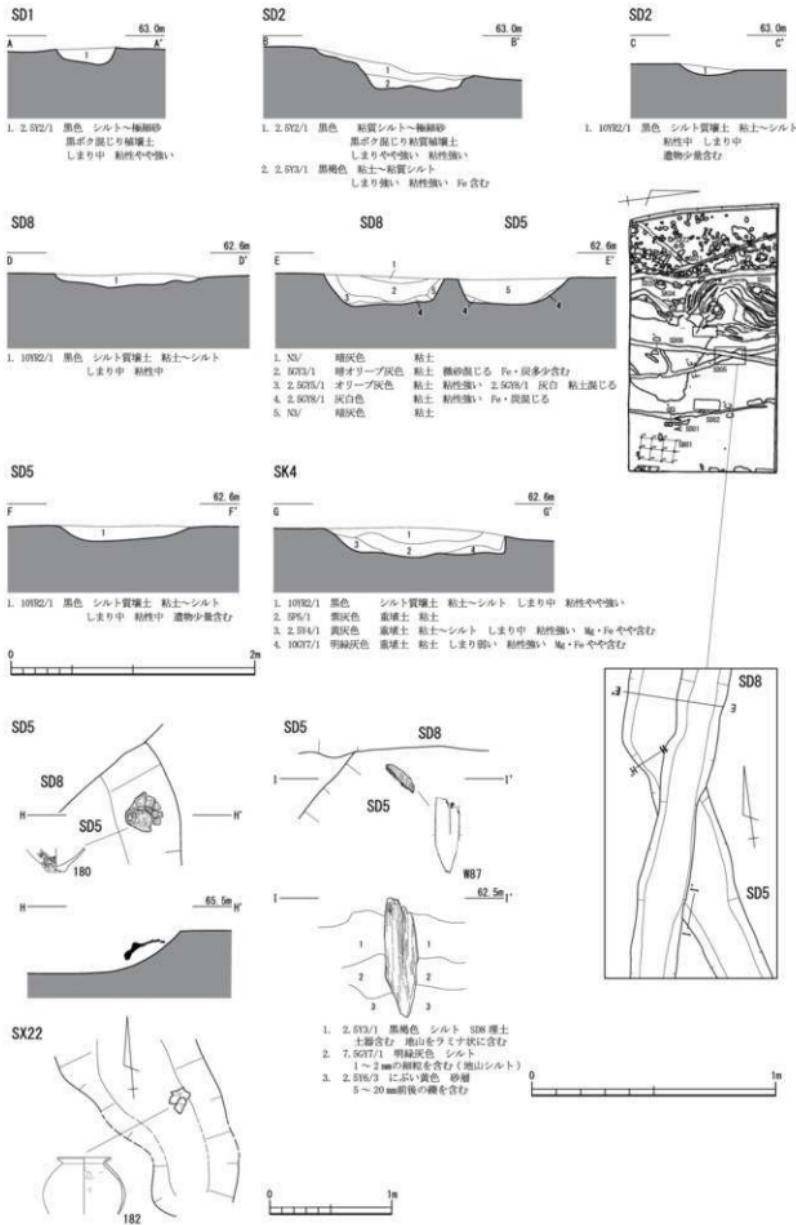
1' 1 よりやや暗め（内に向かって傾斜して堆積）

1" 1 より地山土が多い（内に向かって傾斜して堆積）

2. 5Y8/1 灰色 シルト（地山シルトが若干混じる）

P10 1. 2.5Y3/1 黑褐色 シルト

寺内3区

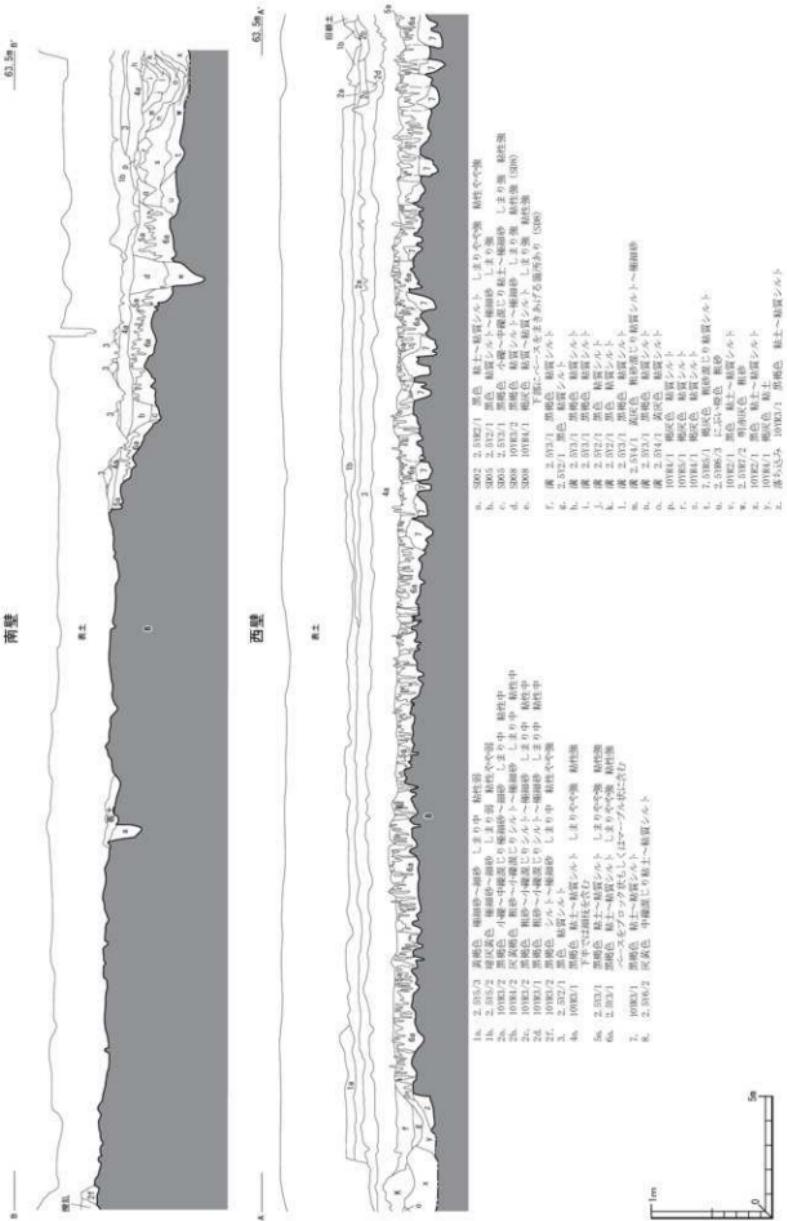




寺内4区

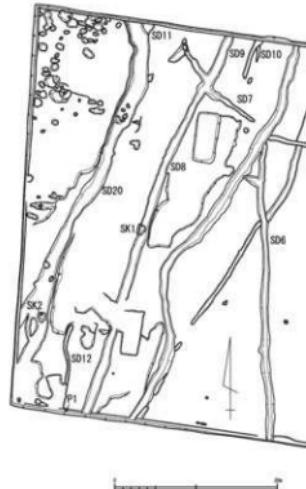
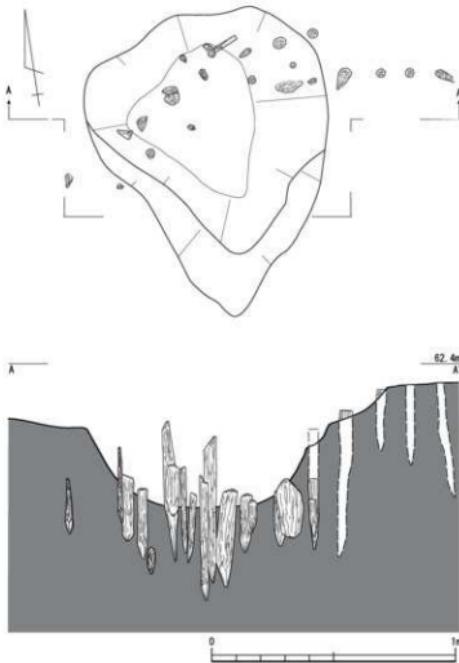
寺内4区 全体図

寺内4区



寺内4区 西壁・南壁土層断面図

SK2



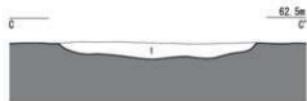
SD20



1. 10YE2/1 黒色 シルト質極細砂、粗砂・小礫・炭・木質を含む
2. 10YE2/1 黒色 シルト質極細砂、粗砂・小礫を多く含む

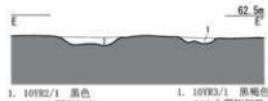
1. 10YE3/1 黒褐色 シルト質極細砂、粗砂・木質を含む

SD20



1. 10YE3/1 黒褐色 シルト質極細砂、粗砂を含む
小礫・炭を少量含む

SD9 SD10



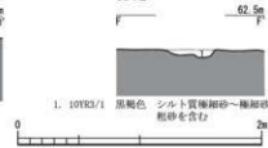
1. 10YE2/1 黒色 シルト質極細砂、粗砂を含む
1. 10YE3/1 黒褐色 シルト質極細砂、粗砂を含む

SD20

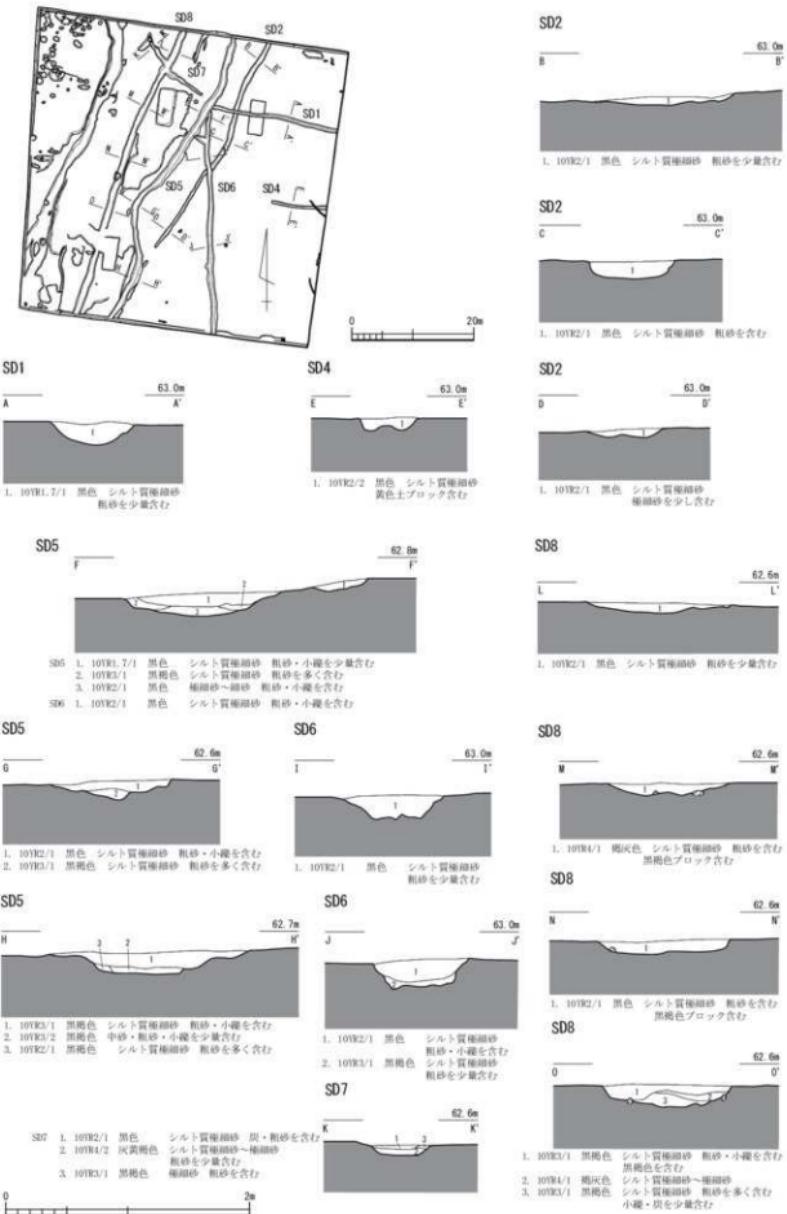


1. 10YE2/1 黒色 シルト質極細砂、粗砂・小礫を含む
2. 10YE2/1 黒色 シルト質極細砂、粗砂・小礫を含む
3. 10YE3/1 黑褐色 シルト質極細砂へ極細砂、粗砂を含む
4. 10YE3/1 黑褐色 シルト質極細砂へ極細砂、粗砂を少數含む

SD12

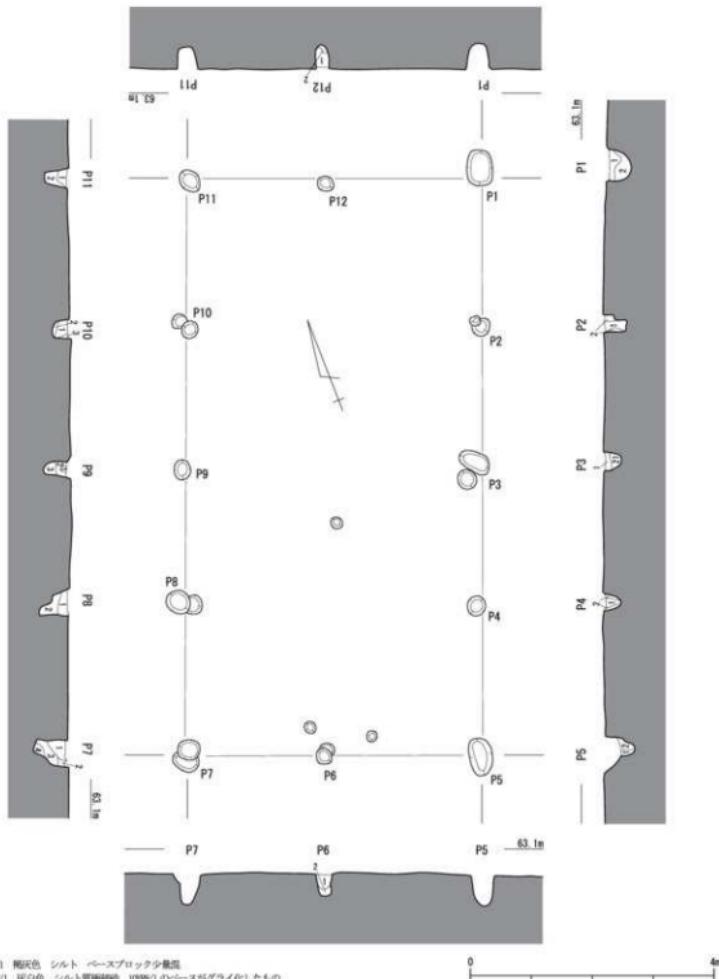


1. 10YE3/1 黑褐色 シルト質極細砂へ極細砂、粗砂を含む





寺内5区 全体図



内 L 1098/1 極灰色 シルト ベースブロック少散乱
2. 1.098/1 灰白色 シルト質細颗粒 1098/1のベースがグライ化したもの
1098/1 極灰色 シルト混

12. L. 1098/1 梅灰色 シルト 30%W/H 白灰色 シルト質細粒(ベース) ブラック少含む
13. L. 1098/1 白灰色 シルト 30%W/H 白灰色 シルト混じる
14. L. 1098/1 梅灰色 シルト 同上
15. L. 1098/1 梅灰色 30%W/H ブラック少含む
16. L. 1098/1 白灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
17. L. 1098/1 梅灰色 シルト 同上
18. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
19. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
20. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
21. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
22. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
23. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
24. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
25. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
26. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
27. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
28. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
29. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
30. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
31. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
32. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
33. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
34. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
35. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
36. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
37. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
38. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
39. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる
40. L. 1098/1 梅灰色 シルト 質細粒(ベース) 30%W/H 梅灰色 シルト混じる

10月8日 灰白色 シルト 粘性粒・炭酸少量含む
10月8日 灰白色 シルトブロック少量混

3. 10W/14 磁灰色 シルト
10W/14 磁灰色 シルトブロック層 柱状節理食したものが?

3. 層と同 厚さ細少ない

4. 10W/8 磁灰色 シルト 10W/14 磁灰色 シルト少底層

5. 10W/14 磁灰色 シルト 貫入層間隙 中砂 少量風化

2. 10W/4 磁灰色 シルト 壓縮風化

10W/14 磁灰色 シルト ベース層 ブロック層 中砂1層より多く風化

3. 10W/8 磁灰色 シルト 壓縮風化 層間隙 シルト貫入層間隙

P10. 1. 10W/14 磁灰色 シルト 壓縮風化 10W/14 (ベース) ブロック層むけ

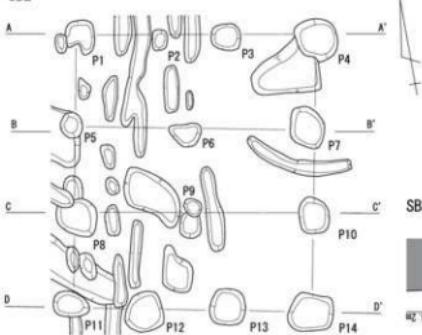
3. 層と同 ブロック層

3. 10W/8 ブロック層多に含む

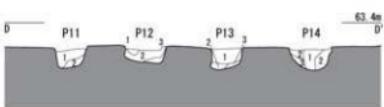
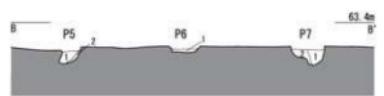
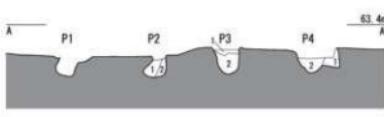
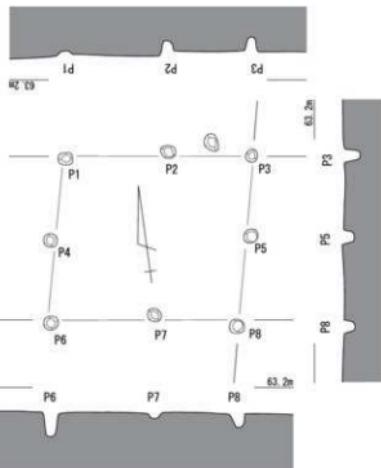
P11. 1. 10W/14 磁灰色 シルト ベースブロック少量含む

2. 10W/8 磁灰色 シルト 壓縮風化 30W/14 磁灰色 シルト浸透性

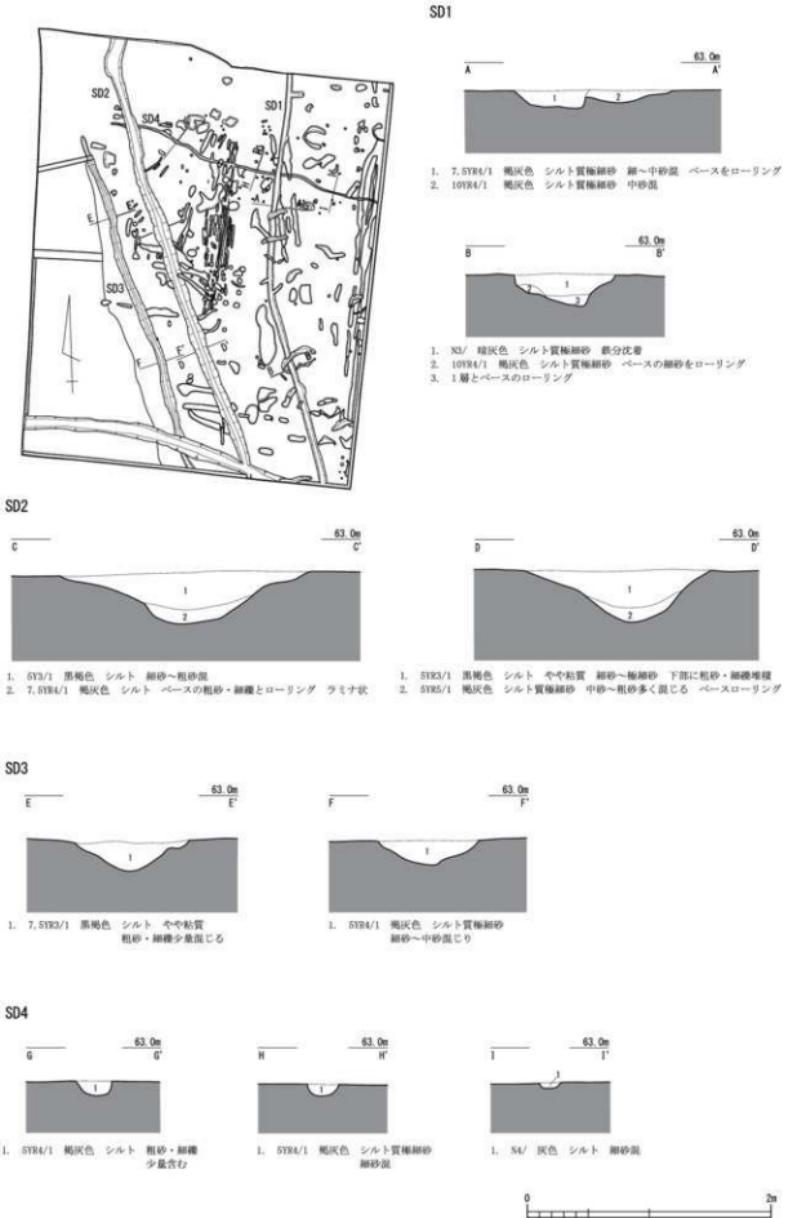
SB2



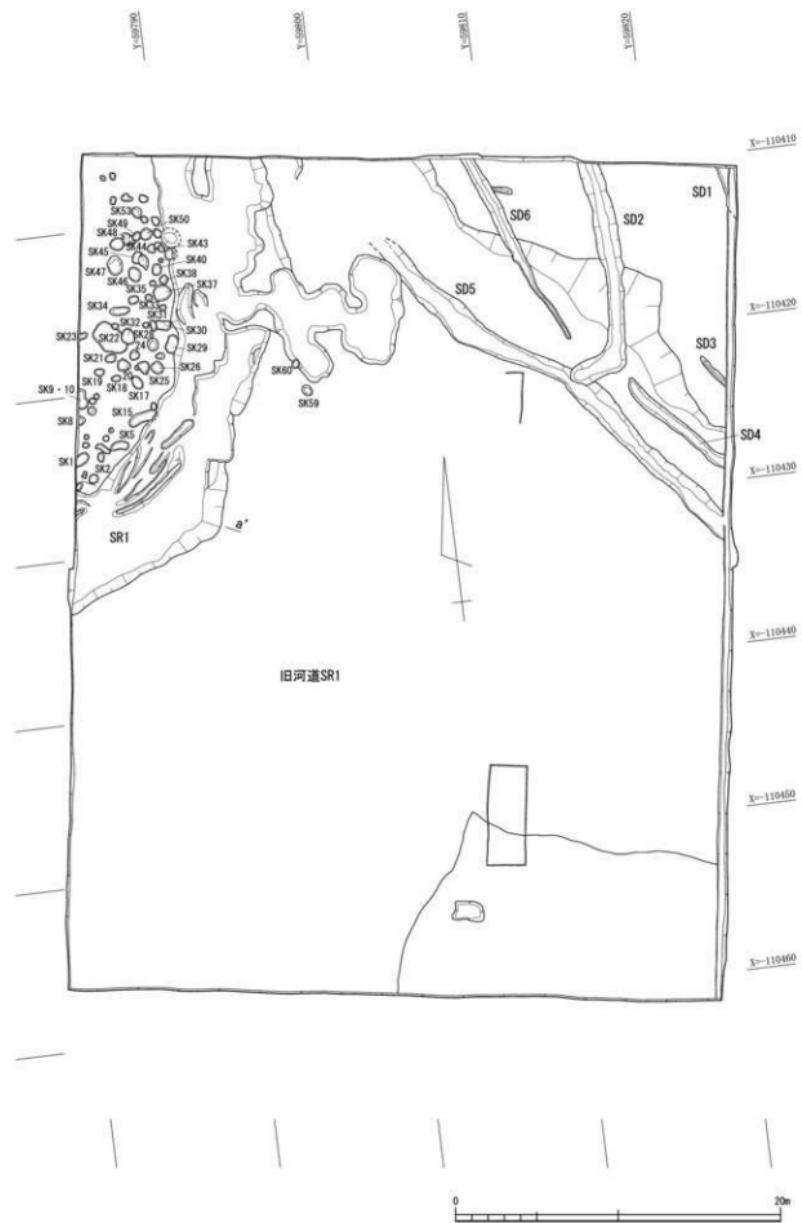
SB3

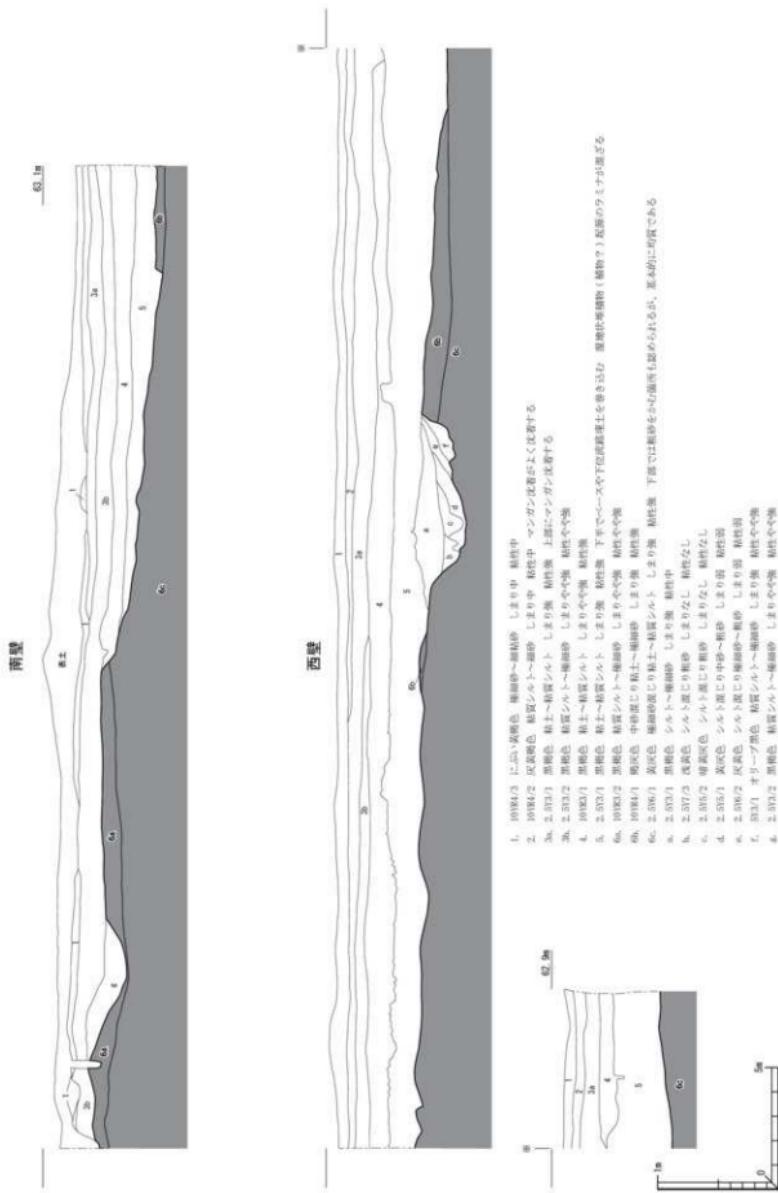


- P2 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック少量含む
 2. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック含む
 P3 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック多く含む
 2. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック極少含む
 P4 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト ブロックはほとんど入らない
 2. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック多く含む
 P5 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/2 灰白色 シルト混
 2. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト
 P6 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック少量含む
 2. 7.SYR2/1 黑褐色 シルト 2.SYR1/1 灰白色 細～中砂ブロック多く含む
 P7 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト やや軽質
 2. 1層と同 107RS/2 灰黄色シルト（ベース土）がブロック状に混じる
 P9 L. 7.SYR2/1 黑褐色 シルト質細砂
 P10 L. 7.SYR2/1 黑褐色 シルト 107RS/2 灰白色 シルトブロック混
 2. 7.SYR2/1 黑褐色 シルト 107RS/1 黑褐色 シルト少量混
 P11 L. 7.SYR2/1 黒褐色 シルト 大きめの 107RS/2 灰白色 シルトブロック多量に混じる
 2.
 P12 L. 7.SYR2/5 灰黄褐色 シルト質細～極細砂 後世のスキ溝埋土
 2. 7.SYR2/1 黑褐色 シルト質細砂
 3. 2層と同 107RS/2 灰白色 シルト質細砂ブロック混
 P13 L. 7.SYR2/1 黑褐色 107RS/2 灰黄褐色 シルト質細砂上層にブロック状に混じる
 2. 1層と同 107RS/2 灰黄褐色 シルト質細砂にブロック多量に混じる
 3. 1層と同 107RS/2 ブロック極少含む
 P14 L. 7.SYR2/1 黑褐色 107RS/2 灰白色 シルト質細砂ブロック少量混じる
 2. 1層と同 107RS/2 ブロック多量に含む
 3. 1層と同

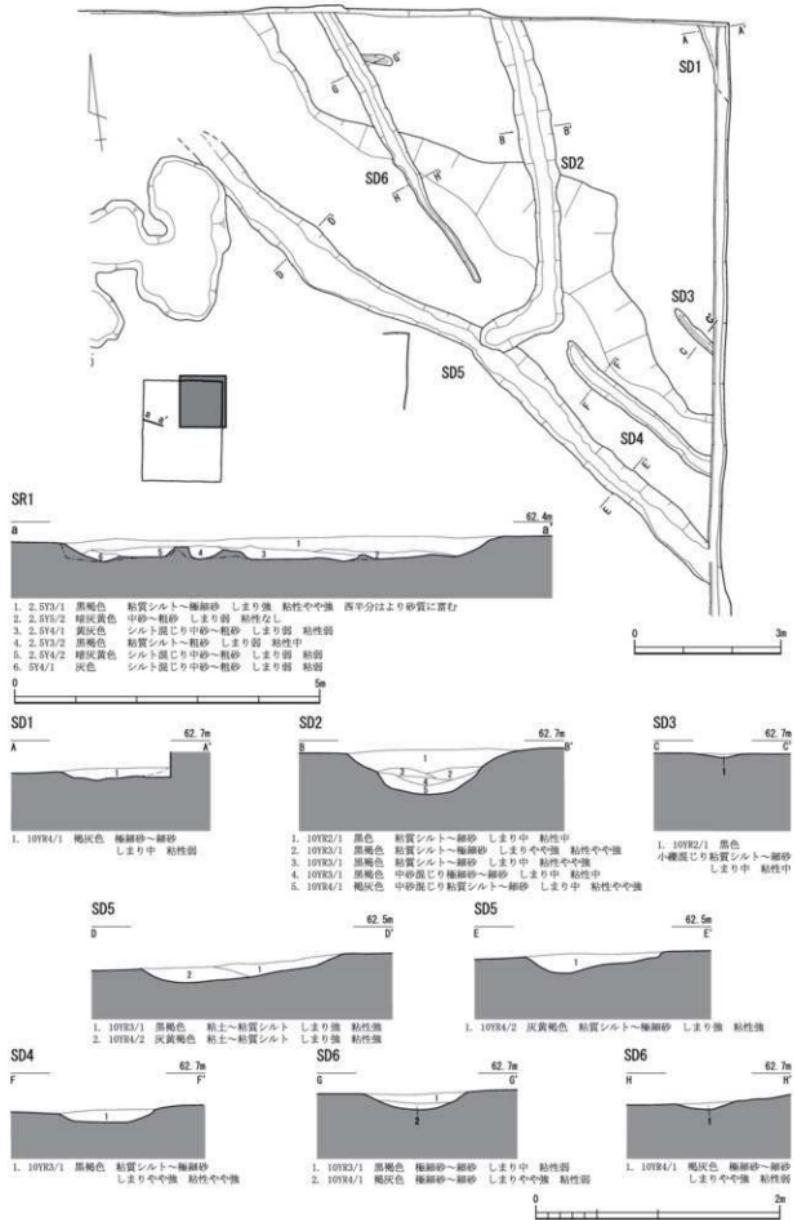


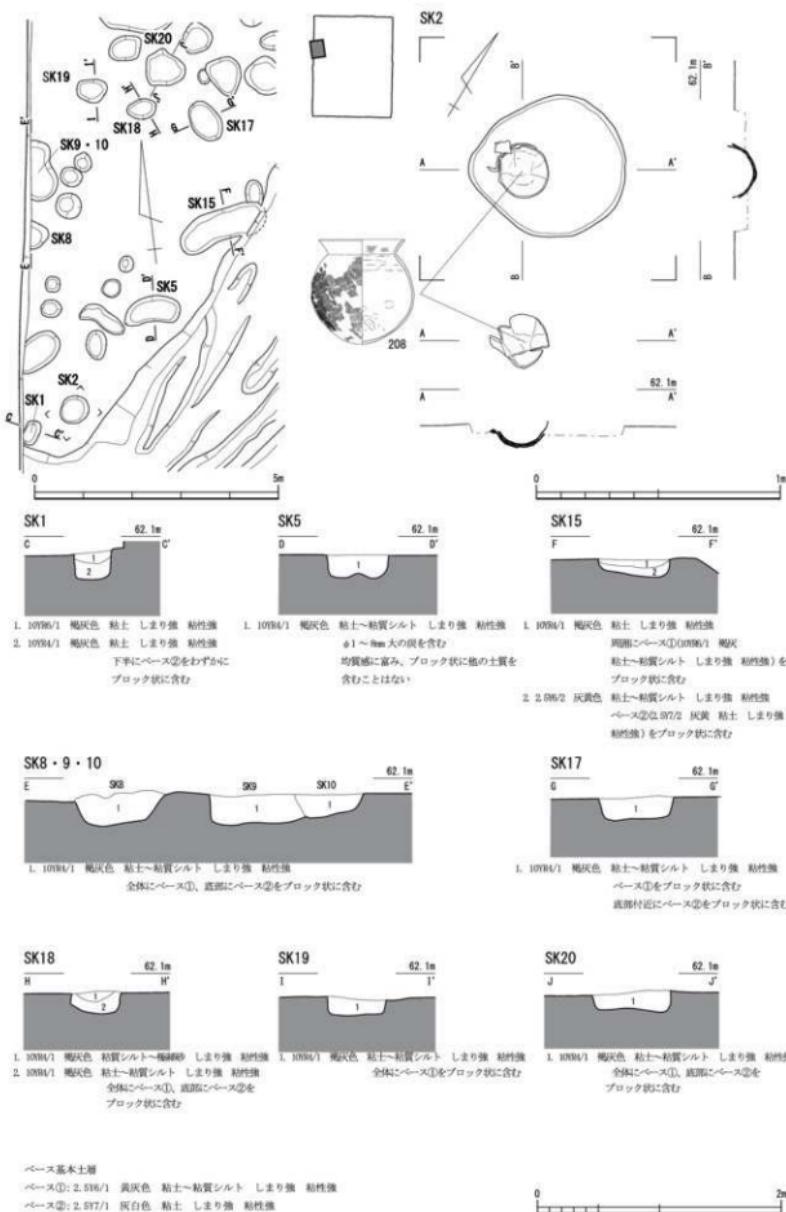
寺内 5 区 SD1 ~ SD4

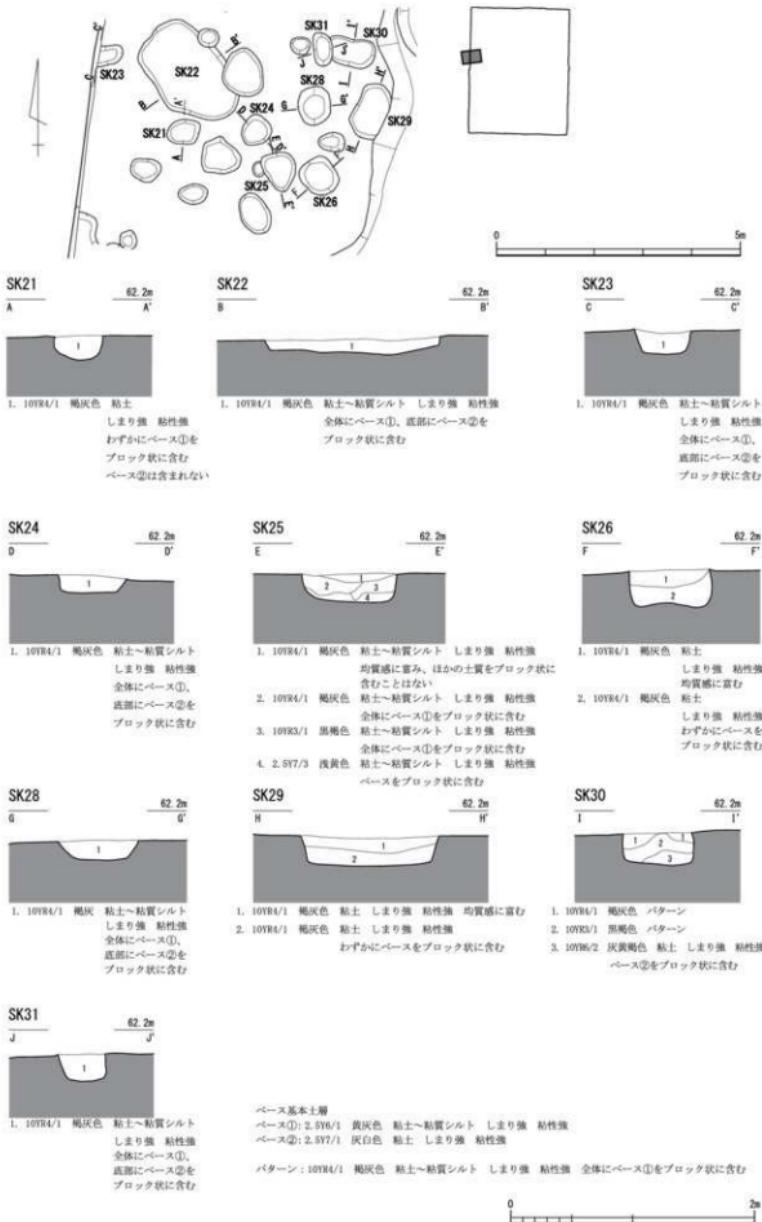


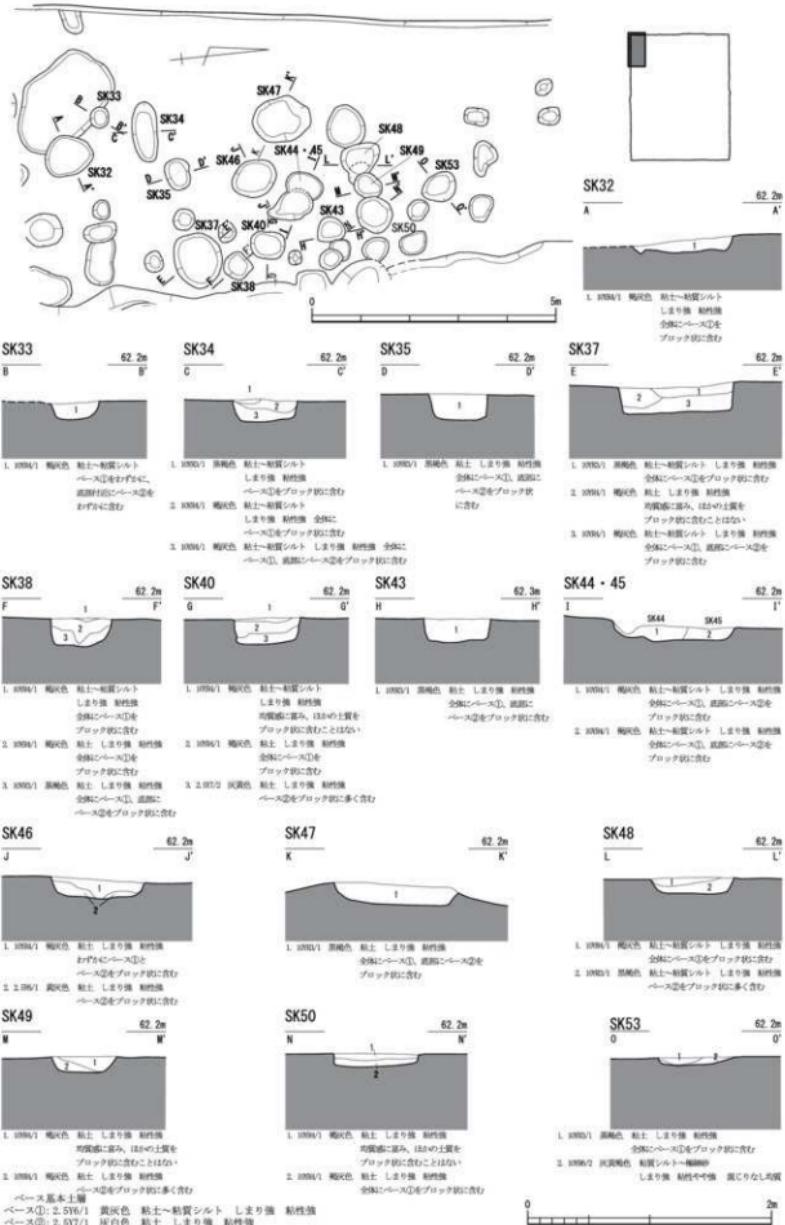


寺内 6 区 南壁・西壁土層断面図

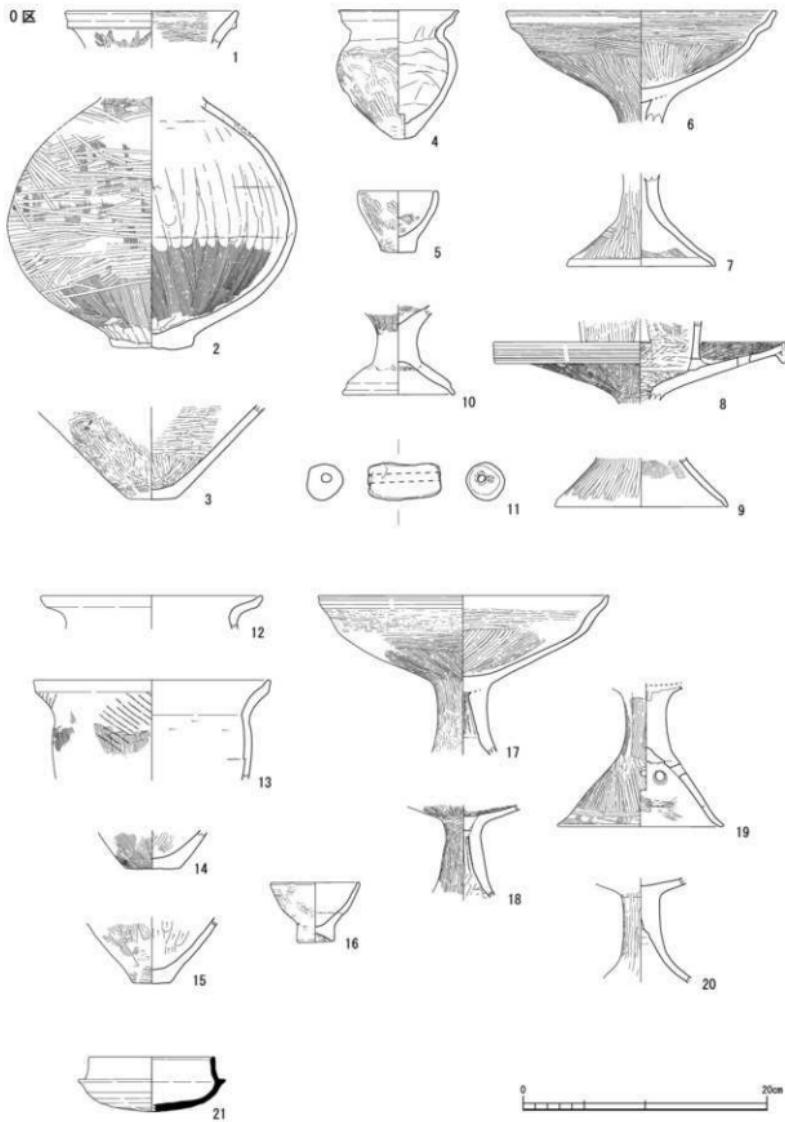


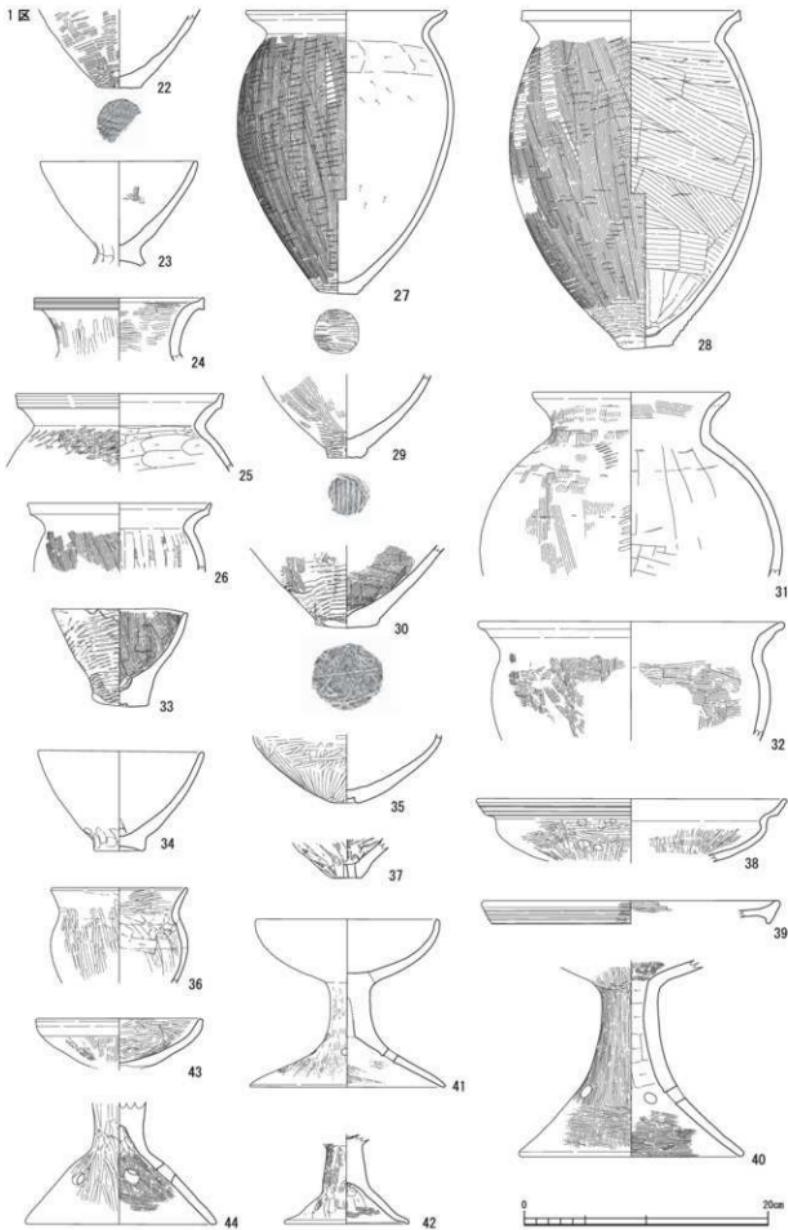




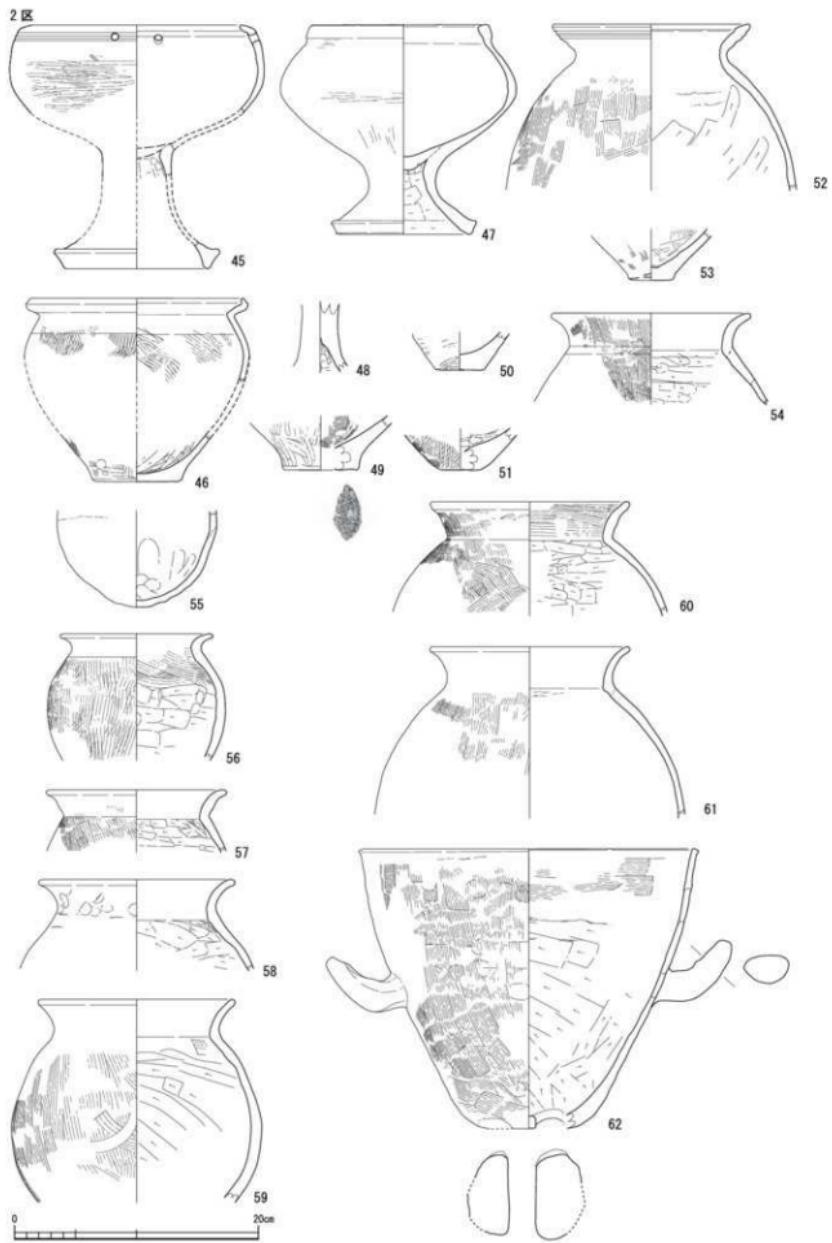


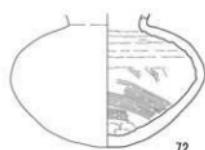
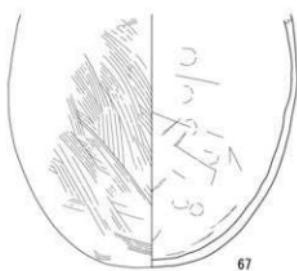
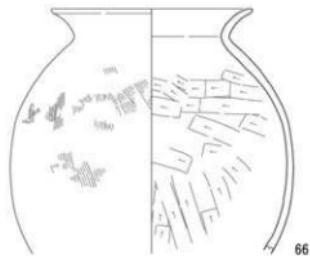
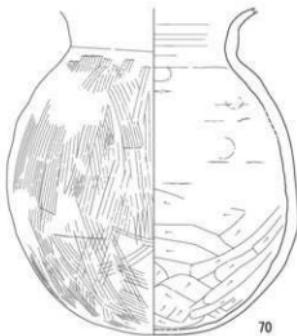
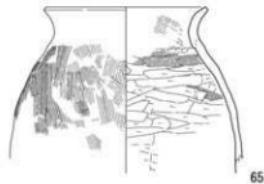
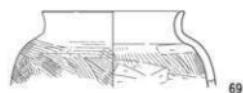
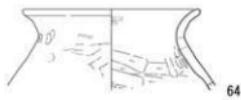
寺内〇区

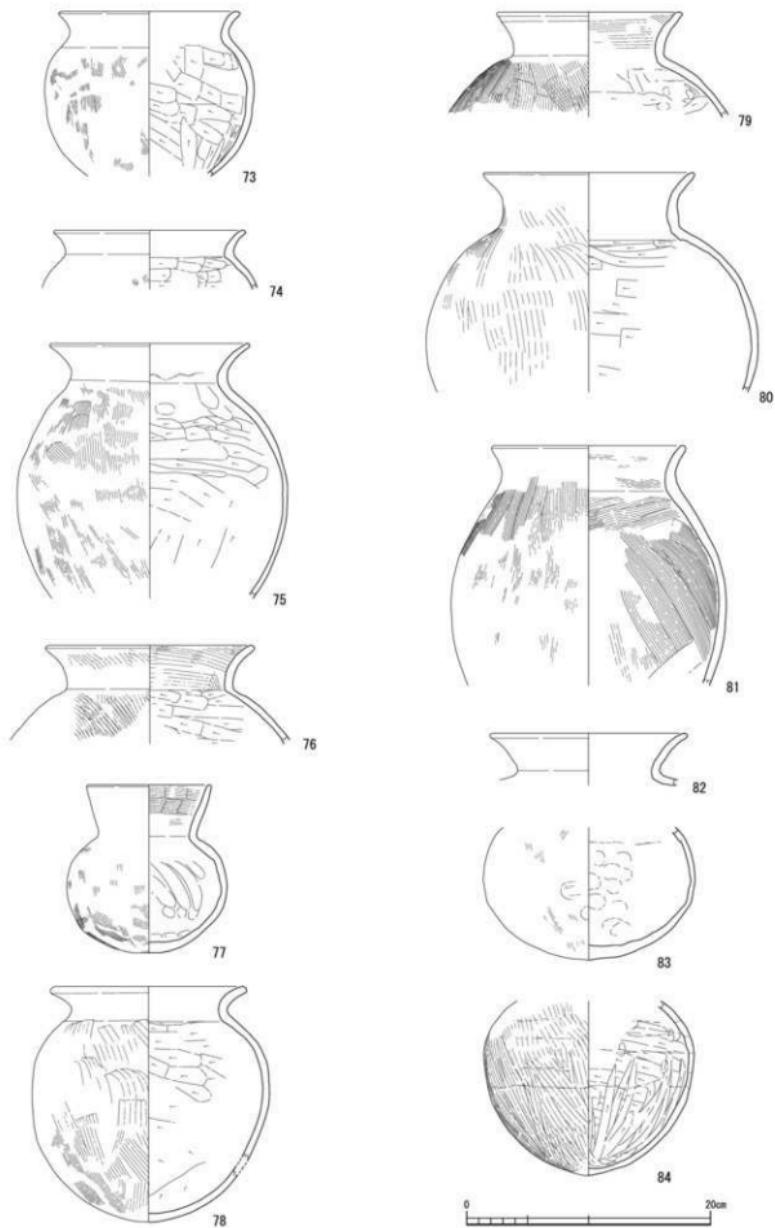


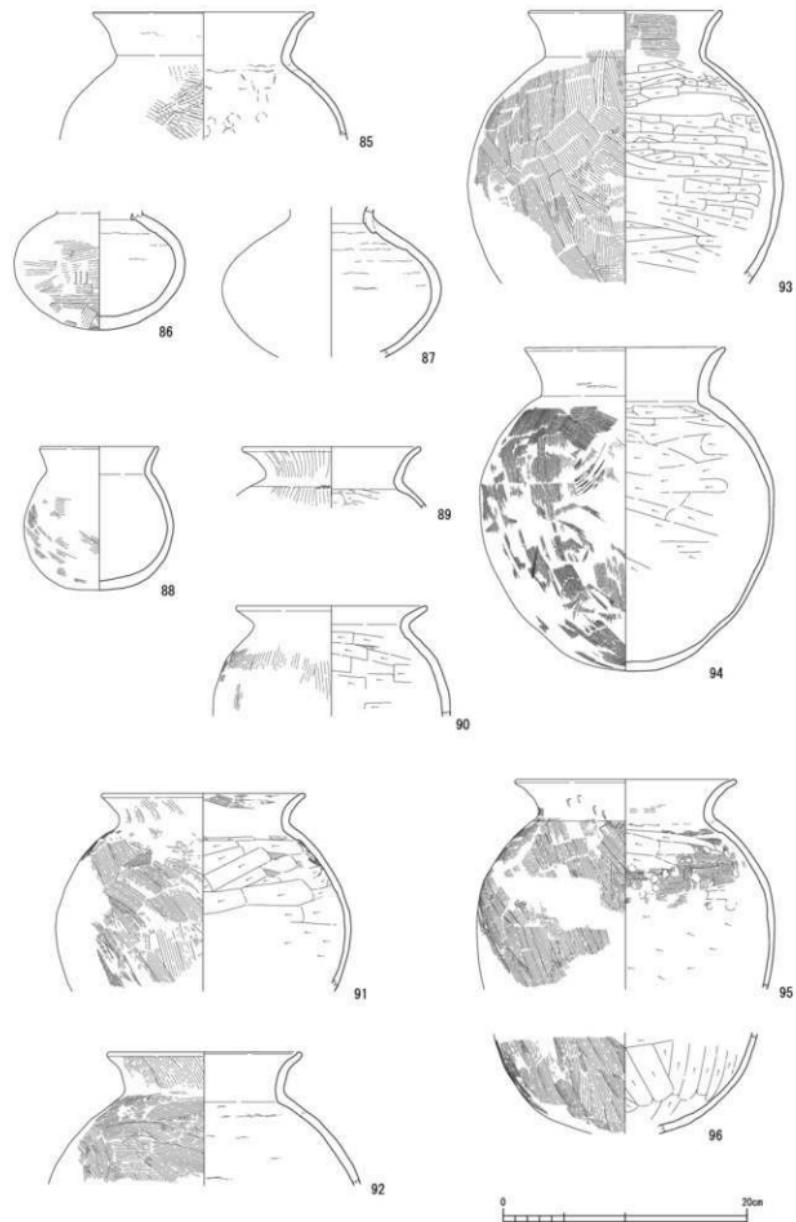


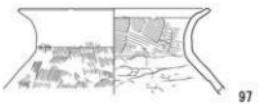
寺内2区



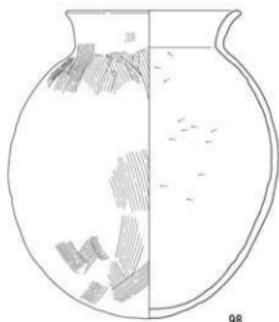




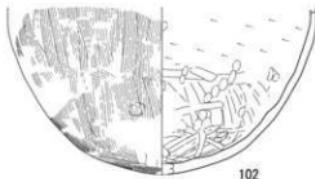




97



98



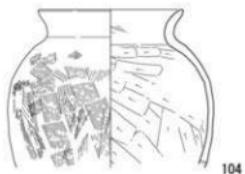
102



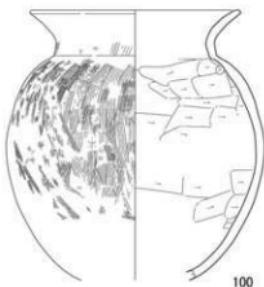
103



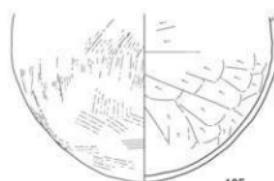
99



104



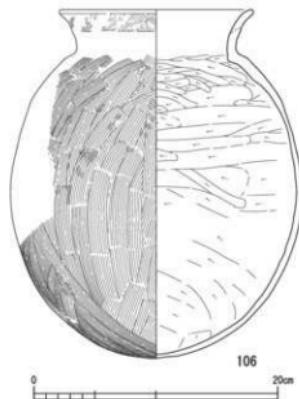
100



105

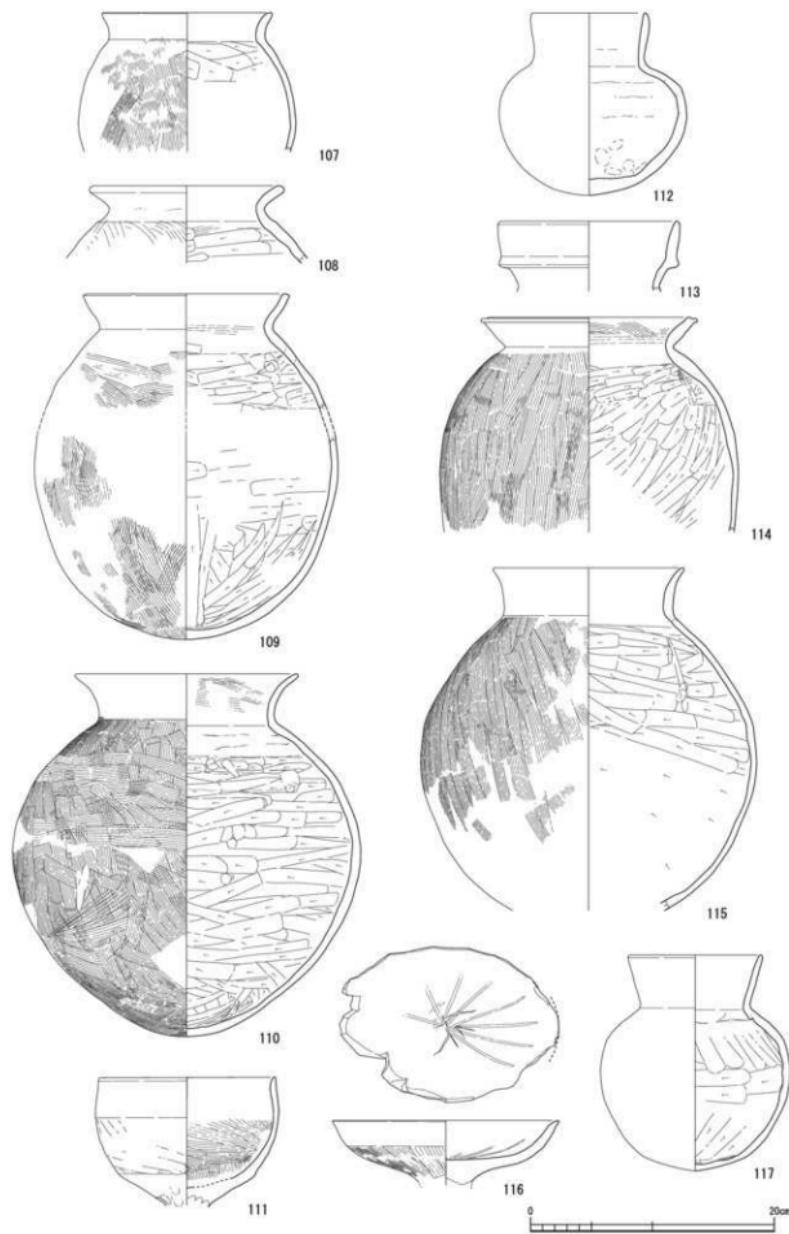


101

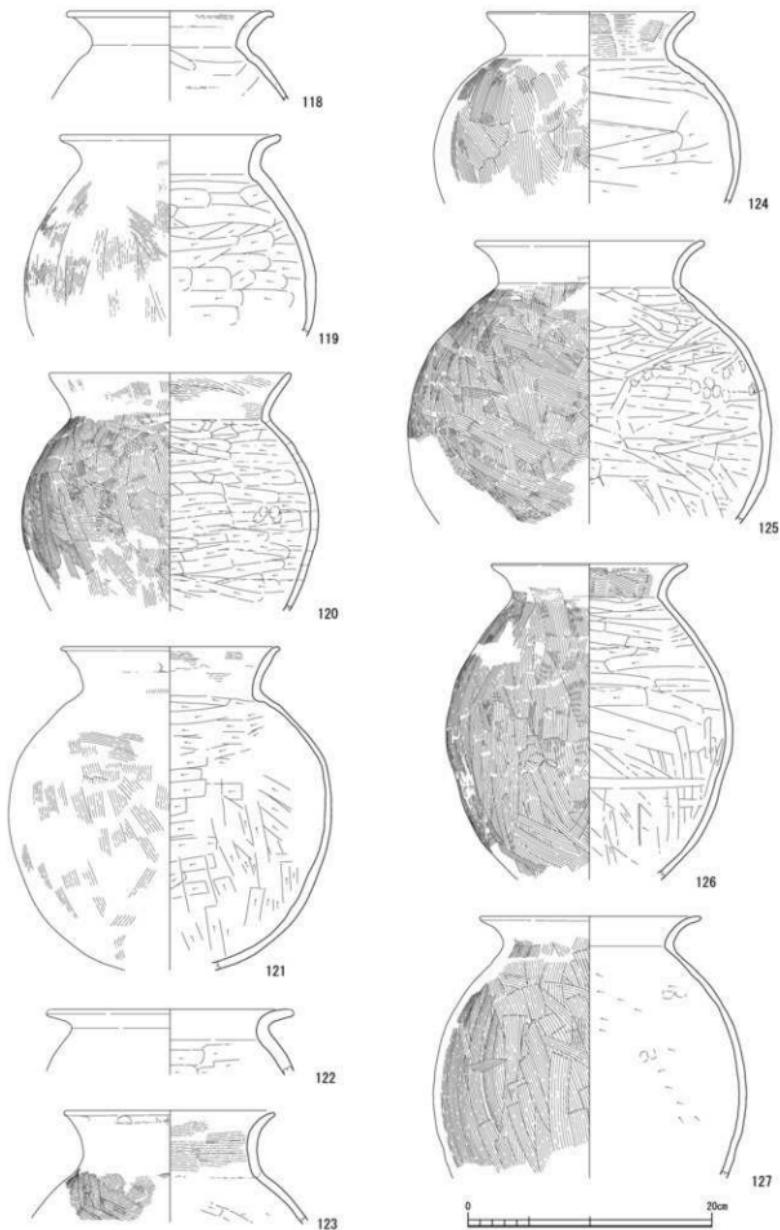


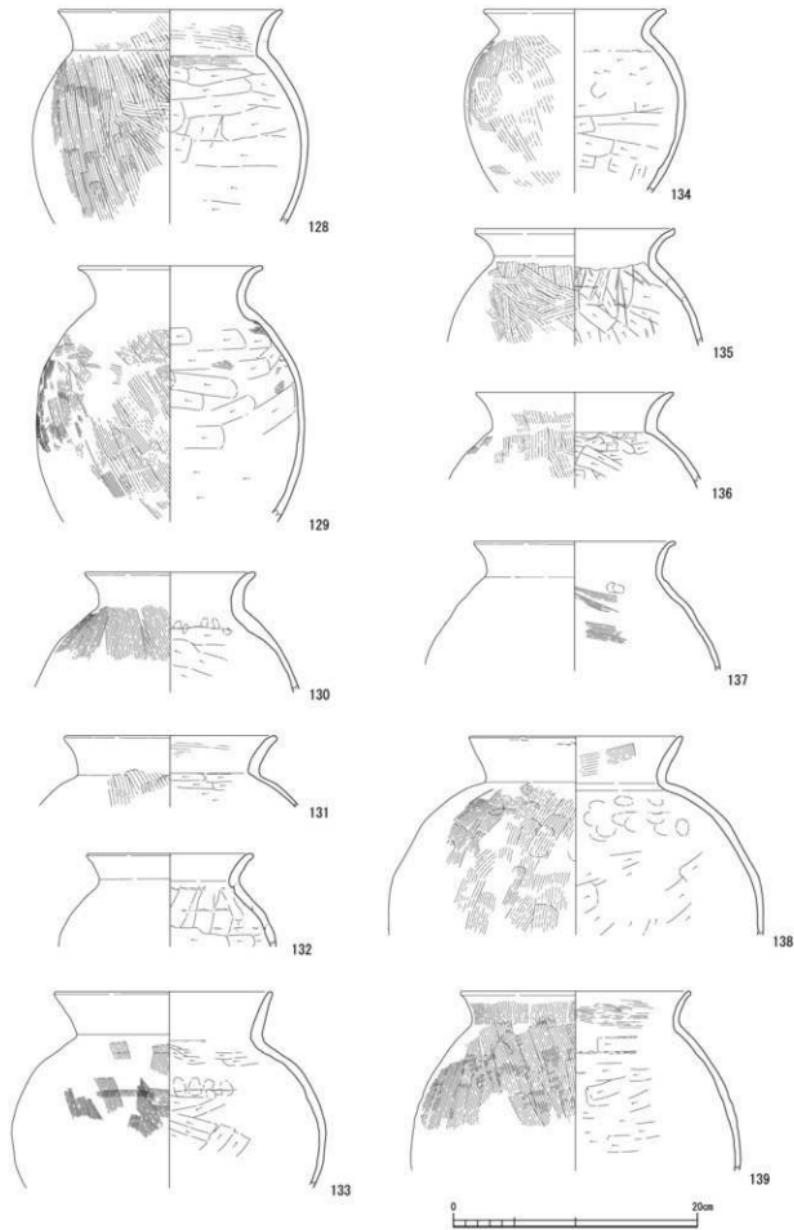
106

20cm

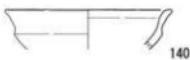


寺内2区





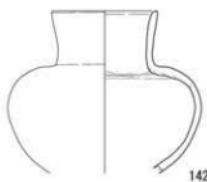
寺内2区



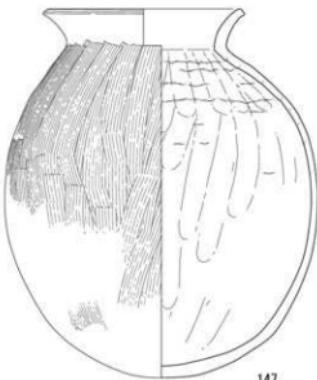
140



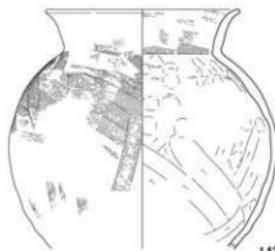
141



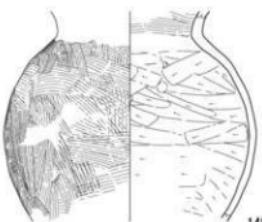
142



147



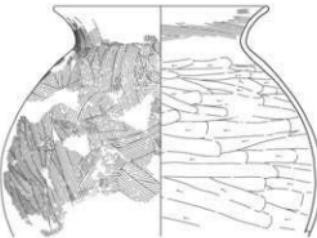
143



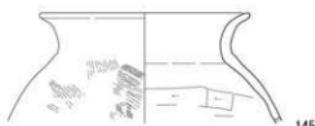
148



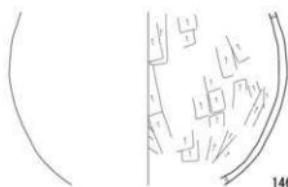
144



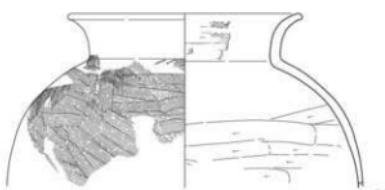
149



145

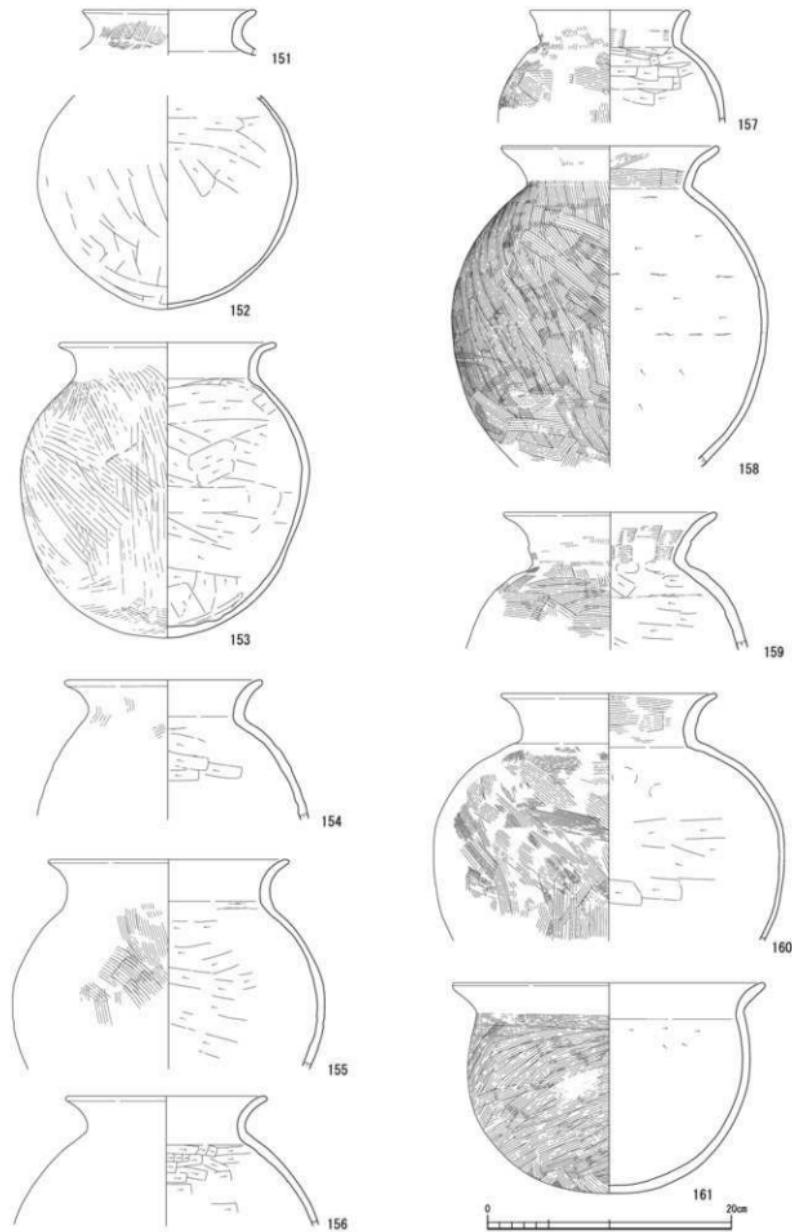


146

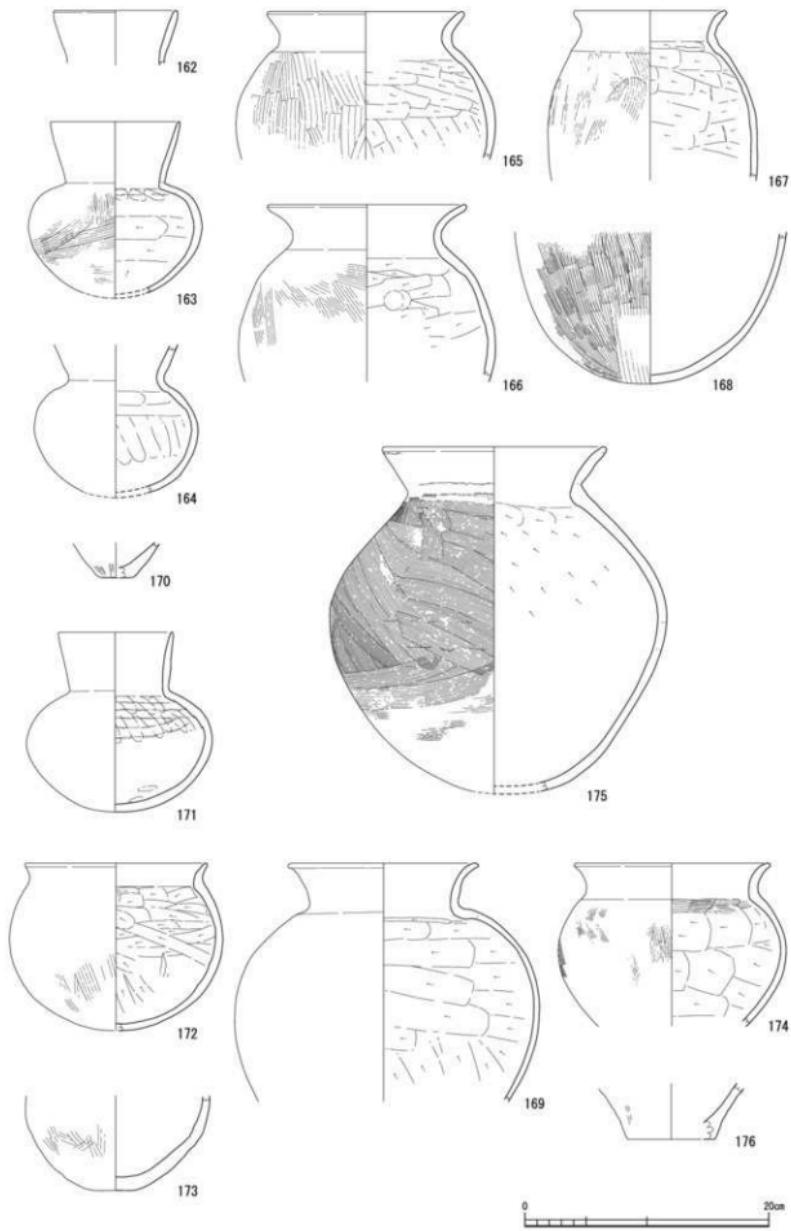


150

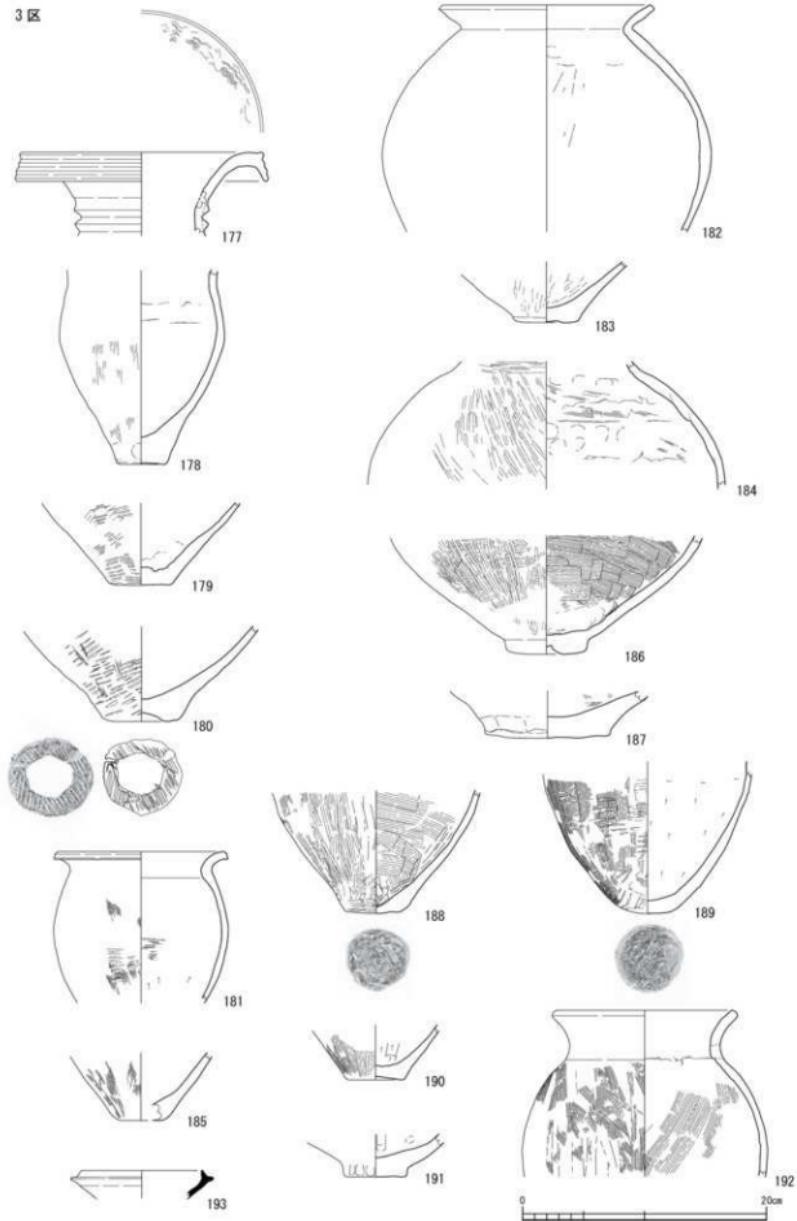




寺内2区



3区



寺内4区

寺内5区

寺内6区

4区

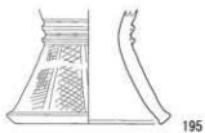


194

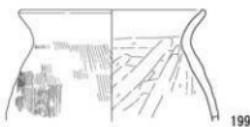
5区



197



195



199

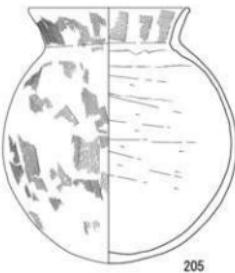


196

6区



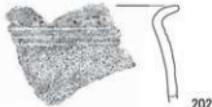
200



205



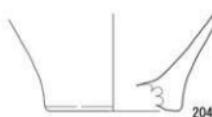
201



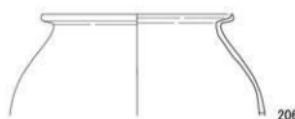
202



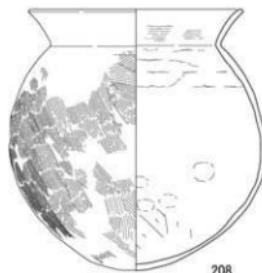
203



204



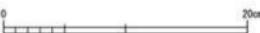
206



208



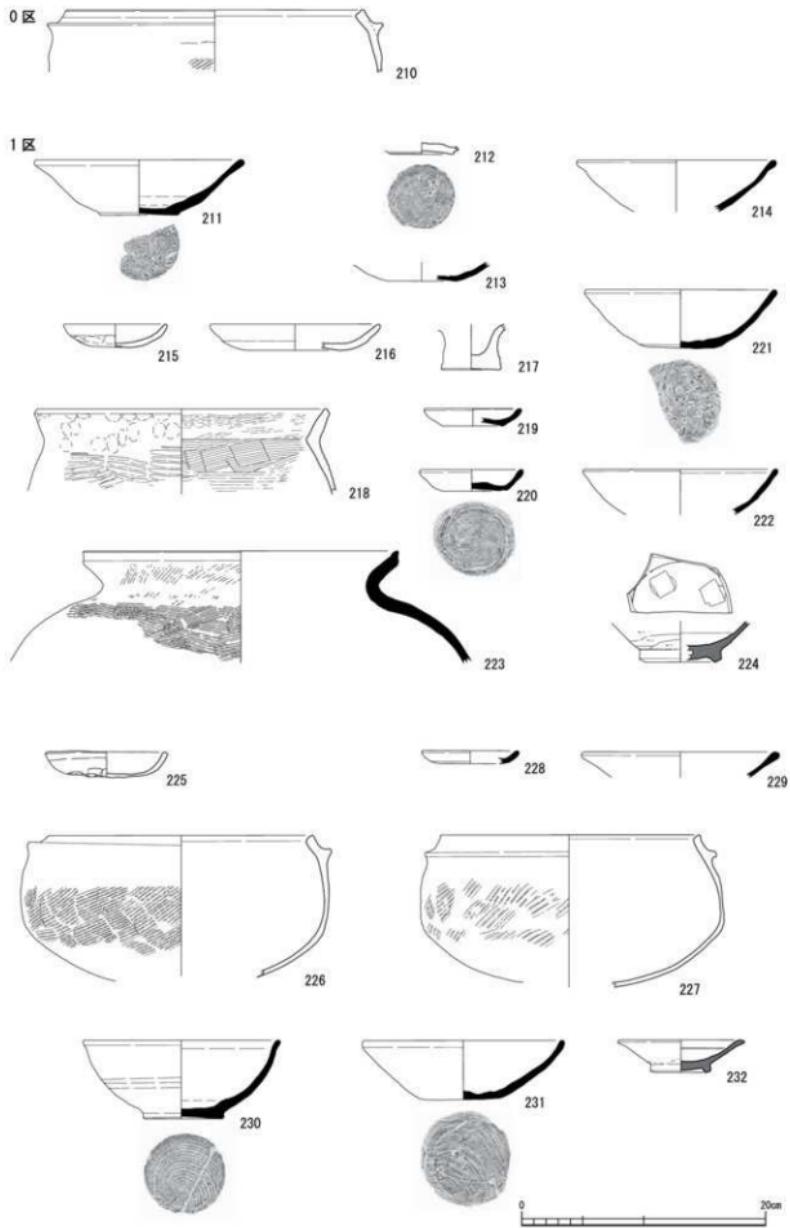
207



209

寺内〇区

寺内1区



1区



233



235



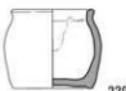
234



237



238



239



241



242



240



246



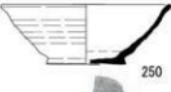
247



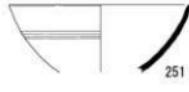
248



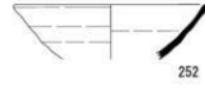
249



250



251



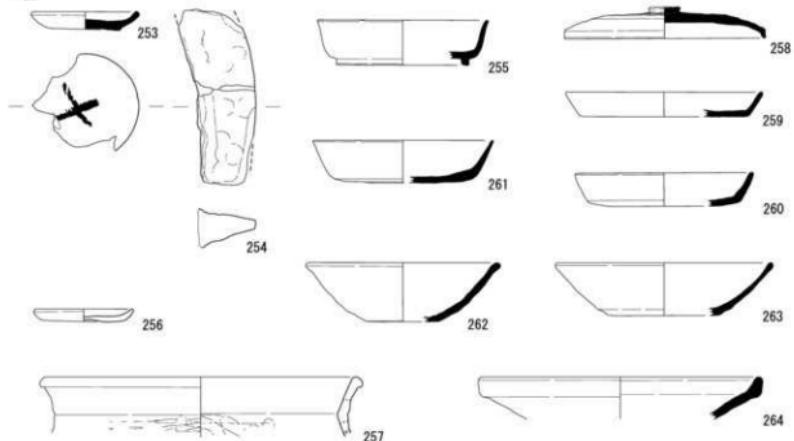
252



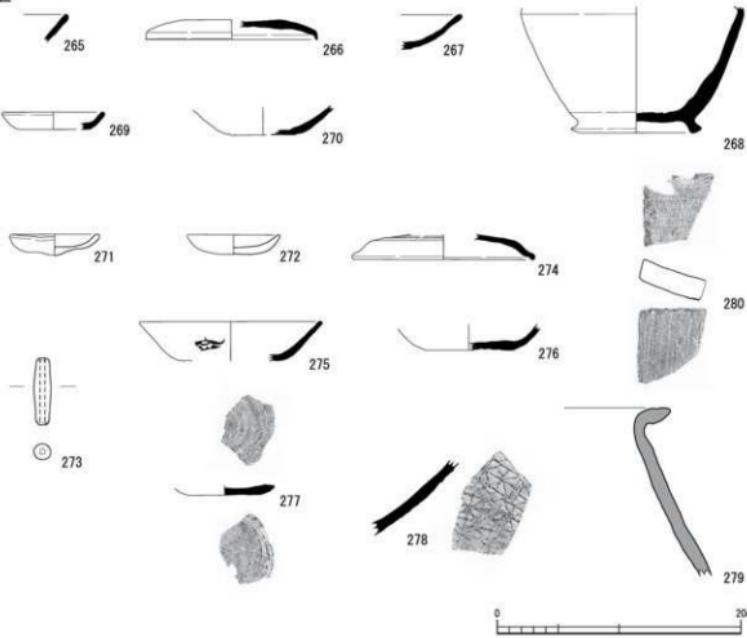
寺内1区

寺内2区

3区



4区

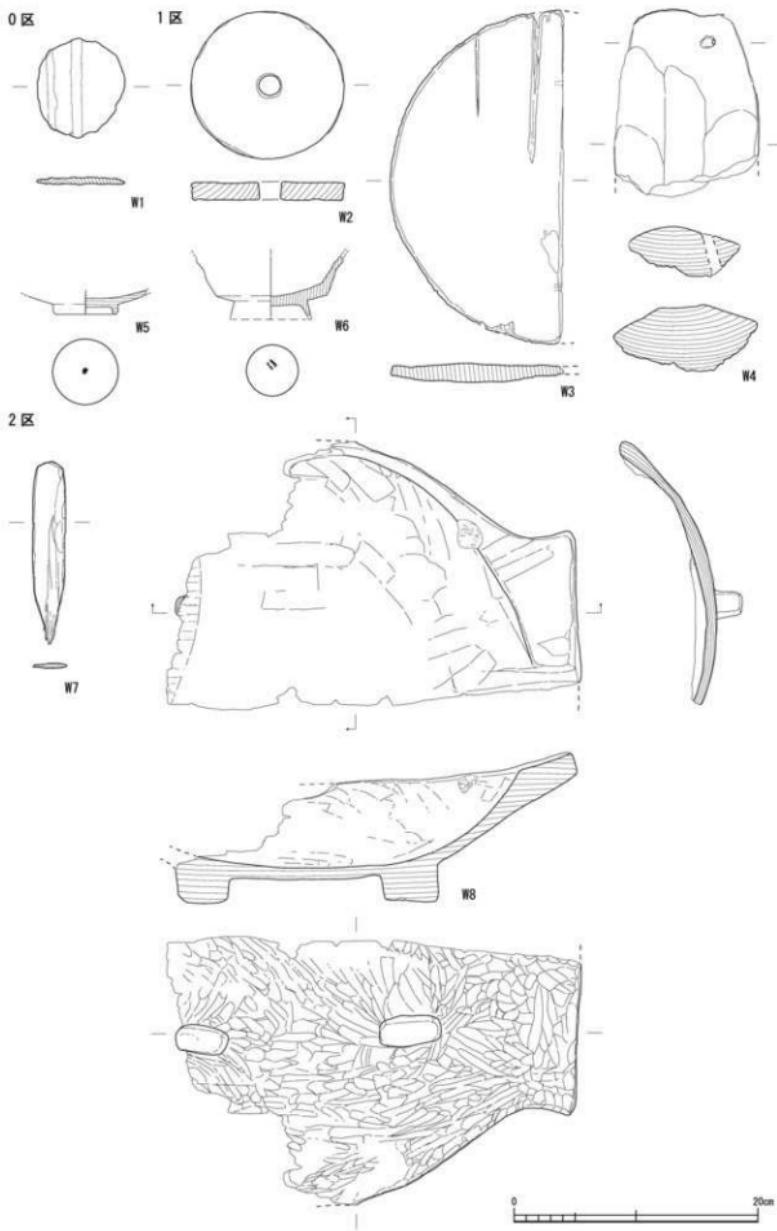


5区

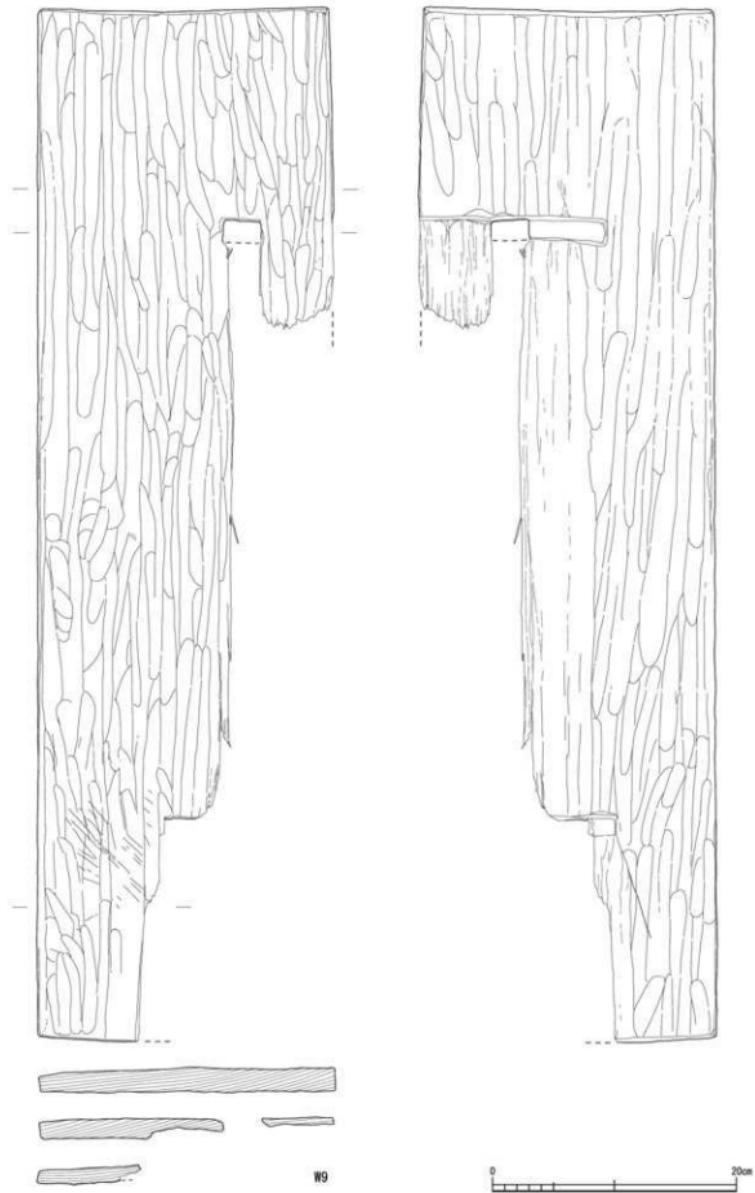


寺内5区

寺内6区

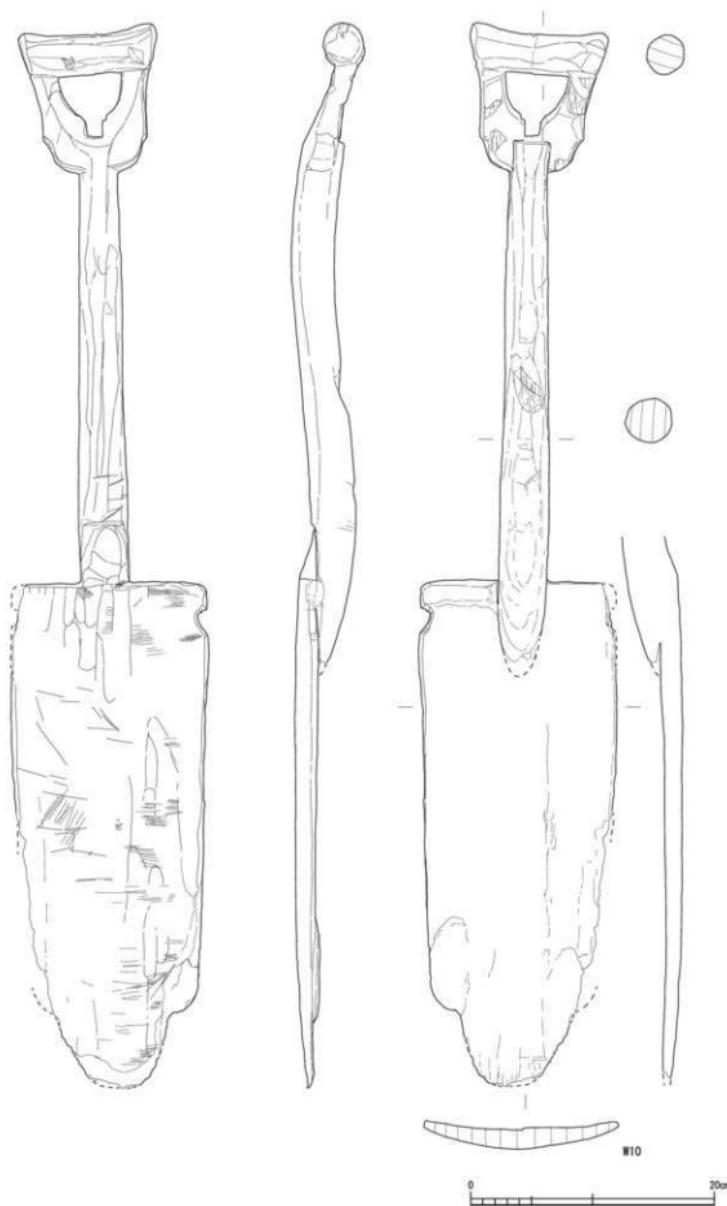
寺内0区
寺内1区
寺内2区

木製品 1



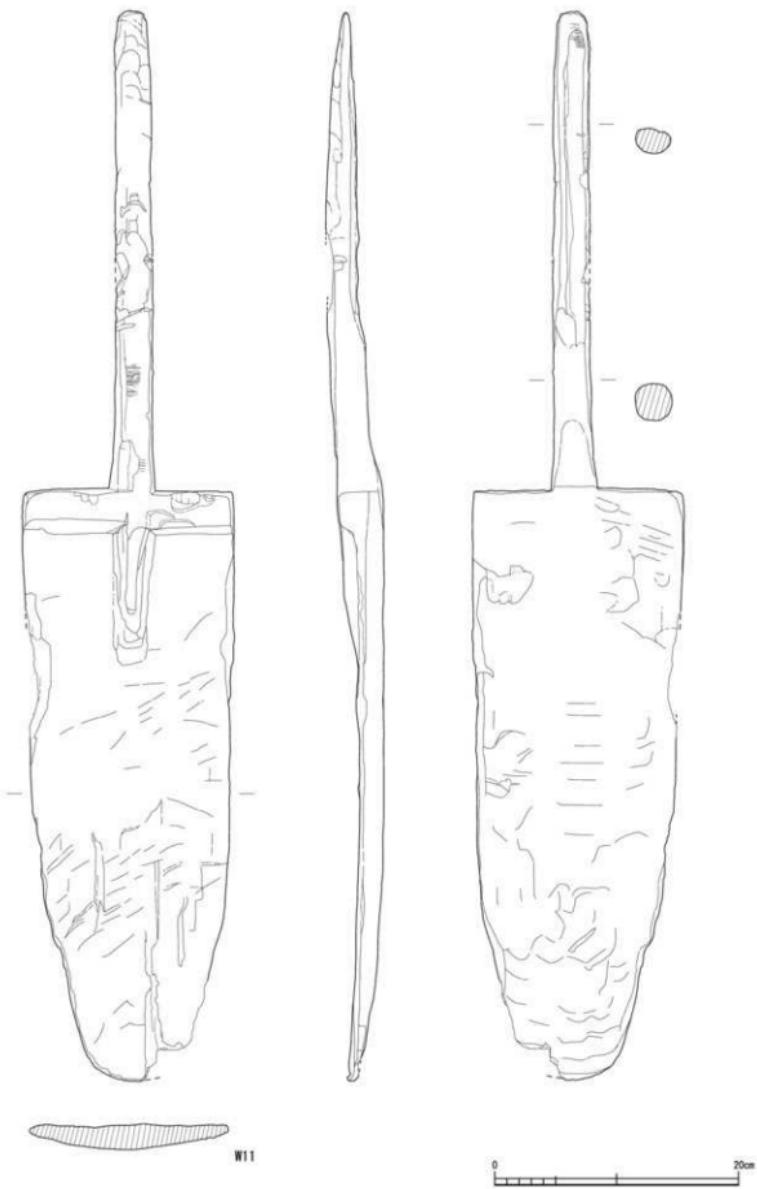
木製品 2

寺内2区

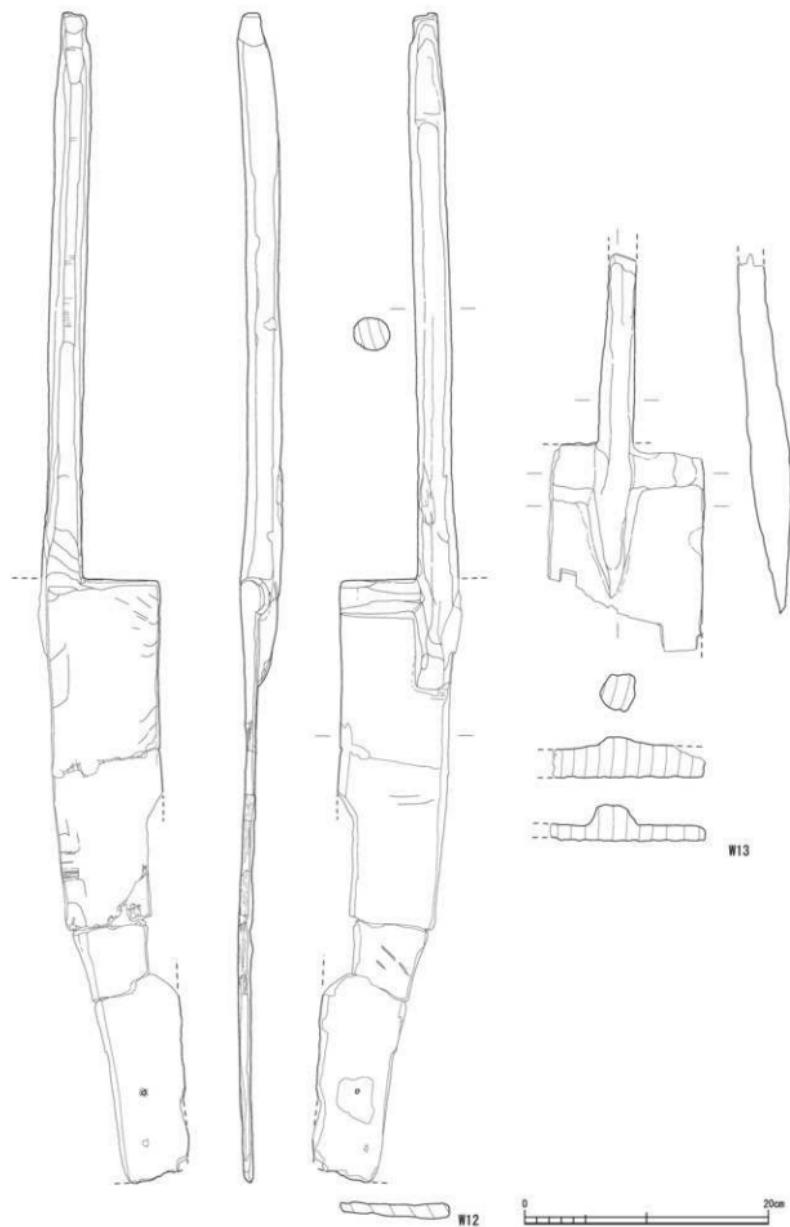


木製品 3

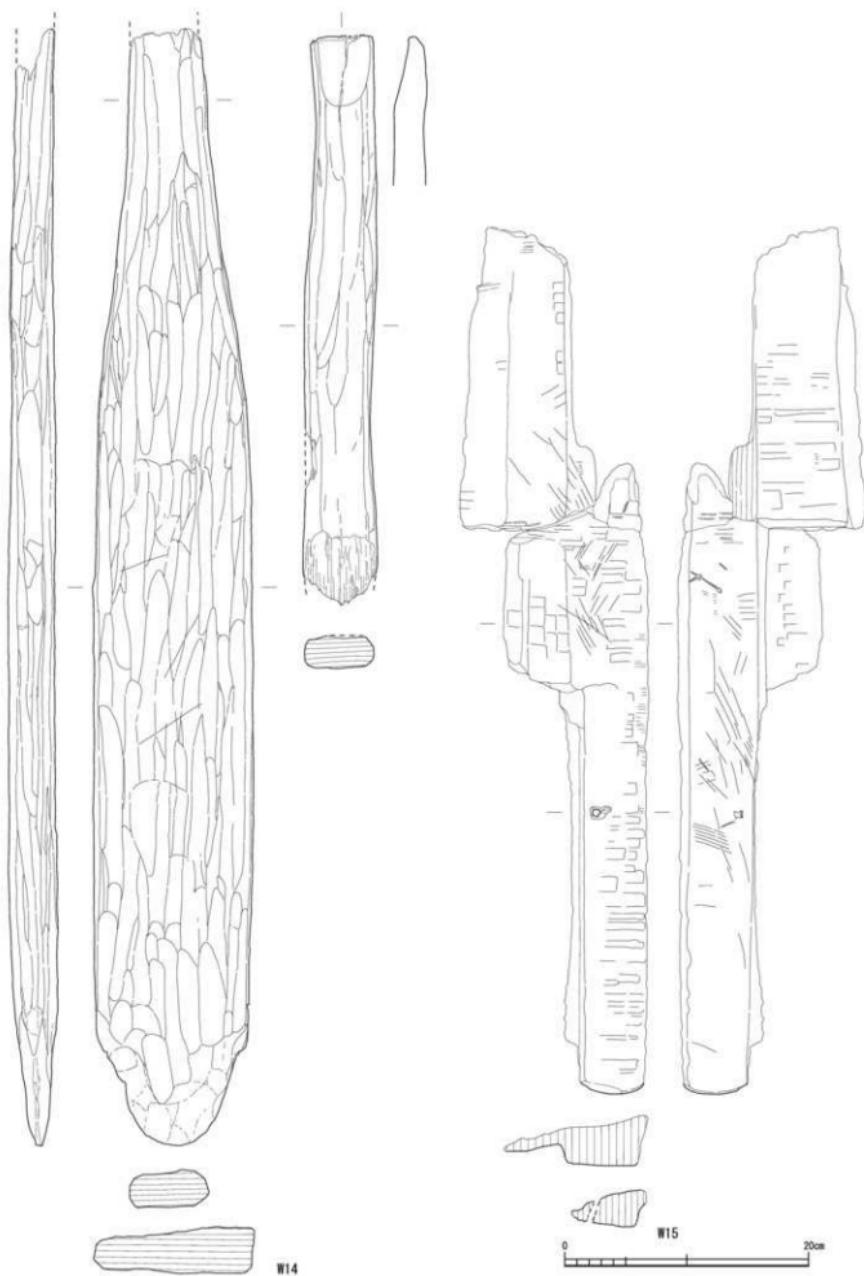
寺内2区



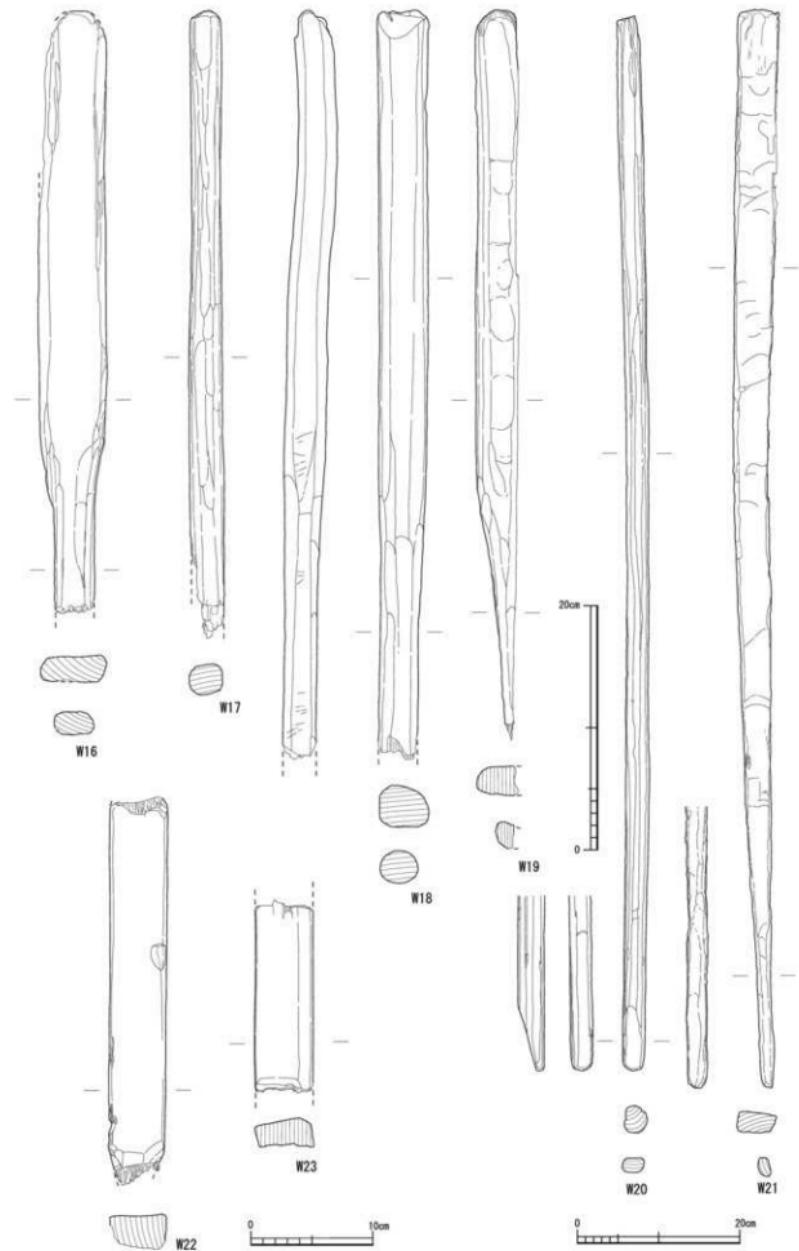
木製品 4



寺内2区

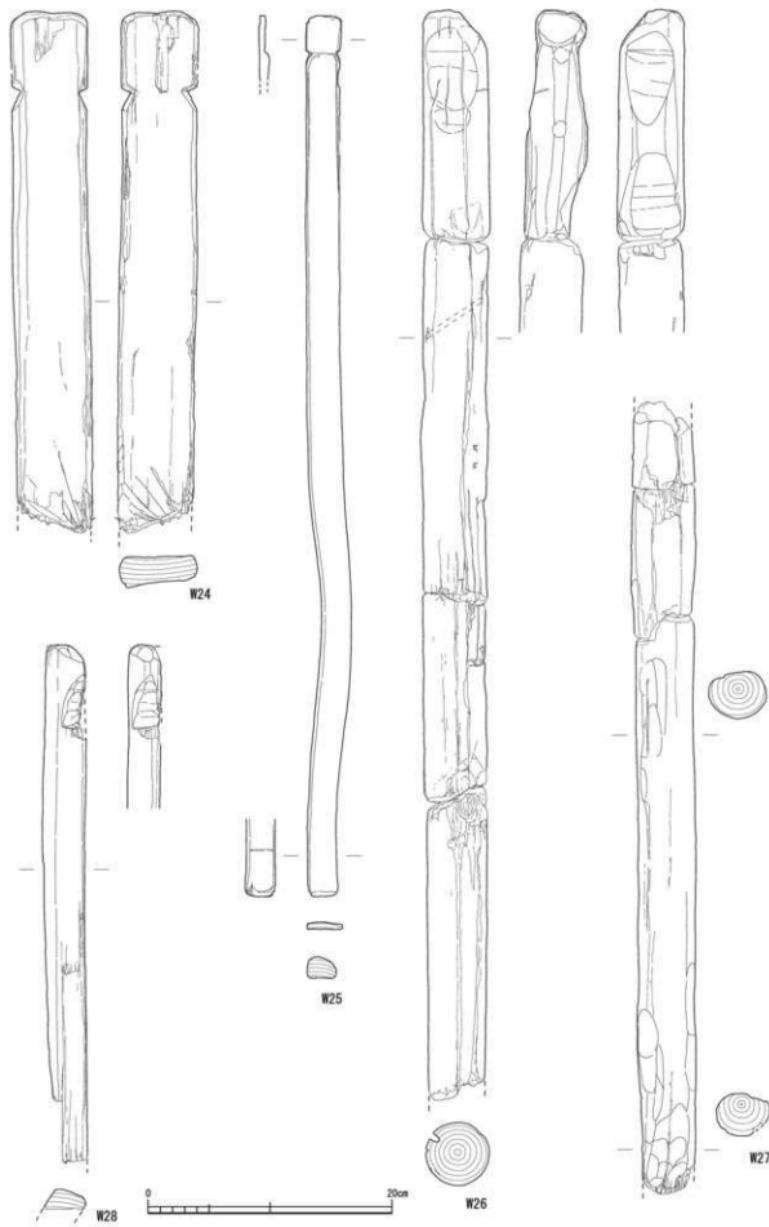


木製品 6

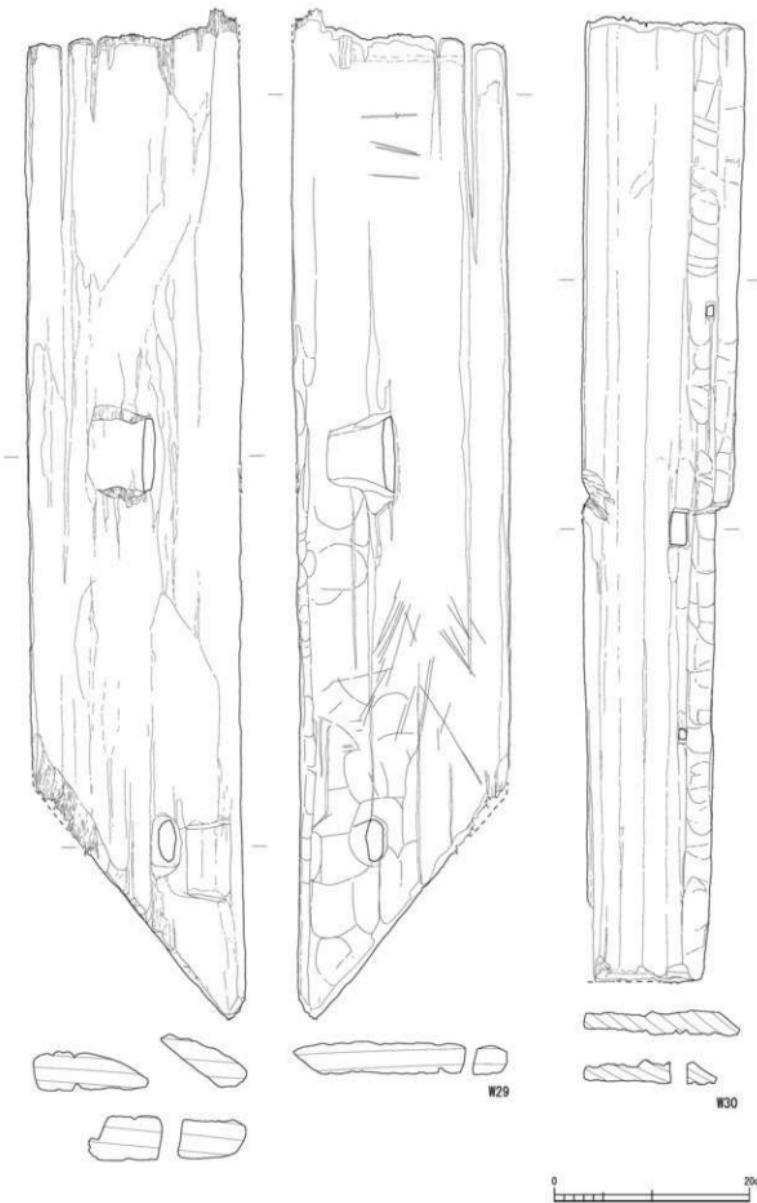


木製品 7

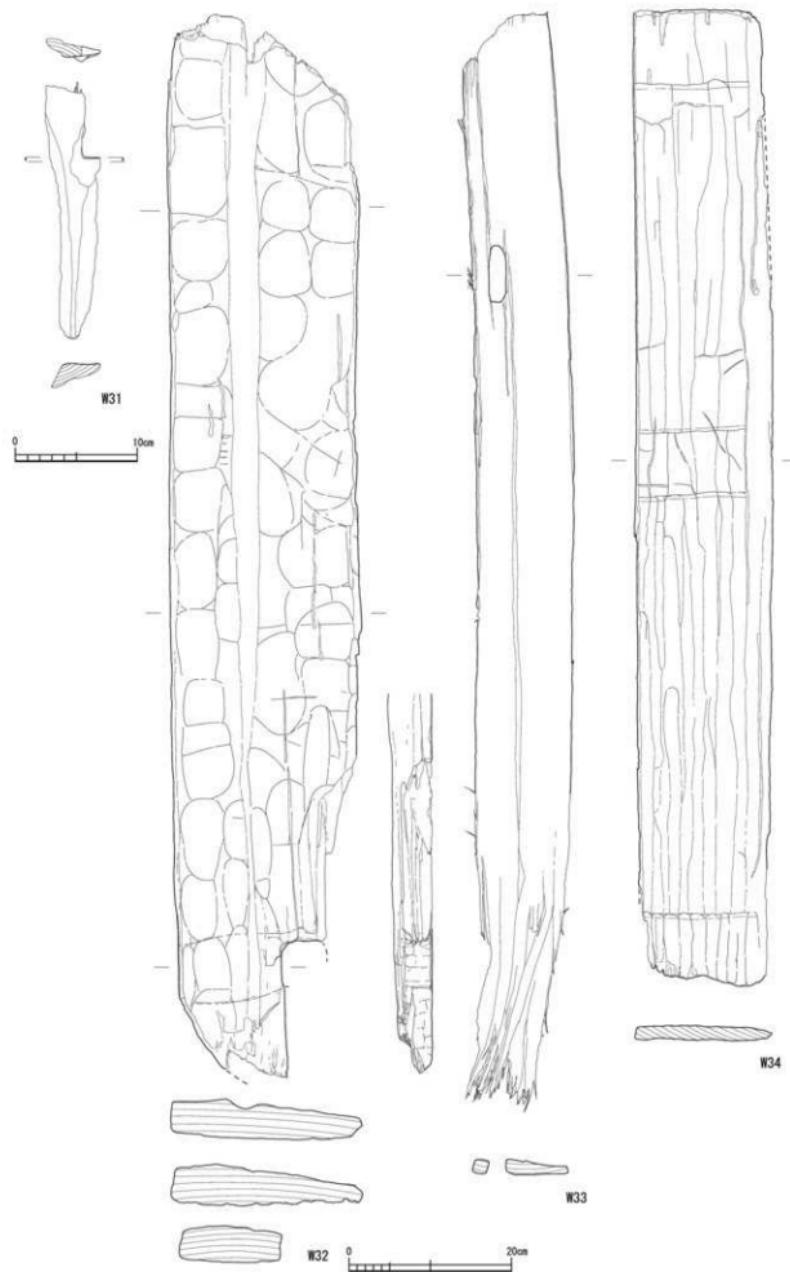
寺内2区



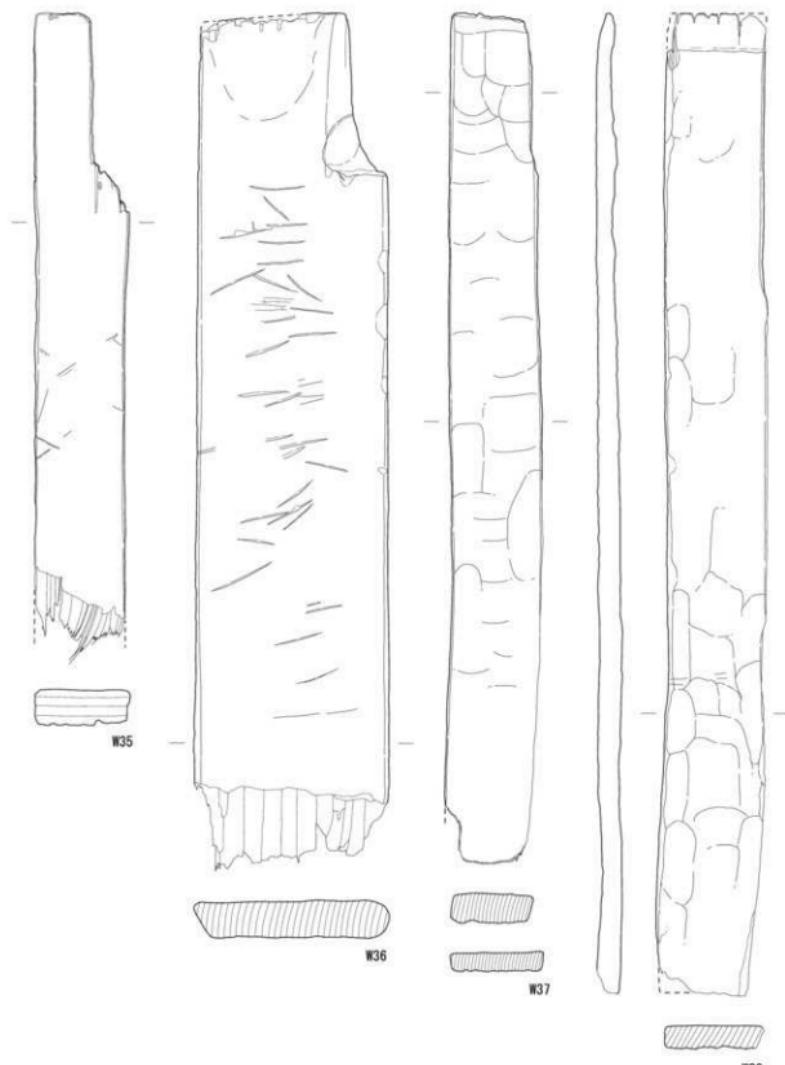
木製品 8



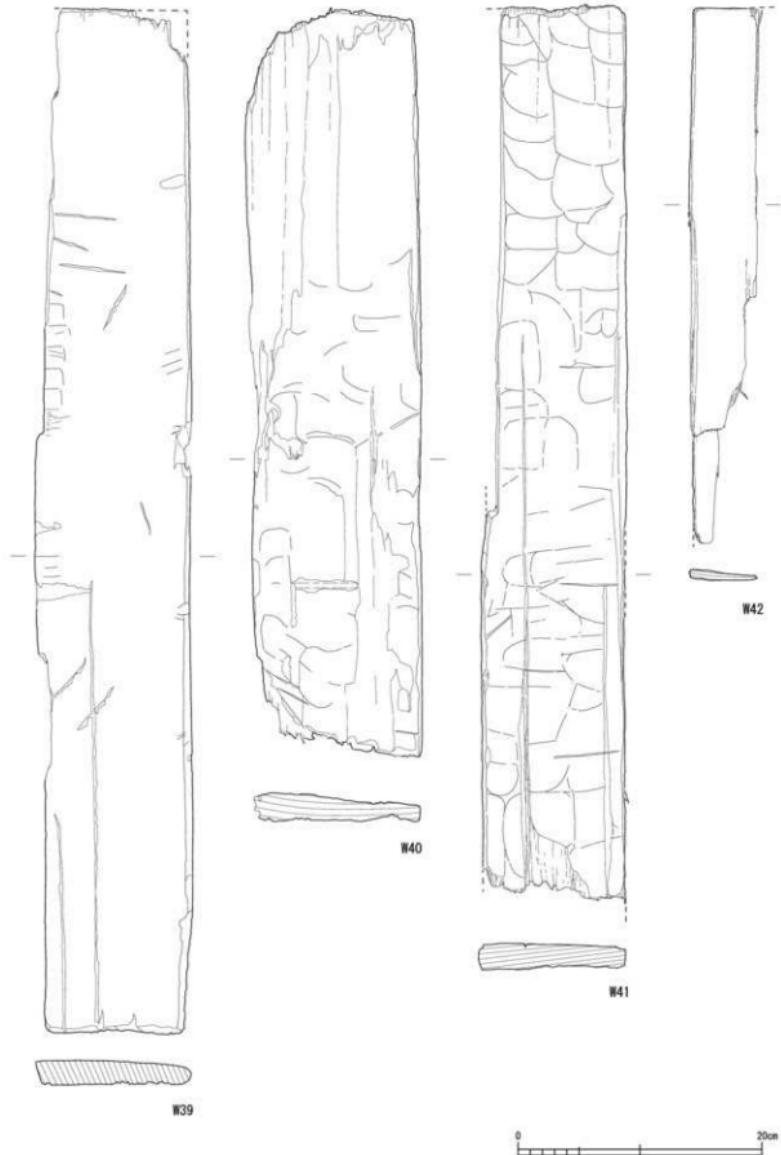
木製品 9



寺内2区



寺内2区

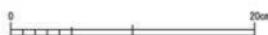


木製品 12



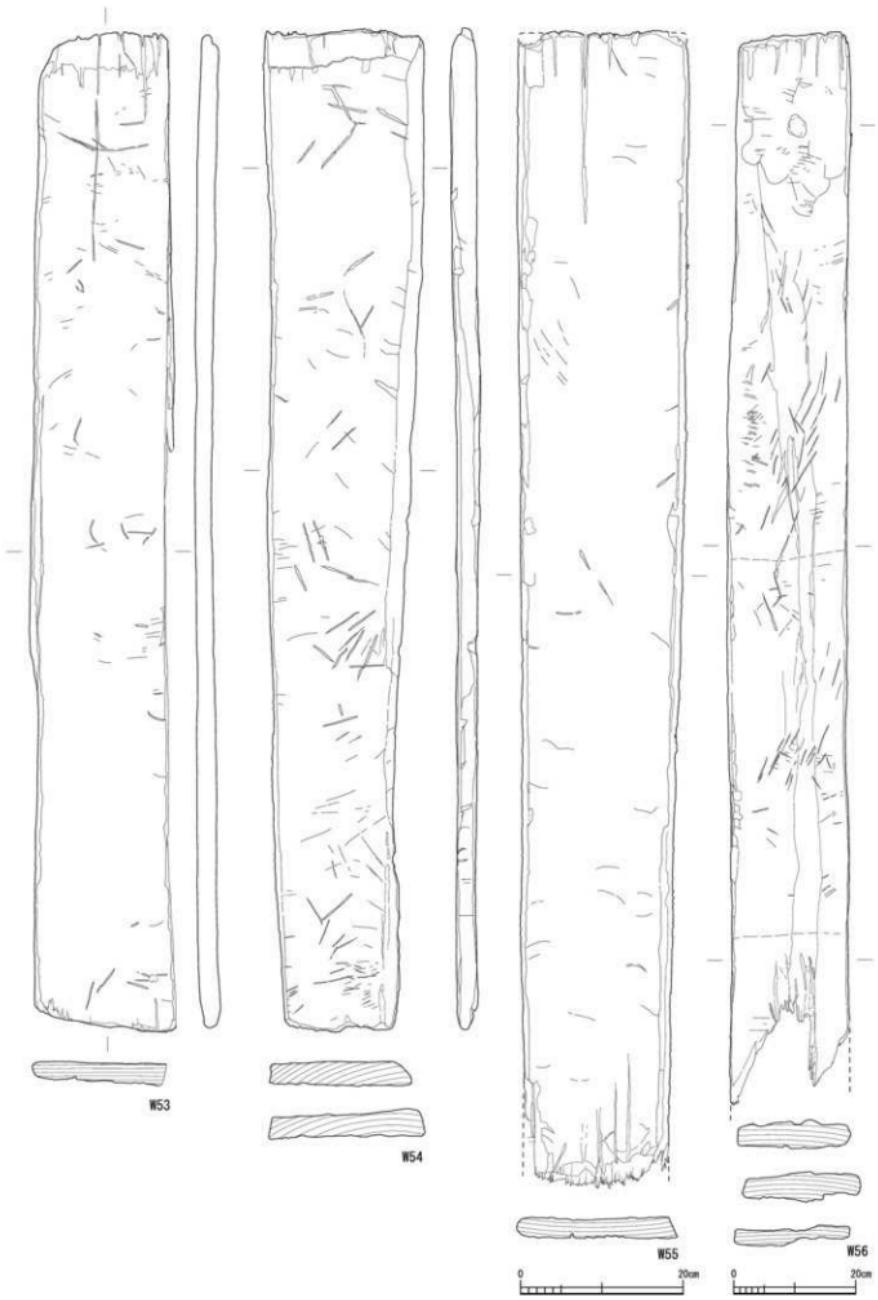
木製品 13

寺内2区

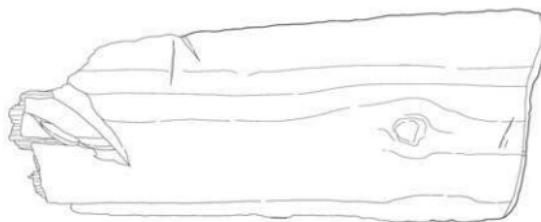
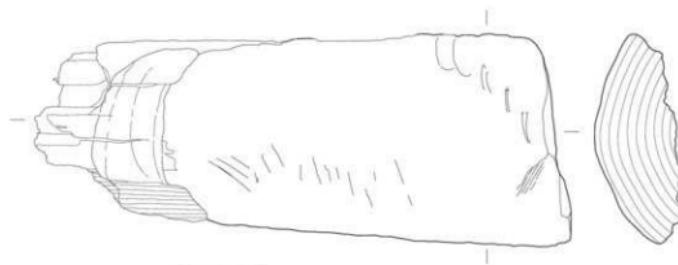




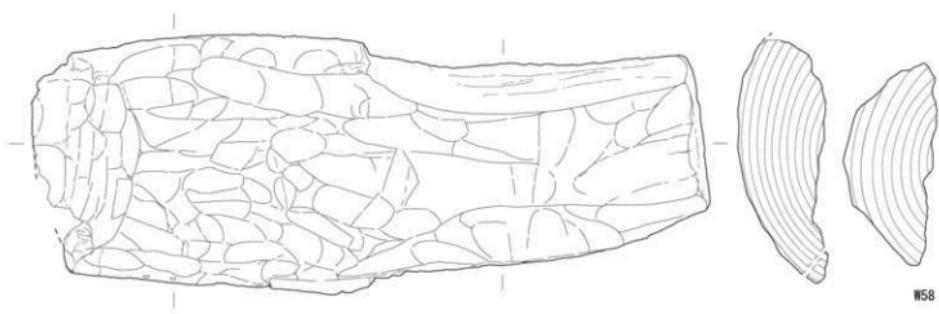
寺内2区



木製品 16



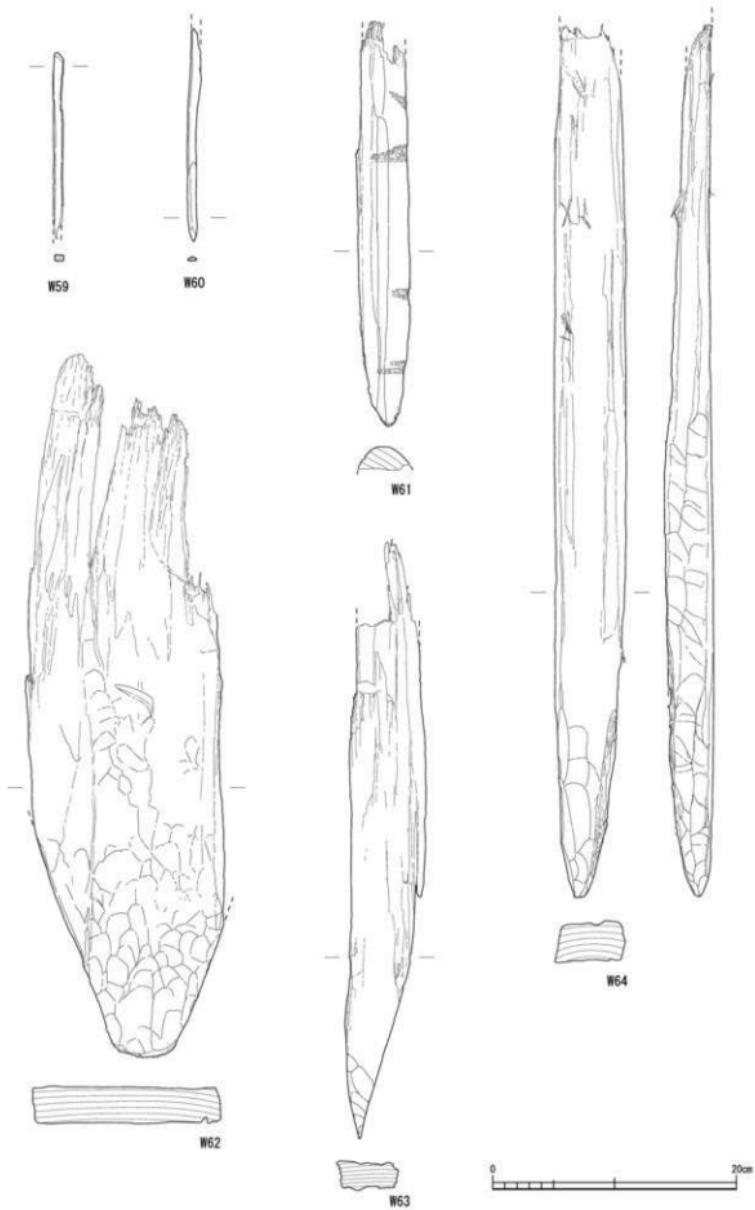
W57

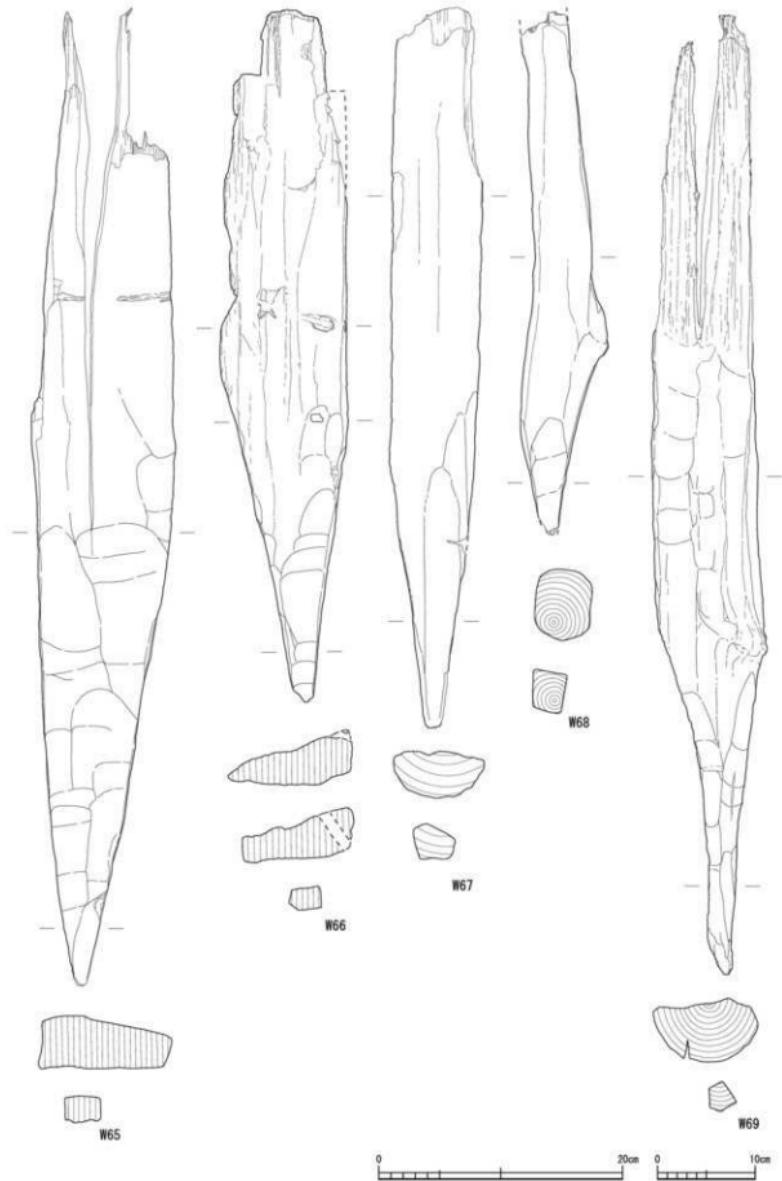


W58

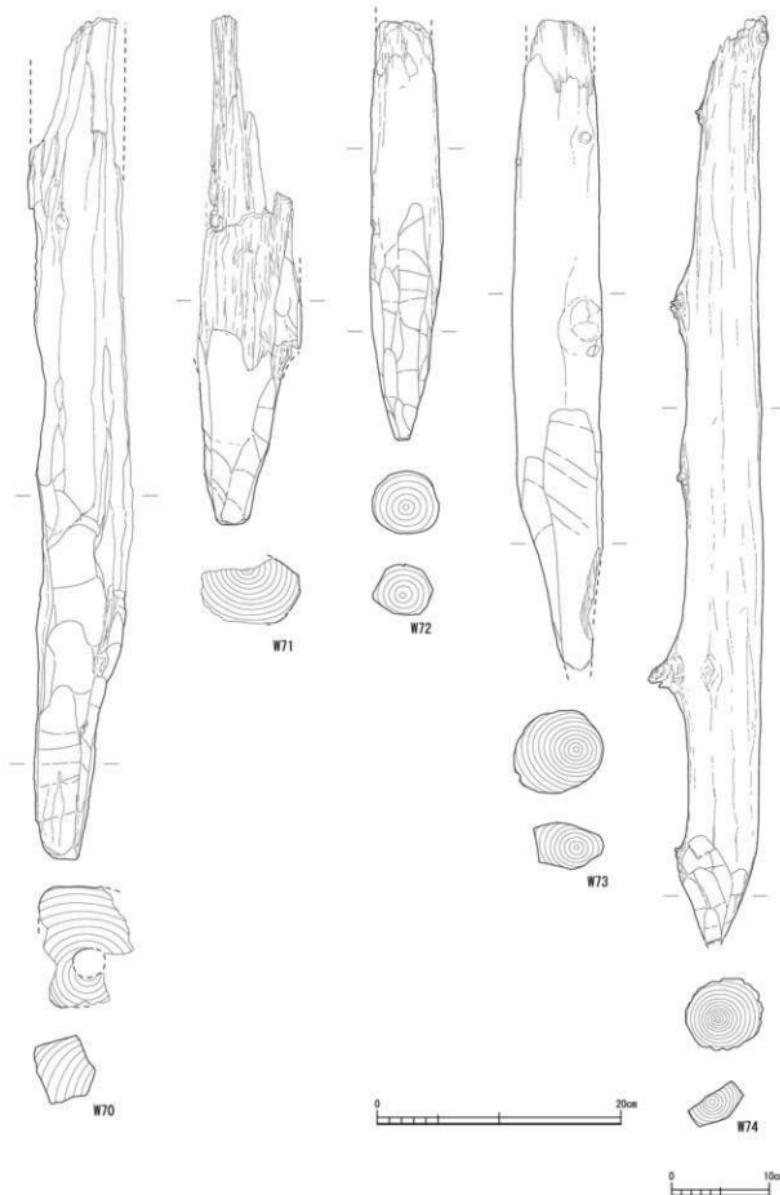


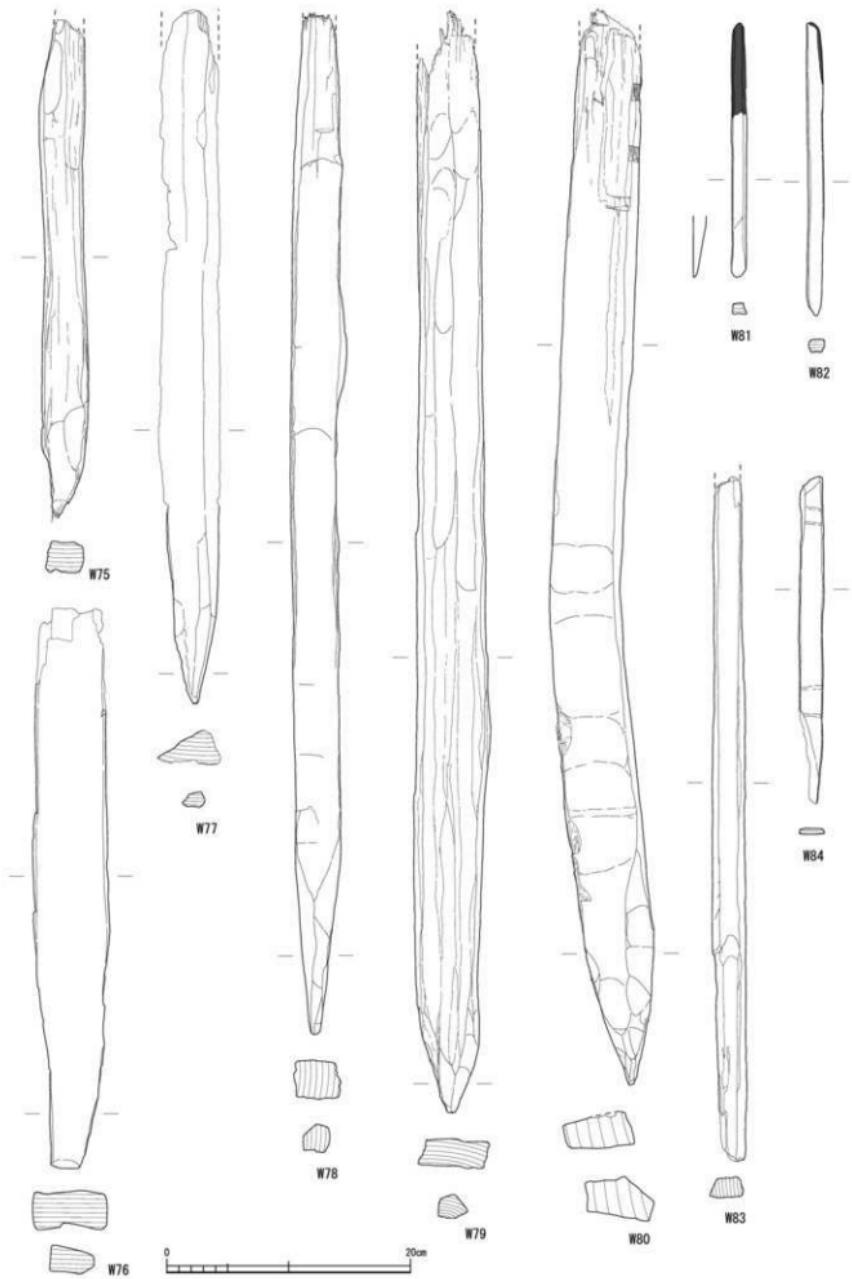
寺内2区



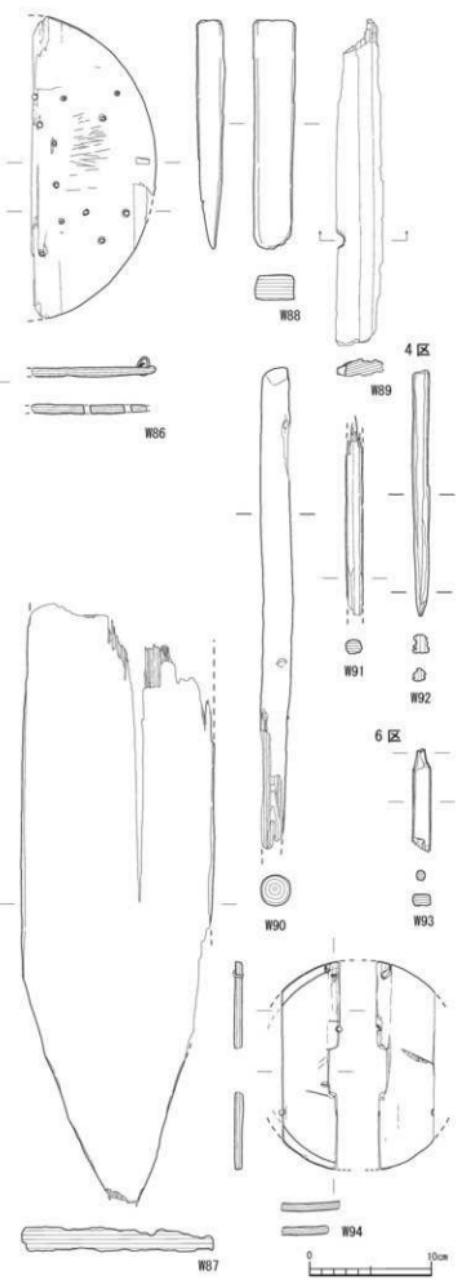
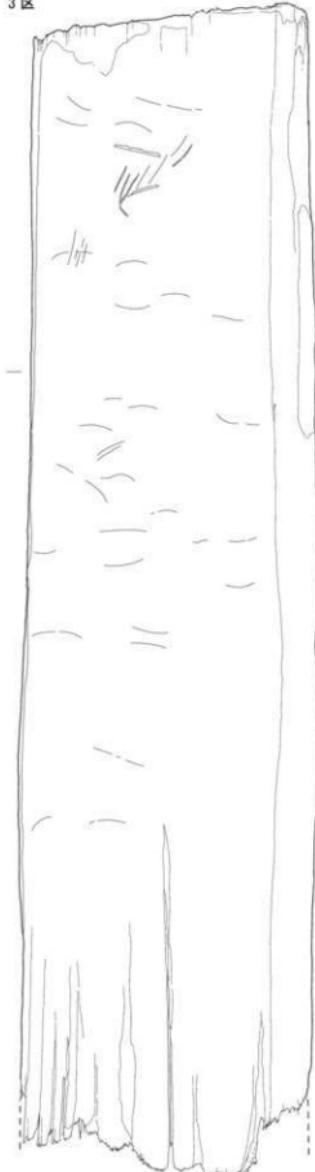


寺内2区





3区



寺内3区

寺内4区

寺内6区

